# 【改訳】　聖剣伝説3

丸猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【改訳】　聖剣伝説３

【Ｎコード】
Ｎ８８９１Ｈ

【作者名】
丸猫

【あらすじ】
草原の国フォルセナの若き衛兵デュラン。彼は剣術大会で優勝をした夜、紅蓮のマントを羽織った魔術師に完膚なきまでの敗北を喫す。打ち砕かれた誇りを取り戻すため、彼は旅に出る。そして、その旅は世界の命運を左右する壮大な物語となるのだが、この時の彼はそれを知る由もなかった。

# プロローグ（前書き）

タイトルにあるように、これはＳＦＣソフト聖剣伝説3を基にした二次創作です。原作設定＋αでオリジナル設定、キャラが若干登場します。二次創作が苦手な方は閲覧しないことをお奨めします。

# プロローグ

……とある世界、とある日、とある場所に、弱々しい光が忽然と現れた。そこは人々から忘れられた小さな島の上空。

そんな小さな異変を誰も知らない平凡な日からこの物語は始まる。六人の青年と三つの悪と世界の命運が交差する物語が……。

北の広い雪原に一人の少女が行き倒れた頃、中央の鬱蒼とした森で一人の少年が叫び、南の砂漠では一人の男が親友殺しの疑いで投獄された。

そして同じ頃、ファ・ザード大陸北西部、草原の国フォルセナでは……

「お……ン……しっかり……」

世話役の男がフォルセナの若き衛兵に声を掛ける。しかし、銅製の胸当てをまとうその青年は返事をしない。剣先を硬い床に付け、ジッと前しか見ていない。

「声を掛けても無駄さ。準決勝の時もそうだったが、試合開始直前になると相手しか見えなくなっちまうんだよ。そいつは」

もう一人の世話役の言った通り、今の彼には高鳴る心音と闘技場へと開ける入り口の光しか感じられなかった。長年掛けて研ぎすまされた集中力の賜である。

そして決戦の刻となり、ファンファーレが鳴り響く。

「おい、デュラン。出番だぜ！しっかりな！」

ドクン、ドクンとの脈音に合わせながら、光の指す方に歩みを進める。

同じように反対側から現れるアーマーナイト、ブルーザー。彼も何か喋るが、デュランの耳には入らない。

唯一聞き取れたの、

「ただ今より剣術大会若手部門、一位決定戦を行う！両者前へ！」

デュランの剣術の師匠であり、フォルセナ国の統治者――英雄王の声だった。彼は厳かな顔で闘技場の真ん中に立ち、二人の剣士を呼ぶ。

にらみ合う二人の顔を見てから、英雄王はゆっくりと右手を上げる。

「はじめ！」

彼が右手を振り下ろすと同時に、渋い声が場内に響き渡った。

合図と同時に、ブルーザーは一歩二歩と踏み込み、大剣を一突きする。デュランはひらりと左前方に進み出ながらそれをかわし、剣を降り降ろし一太刀、素早く胸を突いての二太刀目をいれる。

「くっ、キサマ」

ブルーザーは苦顔を見せつつも、デュランが英雄王の死角に入ったことを確認し唇の端を釣り上げた。彼は素早くデュランに切り込むが、集中力が極限に高まっている彼に避けられないはずはなかった――はずだったが。

カラン――と、デュランの剣が地に落ちた。

「てめぇ……」

デュランの鋭い視線がブルーザーの右手に――その手に握られているスパナに――向いた。

ブルーザーは左手で一閃を放つと同時に鎧に忍ばせていた凶器で、回避したデュランの右手を打っていたのだ。

「倒れろ！」

ブルーザーが再び一閃を降りおろす。

デュランは突差に自由のきく左手で剣を拾いながら、その一撃を回避し、敵の懐に潜り込んだ。

「！？」

声をあげる間もなく、彼の一撃がブルーザーの鎧を打つ。

ガシャン！――大きな音ともに彼は後ろに倒れた。しかし、デュランの追撃は終わらない。立ち上がろうとするブルーザーに、

「これで最後だ！」

と言い放ち、勢いよく跳躍した。
「十文字斬り！」
デュランはフォルセナの強兵が得意とする必殺技を放った。
鉄が鉄を打ち砕く衝撃音と、その衝撃に吹き飛び地面に叩きつけられた鎧の衝突音、そしてブルーザーの叫び声が闘技場に響きわたる。
「うぉおおッ！……ま、マイッタァァ！」
静まり返る場内に、再び低く渋い声が響きわたる。
「そこまで！デュランの優勝だ！！よくやったぞ！腕をあげたな、デュラン」
英雄王の声に呼応するように、城壁から観戦する国民が沸いた。
沸き立つ観衆の中から、デュランは一人の女の子――妹のウェンディ――を見つけ出した。おばさんのステラと共に大はしゃぎで喜んでいるのを見てから、デュランは剣先を天空に突きつける。
「見てるか、父さん」
雲ひとつない空、強い日差しもが彼の勝利を祝っているようだった。

草原の王国フォルセナの傭兵、デュラン……
父親は英雄王のかつての友人であり、『黄金の騎士』と称されるロキであったが、デュランが幼い頃に行方不明となる……。
母親も病気で亡くしてからは、伯母のステラのもとに妹のウェンディと共に引き取られた。父親の思い出はほとんどないものの、やはり血は争えず剣術において若手の中では右に出る者がない程の腕で、フォルセナ国の傭兵として英雄王に仕えるようになった……

「ふぁああ、眠みぃな…」
剣術大会を終え、夜の警備についていたデュランは大きなあくびをしながら言った。
隣に立つ同僚は笑いながら

「もうすぐ交代が来るから、それまでの辛抱だ。……オレは、ちょっくらもう一回りしてくるよ」
一人見張りを続けていると、彼はだんだんとまぶたの重みを我慢できなくなっていた。

……

……

……

気がつけば彼の眼前には、寂れた映写機が映し出すような古めかしい色に染まった天井があった。
「（ここは、俺の家？）」
頭がぼぅっとする。だが、遠くから聞こえてくるこの声だけは聞き違えることはなかった。
部屋の外、一階から聞こえる声は……、
「父さん？！」
幼い容姿のデュランは自分の部屋から飛び出し、階段を駆け降りた。
一階の居間には鎧を身に付けた二人の騎士が立っていた。一人は英雄王、いや当時彼はまだ王位に就いておらず、リチャード王子と呼ばれていた。もう一人の騎士は眩しいばかりの黄金色の鎧を纏い、その前に立つ女性は涙を目に溜めている。
幼い日のデュランは無邪気に黄金の騎士に訊いた。
「パパどこにいくの？」
「ドラゴン退治だよ。今度の敵は『竜帝』と呼ばれるドラゴン族の中でも最強のヤツだ。だが、大丈夫。リチャード王子と私なら必ず勝てるよ！」
重たそうな甲冑を纏ったロキは言った。
「デュラン、おまえは男の子だ。妹のウェンディと母さんを頼んだぞ」

「ん！いってらっしゃい」
強さと優しさを秘めた瞳をした父、ロキはリチャード王子を見て頷くと、颯爽と玄関から出て行く。ロキの言葉に強く頷いたデュランは元気に手を振って、父親を見送った。広い背中をジッと見つめながら。扉が閉まるまで。

（そうだ。父さんと過ごした最後の時間だ……。数ヶ月経って、国王陛下、いやリチャード王子がいらっしゃったんだ……）

「シモーヌ、すまない。……ロキは私を助けようと竜帝と刺し違えて、……竜帝と一緒に……底知れぬ穴に落ちてしまったのだ。私たちはその後もそこにとどまってロキの捜索を続けたのだが……」
「そうですか……。あの人は……ロキは、最期まで『黄金の騎士』であり続けたんですね。彼もきっと、本望だった……と思い……ウッ……」
言葉が途切れ途切れになりながら、ついには胸を押さえて倒れるデュランの母、シモーヌ。それを見てリチャードは彼女に駆け寄った。
「！？　シモーヌ、しっかり！」

（母さんが倒れて、俺たちを手伝いにステラおばさんがうちに来たんだ。でも、その後すぐに……）

高熱を出し、何日も寝込んだシモーヌ。
その数日後、意識を取り戻した彼女はベッドに臥しながら姉の顔を見つめ、ゆっくりと口を開いた。
「ステラ姉さん……」
「シモーヌ、どうしてこんなになるまで病気を放っておいたんだよ！」
「わたしが病気だと知ったら、きっとロキは安心して戦いに行けな

かったと思うの……。私は、あの人の足手まといにはなりたくなかった……」

　儚げな表情を受かべるシモーヌ。その顔にステラは涙を浮かべる。

「馬鹿だよ、あんたも、ロキも……うぅ……」

　その近くで妹と一緒に遊ぶデュラン。シモーヌは幼い二人の子どもたちを見て言う。まるで最後の力を振り出すように、小さい声で。

「ねえさん……子供達を……」

「安心しな！あんたの子供たちはあたしがちゃんと面倒を見てあげるよ」

　今にも逝ってしまいそうな雰囲気を否定するかのように、ステラは声を張り上げる。病巣の妹を励ますように。

　姉の言葉に、心の底から安堵したシモーヌは、ゆっくりと瞼を閉じた。眠るように。

　そうして、聞こえるか聞こえないか微かな声で言う。

「良かった、ありがとう」

「だから、あんたも……シモーヌ？シモーヌ！！」

　ステラが大声を出し、シモーヌの肩を揺らしながら名前を呼ぶ。しかし、彼女が目を開くことは二度となかった。

……。

……。

……。

「……うっ、いけね……うっかり寝ちまった」

　重たくなった瞼を開けると、暗闇に包まれ、仄かな灯火に照らされる城内が見えた。夜闇の寒さが肌身を刺すように染み渡る。だが、

「……ん？なんだこの違和感は！？」

　デュランは自分と反対側にいるはずの見張りの姿が見えないことに気がついた。そして、そこからほど近い内側城門を越えた城の内側で真っ赤な炎の玉が宙を舞うのを見た。

「なんだ、あれは!?」
急いで内側の城門を潜り抜け、真っ赤に燃える炎が舞っていた場所に走る。
そこにはフォルセナの誇る兵士数人が倒れていた。それともう一つ、赤い、いや、血のように真っ赤な紅蓮のマントを羽織った男がどこからともなく現れ、建物の中に入っていくのが見えた。
その時、近くにいた兵士が唸り声をあげた。
「おい！大丈夫か!?」
抱き起こし、顔を覆う兜を剥がした。すると、
「ブルーザー！ブルーザーじゃないか!?おまえ程の奴がどうして!?」
「うぐっ。気を付けろ、奴の魔法は並じゃない……」
そう言ってブルーザーは気を失った。
魔法?――そんな疑問を抱きながら、ブルーザーの体を見ると、そこには重い火傷の痕があった。
「くそっ！何者なんだ、あいつは!?」
拳を震わせながらデュランは紅蓮の男を追う。ただ一人で。

渡り廊下に出るとさっきの男が王室に向かおうとしているのが見えた。城内警備を任務とするデュランはフォルセナ兵に配給されているブロンズソードを抜いて、急いで侵入者に駆け寄る。
「待てっ！何者だ!!」
彼は叫び、侵入者を止める。男は立ち止まり、口元に笑みを浮かべながら振り向き、言う。
「フフフ、なかなか勘の鋭い奴だ……」
そう言うと、男は吸い込まれるように後ろへと引いた。まるで床を滑るような素早い動きにデュランは目を見張ってしまった。
彼は男を追いかけ、全力で剣を降り降ろす。感覚もタイミングも、その男を斬り倒すのに十分だった。しかし、男は静かに後ろに退いていた。

「……フフフ……ハハハハ」
「何がおかしい！！」
ただの笑みが侮蔑交じりの笑い声に変わった瞬間、デュランの頭の中は真っ赤に染まった。その様子を見て、侵入者は三下の兵士を見るような目で語る。
「……どうやら、おまえはこの城で一番の剣の使い手である事を誇りにしているようだが、身の程知らずを思い知るがいい……」
「だまれっ！！」
叫びながら、デュランは二刃を放とうとした。しかし、瞬間、男はデュランの横を通り過ぎ、彼の背後に移動した。
デュランもバッと身を翻し、再び男を斬りつける。だが、かすりもしない。研ぎ澄まされた刃が虚しく空を切る。
「……ハッハッハ！まだまだ子供だな。こんな奴を傭兵として雇っているようじゃ、英雄王とやらも噂ほど大した王じゃなさそうだ」
心の底から出てくる侮蔑交じりの笑い声に相まって、師匠を馬鹿にされたことで、デュランの怒りは爆発する。
「国王陛下を悪く言う事は許さんっ！！」
叫びながら剣を三度(みたび)振るうが、紅蓮の男は再び移動しデュランの背後を取る。デュランは何とかその動きを目で追い、続けて剣を振るう。しかし、男はヒラリとマントを翻し、またもデュランの背後に立った。
良いように翻弄されるデュランに紅蓮の男は言う。絶えず微笑みを携えながら。
「今度はこちらから行くとしよう」
男がすぅッと右手を撫でるように上げ、すらすらと呪文を唱える。すると右手の中に小さな三つの炎球が浮かび上がった。その蛍火のような球は酸素を集め、見る見る間に紅く大きな球となった。
「煉獄の炎よ、かの者を焼き払え、……ファイヤーボール」
男がつぶやくと紅き剛球は意思を持っているかのようにデュランの周りを飛び交い始めた。彼は剣でそれを叩き切ろうとするが、か

すりもしない。炎の塊はぐるぐると彼の周りを舞うと、翻弄され隙を見せた彼を襲った。刹那、彼の体は業火の炎に包まれる。

「ぐぁぁぁぁ！」

「まだだ」

男はさらに呪文を唱える。すると今度は彼の両肩の上に空気が集約し、氷の塊が形作られていった。

「凍りつきし妖精よ、全てを凍てつかせよ、……アイススマッシュ」

いくつもの氷の塊がデュランを襲う。

「ぐふっ」

火傷と凍傷を負った彼は膝を着いて男を見上げた。感情もない、作り物のような冷たい目が彼を見下げていた。

「とどめだ……」

虫でも殺すかのような魔術師の目を見て、デュランは全身の毛穴が開くのを感じた。死の恐怖が彼を包み込む。恐怖と敗北感、そして師を守れず死ぬことへの叱責感が彼の心を埋め尽くした。

その時、

『ピー　ピー』

笛の音が鳴り響き、「場内に侵入者がいるぞ！探せ！！」「逃がすな」「必ず捕まえるのだ！」等々と何人者の兵士がこちらに向かう気配がした。

「……ククク、命びろいしたな。今日はこれで引き上げる。まぁ、慌てなくても、こんなザコ相手ならいつでも、たやすく我らの占領下に置くことができだろう。フハッハッハッハ」

そう言い残し紅蓮の男は姿を消し、デュランも意識を喪失した。

目を開けると、そこには自分の部屋の天井があった。モノクロではなく、所々傷んだ天井だ。

「俺はいったい……」

起きあがろうした時、誰かが自分の手を握っていることに気づい

た。
　妹のウェンディが両手でデュランの右手を握りしめながら、ベッドに上半身を委ねて眠っていた。うっすらと涙の跡を残しながら……。
　デュランは、自分が紅蓮の男に完膚なきまでにやられたことを思い出し、苦々しい感情が心を満たしていった。
　彼は妹を起こさないようにそぉっとベッドから抜け出し、包帯だらけの体に服を着せ、町に出た。

　しばらくしてウェンディは目を覚まし、兄がいなくなっていることに狼狽した。
「あんな傷だらけの体でどこに行ったの!?」
　ウェンディは着の身着のままで外に出た。デュランの友人の家や広場などを探すが、見つからない。
「もしかして……」

　ウェンディはパブに向かった。普段、デュランは酒を飲まない男だった。士気が落ちると考えていたからだ。
　だからこそ、パブの奥で酒に溺れていた兄を見たときのウェンディのショックは大きかった。
「ちくしょう……ちくしょう……」
「お兄ちゃん!まだケガが治ってないんだから、寝てなきゃだめよ!」
「ちくしょう!……紅い……紅い魔導師……俺は……俺は……」
「お兄ちゃん、しっかりして!……お兄ちゃんの弱虫!だいっきらい!」
　ウェンディは泣き叫びながら出ていった。
「……ウェンディ」
　デュランは自分が情けなく思えてきた。
（何やってんだ、おれ。……くそったれ!）

机の上で拳が震え、グラスの中にある酒が波を打つ。
「マスター、勘定ここに置いとくからな」

彼は夜の帳に包まれた町中に戻っていった。トボトボと寂しい道を歩く。しかし、彼の足が家に向かうことはない。
（家で休める気分じゃねえ。俺はどうすりゃ……）
悩める男の前に『占いババの店』と書かれた看板が目にとまった。
普段彼は占いや迷信なんてままごとにすぎないと思っていた。しかし、今宵の彼は違ったのかもしれない。紅蓮の魔導師に完敗し、自分の無力を知った彼は藁にも縋りたかったのだろう。デュランは二階にある占い屋に入っていった。
「人の運命は９９パーセントまで、予め決まっておる……。じゃが、残りの１パーセントに未来があり、夢がある……。人はその１パーセントをこう呼ぶ……『希望』と……。何じゃおぬし、しけたツラしおって……。どれ、この占いババが占ってしんぜよう！」
入るや否や、きな臭い老婆が説法し、占いを始めた。客が入ってきた時の決まり文句なのだろうか。
「うるせえ！俺は占いなんか信じねえ！力だ！信じられるのは、力だけなんだ！やい、ババア！どうすりゃ俺は強くなれるんだ！？」
まだ酔いが醒めぬデュランはいきり立って、老婆の前にある台に上った。じゃあなんでここに来たんだ？――と誰しもが聞きたいところであろう……。
「ひーっ、何するんだよ！この乱暴者！そんなに強くなりたきゃ、聖都ウェンデルへでも行きな！光の司祭ってのがクラスチェンジの方法を知ってるってさ！」
「クラス……チェンジ……？」
何かが拓けたように感じたデュランは思わず呆けてしまった。そんな彼を老婆は台から突き落とす。
「おわっ！」
「ふん！あんたみたいなヒヨッ子は【ひよこ戦士】にでもクラスチ

エンジするんだね！さぁ、とっとと出てっておくれ！」
デュランは言われるがまま店を出た。
そうして、白けてきた夜空を見上げながら、
「クラスチェンジか……！あの紅蓮の魔導師に勝つためなら、何だってやるぜ……。よーし！いっちょ聖都ウェンデルまで行ってみるか……」

彼は旅支度の為に家に戻った。既にステラとウェンディは寝ているようだったので、デュランはこっそりと自室に入っていく。
「オレは、あの紅蓮の魔導師を許さない。何があっても、必ずたおしてやる。……それまでは、ここには帰れない。……帰らない」
しばらくして旅支度を終えた彼はひっそりと家を出ようとした。
しかし、最後にウェンディの顔を見ようと踵を返した。
妹の乱れた布団を掛け直し、心の中で妹に語りかける。
（すまん。誰よりも強くなって、すぐ帰ってくるからな）
そう誓うと、妹はうっすら微笑み、
「……お兄ちゃん……ゆうしょ……おめで……スースー」
と寝言を言った。
デュランはくすりと笑みを浮かべた。そして、妹の向こう側のヘッドで寝るステラにも内心で語りかける。
（ごめん、ステラ伯母さん）
彼は頭を深く下げた。
後ろ髪を引かれながら、デュランは家を出る。しかし、すぐドアが開いた。
「お待ち！」
「！　おばさん……」
「ほら、同じブロンズソードだけど、こっちの剣と取り替えていきな！」
「これは？！」
「あんたの父さんが、若い頃に使っていた剣さ。ロキもこの剣で剣

術大会に優勝したんだ。決勝で英雄王を破ってね」
　初めて聞く、父と恩師の思い出にデュランは驚きを禁じえなかった。
「さぁ、いきな。ウェンディにはあたしからちゃんと言っておくから、後のことは大丈夫。旅立つ前にお城に寄って王様に挨拶していくんだよ。お待ちになってるから」
「国王陛下が！？」
「ロキの息子なら、きっと旅立とうとするはずだって……。流石だねぇ……まぁ、あたしも伊達にあんたたちの母親代わりをしてたわけじゃないかあ、そうなるだろうとは思ってたけどね」
　彼の心に熱い何かがこみ上げてくる。
「ありがとう、おばさん。きっと戻ってくるよ」
「あぁ、いっといで」
　彼は英雄王に会いに、城へ向った。
　玉座に入ると、英雄王が待っていたといわんばかりの顔で王座に座っていた。デュランはゆっくりと王の眼前に歩を進め、ひざまづく。
「旅たつのか、デュランよ……」
「王様、私が不甲斐ないばかりにむざむざと敵を逃してしまい、誠に申し訳ありません。私は、あの魔導師だけは許すことはできないのです。生まれて初めて敗北を喫したばかりでなく、わが国王陛下を侮辱した、あの魔導師を……。私は、あの魔導師を打ち倒すまでこの城には戻れません」
「そうか……。わかった。気をつけていくのだぞ！」
「ありがとうございます」
　玉座を飛び出るように出て行ったデュランの背を見ながら英雄王は思った。
「ふふふ。あいつ、いい目になりおった。以前はプライドが高すぎて心配だったのだがな……。ロキの若い頃にそっくりだ」

城を出て、城下町を抜けると、そこはモールベア高原――名前の通り何匹ものモールベア、そしてアサシンバグが彼の行く手を阻もうとする。しかし、彼は幾体ものモンスターを倒し、彼はウェンデルへの玄関口、ジャドへの定期船を出すマイアへと向った。

同じ頃、東の頂で一人の少女が燃え盛る故国の城を背にして旅立ち、聖都の神殿では幼子が想い人を追いかけるために画策していた。

デュランはマイアとフォルセナを分つ大地の裂け目の大つり橋を渡り、故国に別れを告げるかのように、決意を口にした。

「見てろよ、紅蓮の魔導師め！……オレは強くなる……誰よりも……誰よりも強くなってやる……。そして、必ず勝つ！……」

フォルセナに現れた紅蓮の魔導師に敗れ、自信を失いかけたデュランであったが、いつの日にか、あの魔導師に勝つ為、聖都ウェンデルへと旅立っていった。

だが、この時デュランは世界の命運をかけた戦いにやがて自分も巻き込まれていくことなど、知る由もなかった……。

物語は、まだ始まったばかりなのだ……。

# 第一章「運命の胎動」　第一話

一日半の船旅を経て、デュランはウェンデルへの窓口とも呼べる城塞都市ジャドに着いた。
船から降りる際に船乗りが
「何だか町の様子がおかしい。あんたも警戒しな」
と声をかけてくれた。
どうやら船乗りの見立ては正しいらしく、港から町中に入ると一人の男が来訪者に脅迫めいた挨拶を告げた。
「俺は獣人のルガー！討伐部隊のリーダーだ！ジャドの町は、我々ビースト軍が占拠した！大人しくしていれば、危害は加えない！また、この都市の外に出ることは許さない！港も門も封鎖する！」
デュランは驚いた。
「門まで封鎖されたらウェンデルに行けないじゃねぇか！？」

途方にくれながらジャドを歩いていると、至る所で獣人が我が物顔で歩いているのが見て取れた。その中でデュランは、一人隠れるようにしている獣人を見つける。
（獣人は鋼の肉体で、戦闘レベルも常人の何倍と聞くから力技での強行突破は厳しいだろう。しかし、手頃な奴から倒していけば、もしかしたら…）
デュランは路地でコソコソする獣人に声をかけた。
「おい、そこの奴！」
「う、うわっ！？」
獣人の男、いや青年はビクッと驚いていた。
その姿を見て、
（こいつは、他の奴らとは違うんじゃないのか？目に殺意みたいなもんがねぇ……）
「おまえも奴らの仲間なのか？」

「ち、違うよ！オイラはケヴィン。あいつらと同じ獣人だけど、ここには光の司祭様に会いに来たんだ。大事なトモダチを生き返らせたくて……」
「じゃあ、どうしてそんなコソコソしてるんだ？」
「オイラ、奴らと同じビーストキングダムにいた。でも、今はわけあって追われてる。だから、見つかるわけ、いかない」
「……そうか。疑って悪かったな。俺も光の司祭に会いに行きたいだがこの状況だ。どうだ、俺と強行突破に出ないか？」
「それ、無理。奴らは人間討伐部隊、獣人の中の選りすぐり。オイラらたち、かなわない。絶対」
「そうなのか。どうすっかなー？」
デュランは頭を抱えた。そんな彼を見かねたように
「夜を待つ」
「えっ？」
ケヴィンはそれ以上はなにも言わず黙ってしまった。

『夜』というキーワードを得つつも、デュランにはさっぱりだった。
（なんだよ、『夜』って？）
悩みながら歩いていると、すぐ横にＰＡＢがあることに気づいた。
（居酒屋か……。ここは夜になれば人が来るからな、なんか手がかりがつかめるかもしれない）
デュランはそう考え、店の中に入っていった。中はガランとして、暇を持て余してるマスターと旅人の出で立ちをした男がカウンターにいるだけであった。
「よお。あんたも旅人かい？こんなんじゃあ飲むしかないよな」
「そう言って飲みに来てくれる奴は殆どいないよ。町の人間は獣人が怖くて、夜は家の中に閉じこもっちまうのさ」
「そりゃ気の毒に」
するとマスターはデュランに顔を近づけて小声で言った。

「だがそこが町を抜け出す狙い目でもあるのさ。奴ら夜になると野生の血が抑えられなくなるのか、獣化しちまって見張りも手薄になるのさ」

「本当か！？そりゃ良いことを聞いた。ありがとう！」

デュランはパブを飛び出た。騒々しいその男の背に店にマスターは届かぬ声を叫んだ。

「あっ、おい！？……ちぇっ、一杯くらい飲んでけよな」

「ハハッ。ありゃ旅の素人だな。じゃああいつの分も俺が飲んでやる。もう一杯くれよ」

「おっ、流石だね、ダンナ！名前はなんていうんだい？？」

「俺かい？俺はホークアイっていうんだ。また来たときはよろしくな」

デュランは夜に備えて武器・防具を揃えに行くことにした。

しかし武器屋に行くと

「獣人の奴らに武器を没収されちまった。これじゃ商売あがったりだよ」

と商人がまさかな事を言い始めた。

「何！？武器置いてないってのか？」

「ああ。悪いね」

デュランは頭を掻き、仕方なく店を後にすることにした。すると、長い後髪を束ねた１５、６歳の少女が入ってきた。

（この子も武器を買いに来たのか？）

「あんたも武器を買いに来たのかい？だったら残念だか、それは無理だ。獣人共に持ってかれちまったらしい」

デュランはその少女に話しかけていた。緑色の服を着た少女は少し驚く素振りを見せる。

「そうなのですか…？でも仕方ないですね。ご丁寧にありがとうございます」

「あっ、いや、そんな礼を言われることじゃねぇよ」

（武器を買いに来たってことは、この子も旅人か？それにしても随分丁寧な言葉遣いをする子だな）

相手もデュランと同じことを考えていたらしい。

「あの、私は『リース』と言います。風の王国ローラントから来ました。あなたも旅人なのですか？」

「ああ。俺は草原の王国フォルセナのデュランだ。ちょっと訳ありでウェンデルに向かってるんだ」

「あなたもなんですか！？実は私もなんです。あの……、ここから出られる良い方法などご存知じゃありませんか？」

「それならパブのマスターが良い情報教えてくれるぜ」

「パブ……ですか？」

幼さを残す少女の顔が急に曇った。

「パブならさっき言ったのですが、カウンターに座ってた髪の長い男の人に、その……、気持ち悪いこと言われて……」

「ナンパされたのか？」

少女は無言で頷いた。

（たしかに、軽々しく声かけそうな顔してたもんな、あの長髪）

「なら俺が教えてやるよ。耳を貸してくれ」

デュランはリースに、夜になれば獣人は獣化して、見張りが手薄になるということを小声で伝えた。

（それにしても、こんな少女がモンスターのいる森の中を一人で進むなんて危険だな）

「ところで、君は一人でウェンデルに行くのかい？もしそうなら、旅は道連れ世は何とかだ、俺がお供してやろうか？」

リースは瞬きを二、三回してから微笑み、

「いえ、大丈夫です。こんな情報まで教えて頂いた上に、そのようなご迷惑はお掛けできません。それに私にはこれがありますから」

リースは腰背に仕舞う三槍に手をかけた。

（そんな華奢な体で槍術ができるのか？）

「そうかい？まぁ、無理にとは言わないけど」

「はい。ご心配ありがとうございます。それに私、こう見えても【アマゾネス】なんですよ。それでは、失礼します」
少女は礼儀正しく頭を下げ、店を出ていった。
「大丈夫かねぇ。まぁ、いいや。俺も行くか。武器売ってない武器屋に用はねえし」

デュランは店を出て、夜になるまでに体力を回復させようと思い宿屋に足を向けた。そこに女の馬鹿でかい声が訊こえた。
「いったいわねぇ!!どこ見て歩いてんのよ!!」
「なにぃ!キサマ、人間の分際でオレ様にたてつこうってのか!?」
「人間の分際?ふん!ただの狼男が偉そうにしてんじゃないわよ!」
誰かが獣人に喧嘩を売ったらしい。遠巻きに眺めるジャドの市民たち。デュランも思わず声の響く方向に目をやった。
「てめぇ、このアマ!随分ナメた口きくじゃねぇか!」
獣人に反抗的態度を取っていたのは、自分より少し年上の美人な女性だった。怒り心頭の獣人はその美女に今にも殴りかからんとしている。
「待てよ、獣人のおっさん!」
デュランの体と口はすでに動いていた。もともとの熱血漢であるからして、一方的なケンカを見過ごすことはできなかったのである。
「そんなガタイした男が女に手を挙げるとは、獣人ってのも情けない種族だな!!」
「なんだその目は!?やろうってのか!?」
「望むところだ!」
「ちょっとアンタ!」
「君は下がっていろ!」
視線を背にいる女性に向けて彼女を後ろに下げた。そして、剣を抜こうと前を見ると、すでに獣人は戦闘態勢にあり、剣を抜く間もなく、獣人の剛腕がデュランの体を吹き飛ばした。

気がつくと、デュランは宿屋にいた。獣人に倒されて、誰かがここに運んでくれたらしい。丁寧に治療までしてある。

彼は誰が世話をしてくれたのか気になり、宿屋のモテイさんに声を掛けようと立ち上がった。すると、周りの奴らがニヤニヤした目でデュランを見ている。

（なんだぁ？…さては、勢いよく出ていきながら返り討ちにあったのを笑っていやがるのか？くっそぉ！剣さえ抜ければあんな奴…）

そんなことを思いながら、番台のモテイさんに話しかけた。

「悪いんだが、誰がオレをここに連れてきて、こんな手当をしてくれたのか教えてくれないか？」

モテイさんもニヤついた目で

「いやぁ、ダンナも隅に置けない人だよ。あんたを連れて看病してくれたのは、紫の髪したレオタードの女性だよ」

「レオタード？」

（そういえば、獣人に絡まれてた女がそんな格好してたな。じゃあ、あの人が助けてくれたのか）

「さっきまで付きっきりであんたをみてたんだがね、さっき出て行っちまったよ。あぁ、ダンナがうらやましいよ」

モテイさんはなおもニヤニヤした目で見ていた。

（『うらやましい』？なにがだ？……ん、待てよ！）

「お、おい！今何時だ？」

「ええと、夜の８時過ぎだよ」

「しまった！モテイさん、宿代は？」

「あぁ、０ルクで良いよ。どうせ獣人のせいで儲けにならないからね」

「そうかい、ありがとう！」

デュランは急いで宿屋を出て、南門に向かった。昼間いた見張り役はいないようだったが、その代わり二体のバウンドウルフが倒れていた。見ると、生新しい３つの刺し傷がある。

横目にそれを見つつデュランはつぶやいた。
「ありゃあ、三槍だな。……リースか！？なるほど、確かに強いな」

# 第二話

ラビの森に入っていくと、ちらほら草むらや木々の下にラビが眠っていた。
（こりゃあ戦闘もなくて楽だな）
そう思っていると、足下のでかいキノコがぴょこっとはい出てきて、デュランに攻撃してきた。
（しまった！マイコニドもいたのか）
慌てて剣を抜いて一太刀いれると、マイコニドは大きな悲鳴をあげて倒れた。すると、その叫び声にラビたちが文字通り跳ね起き、デュランに向かってきた。
「うわっ、この大群はなしだぜっ！」
そう言いながら、彼はラビの森を駆け抜けた。いや、逃げ出した。

やっとの思いでラビの大群から逃れると、目の前に一つの道標が道中に立っていることに気がついた。そこには『→ラビの森／滝の洞窟↓／←湖畔の村アストリア』とある。
「ウェンデルに行くには滝の洞窟抜けなきゃならねぇからな」
デュランは道標の指示に従って滝の洞窟に向かった。
しかし、薄暗い洞窟の入り口に足を踏み入れようとすると、デュランは目に見えない力に弾き返されてしまった。
「イテテテ。なんだぁ、結界かぁ？！」
もう一度入ろうとしても、結果は同じだった。
「参ったな…。仕方ねぇ、アストリアで作戦練るか」

彼は踵を返してアストリアに向かった。

夜といえど喧騒的なジャドとは打って変わって、アストリアは静かでひっそりとした小さな村である。

「時間も時間だし、一眠りしてから策を練るか」
デュランは小さな村には似合わない大きな宿屋に入り、少しの仮眠を執ることにした。
船旅とモンスターとの戦闘の疲れで、彼はすんなりと眠りについた。しかし、程なくして彼は眩しさのあまり目を覚ますことになる。
「…んっ……なんだ……もう朝なのか…？」
虚ろに時計をみると、陽が射すには早すぎる時間であった。しかし窓からは強烈なまでの光が射し込んでいる。
訳がわからずにいると、光は遠のくように弱まった。
そうしてデュランは気づいた。何か異変が起きているのだと。
跳ね起きて宿屋を出ると、村人は、ある者は好奇の目を向けて、またある者は畏怖の目をしてそれを見ていた。青白く輝き飛ぶ、光の玉を。
その光の玉は、村人の目から逃れるようにラビの森に出ていった。
彼の側にいる老婆は言う。
「恐ろしや…。『光り輝く玉現れん時、悪しき獣に世界は滅亡す…。』予言の通りじゃ…。恐ろしや、恐ろしや…」
デュランは不安と探求の狭間に揺れながらも、誘われるように光の玉を追ってラビの森に向かって行った。
モンスターを斬りつつ、目をやり光玉を見ると、時折その中に小さな人影が見えた。
追いかけながら、段々と光りが弱まっていくのがわかる。そして、もうずく消え入りそうな光の玉はアストリアの反対側にある花畑へとたどり着き、ふっと輝きを失ってしまった。
花畑に足を踏み入れ、光の玉が消えた場所に行くと、透明の羽を持った、小さな女の子が倒れていた。
「おっ、おい、大丈夫か？」
小さな少女は羽をぱたつかせて力なく飛び上がった。

「ええ、ありがとう。マナが少なくて力が出ないの」
「君はいったい……」
「私はフェアリー。マナの聖域から光の司祭に会いに来たの。…あなたは？」
「俺はデュラン。俺も訳あって光の司祭に会いに行くところだ」
「デュランか…。この際仕方ないわね。・・・よし、あなたに決めた！」
「んっ？何だって？」
「ううん。こっちの話。ねぇ、お願い！あたしをウェンデルの光の司祭様の所に連れて行って…。私にはもうこれ以上飛ぶ力が残っていないの・・・」
「そいつぁ構わないが、滝の洞窟に結界が張ってあって、中に入れないんだ」
「それは、私がいれば多分大丈夫。…さぁ、急いで！　マナの聖域に異変が起こっているの…」
「『マナの聖域』？なんだ、そりゃ？」

デュランが疑問符を浮かべると、突然湖の反対側に赤い光が見えた。何かが燃えているような明るさだった。二人は驚きながら、湖に駆け寄った。
「！？　アストリアの村の方だ…一体何が起こったんだ？　急いでいってみようぜ！」
「私はあなたの中に入り込んで休ませて貰うね。しばらく姿は見えないけど、心配しないでね…」
「ええっ？！ちょ、ちょっと待ってくれ！」
デュランの態度を気にも溜めず、フェアリーは彼の頭の中に入っていく。慌てふためくデュランに彼女は言った。
（さぁ、早くアストリアの方に行ってみましょう！）
「うへぇ、頭の中から声がするっ！」
（いいから、早く！）

「…わかったよ！」

フェアリーと一緒に行くことになった。
デュランは急いでアストリアに戻った。

しかし、もはやそこに村はなかった。あるのはボロボロになった家と燻ぶる火種だけである。
「一体何があったんだ…？！　皆は？」
（ビースト兵に襲われたようね…）
デュランは村人の事を思い出していた。平和そうに宿屋をやっていたおじいさん、無垢な顔して遊んでいた子供の姿、光のたまに怯えるおばあさん…。
「畜生、…なんてひどい事を！」
彼は拳を地面にたたきつけた。
（一刻も早くウェンデルの光の司祭様にこの事をお知らせしなければ…。今度はウェンデルが危ないわ…）

デュランは深くうなづき、滝の洞窟に急いだ。

# 第三話

滝の洞窟の入り口に行くと、一人の女が立ち往生しているのが目に入った。ジャドで獣人に啖呵を切っていた女だ。
「あれ？あいつは…（月の光と滝の水で、なんか神秘的だな…。どっかの姫みてえだ）」
向こうもデュランに気づいた。そして顔を赤らめて一人焦り始めた。
「あっ！あんたは…」
「よお、久しぶりだな。あんたも…」
「ち、違うのよ！あれは、その…、私も眠たくなって、それで触れちゃっただけなんだからね！」
レオタードの女は何故かパニックに陥ってデュランの言葉を切った。それも必死に。
「…は？」
「…えっ？」
前者はデュランの『何言っているんだ、こいつ？』という意味の、後者は女の『こいつ、覚えてないの？』という意味の疑問符である。
「覚えてないのなら良いのよ！ふん！…それより、あんたも滝の洞窟に入るの？だったら無駄よ。辞めときなさい」
女は目を合わさず、顔を少し紅潮させながら言った。
「あぁ、それなら…」とデュランはフェアリーが結界を解いてくれることを話した。
「そうなの！？ラッキー！」
「オレはデュラン。草原の王国フォルセナから来たんだ」
デュランは紅蓮の魔導師のこと、強さを求めてウェンデルの光の司祭に会いに行くことを話した。
「…ふぅーん。そうなんだ。あたしはアンジェラ。魔法の国アルテナから来たわ。その紅蓮の魔導師は私の幼なじみね。って、勘違い

しないでよね！私もあいつに殺されかけてここにいるのよ」
　アンジェラはこれまでの事情を語り始めた。
「実は私、アルテナの第一王女なのよ。第一って言っても、お母様、つまり今の女王の一人娘なの。でも、これっぽっちも魔法使えなくて…。魔法は【知性】を高めれば収得できるんだけど、ちまちま本読んだり、話を聞くのってつまらないからサボってばっかりだったわ。…そんなある日、私はお母様、【理の女王】に呼ばれて玉座に行ったの、そしたら紅蓮の魔導師も居て、こう言ったのよ。王国を守るためにマナストーンの力を得る、力を解放する人柱におまえの命を使うって…。アルテナは極寒の地にあって代々王女がその魔力で雪と冷気を防いできたの。でも、マナの減少でそれが維持できなくなって、それでマナストーンの力が必要になったのよ」
「それで、その後はどうしたんだ？」
「わからない。お母様に殺されるなんて嫌だって思って、気がついたら国の外、雪原にいたのよ。その後は助けを求めて歩いてたんだけど、寒さとショックで気を失ってしまったの。でも、近くの村人さんが助けてくれたわ。その後は宿屋にいた占い師さんに光の司祭のこと聞いて、光の司祭から魔法の使い方を教わって、私が大魔導師になればお母様も私を認めて人柱にするなんて言わないと思った。だから私はここに来たのよ」
「…そうか。どうやらオレたちは似た者同士みたいだな。理由は違えど、今の自分より強くなるために旅に出た。…どうだ？オレと一緒に行かないか？」
　アンジェラは再び顔を赤らめ下を向き、手をもじらせた。
「ふぇ！？でも、その、あんた、悪くはないけど、私たち知り合ったばっかりだし…」
「何の話だ？どうせウェンデルまでは同じ道のりなんだし、一緒にいった方がモンスター退治も簡単で早いだろう？」
「えっ？あっ、そうよね！ふ、二人ならモンスターも倒しやすいし、ウェンデル行きやすいもんね？そうね、そうしましょう！オホホホ

…」

アンジェラは少し恥ずかしそうな顔をしていた。

（変な女だなぁ）

デュランの率直な感想である。

「そうとなったら善は急げだ！」

デュランは洞窟の入り口に駆けていった。

「あっ！ちょっと！！」

アンジェラが叫ぶと同時に、デュランの体が結界に弾き返された。

「もう。せっかちなんだから」

デュランの頭からすぅっとフェアリーが現れて言った。

「あなたがフェアリー？」

「ええ。はじめまして。アンジェラ」

アンジェラは不思議そうな目で、フェアリーは優しい目で、互いの顔を見ていた。

「いま結界を解くから」

フェアリーはそう言って呪文を唱えると、体から閃光を発した。

「これで大丈夫よ」

デュランがそぉーと手を出すと、さっかまであった見えない壁がなくなっていた。

「よしっ、行こうぜ」

デュランとアンジェラ暗い洞窟の中に入っていった。

「そう言えば、まだ礼を言ってなかったわね。ありがとう」

「あっ？洞窟に入れたのフェアリーのおかげで、俺はなにも…」

「そうじゃなくて、ジャドで助けてもらったお礼。それに、私のせいであんなことになってしまって…」

「あぁ、そのことか。別にいいさ。俺も獣人どもにはムカついてたし」

（なになに？ジャドで何かあったの？）

フェアリーが話に入ってきた。
「え、え～とね、私がジャドで獣人に襲われたのをデュランが助けてくれたの」
（へぇ～。デュラン、やるじゃない）
「んっ、まぁな」
（ホントはアンジェラにいい格好見せようとしてたんじゃないの～？）
「何言ってんだ！？そんなわけないだろ！」
（ホントかしらね～？ほら、アンジェラも色っぽい格好してるし、変なこと考えてたんじゃないの～？）
「なっ、なんてこと言うんだ！？」

デュランはアンジェラをちら見した。

「ちょっと！どこ見てるのよ！変態！！」
アンジェラは胸を隠しながら叫ぶ。
「ちが、誤解だ。服装云々言うなら、フェアリーなんか何も着てないじゃないか？！」
（だって私、人前に姿見せないし、半透明だから見えないじゃない）
「そりゃそうだが…」
「ちょっとデュラン！あんた、フェアリーまでそんな目で見てるってことはやっぱり…」
「だから、違うって！俺が変態なら、お前だって獣人に食ってかかっていったんだから、おてんば姫じゃないか！」
「なにそれ！ひっど～い！お礼言って損した、フン！」
アンジェラがそっぽを向くと同時に
「キャッ！！」
「あぶねぇ！」
ほの暗い洞窟の中、アンジェラは足場がなくなってることに気づかず、滝壺に落ちかけてしまった。しかし、寸でのところでデュラ

ンが彼女の手を取り、大事を免れた。

「ちょっと早く引き上げなさいよ！！」
「やれやれ」
「早くしなさい！」

足をバタつかせるアンジェラを引き上げた。

「暗いし、足場も濡れてるんだ。気を付けろよ」
「何よ、偉そうに！そういうのは先に言ってちょうだい！」
「ふぅ。やっぱりおてんば姫だな。それだけ元気なら大丈夫だろ。先を急ごうぜ」
「あっ、ちょっと！置いて行かないでよ」

先に歩を進めたデュランを追うように、アンジェラも立ち上がり歩きだした。
しばらく歩いていくと
「たちけて～」
との悲鳴が聞こえた。
「なんだ、この声？」
「…下から聞こえるわ。行ってみましょう」

二人は洞窟をすすみ、声のする方に向かった。
すると一人の幼女が崖道から落ちかけていた。
「ひぇ～！たすけて～！」
「大変だ！」
二人は駆け寄り、その女の子を助け上げる。少女は息をを整え
「うぅ、危なかったでち」
「君みたいな子供がどうしてこんな所に？」

すると女の子は頬を膨らませて
「こんなびしょうじょをちかまえて子供とはちつれいでちね！こう見えてもあたちは１５才のぴちぴちの女の子なんでちよ」
（こんな幼い顔して、俺の二個下？！）
「あ、ああ。それは悪かった」
「まったくもう！気をつけるんでちよ！…あたちはシャルロット。普段は光の神殿にいるんでちが、ちょいと訳ありであすとりあに行ったんでち」
「訳あり？俺もアストリアにいたんだぜ」
デュランの言葉など無視し、シャルロットは涙を浮かべて語り始めた。
「うぅ、じつは、光の神殿にはひーすっていう神官がいるんでちが、昨日あすとりあに現れた光の玉をちょうしゃしに行ってしまったんでち。大好きなひーすに何かあったらと心配になったあたちひひーすの後を追って行ったんでち。そしたら…、そしたら…」
「そしたら？」
「ラビの森でひーすに再会したんでちが、道化の格好した変なおやぢにひーすを連れ去られてしまったんでち。ぐすん、だから、あたちはこのことをおじいちゃんに知らせようとウェンデルに戻ろうとしたんでち。でも、道を間違えてあそこから落っこちて…」
シャルロットは、さっきアンジェラが落ちかけた崖を指さした。
「そこに俺たちが来たってことか」
「ねぇデュラン、私達も光の司祭様に会いにウェンデルに行くんだし、この子も送っていって上げようよ」
「なーんだ！あんたしゃんたち、うちのおじいちゃんにご用だったんでちか？」
「『おじいちゃん』？」
「そうでち！こう見えてもあたちは光の司祭のかわいい孫娘なんでちよ！だったらあたちのことを助けてもばちはあたりまぇん！さ、うぇんでるまで送るんでち！」

「現金な子だなぁ。じゃあ、行くとしよう」

シャルロットが仲間になった。

新たな仲間を連れ、モンスターを倒しながら先を進むと、出口が明かりを差し込みながら見えてきた。洞窟を抜けると、ウェンデルはすぐそこである。

獣人に占領されたジャドとは違い、聖都ウェンデルは平安としていた。静かな町中を歩いていくと、大きな建物があった。光の司祭がいる、光の神殿である。

デュランとアンジェラが神殿に一歩足を踏み入れると、シャルロットだけが足を止めた。

「あたちはここで待ってるでち。勝手に神殿を抜け出したのが知れたら、きっとおじいちゃんに怒られるでち」

「…そうか。わかったよ」

シャルロットが仲間から外れ、デュランとアンジェラは神殿の中に入っていった。

# 第四話

道なりに進むと、一際大きな空間に出た。そこに神々しい女神像と一人の老人が立っている。

（あの方が光の司祭よ）

フェアリーに言われ、デュランたちは司祭のもとに駆け寄った。

「あなたにもマナの女神の祝福があらんことを…」

司祭が祈りを捧げたのも構わず、デュランは焦る気持ちを押さえられずに声を荒げた。

「光の司祭、俺は強くなりてぇんだ！どうやったらクラスチェンジ出来るか、教えやがれ！」

「…クラスチェンジは武術や肉体を鍛えるのみならず、自己の精神を高めることが必要じゃ。今のお主にはクラスチェンジはできまい…」

驚きを隠せないデュランが反論しようと口を開けると、アンジェラの掌ていが左頬にクリーンヒット。彼は勢いよく横に飛ばされてしまった。

「光の司祭様、私、お母様に見捨てられてしまったの。魔法が全然使えなくて……。お願い、どうすれば魔法が使えるようになるか教えて！」

すると、フェアリーが姿を現し、焦る二人を諫めた。

「待って、二人とも。まず私に話をさせて。…司祭様、私はマナの聖域から参りました。世界からマナが減少し、聖域のマナの樹が枯れ始めているのです」

「何と！大変じゃ！！　マナの樹が枯れれば、マナストーンに封印されし神獣達が目覚め、世界は滅んでしまうぞ！」

「おい！二人で何の話してんだ？！」

デュランの疑問に、司祭は呆れと驚きを併せたような顔で答えた。

「何を他人事みたいに言っておる。おぬしはフェアリーに選ばれし

者、お主が聖域に行ってマナの剣を抜かねばならぬのじゃぞ！！」
「なんだよ、それ！そんなの聞いてねーぞ！どういうことだ、フェアリー！？」
「……ごめんなさい。マナの減少によって、私たちは聖域の外では誰かに取り憑いていないと死んでしまうのよ。あの時、あなたに逢っていなかったら、今頃私は……」
「はいはい。そりゃよかったね。じゃあもういいだろ？　とっととそのジジイにでも取り憑いてくれ」
「それが出来れば苦労せんわい。フェアリーは一度宿主を選んでしまうと、その宿主が死ぬまで一生　離れることが出来んのじゃ！」
「そんなぁ！俺は嫌だぜ！俺にはそんな剣なんて必要ねぇからな！！」
「でも、これはデュランにとってもチャンスよ。マナの剣を抜くためにはマナストーンの近くにいる精霊の力を借りなきゃならないし、その途中でクラスチェンジが出来るかもしれないわ。そうすれば、紅蓮の魔導師にも勝てるだけの力を手に入れられるはずよ」
「あっ、てめ、俺の頭の中、勝手に覗きやがったな！……でもちょっと待てよ。その【マナの剣】ってなんなんだ？」
「マナの剣…、それは全ての精霊を司る古の力の象徴……」
司祭は遠い目をしながら語り始めた。
「マナの女神が世界を創造した【黄金の杖】の仮の姿…。マナの剣を手にせし者、世界を支配しうる力、与えられん…。その剣、今なお、マナの樹の根に密かに眠らん…。マナの樹が完全に枯れてしまう前にマナの剣を抜くことができれば、マナの女神様は再びお目覚めになられて世界をお救いくださり、望みも叶えてくださるじゃろう…」
「ホントか？！…で、そのマナの聖域にはどうやって行くんだ？」
「ごめんなさい。マナが減ってしまい、私にはもう【聖域へのトビ

ラ】を開けるだけの力は残っていません」
　再び司祭は遠い目をして語り始めた。
「世界の様々な所に【マナストーン】と呼ばれる神獣が封印されし８つのエネルギーポイントがある…。これらのマナストーンからエネルギーを解放すると、マナの聖域と現世をつなぐ【聖域へのトビラ】が現れる。このトビラに入れば、マナの聖域へとたどり着けるのだが、マナの女神が眠りについたとき、聖域を現世から封じるため、８つのマナストーンのエネルギーは封じられてしまった」
「どうすればいいんだ？」
「大昔には、古代魔法と呼ばれる呪法によってマナストーンのエネルギーを自在にコントロールする事が出来たと言われている。しかし、その呪法をめぐり、利権を奪い合う国々によって戦乱が起こり、世界は神獣以来の危機を向え、滅亡寸前にまでいったことがある。辛うじて生き残った者たちは、同じ過ちを繰り返さないよう、その古代魔法を禁断の呪文として術者の命を奪うような呪いをかけ、封印してもうた。今では失われた魔法として誰も知る者はいない…」
「……」
「一つだけ手があるよ。マナストーンの近くには必ずその属性の精霊たちがいるはずよ。彼らの力を借りる事ができれば、残されたマナの力で私でも聖域へのトビラを…」
「その手があったか。お主たちが通ってきた滝の洞窟の上には光のマナストーンがあると言われている。滝の洞窟で光の精霊ウィル・オ・ウィスプの力を借りに行くのじゃ、フェアリーと共に滝の洞窟に行って調べてみるといい」
ずっと話を聞いていたアンジェラが口を出した。
「ねぇ、フェアリー。もしかして、あなた達と一緒に行けば、私の願いも叶うの？」

「ええ。精霊の力を借りれば精霊魔法位なら使えるようになるわ。一緒に行きましょう！」
「やったぁ！デュラン、私もあんたと一緒に行くからね！断っても着いて行くから！」
「わ、わかったよ。まぁ、とりあえず、いっちょ精霊探しに行くか！」

そう言って、デュランたちは司祭のもとを去った。

「つっても、あの洞窟のどこに精霊がいるんだ？」
「さぁ？聞いてみれば。あっ、すみませーん」
デュランの疑問に安易な返事を返したアンジェラは近くにいた修道女に話を聞きに行った。
「私たち滝の洞窟に行ってウィル・オ・ウィスプに会いたいんですけど、どこにいるか知ってますか？」
（おいおい、なんて軽い女なんだ？！）
（ウフフフ。でも、行動派でいいじゃない）
（それはそうだが…）
「何ぶつぶつ言ってんのよ」
頭の中でフェアリーと会話しているうちに、アンジェラは聞き込みを終えて戻ってきた。
「それより今聞いた情報によると、ウィスプは洞窟の上部の東側によく出るみたい。でも、ただ、奥からズーンズーンって、変な音が聞こえるようになって、それ以来見かけないんですって」
「そうか」
「うん、よくわかんないけど、行ってみれば何かわかるかも！」

神殿を出ると、シャルロットが二人を待ち構えていた。
「中でおじいちゃんとの会話を聞きまちた。あんたしゃん、実はす

ごい人だったんでちね。こうなったら、あたちも着いて行きまちゅからね！そのボインのおねぇちゃんも連れて行くんだから、嫌とは言わせないでち」

「ボ、ボインって…」

デュランは困惑し、赤面したアンジェラは咄嗟に胸を隠しながらシャルロットの眼を見た。その決意に満ちた強い眼に敵う気はしなかった。

「わかった。君を連れていくよ」

こうしてシャルロットを再び仲間に加え、三人は滝の洞窟に進むこととした。

モンスターを退けながら先ほど通った洞窟の道を引き返し、シャルロットと出逢った場所まで戻ると、

（ちょっと待って）と、フェアリーが姿を現した。

「こいつがふぇあり―しゃんですか？ちっこいでちねー」

「フフ、あなたもね」

変わらぬ笑みで嫌味を返したフェアリーは、滝の下へと降り、次に上へと昇って行った。そして戻ってくると

「この上に横穴があったわ。そこの奥からほんの少しだけウィスプの気配を感じたわ」

「よし、そこに行ってみよう」

三人は再び歩を進めて、横穴が見える場所にたどり着いた。横穴は、彼らがいる場所と地続きではなく、離れた場所にあったのだ。

「フェアリー、横穴の見える場所まで来たんだが…」

デュランの困惑した声にフェアリーは姿を現して言った。

「そっか。あなたたち、飛べないんでものね。でも、大丈夫。ここ

だったら滝の水からマナエネルギーを取り出して、あなたたち三人分くらいなら向こう岸に渡せるから」
「はい、フェアリーさん、質問でーす」
アンジェラが手を挙げた。
「もし力が足りなくかった場合はどうなるんですかー？」
「うーん、そうねぇ…。落ちるんじゃない？　やっぱり」
落ち着いていた様子だったアンジェラは顔を引きつらせて態度を急転させた。
「いやいや！絶対いや！この高さだよ、落ちたら死んじゃうよー」
半べそ状態の彼女の手をデュランは握った。
「大丈夫だ。俺が守ってやる。ほら、手、つないどいてやるから」
アンジェラは少しを頬を赤らめ、彼の手をしっかりと握った。そして小声で
「う、うん。ありがと…」
「ケッ。滝の側なのに、ここはあちゅいでちねー」
幼いシャルロットでさえ、二人のやり取りはウザかった。
「ウフフ、それじゃあ、行くね」
フェアリーが呪文を唱えると、三人の体は宙に浮き、あっという間に反対側の岸に移動した。
「これでよし！」
そう言って、フェアリーはデュランの体に戻っていった。
「いつまで手をつないでるんでちか？」
アンジェラは岸を渡り終えた後もデュランの手を握っていたので、シャルロットはジトッとした目で彼女を見上げた。
「あっ！ちょ、ちょっとあんた！いつまであたしの手を握ってんのよ！！？」
幼女の指摘に応じるように、アンジェラは思いっきりデュランの手を振りほどいた。
「イッテ。なんだよ、いきなり！」
「淑女の手をなんだと思ってんのよ」

アンジェラはぷりぷり怒りながら、先に進んだ。そんな彼女の背中を見ながらデュランは呟いた。
「淑女って、誰のことだよ…」
「デュラ～ン、何か言ったかしら？」
「（どんだけ耳がいいんだよ？！）い、いや、何も」

そう言って三人で道を進んでいくと、妙に開けた場所に出くわした。
「なんでちか、ここは？」
入るや否や、ヒューという何かが空を裂くような音が聞こえてきた。
（気をつけて、何か来るよ！）
フェアリーが忠告を発したと同時に、空から巨大なモンスターが降ってきた。
「なんだ、この甲殻類は？！」
「こいつはフルメタルハガーでち。昔はよくうぇんでるを襲っていたと訊いたことがありまちが、こんなに大きいはずは…」
（ウィスプの気配、この中からするよ！）
「なんだって？！」
デュランが驚きの声を上げると、フルメタルハガーはその大きな目からビームを出してきた。彼は剣を盾代わりにして、それを防ぐ。
「気をつけろ、こいつ、敵意剥き出しだぞ」
嘲け笑うような泣き声を出すフルメタルハガーを睨みながら、彼は言った。そして、三人で敵を攻撃し始めた。
しかし、
「くぅ、こいつ、すっごい硬いよ」
「いくら叩いても、効いてないみたいでち・・・」
「くっそぉ…」
デュランは敵の体を良く見た。
「（どこだ？どこかに弱点があるはずだ……）そうか！目だ！目を

狙って攻撃するんだ！」
「そっか、目まで硬い生き物なんていないもんね！」
三人は俄然フルメタルハガーの目を狙い始めた。すると、フルメタルハガーは目を閉じてしまった。
「これじゃ、攻撃があたらないでち」
「でも、あっちもあたしたちが見えないから、お互いに攻撃できないわ」
「その通りだ。ほら、痺れを切らして、目を開けようとしてるぜ」
デュランの言葉通り、敵は目を見開いた。そこを三人は待ってましたと言わんばかりに攻撃を加えた。
すると、フルメタルハガーは足を踏ん張り、空中高く飛んだ。
「どうしたのかしら、突然」
「あまりのいたちゃに飛び上がったんでちかね？」
すると、再びヒューをいう音が聞こえてきた。
「まさか、…おまえたち、離れろ！」
デュランは二人の襟首を掴み、自身の体と共に後ろに飛びのいた。すると、それからフラウメタルハガーの巨体が振ってきて、どすーんという大きな音を立てて、地面を揺らした。ダイブアタックである。
間一髪のタイミングでそれを交わした三人は、すぐさま立ち上がると、再び敵の目を殴り、剣を突き立てた。

度重なる攻撃にフルメタルハガーの目はつぶれ、ついに力なく倒れたのであった。そして息を切らして立つ三人前で、モンスターの大きな口から光の粒子が飛び出し、一つの大きな光となる。
「見て、あれがウィスプだよ」
三度フェアリーは姿を見せて言う。
「ちわっス、みなさん！助けて頂いて、どうもッス」
「（随分軽い奴なんだな。）助けたって、何がだ？」
「いやあ、実はオイラ、先日あのフルメタルハガーに食われてしま

ったんスよ」
「それで、あのフルメタルハガーはあんなに大きかったのね」
「そうなんすよ。ずっとオイラのエネルギー吸い取ってて。でも、みなさんが助けてくれたおかげで、出られることができたッス」
「そうか。実はウィスプ…」
「あっ、ご用件ならフェアリーさんからテレパシーで聞いたッス。喜んで力を貸すッスよ。フェアリーさんもスけど、僕ら精霊もマナがなくなっちゃったら存在出来なくなっちゃいますからね」
「そうなのか。でも、よかった。これからよろしくな」
「よろしくッス」

光の精霊ウィル・オ・ウィスプが仲間になった。

「おや？　おやおやおや？　みなしゃーん、ちょっとこっち来るでち」
シャルロットは何かを見つけたらしく、入ってきた場所とは反対側の位置にデュランとアンジェラを呼んだ。フェアリーとウィスプの憑代体たるデュランもシャルロットに駆け寄った。
「これをみるでち。今の戦闘のしょうげきであいたみたいでち」
シャルロットが指差す場所には、ぽっかりと大きな穴が開いていた。
「これは近道になるな」

そう言って穴を潜った三人。しかし、そこにはゾンビの大群が待ち伏せしていた。

「こいつはヤバいな、まださっきのダメージがあるってのに」
「ここは私にやらせて！」
アンジェラが申し出た。
「大丈夫。ウィスプとつながった時、呪文は解ったから」

そう言うと彼女は素早く呪文を詠唱した。
「ホーリーボール！！」
どこからとなく真白に輝く光玉が現れ飛び交い、膨張・炸裂し、閃光が辺りを包んだ。
その光を浴びたゾンビは断末魔と共に浄化され消えていった。一体も残らずに。
「やったー！！」
アンジェラは初めて魔法を使えたことに慶びを隠しきれなかった。
（デュラン…）
フェアリーがデュランにだけ話しかけた。
（この先、彼女とは絶対に行動を共にした方が良いよ）
（なんでだ？）
（精霊魔法っていうのはね、基礎知識があれば大抵の人間が使えるの。でも、その威力は術者の魔力次第。いまアンジェラは初めて魔法を使ったのに、一撃で大量のモンスターを倒したわ。今の威力は何十年修行した魔導師のレベルよ。彼女の潜在的魔力は並じゃない。絶対にこの先私たちを助けてくれるわ）
「ふーん」
「ちょっとデュラン！何が『ふーん』よ。あんたも一緒に喜びなさい！」
いつの間にかシャルロットと手を取り合って踊っていたアンジェラは、デュランの手まで取り踊り始めた。
「お、おいっ！アンジェラ！？」
困惑しながらも、デュランはアンジェラの勢いに躍らされていた。
（あ、あの、アンジェラ…）
「あら、何かしら？あんたも躍る？」
（その、喜んでるところ悪いんだけど、そろそろ先に進まない？？ビーストキングダム軍がウェンデルに向かってるかもしれないし…）
「あっ、そっか！」
アンジェラが突然手を離したせいで、デュランもシャルロットも

勢い余って倒れてしまった。
「うぅ…、いたいでち」
シャルロットはおしりをさすりながら立ち上がった。
「おてんば姫め…」
「ほら、とっとと行くわよ。さっきの離れ道はすぐそこみたいだし」
三人は足場のない渡り道に出た。

「じゃあ、フェアリー、さっきみたいに頼むよ」
「任せて」
さっきと同じ様に、フェアリーの魔法で対岸に高速移動した。
しかし、対岸に着く寸前、ジャドを占領していた獣人、ルガーが暗所から現れた。
「なに!?」
三人が驚きながら対岸に着地すると同時に、ルガーの一撃が三人を襲った。

「うわぁぁぁ!」
滝壺へと落ちていく三人を見ながら、残されたフェアリーは愕然とした。
「なんて酷いことを…」
「貴様等が結界を解いてくれたおかげで、我々もウェンデルに行くことができる。礼を言うぞ、フハハハ」
「うっ…」
「行くぞ」
獣人はきびすを返し、道なりに歩きはじめた。

一方真っ逆様に落ちていた三人であったが、デュランはとっさにシャルロットを突き飛ばし、下の渡り道に落ちるよう軌道を変えた。
「あいたっ!」

上の崖とは１０メートルに満たない位の高さであったから、命に関わることはないと踏んでいたのだ。

「おまえは光の司祭にこのことを伝えるんだ――！！」

デュランはそう叫ぶと、横で一緒に落ちていくアンジェラに手を伸ばし、抱き寄せた。そして、ものすごい音ともに崖下に落ちた。

デュランに身を挺してもらったおかげで、アンジェラは何とか意識を保っていた。しかし、

「デュ…ラ…ン」

彼の名を呼び、その腕の中で意識を喪失した。

# 第五話

……

……

……

（なんだこれ？　夢？）

今、デュランの目には大きな大樹とその太い根に刺さる一本の剣、そしてその周りを不安げな表情で飛ぶ４人のフェアリーが写っていた。

その中の一体が言った。

「このままじゃ、マナの樹が枯れちゃうわ」

「早く聖剣を抜く勇者を見つけないと」

「でも、どうやって？」

「光の司祭様に聞いてみてはどうかしら？」

「そうね。そうと決まれば、早く行きましょう！」

フェアリーたちは大樹の元を飛び立ち、現世へと向った。しかし、その途中、一体のフェアリーが苦しい顔をし始めた。

「ハァ、ハァ。私はもうダメみたい」

「何言ってるの。下界はもうすぐよ。頑張って！」

「ハァ、ハァ、ハァ。もうダメ、私の分まであなたたち頑張って…」

そういって一人のフェアリーが力尽きた。そして程なくしてもう一体、二体……。そして、最後の一人も苦悶の表情を浮かべたが、再び力をみなぎらせ飛んでいった。

（そうか。俺が出会ったフェアリーはこいつか……。これは…、フ

ェアリーの夢？）

……

……

…

「う、うぅ、ここはどこだ？……アンジェラ！」

デュランは意識を取り戻すと、近くに転がっていたアンジェラの体を抱き寄せた。デュランの声に彼女も目を覚ます。

「デュ…ラン？…良かった…生きてて…」

彼女の声には力がなかったけれど、デュランの無事を心から喜んでいるみたいだった。

彼は辺りを見回した。

「ここは…、牢屋か？！」

傷だらけの体に鞭打ち、鉄格子の場所まで行って、彼は叫んだ。

「チクショー！こっからだしやがれ！！」

「おい。あまり騒ぐな」

不意に隣の房から声がした。デュランは壁際に移動して声をかける。

「ここはどこなんだ？」

「ここはジャドの牢屋さ。あんたは俺より少し先に容れられてたみたいだけど、良かった、生きてたみたいだな」

「あぁ、だが俺たちは早く移動しなきゃならねえんだ。どうにか抜け出せねぇかな？」

「そいつは名案だ。俺もここからは早く出たくてね。おっと！」

「オラァ！何を話してやがる！静かにしねぇか！！」

屈強な獣人が牢の前に現れた。すると、隣の房の男は

「すみませーん。こっちの鉄格子、なんだか鍵が開いてるみたいなんですよねー」

「なに？！」

牢屋番らしき獣人は慌てて隣の牢屋に駆けて行った。
「本当だ。しかし、一体どうやって？」
「簡単ですよ。お兄さん、ちょっとこっちに来てくれますか？」
獣人は男に言われるがまま房の中に入った。そして、男はすらりと外に出てドアを閉めて、錠を見せながら
「ほら、この針金を、こう、こう、こうして、こうすると…」
ガチャン！
「ほら、鍵が閉まった！」
「そうか、なるほど。…って、どうしておまえが外にいて、俺が中にいる？」
「へっへっへー」
「あっ、この野郎！だましやがったな！」
馬鹿な獣人を尻目に、男はデュランたちの房を開けた。
「さぁ、ここから出るんだ。これから街の皆で脱走するらしい。もうすぐ港から船が出るんだとよ。パブ屋のマスター情報だ。まず間違いねぇ。おっと、その前にあんたたちはそこの金の女神像で体力を回復させねぇとな」
デュランは意識を朦朧としているアンジェラを抱きかかえ、金の女神像に連れて行った。
すると、
「んんぅ…あたし……って、どこ触ってんのよ！？」
デュランは完全な言いがかりをつけられ、顔面にグーパンを入れられた。
「ぐへっ！さ、先に回復してなかったら、俺が死んでるぜ……」
「って、ここは？」
「ここはジャドだってよ。今から船に乗って脱出だ」
デュランは鼻を押さえながら、アンジェラに説明した。
「ハッハッハ。面白いカップルだな！さっ、こっからおさらばしようぜ！港に脱出船が待ってるはずだ！おっと、名前がまだだったな。オレはホークアイ、【シーフ】だ。よろしく頼むぜ！」

「オレはデュラン。【ファイター】だ」
「あたしはアンジェラ。【マジシャン】よ」
「そして俺たちはそんなバカップルではない」
「アッハッハッハ。では、そういうことにしておこう。デュランに、アンジェラだな。よし、行こう！」
地下の牢屋から抜け出すと、外はすでに夜になっているらしく、番をしているはずの獣人たちは全て獣化し、街中はバウンドウルフだらけであった。
そいつらとの戦闘をしながら港に行き、三人はマイア行きの最後の脱出船に乗り込んだ。

「ふぅ～、何とか逃げおおせたな」
「あいつらのおかげで随分時間を無駄にしてしまったわ」
出航した船の上、甲板で夜の潮風を浴びながら座る三人の前に、フェアリーが愚痴を言いながら出てきた。それに驚いたのはホークアイである。
「おわっ！なんだ、このミニかわい子ちゃんは！？」
「あっ、私の自己紹介がまだだったわね。私はフェアリーよ。よろしくね」
フェアリーはウィンクしながらホークアイに言った。それを見て、彼はハッとした顔を作った。
「『フェアリー』…、そうか！光の司祭が言っていたのはあんた達の事だったんだな！？」
「どういうこと？」
アンジェラが首を傾げ疑問符を浮かべる。
「あんた達の後に俺も光の司祭に会ったのさ。そん時に、フェアリーが現れて世界が混沌に向かおうとしているとかなんとか聞いたんだ」
「その様子だと、今一つ事の重大さを察していないみたいね。いいわ、ちょっと目を瞑って」

フェアリーはホークアイを諭すと、彼の頭の中に入っていき、しばらくしてから出てきた。
「彼の頭に直接話してきたわ。こっちの方が早いから」
「…そうか。世界はそんな大事になっていたのか…」
真面目な顔になったホークアイにアンジェラが話しかけた。
「ねぇ、あんたも光の司祭の所に行ったって事は何か悩み事でもあるの？」
「…ああ。実は、俺は砂の要塞ナバールから来たんだ」
「ナバールって、あの大盗賊団のか！？」
「そうだ。かつては英雄的義賊の集まりと言われていたナバールも、ある日を境に陳腐な盗賊団になっちまった。あの女、イザベラが現れてから…」
「イザベラ…？」
「ああ。俺たちの首領、フレイムカーン様が砂漠で行方不明になったことがあったんだが、数日後にイザベラって女を連れて帰ってきたんだ。行き倒れていたのを助けてもらったらしい。しかし、その日からフレイムカーン様はおかしくなっちまった。義賊としての誇りもプライドもなくしてきちまったみたいに。不思議に思った俺は親友のイーグルとフレイムカーン様とイザベラの周りを調べた。そしたら、イザベラが奇怪な邪眼をした男と会って、フレイムカーン様を操っていることが判ったんだ。俺とイーグルは現場を押さえたと思ってイザベラを取り押さえようとした。ところが、イザベラの妖術でイーグルが操られて…。俺は仕方なくイーグルを…」
デュランは苦しんでいるホークアイの肩に手をかけた。
「……すまん。牢屋に容れられた俺にイザベラは、イーグルの妹ジェシカに死の呪いをかけたと言いやがった。もし事実を話せば、呪いでジェシカは死ぬと…。誰にも何も言えない俺を助けてくれたのは、弟分のニキータだった。あいつのおかげでナバールを抜け出し、ジェシカの呪いを解くために俺は光の司祭に会いに行ったんだ」
「そうだったの……」

「なぁ、頼む！俺もおまえたちの旅につき合わせてくれ！マナの女神にジェシカの呪いを解いてもらいたいんだ！」
「わかった。もちろん良いぜ！」
「これからよろしくね、ホークアイ」
デュランとアンジェラは手を差しだし、ホークアイはそれをガッシリと握った。
「それで、これからどうするんだ？フェアリー？」
「そうね。残りの精霊を集めないと行けないんだけど、肝心のマナストーンの場所が不明確なのよね」
「そうなのか……」
「だから、私はフォルセナの英雄王の下に行きたいの。英雄王ならマナストーンの位置を知ってるはずだから。良いわよね？デュラン」
デュランは頭を掻きながら
「クラスチェンジするまで帰らねえって決めてたんだが、事が事だ。仕方ない」
「ウフ。ありがとう」
「なんだ、デュラン？会いたくない女でもいるのか？」
ホークアイがニヤケた顔して訊いてきた。
「ちげーよ。俺はフォルセナの傭兵なんだ。それが……」
デュランは自分が旅に出た理由をホークアイに話した。
「そうかい。あんたも熱い思いを胸にして旅に出たんだな。君もそうなのかい？アンジェラ」
「えぇ、私はね……」
デュランに次いで、アンジェラもこれまでの経緯を語った。
「そうか…。絶対精霊を集めてマナの女神様に会おうな！」

ホークアイが力強くそう言うと、ちょうど船は港に着いた。フォルセナ領自由都市マイアに。

# 第六話

「さぁデュラン！フォルセナに案内しなさい！」
「言われなくてもそうするつもりだ。フォルセナはここから黄金の街道を通って、大地の裂け目という崖にかかる吊り橋を渡ればすぐだ」
お姫様育ちがそうさせるのか、アンジェラは桟橋から降りるや否や、人差し指を突き出して言った。指を鼻先にさされたデュランは二人を引き連れてマイアを出ようとする。すると、町の出入り口に小さな人溜まりが出来ていることに気がついた。三人がその横を通り過ぎようしたところで、一人の男が話しかけてくる。
「よう、あんた知ってるかい？ウェンデルの司祭様、ビースト兵を駆逐した後に前よりも強力な結界を張ったらしいんだが、それが禁呪の一種らしく、呪いで倒れられたらしい」
「なんだって！？」
「その呪いを解ける神官ってのがいるらしいんだが、何でもそいつも行方不明らしい。光の司祭様まで倒れられて、一体世界はどうなっちまうんだろうな……」
男はそれだけ言って去っていった。
「ねぇデュラン。司祭様、大丈夫かしら……」
「うーん、正直わからないな。でも、シャルロットが側にいるんだ、大丈夫だろ。たぶん」
「だと良いんだけど……」

三人は光の司祭の安否気にしつつ、黄金の街道を進んだ。
そして、ポロンなどのモンスターを退け、大地の裂け目とよばれる洞窟に入った。大地の裂け目、そこは巨大な地下渓谷であり、その谷の深さがまるで大地が裂けてしまったように見えることから、

その名がつけられた。

「懐かしいな。ほら、この吊り橋を渡ればフォルセナは目と鼻の先だ」

デュランが先陣を切って大きな吊り橋を渡っていくと、橋の終わりに一人の女が立っているのに気がついた。

あまり見ない服だな、と思いつつ近づくと、その女もデュラン達に気がついた。すると、その女は驚いた顔を作り

「あっ！フォルセナ兵！…アンジェラ王女まで！！」

素早く笛を鳴らし、仲間を集合させた。

その行動にたじろぎながらデュランは叫んだ。

「その服はアルテナ兵かっ？！ここで何をしてやがる？！」

「うるさい！ここで見られたからには生かしてはおけぬ！」

「ちょっと！私はアルテナの王女よ！物騒なことはやめなさい！！」

アンジェラが制止しようとすると、その女性魔導士はじっと彼女の顔を見てニヤリと笑った。アンジェラも相手の顔を怪訝そうに見ていた。そして、何かに気付いた。

「あっ、あなた……」

アンジェラがみなまで言う前に、耳を疑うような言葉が返された。

「アンジェラ王女、理の女王様より反逆罪で抹殺命令が出ております」

「ま、抹殺？！そんな…。私が何をしたって言うのよ…」

あまりのショックにアンジェラはその場にへたり込み、涙を流し出す。

「おいおい、穏やかじゃねえな」とホークアイ。

「黙れ！おまえも仲間だな？！おい、例の魔兵器を使うぞ！こいつらを橋の上に閉じ込める結界を張れ！」

隊長格らしきその女が指示すると、二体のマシンゴーレムが吊り

橋の前と後からゆっくりと歩いてきた。

「アンジェラ、泣いてる場合じゃないみたいだぜ」

デュランに声をかけられたアンジェラが顔を上げ、こちらに向かってくるマシンゴーレムを見た。すると、彼女は驚きを露わにした。

「マシンゴーレムR?!こいつはアルテナで試作段階の新型のマシンゴーレムよ!ハイスペックだから、みんな気をつけて!」

言うや否や、二体のマシンゴーレムが徐に腕を延し、その二の腕部分まで赤く光り始める。

「気をつけて!ロケットパンチが来るよ!」

アンジェラの叫びを聞き、デュランとホークアイは橋の左右に飛びのいた。すると、さっきまで自分がいた場所をゴーレムの腕が剛速に飛び交っていった。

「あ、あぶなかった…。アンジェラの忠告がなかったらいきなり致命傷だったぜ」

「デュラン、呆けてる場合じゃないぜ!この機械人形をどうにかするんだ!」

ホークアイの一喝に身を引き締め、デュランは剣を抜いた。

二度三度と剣身を打ち込むが、マシンゴーレムの装甲は堅く、大きなダメージは与えられなかい。

「くぅ〜。かってぇ体しやがって〜」

「私に任せて!」

アンジェラは叫ぶと、覚えたての呪文を唱えた。

「ホーリーボール!」

前見た時と同様に、無数の光の玉が現れ爆発する。その衝撃で二体のマシンゴーレムはそれぞれ吹っ飛んだ。

「やったか?!」

「いや、まだだ!」

ホークアイの言葉通り、二体のマシンゴーレムは立ち上がり、三人を目指して進軍してきた。

「無駄です、アンジェラ王女。吹き飛ばされた時は肝を冷やしましたが、マシンゴーレムの装甲にはマジックシールドのシュがかけられています」

「ベェ～だ！一回位で何言ってんのよ！もう一発行くわよ！」

アンジェラが再び呪文を唱えようとすると、一体のマシンゴーレムの胸が開き、ロケットミサイルが発射されようとした。

「あぶない！」

ミサイルが発射されると同時に、デュランがアンジェラの前に立った。

「デュラン！」

「うわぁぁ」

ミサイルはデュランに直撃し、今度は彼が大きく吹き飛ばされてしまった。

「デュラン！」

デュランに駆け寄るアンジェラ。

「…ケガはないか？」

「大丈夫だよ…。ごめん、私……」

デュランはアンジェラの手を握った。

「あの時の、滝の洞窟での一発を、もう一度俺に見せてくれよ」

「でも…」

「大丈夫だ。次はうまくいく」

デュランの励ましにもう一度立ち向かう勇気を得たアンジェラは力強く頷いた。

「今度は俺とデュランでマシンゴーレムの動きを止める。敵なんか気にしないで、しっかり呪文を唱えるんだ！」

ホークアイは叫びながら、得意のダガーさばきをゴーレムに浴びせた。デュランも起き上がり、もう一方のゴーレムに突きを入れた。

「……邪気を吹き飛ばせ、ホーリーボール！！」
アンジェラがさっきより強く念じ叫ぶと、さらに大きな光の玉が現れ、空中に円を描いて四散した。
「くっ！なんて魔力なんだ！」
結界を張るアルテナ兵は驚いた。ついこの間まで全く魔法を使えなかったアンジェラとは思えない程の威力を目の当たりにして。
大きく吹き飛ぶマシンゴーレム。しかし、再び立ち上がる。
「やっぱりダメなの…？」
「いや！今度はばっちり効いてるみたいだぜ」
見ると、二体のゴーレムの装甲には亀裂が生じていた。
「デュラン、壊れた所に必殺技をぶち込んでやろうぜ！」
「おう！」
ホークアイの提案を受け、デュランはバチバチ音のしている亀裂に十文字斬りをお見舞いした。反対側では、ホークアイがキレイで素早く華麗な必殺技、背面斬りを披露していた。
「十文字斬り！！！」
「背面斬り！！！」
金属同士がぶつかる鈍い音が大きく響き、二体のマシンゴーレムは勢いよく吹っ飛んだ。その衝撃は凄まじく、デュランの相手だったゴーレムは吊り橋から落ちていった。そして、はるか下の方で大爆発を起こした。
一方、ホークアイのマシンゴーレムはぴくりとも動かなくなり機能を停止したみたいだった。
「やったー！」
三様の喜びを見せる三人。そしてデュランは結界を張る魔導士たちに指をさし言った。

「さぁ、俺たちを通して貰おうか！」
「うぬぬぬ……んっ？…ヤバイ！逃げろ！皆撤退だあ！！」
アルテナ兵はデュラン達の後ろを見ると、血相を変えて逃げ出した。
疑問符を浮かべて後ろを見ると、機能停止したはずのマシンゴーレムが立ち上がり暴走気味に腕と頭をグルグル回していた。
するとアンジェラが叫んだ。
「こいつ、魔力をコアに収束させてる。自爆する気だよ！」
「爆発するのか？！みんな、逃げろ！」
言うや否や、ゴーレムは赤く光り爆発した。同時に、吊り橋も大破して底知れぬ穴へと落ちていった。
三人は何とか元来た場所の崖っぷちに逃げ仰せていた。
「あ～、びっくりした！」
アンジェラは沈んだ顔をしていた。
「みんな…ごめんね……私のせいで迷惑かけて…」
「まったくアルテナって国は何てひでぇ国だ！」
デュランが怒りを口にすると、母国を悪く言われたアンジェラは態度を一変させた。
「何ですって、デュラン？！フンだ！あんたも吊り橋と一緒に落ちちゃえば良かったのよ！」
「まぁまぁ。痴話喧嘩は別の時にしてくれ。それより、これからどうするんだ？」
「なっ？！」
アンジェラは顔を赤らめた。
「そうだな。フォルセナへの一本橋も落ちちまったし、一旦マイアに戻るか」
「ちょ、ちょっと、デュランもちょっとは否定しなさいよ！」

黄金街道に出るため洞窟内を歩いていると、アンジェラの顔はどこか沈んでいた。
そんな彼女を見て、出口に差し掛かったデュランは言った。
「アンジェラ、見て見ろよ」
「なに、デュラン？……わぁ、綺麗」

黄金街道、その名の由来はこの道にしか咲かない花にある。この花は色素の関係で夕陽を浴びると光を乱反射し黄金色に輝くのである。故に、この花が咲き乱れる街道は夕方になるとまるで黄金のように輝くのであった。
そして、デュランたちが洞窟で戦闘を繰り広げている間に日は傾き、ちょうど今、日が沈む頃で黄金街道は正に黄金色に輝いていた。

「この道は夜になりゃ真っ暗になる。でも太陽が昇れば明るくなる。陽が沈む時も輝くんだ」
「へぇ、そうなんだ」
「でもな、その輝きは夜暗いからなんだ。吸収した光を夜に全部抜いちまうんだってさ。だから、日が照るときに明るくいられるんだ」
「……」
「俺たちも同じだ。暗い、ていうか、辛い時があるからこそ、日があたる時に十二分に輝ける。今はさ、色々辛いけど、必ず先は拓けると思うぜ」
「”大悪来たれば大善来たる”ってことだな」
デュランの言葉にホークアイが付け足した。
「今悪い時だからこそ、この先は善いことが起きる、そう変わっていくってことだ。昔、ある国の書に書かかれてた言葉だ」
「まぁ、そういうことだ」
「……ありがと。デュラン。ホークアイ」

アンジェラは微笑んで礼を述べた。

# 第七話

茜色の空、黄金色に輝く街道を駆けるデュラン、アンジェラ、ホークアイの三人。彼らがマイアに戻った頃にはすでに陽は沈んでいた。さすがに人の姿は少なく、まともな聞き込みは期待出来ないと考えた三人は宿屋に泊まり朝を迎えることとした。

夜が明け、三人は街中に繰り出した。朝の暖かな日差しの下、多くの市民が溢れていた。平穏な雰囲気の中で、ホークアイはほのぼのとしながらデュランに問いかけた。

「で、これからどうするんだ？」

「フォルセナに行くにはあの橋しかなかったからなぁ……」

この時、ホークアイとデュランの会話を耳にした男がいた。その男は二人の会話を聞くと、喜びながら話しかけてきた。

「なに、橋が落ちたとな。ウッシッシ、これはチャンスだ。おい、あんたたち、フォルセナに急ぎのようか？」

声をかけられた三人が声の主を見ると、そこには背の低い、いわゆるとっつぁん坊やと呼ばれてるようなおっさんがいた。

「あ、ああ」

「そうかそうか！なら、ワシに着いてきなさい！」

男は終始嬉しそうな顔を絶やさずに三人を一軒の家に案内した。三人も何か手があるわけではなかったので、その男に着いていった。

男は家を抜けると、裏庭に三人を案内した。そこには

「うおっ、でけぇ」

「フッフッフ、どうじゃ、立派じゃろ？」

三人の前に巨大な大砲があった。

「ワシはボン・ボヤシ、発明家じゃ！そしてこれは『ウルトラ・ス

ーパー・ハイパー・キャノン・マーク2』。これでお主らをフォルセナに飛ばしてやる」
「ホントか?!助かるぜ!」
「準備はいいか?ではそこに並びたまえ?」
三人が大砲に乗り込もうとした時、ボン・ボヤジは何かを思い出して大きな声を上げた。
「あっ、しまった!作るのに夢中で忘れてた!火薬だ火薬!『ニトロの火薬』がないぞよ!すまんが君たち、『ニトロの火薬』を取ってきてくれ!ワシは次の発明で忙しいのだ!」

そう言うと、ボンボヤシはどこかに走っていってしまった。それはまるで、最初から火薬を取りに行かせるために三人を呼び、逃げ出したかのようだった。
三人は彼の家を後にした。
「ったく!火薬ったって、どこにあるんだ?」
「わかんないなら聞いてみましょうよ。そうね……、あのおばあさんなんか知ってそうじゃない?すみませーん!」
ウェンデルの時と同じように、アンジェラは見知らぬ住民に声をかけに行った。
「アンジェラは、随分アクティブな性格なんだな。だが、たまたま声をかけた人が有益な情報を持ってるなんてなかなかないぜ」
「いや、アンジェラの場合はそうでもないんだ……」
デュランが呆れ顔を作り、ホークアイが疑問符を浮かべていると、満面の笑顔でアンジェラは戻ってきた。
「なんかぁ、ドワーフの村に火薬があるらしいわよ。早速ドワーフの村に行きましょう!」
彼女は明後日の方向を杖で指した。
「ちょっと待て。おまえ、ドワーフの村がどこにあるのか知ってるのか?」
「あっ……。じゃあ聞いてみましょう!」

アンジェラは再び聞き込みに行った。
「なんであいつはああも楽しそうなんだ?」
「まぁ、いいじゃないか。それにしても、アンジェラの聞き込みは百発百中なのか?」
「ああ。ウェンデルの時も一発でウィスプを目撃した人を当てやがった」
(それはきっと、彼女の魔力が原因ね。魔力で自分たちに有益な情報を持ってる人を探知できるのよ)
突然フェアリーが声をかけてきた。
「あっ、フェアリー。いたのか」
(ひっどーい!ずっと側にいたのに)
ホークアイの一言にフェアリーは少しいじけた。だが、当の本人もそろそろ存在感をアピールしておかないとパーティの一人であることを忘れられると思っていたことも否定し得ないであろう。
そうこうしているとアンジェラが戻ってきた。
「聞いてきたわよー。大地の裂け目にドワーフの村があるらしいわ。でも、ドワーフって種族は人間があまり好きじゃなくて、隠れ里に住んでるんですって!」
「そっか。じゃあ、取り敢えず大地の裂け目に向かうとしよう」

三人は三度黄金街道を抜け、大地の裂け目に向かった。

「さて、大地の裂け目に着いたが、ドワーフの村への入り口はどこだ?なぁ、フェアリー」
(知らない。どうせ私はいるのかいないのかわからない程度の存在だもん。ふん)
ホークアイの投げ掛けに対し、フェアリーはぶっきら棒に答えた。まるで頬を膨らませて怒っている幼子のような声で。
「なんだ、まだ怒ってるのか?ほんの冗談じゃないか」
「なになに?　何かあったの?」

ホークアイが得意のにやけ顔を作ってフェアリーに話かけるのを見ながら、アンジェラは疑問符を浮かべてデュランを見た。デュランも困っていると、
「ここはぼくの出番ッスね！？」
とウィスプが勢いよく現れた。

「大地の裂け目は別名宝石の谷と呼ばれてるッス。ドワーフは宝石を使って光を屈折させてるんスよ」
「そりゃどういう意味だ？」
「つまり……ええと、ここッスね、つまりこの洞窟の壁はですねぇ、うまい具合に光の屈折を利用して幻を見させているんッスよ！だから、ここをこうして……」
ウィスプが洞窟の壁の一点に光を当てると、そこにあった大きな岩が姿を消し、、地下に続く長い階段への入り口が見えた。
「じゃーん！これが真実の姿、ドワーフのトンネルへの入り口ッス！　さぁ、行ってみましょう……」
「あっ、待って、ウィスプ。昨日もだけど、いつもありがとう」
「いいッスよ、アンジェラさん。それに魔法の威力はアンジェラさんの魔力によるから、僕は大したことしてないんッスよ。ではまた～」

ウィスプはゆらりとデュランの体に戻っていった。
少し小さなほら穴をくぐり長い長い階段を下りながら、アンジェラはさっきの疑問を口にした。
「で、何でフェアリーは怒ってるの？」
「ああ、実は……」
デュランはマイアでの今朝のやりとりをアンジェラに教えた。
「それはホークアイが悪いわよ！フェアリーに謝りなさい！」
アンジェラの一喝に、ホークアイは
「うっ、すまん、フェアリー……」

（別にいいよ。もう怒ってないから。それより、ドワーフの村のどこにニトロの火薬があるか、判ってるの？）

「さぁ？　でも道具屋に行けば少なくとも情報はあるだろ」

一行はドワーフ村に入ると、一路道具屋を目指した。

ドワーフは穴掘りを日課とする地底種族である。マナの減少でモンスター化した亜人、ビー族やダークプリースト族などとは異なり、彼らは決して理性を失うことなく独自の文化を発達させているといわれている。

しかし、人間に対しては脅威を抱く者もおり、活発な交流があるわけでもない。

三人が村に入ると、中には逃げ出す者はいたが、投石打杖を行う者はいなかった。むしろ、噂されているよりもドワーフは人間を忌み嫌っているようでもなく、普通に会話をしてくれる者ばかりであった。

道具屋に行くと、一人のドワーフがカウンターの前にいた。

デュランが声をかけると、

「道具屋？違う違う。おいらは単なる店番だ。道具屋のワッツならでかけちまっただよ。何かトンネルの奥の方でどえれぇ事になっとるー、ちゅうて。ニトロの火薬ならワッツが持っとるけ、追いかけるがよいだよ」

そう言うと男はカウンターの中に入っていき、他方三人は店を出ていった。

「さて、お次はドワーフのトンネルですか？思ってた以上に大変なお使いになりそうだ」

ホークアイは肩をすくめ、苦い笑顔でそう言った。

村をいったん出て左に進むと、一人のドワーフが穴掘りをしていた。

「ん？トンネルに入りたいだか？ちょっと待っとれ、今開けたるべ」
そう言うや否や、大きな爆発が起こり同時に横穴が開いた。三人は爆発の勢いで後ろに飛ばされてしまった。
トンネルへの入り口を開けると、男はさっさと村に戻って行った。
三人が立ち上がり中に入ると、ゴブリンやスライムといったモンスターがわんさといた。
それらを倒しながら先を進む。

しばらく進むと、アンジェラが小さな人影を見つけた。
「見て！あそこにドワーフがいるわ！」
彼女が指さす方を見ると、一人のドワーフが慌てた様子で走っていくのが見えた。
三人は彼を追いかける。そして、モンスターのいない開けた小部屋で彼に追いついた。
「おっ、人間がこんなとこで何すてんだ？」
「あんたが道具屋のワッツか？」
「んだ！オラがいかにもワッツだ！」
「俺たち、ニトロの火薬が欲しいんだけど……」
「ニトロの火薬？ああ、それなら、ホレ、ここにあるだよ。もちろんタダでとはいわねえべ。５０００ルクでどうだ？」
三人は財布を見せ合った。
「絶対足りないな……」
ホークアイがひき笑いしながら言うと、デュランはワッツに向き直り
「た、高すぎるぜ！」
するとワッツはニヤリと笑い
「く～、おめえら商売上手だな。そんなら出血大サービス！３０００ルクにまげてやるべ」
三人は再び財布を見せ合い、手持ち金を確認した。しかし
「三人合わせても１５７３ルクか……」

「やっぱり高すぎる……」
「そんならこいつは売れねえだ！またお金貯めてくんべ！」
三人が肩を落とすと、ワッツは何かを思い出したように言った。
「って、こんなことしてる場合じゃねえだ！この場所はオラ達の守り神、ノーム様の神聖な場所だったのに、ノーム様がいらっしゃらないんだ！探しにいかねと～！」
急に焦り始めたワッツは俄然トンネルの奥へと走り去ってしまった。
「あぁ、ちょっと！……行っちゃったよ」
「これからどうすんのよ？！」
「どうするって、お金作るしかないだろな。要らない道具売ったり、モンスター倒したりして……」
「ちょっと待って、みんな」
三人の会話にフェアリーが現れ口を挟んだ。
「今ワッツはノームがここにいるって言ってたわ。ノームは土の精霊で、力を借りなきゃならない精霊の一人よ。折角ここまで来たんだから、彼の後を追ってノームに会いましょうよ」
「そうか。どっちみちモンスターと闘ってお金集めなきゃならねえし、フェアリーの言うようにワッツを追いかけよう」
「そうね！私も早く地系の魔法覚えたいし！」
「俺も異論ないぜ」
アンジェラとホークアイも賛同し、一行はワッツの後を追い、トンネルの最深部へと向かった。

トンネルの最深部は随分縦に大きい場所だった。ワッツは一人そこに佇んでいた。
「ワッツ、ノームは見つかったかい？」
「いんや、みつからねーだ。……でもここは、前はこんな場所じゃなかっただよ。どうしてこんな縦穴になっちまったんだか……」

ワッツは何かに怯えながらも、それを押さえ込むようにしてそう言った。そこに突然
「ぐぎぁああん」
といううなり声が響いた。
「ひぇ！き、聞いた？いまの。こ、こんなところに長居は無用、お先に！」
うなり声に耐え切れず飛び上がったワッツは一目散にその小部屋から出ていった。すると、地鳴りが起こり、落盤によって部屋の入り口が塞がれてしまった。そして、横長の洞窟の両壁が崩れ、左側の穴からから全長5メートルほどの巨大なモグラ、ジュエルイーターが現れた。

「なるほど、こいつが鳴き声の正体か」
「こいつ、すっごい敵意剥き出しで私たちを見てるよ！」
「倒さなきゃこっから出られねぇみたいだな」

ジュエルイーター、その名の通りジュエル、つまりは宝石を喰らい行き続ける地底生物である。巨体でありながら、地下を潜り進むスピードは素早く、その姿を捉えることは困難とされている。それだけに目撃情報も少なく、伝説上の怪物として伝えられてきた。

デュランもホークアイも見事な剣さばき、クナイさばきを見せるが、宝石を喰らい作られた強固な外皮はまるで岩のようであった。
「こいつもかてえ体してやがんな……。アンジェラ、魔法でどうにかならないか？！」
「任せて！……ホーリボール！！」
地底深くに光の玉が現れ、ジュエルイーターを包み込んだ。地系の敵に光系の魔法は特段効果があるわけではなかったが、ジュエルイーターは地底獣であるため、その閃光は目を痛めるには十分であった。

「キシャアア」
しかしこれが仇となった。ジュエルイーターは叫びながら両手で目を覆ってしまったため、一段と強固な手に阻まれ武器攻撃が効かなくなってしまったのだ。ジュエルイーターは地底を進むのに、手で土や岩石を掘るから、その手は体の中で最も固くなっているのだ。
キンッと剣、ダガーを弾きつつ、敵はダイヤモンドミサイルという魔法で攻撃した。地面や大気中にある物質を魔力により結合、巨大化させ結晶を造り、それを操り相手を襲う、恐ろしい攻撃魔法。
「ウアアア」
「きゃあ！……こっちだって！」
アンジェラは再びホーリボールを繰り出した。
目は塞いでいたものの、その衝撃波だけである程度のダメージを与えることはできた。
「もう一度行くわよ！」
アンジェラがそう言うと、ジュエルイーターは手の隙間から三人を確認した。そして手を下ろすと、一歩二歩と後ろに後退した。
「今だ！」
デュランとホークアイは得意の武器攻撃に打って出た。
すると、ジュエルイーターは勢いよく穴から飛び出し、反対側の穴に移動した。
5メートルもの巨体が物凄い速さでぶつかってきたのである。その線上にいた三人は弾き飛ばされてしまった。
「うわあああ！」
「ぐっ！」
「キャア！」
反対側の穴から顔を出したジュエルイーターは勝ち誇っているように倒れこむ三人を見ていた。
「今のは『ぶちかまし』だ！得意技だから、気をつけっぺ！」
積み重なった岩の隙間から覗き見ていたワッツが叫んだ。
「先に言ってくれよな！……それにしてもデュラン、こいつぁ手強

いぜ」
「ああ、魔法も武器も大きなダメージを与えられないからな。持久戦か……」
　すると足下に黒く丸い物体が転がってきた。デュランがそれを拾い上げると
「そいつを使うだ！ニトロの火薬なら大きなダメージを与えられるはずだっぺ」
　岩の隙間からワッツが玉状になっているニトロの火薬を投げ入れたのだ。黒く丸い火薬を見ながらデュランは入り口で見舞った爆風を思い出した。
「普通の火薬であの爆発だったからな、ニトロなら……って俺ら火持ってなくね？」
　宝の持ち腐れとなった三人に、ジュエルイーターは再びぶちかましをお見舞いした。
「ぐわああ！」
　三人は再び吹き飛ばされ、あまりの勢いにデュランはニトロの火薬を落としてしまった。火薬はコロコロと転がり、ジュエルイーターの目の前に。
　そして、ジュエルイーターは何を思ったか、それをくわえて丸飲みしてしまった。
「しまった！」
「万事窮すか……」
「ちょっとデュラン！何で離しちゃったのよ？！」
「仕方ねえだろ！それに爆発させるにも火がなきゃ話しにならないだろうが？！」
「あ～、もう！あんたバカぁ？ホーリボールの爆発で火薬も爆発させられたじゃないのよ」
「だから、そういうことは先に言えよ！」
　デュランとアンジェラの言い合いを聞きながらホークアイは考えた。

「『ホーリボール』……光系の魔法……もしかして。おい、ウィスプ！」

彼はウィスプに話しかけた。

（こんな時に何スかー？）

「ホーリボールは物質を通り抜けることは可能か？」

（可能ッスよ。光は質量を持たないッスからね）

「じゃあ、あのデカモグラの腹の中でホーリボールを爆発させることもできるか？」

（うーん、それは術者次第ッスね。術者が強くまばゆい光玉を作れれば、あの分厚い皮膚をすり抜けることも可能ッス！）

「わかった、ありがとう！そういうことだ、アンジェラ！」

「ＯＫ！わかったわ！」

「待て、どういうことだ？」

デュラン一人が作戦が解らずにいた。

「つまり、ホーリボールを奴の腹の中で爆発させて、中にあるニトロの火薬に着火させるんだ！」

「そうか。そうすりゃ奴は木っ端微塵になるってわけか！」

「そうとわかりゃ、俺たちはアンジェラが集中できるように奴の攻撃を防ぐんだ！」

二人はジュエルイーターに立ち向かっていった。ジュエルイーターは両手で攻撃を回避するため、動きを封じられてしまった。そこに

「ホーリボール！！！！」

アンジェラの声に比例するようにとてつもなく眩い光の玉達が現れ、ジュエルイーターの体の中に吸い込まれていった。

するとジュエルイーターの体の動きが鈍くなり、動きが止まった。

一同が固唾を飲んでいると、ジュエルイーターは一歩二歩と歩き始め、部屋の真ん中で止まり目を瞑った。そして目鼻から光を発したかと思うと、その巨体が影も形もなくなるほどの大爆発を起こして散った。

「やったー！」

三人が喜んでいると、今度は入り口の岩盤が爆発した。
「今度はなんだ?!」
噴煙の中から小さな人影が現れる。
「ケホッ。火薬の量間違えちまったかなぁ。……いやぁ、そんれにしてもおどれえた!ありゃ、千年に一度現れるっちゅう地底獣ジュエルイーターだべさ。ホントまぁ、おどれえた!」
「ワッツ、ありがとう。君のおかげで助かったよ」
「どいたしますて。それより、ノームは一体にどこにおるんかのぉ……」
ワッツが心配そうな顔をすると、どこからとなくクシャミが聞こえた。
「ハックション!!誰じゃ、ワシの噂をしとるのは?」
クシャミと共に聞こえた陽気な声の方を見ると、髭の長い小さなおじいさんがぴょんぴょん跳ねながら姿を見せた。
「ノーム様!どうしてこんなところにおるんですか?!心配したじゃないですか」
ワッツの心配も気にかけず、ノームは陽気に言った。
「いやぁ、いつもの場所で寝とったら、地底獣に餌と思われてこの巣穴に連れて来られてたみたいじゃ。今の爆発音で起きてな。いやぁ、びっくりしたわい。ワハッハッハ」
ノームが笑っていると、フェアリーが姿を見せた。
「ノーム、私たちに力を貸して欲しいの!」
「おっ、かわい子ちゃんの登場じゃわい!ワシはかわい子ちゃんからのお願いは断れないからのぉ、いいとも、力を貸すぞい!」
二つ返事で了承したノームにフェアリーはマナが減少し、聖域のトビラを開くのに精霊の力が必要ということを説明した。
するとワッツは驚きながら
「おめぇら、ノーム様をお仲間にしちまうとは、すげー方だったんだな!そんなお方とは露知らず、先ほどは失礼しただ。ほれ、ニトロの火薬はまだありますだ、これを差し上げますだ!お金はいただ

けません。そんなん頂いたら罰があたるだよ！」
「そうかい？なんだか悪いなあ」
「とんでもございませんだ。それにこの魔法のロープで入り口までお送りしますだよ」
「それじゃあ、お言葉に甘えて」
「どんぞどんぞ。ノーム様をよろしくおねげえしますだ」

ワッツが深々頭を下げるのを見届け、三人は地上に戻った。
そして、再び黄金街道を戻りマイアの町、ボン・ボヤジの家に向かって駆け出した。

# 第八話

ボン・ボヤジの家に入るや否や、ホークアイはスパナを片手にうんうん唸っている家主に詰め寄った。
「おい、おっさん！ニトロの火薬、持ってきたぞ！」
「んっ？君たちは誰だね？私は研究で忙しいのだよ」
「おいおい、こっちは命がけで火薬を取ってきたってのに、俺たちのこと忘れちまったのかよ！？」
ボヤジのあまりの態度にホークアイの顔は文字では表現出来ない程に歪んだ。その表情に相手は鳥肌を立たせて慄いた。
「ひっ！いやいや、覚えとる、覚えとるぞ！あ、あれじゃろ？ニトロの火薬じゃろ？……えーと、その火薬が、なんでしたっけ？」
ぶちんというホークアイの堪忍袋の緒が切れた音がデュランとアンジェラの心の中に聞こえると、彼は腰に提げているダガーを手にした。デュランが急いで止めに入る。
「ま、待て、落ちつけ、ホークアイ！」
「止めるなデュラン！この親父、シメる」
「わっわっわ……、おお、思い出したぞ！ワシの『大砲君2号』を使いたいんだろ？」
「そうだ！ほら、ホークアイ！おっさんも思い出したし、俺らの目的も達するんだからさ、その刃物は仕舞おうぜ」
「……ふぅ」
ホークアイはいつもの顔を取り戻し、ダガーナイフを仕舞い乱れた髪を指で払う。
「じゃ、じゃあ、裏庭で待っててくれ！」
三人は裏庭に出た。そして、ボン・ボヤジの指示に合わせ、ホークアイ、デュランは大砲の中に通じる階段に足をかける。
「やっとフォルセナに行けるな」

「あぁ。そうだな。……ん？」
デュランは後ろにアンジェラが着いて来ない事に気がき、辺りを見渡した。すると、アンジェラがボヤジの横に突っ立っている姿を捉えた。
「アンジェラ？」
「ごめん。私はここでお別れ」
アンジェラは微笑みながらやさしく言った。
「えっ？」
「何してんだ？」
先に大砲に入ったホークアイも顔を出した。
「吊り橋の時から考えてたの。アルテナに追われてるあたしが一緒にいたら、デュラン達に迷惑がかかる、って」
「何言ってんだよ。迷惑だなんて思ってねえよ！」
「……ありがとう。デュランは優しいね」
「それに大魔導師になるってのはどうしたんだよ！？一緒に来いよ！」
アンジェラはフルフルと首を振った。
「ドワーフの穴や黄金街道で修行する。そこで知性も魔力も磨く。何年かかったって良いの。絶対大魔導師になるわ！だから、ね？行って」
「……」
（ちょっとアンジェ……）
「わかった！」
アンジェラの話を聞いていたデュランはフェアリーの言葉を遮る大きな声で言った。
「アンジェラがそうしたいなら、そうすべきだ。でも、また旅したくなったら、一緒に行こうぜ」
「うん」
「じゃあな、アンジェラ」
「あっ、ちょっと待って……」

アンジェラは忘れ物があったのを思い出したかのように言った。
その言葉に、大砲の中に入りかけたデュランは再びアンジェラに体を向けた。
「なんだ？」
「あの……あのね……あたし……ホントは……」
「？」
アンジェラは顔を赤らめていた。
そして、しばし沈黙した後
「……ううん。やっぱり何でもない。元気でね」
アンジェラは笑顔で手を振った。
「……ああ。おまえもな」
デュランもアンジェラに別れを告げた。
「挨拶がすんだなら早く中に入ってくれ！ワシは研究で忙しいんだ」
ボン・ボヤジに急かされ、デュランとホークアイは大砲に入った。
「風よーし。方向よーし。フォルセナに向けて飛ばしてやるぞ」
そう言ってニトロの火薬をセット、点火。そして、
ドーン！！！
というけたたましい音と共にデュランとホークアイは飛ばされていった。
見る見る間に小さくなっていくデュランにアンジェラは呟いた。
「あたし、ホントは、あんたのことが大好きだったんだよ……」

デュランへの気持ちを風に告げ感傷に浸っているアンジェラに、ボヤジの素っ頓狂な声が水を差した。
「あっ！大砲の台の位置がズレてるぞい！この方向だと、まぁ、モールベア高原あたりに落ちるかな」
「えっ！？……デュラン」

その頃デュラン達は

「なぁ、ホークアイ」
「なんだー!?」
「これ着地どうすんだー!?」
「……わかんねー!?」
「……」
「「うわぁぁー!!!」」

ガサガサ、バリバリ、……ドスン!!
運が良いのか悪いのか、二人は木枝がクッションとなり無事に着地することが出来た。
「あてて……んっ？ここはモールベア高原じゃねぇか。あのオヤジ、間違えやがったな」
「まぁ、俺もデュランも無傷で何よりだ」
そこにフェアリーが何か言いたげな顔で姿を見せた。
「ねぇデュラン？」
「なんだ、フェアリー」
「前に言ったよね？アンジェラは潜在能力が高いから、絶対離しちゃダメだって」
「ああ、覚えてるさ」
「だったらなんで……？」
「あいつは、アンジェラは決意した目をしてた。その決意を崩すようなことはできない、ましてや俺たちの都合でなんか……」
二人の会話にホークアイが一言だけ口を挟んだ。
「でも、おまえ、アンジェラのホントの気持ち、解ってたんだろ？」
「……」
「まったく、おまえもアンジェラも素直じゃないな」
「デュラン、あなただって、ホントは……」
「そんなことより、フォルセナに急ごう！大地の裂け目にアルテナ兵がいたんだ。もしかしたら今頃フォルセナに危機が迫っているかもしれない」

デュランの予想は当たっていた。
半年前の紅蓮の魔導師の侵入以来、アルテナはスパイを送り続け、綿密な侵攻作戦を企てていた。そして、デュラン達がフォルセナに戻った今日が、その決行の日だったのだ。
すでにフォルセナ城は戦場と化していた。一人のウィザードが紅蓮の魔導師に近づき膝を着いた。
「城内における一級及び二級兵の排除、完了いたしました！残りは下級兵士のみです！」
「わかった。おまえ達はもういいぞ。これから城内に魔法生物を召喚する。待避していろ……」
「はっ！！」

こうして、紅蓮の魔導師率いる侵略軍はフォルセナ城陥落の最終シナリオに入ろうとしていた。
デュラン達がフォルセナに戻ってきたのは、まさにその時だったのである。
「こ、これは……？！どうして城から煙があがっているんだ……？！」
デュランが愕然としていると、一人のフォルセナ兵が通りかかった。
「おまえ……、デュラン！デュランじゃないか？！」
「一体何が起きてるんだ？！」
「とうとうアルテナが攻めてきたんだ。ビースト軍のウェンデル侵攻に対して、フォルセナはウェンデルに援軍を送ったんだ。その隙をついて奴らは……。城下町に被害はないが、城内の残りの一級兵や二級兵を全員倒しちまいやがった……。このままじゃ城は……」
「くっ！遅かったか！！」
デュランは城、英雄王のもとに走った。ホークアイもそれに続いた。

「このままじゃ英雄王さんに会えなくなっちまうからな」
「……すまん！」
城内に入ると、フォルセナ兵とアルテナ兵が多数倒れていた。
「なんてヒドいことを……」
城内を進んでいくと、オブジェになりすましたユニコーンヘッド、影に潜むマジシャンや量産型マシンゴーレムが暴れ回っていた。
二人は立ちふさがる敵を倒し、玉座の間に急いだ。

その頃玉座では

「むっ！う、動けん……」
「クックック……。これが噂に聞く英雄王様とは……。ちょっと魔法を使えば体の自由など簡単に奪える」
「おまえ達は、理の女王はなぜこんなことを……？」
「簡単なこと……。我らがマナストーンを占領するのに、遅かれ早かれフォルセナは反対して兵をあげる。邪魔になる前に潰せとのご命令だ。いつまでも過去にこだわらないと申されていた……」
「そうか……。それは本当に彼女の意志なのか？」
「クックック……、これから死にいくあなたには関係のないことだ……。無駄話もここらへんにしておこう……。では、死んでもらう……」

その時玉座の扉を力強く開ける者がいた。

「そこまでだ！紅蓮の魔導師！」
目に殺気を携え入ってきたデュランは一気に紅蓮の魔導師に斬りかかっていった。
しかし、いつかのように魔導師はひらりとその攻撃を交わした、はずだった。
彼は窓際に移動して口を開いた。

「貴様はいつかの小僧か……。ほぅ、私のマントを掠めるとは、少しは腕を上げたようだな……」
「城内の敵はすべて駆逐した！残るはおまえだけだ！」
「クックック……、これはとんだ誤算だったな。まぁいい。英雄王よ、邪魔が入ったので今日は失礼させてもらおう……」
「待て！俺との決着をつけていきやがれ！」
「フッフッフ……、この程度で私に勝負を挑もうとは、笑止。……だが、覚えておこう。さらばだ……」

紅蓮の魔導師は窓から脱出して、そのまま姿を消した。

「デュランよ、戻っていたのか……」
「はっ！申し訳ありません……、一度ならず二度までも、同じ敵を取り逃がすとは……」
「よい。しかし、咎めるわけではないが、何故戻ってきたのだ？」
「それは……」
「それは私がお話し致します」
フェアリーがひらひらと姿を現した。
「おぉ、フェアリーか！？まさか、デュランがフェアリーに選ばれし者になるとは……」
「国王陛下はフェアリーを御存知なのですか？」
「うむ。フェアリーは世界に危機が生じた時にマナの聖域からやってくる……。先の竜帝大戦でも姿を現してな、何を隠そうワシがフェアリーに選ばれし者だったのだ」
「国王陛下がっ？！」
「しかし、フェアリーは竜帝の力を押さえるため、ワシを庇って犠牲になってしまってな……」
「……英雄王様、私たちはマナストーンの近くにいるという精霊を探しています。ここに来る途中で光の精霊ウィル・オ・ウィスプと土の精霊ノームの力を借りることができました」

フェアリーの紹介合わせて二人も姿を現した。ウィスプはゆらゆらとただよう様に、ノームは元気に飛び跳ねながら。
「チィッス！」
「久しぶりじゃのう、リチャード！」
「おお、懐かしのお！」
英雄王は懐かしそうに二人を見た。
「国王陛下は二人も御存知で？」
「僕たちは今話にでた竜帝大戦でも彼らに力を貸したんスよ」
「あの時は本当に世話になった。ありがとう」
「英雄王様、マナストーンの所在地を私たちにお教え下さい……」
「ふむ。では、まずローラント地方に向かいなさい。その付近に風のマナストーンがあり、風の精霊ジンに会えるはずじゃ。ローラントにはバイゼルから、その埜の漁港町パロに連絡船が出ている」
「あの、国王陛下、実は大地の裂け目の一本橋が落ちてしまいまして…」
「うむ、聞いておる。アルテナが攻めてくる直前、ボン・ジュールという男が来て、新しい移動手段としての大砲を城内の広場に作りたいと願い出てきた。明日になれば完成するだろうから、それまで城内で休むといい。と言っても、整理で騒がしくなるだろうが……」
「はっ！城内での療養を許して頂いただけで有り難き幸せでございます！」
「うむ。ジンを見つけたら、また戻ってきなさい……。頑張れよ！」
「……時に国王陛下。私はウェンデルに向かう途中で、アルテナ統治者理の女王の娘『アンジェラ』と出会いました」
その瞬間、英雄王は驚いた顔をした。
「なに？！ヴァルダに娘がいると？！その娘はどのような娘だった？」
「は、はあ。年は１９歳、髪が長く、エルフのような耳をしていました」
「外観はわかった。して性格は？」

「性格ですか？性格は……、負けん気が強いというか、意地っ張りというか、おてんばというか……。あっ、失礼しました。それと、未だうまく魔力をコントロールを出来ない様子でした」
英雄王はしばらく考え込んだ顔をしてから、再び口を開いた。
「それで、その理の女王の娘はどうした？」
デュランはアンジェラの経緯、共に旅をしマイアで別れたことを報告した。
「そうか……。わかった、もう下がってよいぞ」
「はっ！失礼します」
デュランとホークアイは玉座を後にした。
英雄王は椅子から立ち上がり、紅蓮の魔導師が消えたのと反対側の窓からテラスに出た。
「負けん気の強い性格……、まさにヴァルダの子に違いない……。それに１９歳ということは父親は……」
彼はアルテナのある方角を見て、誰かに語りかけるように呟いた。
「ヴァルダよ、心優しかった君が、どうして侵略戦争など出来るのだ……、どうして娘を殺そうとするのだ……」

その頃、デュランとホークアイは客室にいた。
「英雄王って人はすごいな。あの威厳高さに圧倒されちまったよ」
「ああ、そうだろ？親父が死んだ後、俺に剣術を教えてくれた、剣の師匠なんだ」
「そうなのか。親父って、黄金の騎士と呼ばれたロキだろ？」
「そうだ。だけど、ちっちゃい頃に亡くなっちまったからな……。出来るなら、手合わせしたいぜ」
「ハハッ、会いたいじゃなくて、手合わせしたい、か。デュランらしいな」
「そ、そうか？」
「ああ。そういえば、デュランの家は城下町にあるんだろ？どうして我が家に行かないんだ？」

「……俺は紅蓮の魔導師を倒すまで帰らないって決めたんだ。だから、国王陛下も気を遣って下さったんだろう」
「そうか……。俺はてっきりえっちな本でもあって体が悪いのかと思ったぜ」
「んなっ?!そんなの……」
「ないのか?」
「……」

次の日、城内の広場にはマイアで見たのと同じ大砲が設置されていた。そしてその横には
「あれ?ボン・ボヤシか?」
「ちゃうちゃう、わいはボン・ジュールや。ボンボヤシとは従兄弟になるんや」
「そ、そうなのか?(同じ顔だけどな…)」
「そんなことより、マイアに戻りたいんやろ?わいは兄貴と違って正確に打つさかい、はよ大砲に入りや」
ボンジュールに促され、二人は大砲に乗り込んだ。そして火薬の匂いがして、大きな音と共に大砲は放たれた。
大空に打ち上げられながらデュランはホークアイに話しかけた。
「なぁ、勢いで大砲に入っちまったが、着地はどうすんだ?」
「・・・・・またか」
「「うわあああ……」」

ヒュー……、バスン!!

二人はマイアはボン・ボヤジの裏庭の地面に勢いよく叩きつけられた。しかし、二人の体は自然と無傷であった。
「どうなってんた?」
二人が顔を傾げていると、二人の落下音を聞いたボン・ボヤジが裏庭に出てきた。

「おお！ボンジュールの大砲で戻ってきたか？！」
「ああ、ローラントに行くんでな。一つ聞きたいんだが、あの高さから落ちて、なぜ俺たちは無傷なんだ？」
「んっ、言わなかったか？この大砲には魔道具が使ってあって、落下の衝撃を全部受け流してくれるんだ。そんなことより、これからはこの大砲が有効な移動手段となるぞ！早速世界中の親戚に送ってやる！まずは、そうだぁ……、ローラントのメルシーに送ってやろうかの。……おぉ、ちょうどいい！二人とも悪いのだが……、ってあれ？おーい、どこにおるんじゃ？！」

二人はまた変な苦労を背負い込む前に、ボン・ボヤジの家を後にした。
そして、再び黄金街道を抜け、商業都市バイゼルにたどり着いた。

「フォルセナ領のこの町にはな、ブラックマーケットと呼ばれるでかい店があるんだってよ」
「へぇ、行ってみるか？」
二人でブラックマーケットに行くと、店の前に屈強な男二人が立っていた。
「ブラックマーケットは夜しか営業しない。夜まで待ちな……」
「だとよ」
「じゃあ、またの機会にしよう。のんびりとした旅じゃないんだからな」
仕方なく、二人は港に向かった。すると、ちょうどパロへの連絡船が出る時だった。
船に乗り込むと、ホークアイはニヤケた顔でデュランに言った。
「デュラン、残念だったな」
「何がだ？！」
何となくホークアイの言いたいことは解っていたが、デュランは一応聞き返した。

「クックック、アンジェラに会えなかったことがだよ」
「ハァ～、言うと思ったぜ。あのなぁ、俺とあいつはそんなんじゃないからな！」
「ハハっ。だったら今頃どこかのかっこいい奴とアンジェラがよろしくやってたら、どうするよ？」
「……」
ホークアイは、自分では解りやすいブラックジョークだと思ったのだが、デュランの顔を見て一言付け加えた。
「……すまん。ジョーダンだ」
「……そうかい」
デュランがこの時どんな顔をしていたのか、ご想像にお任せしたいところである。

なにはともあれ、聖剣の勇者となったデュランの冒険は新たな舞台を迎えるのである。この先ローラントで何が彼らを待つのか。アンジェラとデュランの恋の行方は。ウェンデルに戻ったシャルロットは無事なのか。紅蓮の魔導師の陰謀は。
多くの謎を抱え、物語はファ・ザード大陸の東へと舞台を変える。

～第二部に続く～

# 第二章「山海の冒険」　第一話

船から降りて町の中に進むと、見るからに異郷の人間ばかりがいた。山岳地帯の麓、漁港に住む人間はしないであろう、ダークな装束衣装の人々。

すると一人の男が叫んだ。

「この町は我らナバール盗賊団改めナバール国が占領した。逆らえば女子供でも死だ！」

「あっ、ヤベ！」

ホークアイは瞬時に顔を隠し、デュランの影に潜んだ。

「お、おい。どうしたんだ？」

デュランの問いにホークアイは声を潜める。

「前に言ったろ？俺はナバールからの逃亡者だ。見つかるわけにはいかないんだ」

「なるほど。……だが、奴らの様子、なんかおかしいぞ。心ここにあらずというか……」

「……たしかに。取り敢えず、顔を隠しながら様子を伺おう」

「そうだな。それに風の回廊のどこにマナストーンがあるかも知りたいところだぜ」

「それならパブに行きゃあいい。土地の情報は大抵パブのマスターが持ってるもんさ。泥棒稼業の基礎知識さ」

「……なるほど」

二人は武器防具を買い揃えてから、パブに入っていった。

飲み場のある二階に続く階段に向かいながら、デュランは先を歩くホークアイに話しかけた。

「なぁ、昼間っからパブで情報収集できるのか？」

「……可能性はあるさ」

「なんだそりゃ？……さてはおまえ、陽のあるうちから酒飲みたいだけか？」
「まぁ、良いじゃないか。ハッハッハ」
「ったく」
そんな会話をしていると、階段の途中で一人の髪の長い女とすれ違った。パブには不釣り合いな幼さを残した雰囲気で、黄緑の服を着た少女。腰には三槍を携えていた。
「えっ！？」
思わずデュランは振り返った。目端にとらえたその少女に心当たりがあったからだ。
しかし、すでにそこには誰もいなかった。
「……リース？」
「おい、どうしたデュラン。いい女でもいたのか？」
ホークアイが茶化すように聞いてきた。
「……いや、何でもない」
「へへっ、浮気かぁ？今度会ったら言ってやろう」
「なんだよ、浮気って？それに誰に言うんだよ？」
「またまた！ククク」
ホークアイは腹の底からこぼれる笑みを我慢するように口にふくんだ。
「それより酒飲むだけなら町の外にでようぜ」
「まぁ、座れって。一杯だけやらせてくれ」
「まったく……」
「ねぇちゃん、一番おいしい奴頂戴！あとこのグラスも持ってちゃってー！」
「いらっしゃいませー。ただいま片づけまーす」
ウェイトレスに笑顔を投げ、一杯の果実酒を飲むと、そそくさと二人は店を後にした。
歩きながらデュランはホークアイに言う。

「とんだ時間の無駄遣いだったな」
「フッフッフ。そうでもないぜ。あのライザってウェイトレス、気が強そうだけど結構いい女だったじゃないか。それに、……ジャーン！」
ホークアイは自慢げにコースターを取り出し見せた。
「いつの間にウェイトレスの名前聞いたんだよ。それにふつうのコースターじゃないか」
「チッチッチ。よく見て見ろよ。『眠りの花畑』って書いてあるだろ？」
「ホントだ」
「俺たちが入っていく時に階段で顔を隠した旅姿の女とすれ違ったろ？」
「……ああ」
「後ろにいたからよく見えなかっただろうが、あれはわけありの人間の出で立ちだ。その時俺の勘がピーンと働いたのさ。『こいつもここに情報収集に来た』ってな。だから、人が座ってた気配のあるテーブルに着いたのさ。何か手がかりが残ってるんじゃないかって」
「その手がかりが、それか？」
「そういう事だ。マナストーンの場所はわからないけど、ここにいったら何らかのヒントが得られるかもしれない」
「なるほど。で、眠りの花畑ってどこだ？」
「さぁ？それこそその辺の親父に聞けば良い……さ……」
町並みを歩いていると、突然ホークアイの言葉が止まり、足も止まった。そして、踵を返すと脇の細い路地に向かって叫んだ。
「ニキータ？ニキータじゃないか！？」
デュランも顔を覗かせると、そこにはバカでかい商業袋を担いだ猫型獣人がいた。
「こいつはニキータといって、ナバール脱出を助けてくれた弟分なんだ！おい、ニキータ！俺だ、ホークアイだ！」
ニキータと呼ばれたその男もほかのナバール兵と同じで、目を虚

ろにして反応を示さなかった。
「チクショウ……イザベラめ……絶対に許さねぇ！！」
ホークアイがそう拳を握ると
「イザベラ……様……」
とニキータは反応を示した。と同時に忍び装束に身をやつした数人の男が現れた。
「イザベラ様の敵……排除……」
「こいつら、イザベラに逆らう奴らを倒すように操られてるのか？！」
「そうみたいだな！」
デュランは剣に手をかけた。しかし、
「待て、デュラン！」
ホークアイはデュランを制止すると、折り畳まれたＭＡＰを彼の胸目掛けて放った。
「おまえはそれを頼りに先に行け！！」
「だけど」
「良いから！！」
「くっ。すまん！！」

デュランはＭＡＰを持って駆けていった。町の外を、眠りの花畑を目指して……。

天かける道と呼ばれる山道を上ると、何とも甘い香りがデュランの鼻腔をくすぐった。その香りに誘われるように足を進めると、モンスターもいない野原に出くわし、その先に花畑があった。
「甘い香りの正体はこいつか」
デュランが花畑に足を踏み入れると、グラリと足場が揺れる感覚が彼を襲った。さらに、甘い香りが彼の瞼を重くする。
「うっ、これは？眠り草の花？しま……った……」
デュランは気を失ってしまった。

……。
……。

「こっ、ここは……？」

目を覚ますと、冷たい岩肌の下にいた。背中が暖かいのは、い草のベッドが引かれているからである。

「気がつかれましたか？」

透き通るような女の声がデュランの耳に聞こえた。そして、体を起こしてその声の主を確認した。

「リース、か……？」

「久しぶりですね、デュランさん」

「デュランでいい。……ここはどこだ？」

「ここはナバールにローラントを奪われたアマゾネスの秘密のアジトです」

「ナバールに奪われた？」

「ええ。話はデュランと会った日の前日に戻ります。城内に潜入したナバール忍者によってローラント城を守る風が止められ、一気にローラント城は陥落しました。その時に私の弟は行方不明になり父も戦火に……」

「そうだったのか。それで光の司祭に？」

「故国の再興と弟を取り戻すために光の司祭様のご知謀を得ようとしました。しかし、世界が今動乱しつつあることを知り、私に出来ることはないかとあぐねていたところ、生き残ったアマゾネスが他にもいてローラント城の奪還を狙っているとの噂を耳にしてこっちに戻って来たのです」

「そうだったのか」

「はい。ちょうどこのアジトに着いた時にあなたがそこの花畑に倒れていると聞いたのです。運び込んだら、ジャドでお会いしたデュランだと気づいて驚きました」

「俺も驚いたよ」
するとそこに一人のアマゾネスが現れた。
「リース様、会議室に皆様集まりました」
「うん、わかったわ。……じゃあデュラン、体調が戻ったら早くこの辺りから離れた方が良いですよ。もうすぐここは戦場になってしまうでしょうから」
そう言ってリースは部屋から出ていった。
デュランは天井を見上げた。
(『戦場になってしまうから』……。”しまう”、か……。リースは、本当はそんなの嫌なんだな)
デュランは立ち上がり、リースの後を追った。

「リース様！よくぞご無事で……。うぅ、じぃはうれしいですぞ。う、うぅ……、うご、ごほっ、ごほっ！」
「じぃ、感動しすぎよ。それより状況は？」
「あまり芳しくありません。生き残ったのは天の頂で修練中の二部隊と、戦火から何とか逃げ仰せた若干名です。リース様を加えたとしても大多数に占拠されたローラント城を奪還するのは至難かと……」
「義勇軍でも募りますかのぉ……」
「パロもナバール兵に占拠され、町民は脅えています。義勇軍も難しいかと……」
パブのウェイトレスに変装していたライザの言葉を訊き誰もが押し黙ったその時、騒がしいまでの声と共に一人の男が会議室に入ってきた。
「話は聞かせてもらったぜ！俺も手を貸そう！」
「デュラン！？でもこれは私たちの問題ですので、あなたにご迷惑は……」
「そうです！余所者には関係ないことです！」
「……ちょっと待ちなさい」

非難の声が上がる中、一人の中年女性が皆を制した。そして、デュランの顔をまじまじと眺めて、こう言った。
「あんた、黄金の騎士ロキの縁者か……？」
「なっ！？あんた、親父を、ロキを知っているのか？！」
途端、周りはざわつき始め、リースまで驚いた顔をしていた。
「やはりロキの息子か！？顔立ちがあいつにそっくりだったからすぐにわかった！知ってるも何も、あいつとは先の世界大戦で共に戦った、戦友さ」
「アルマ、本当なの？」
「えぇ、リース様。この猛々しい目つきはロキそのもの。こやつはロキの息子に間違いありません」
「おい、そのロキの息子ってのはやめてくれないか？！俺には『デュラン』って名前があるんだ」
「ではデュラン、改めて我らの力になってくれないか？」
「だから、なるって言ってるだろ。いいよな？　リース」
「……すみません。私たちのために」
リースは涙ぐんでしまった。これに慌てたのはデュランである。しかし、そこを乳母のアルマが現実を口にし、リースは冷静さを取り戻す。
「しかし、デュランが加わったとしても、未だ多勢に無勢、勝機が格段あがったとは……」
「賢者ドン・ペリ……」
じぃが何かを思い出したようにぽつりと呟いた。
「『ドン・ペリ』？その方がどうかしたの？」
「賢者ドン・ペリは先の竜帝大戦の時、英雄王・黄金の騎士に知恵を貸し、彼らを勝利に導いたのでございますじゃ。彼なら我らに勝機を授けてくださるかも……」
「なら、早速そいつに会いに行こうぜ？」
「それが、賢者ドン・ペリは人間ではないのです。コロボックルと言われる小人の種族で、大の人間嫌い。そう簡単に知恵を貸してく

れるか……」
「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」
「『ちびっこハンマー』といわれる秘宝が、バイゼルにあると聞いたことがありますです。それを使えば、うまくコロボックルになりすますことができるやも知れませぬ……」
「なるほど。同じコロボックル、小人のふりをして、知恵を授けてもらおうってことか。よし、決まりだな！バイゼルに行ってちびっこハンマーを手に入れてドンペリに会ってくるぜ！」
「ドン・ペリはラビの森に住むと聞いたことがあります」
「よっしゃ！そうと決まれば早速宝探しに行ってくるぜ！」
「私も、行きます」
リースの予想だにもしない申し出にアマゾネスたちは驚いた。
「どうかリース様はここにお残りください！皆、リース様のご無事を知り喜んでおります。またリース様がいなくなられては……」
「ありがとう、ライザ。でも、私は王女として皆を導く責務があるわ。賢者ドン・ペリ様にお会いする大事な務めは私がしなければならないの。どうか、解って」
リースの声と目には決意が溢れていた。
「……わかりました。リース王女がご不在の間は、私たちがこのアジトを守ります」
ライザをはじめ、アマゾネス達は闘志を露わにした。
「ありがとう、みんな。デュラン、行きましょう！」
かくして、新たな仲間、リースと共にデュランの冒険はさらなる進展をみせるのであった。

秘密のアジトを出ると、一人のアマゾネスが立っていた。
「リース様、こちらに！」
デュランとリースが彼女について行くと、花畑の横にどこかで見た大砲が設置されていた。
「これは、ボン・ボヤジの大砲じゃねぇか？！　どうしてこんなと

ころに？」
「ボン・ボヤジをご存知なんですか？　私は彼の従妹でメルシーと言います、よろしくね、デュランさん」
　アマゾネス、メルシーは笑顔で言った。
「大砲の照準はバイゼルに合わせてあります。これでひとッ飛びです！」
「メルシー、これ、危険じゃないの？」
「大丈夫だ、リース。なんでも魔法が施されてて、落ちても怪我しないようになっているらしい。随分都合がいいがな」
「はい、そういうことです」
　少しの不安を持ちながらリースは大砲の中に入り、デュランもそれに続いた。
　そして、
ドーン！！
　という音と共に、二人はバイゼルに飛ばされた。

　ヒュー、バスン！

「いたた、衝撃は吸収されても、やっぱり痛いんですね……」
「ま、まぁな。……ブラックマーケットは夜しかやらないんだ。まだしばらくあるから、どこか時間潰そうや」
　彼らは街中をぶらつき、潮の匂いのする港へと進んでいった。
「そういえば、デュランはどうしてローラントに来たんですか？」
　場所を変えながら、リースはデュランに聞いた。
「ちょっと用事でな。なぁリース、風のマナストーンがローラントの近くにあるらしいんだが、どこにあるか知ってるか？」
「！」
　リースは驚き、目を見開いていた。
「い、いえ。風のマナストーンが城の近くにあったなんて……」
「そうか。ちょっとマナストーンには用があってな」

「用……？」
「ああ」
「マナストーンに用っていうのは、何でしょう？」
「ん？ああ、実は…」
「クラスチェンジしたいんでしょ？」
突然聞こえた声にリースは驚いた。
「えっ？今の声は？！」
「あっ、ごめんなさい。はじめまして、リース姫」
フェアリーが微笑みながら姿を現し、困惑するリースに話しかけた。
「こ、この人は……？！」
「うふふ。私はフェアリー。わけあって、デュランと精霊探しの旅をしてるの」
リースは、何かを思い出しハッとした顔をした。
「『マナストーン』に、『精霊』……。それに『フェアリー』ということは、あなたが『フェアリーに選ばれし聖剣の勇者』？！！」
「なんだ。リースまでそのことを知ってるのか？ホークアイといい、俺たちも有名になったな」
デュランは照れを隠すように冗談を言った。しかし、リースはデュランの発した固有名詞にさらなる驚きを示した。
「『ホークアイ』もご存知なんですか？！彼とは滝の洞窟で一緒になって一緒に司祭様に会いに行ったんです！そこであなたたちのことを聞いたんです。でもその後ビースト兵と戦闘になって、戦渦の中で彼は獣人に捕まってしまったんです……。彼は無事ですか？！」
「あ、ああ。ジャドで一緒に脱獄して、パロまで一緒だったんだ。パブですれ違わなかったか？」
「いえ、気づきませんでした。あの時はナバール兵に気づかれないように闘気を消して、人の顔を見ないようにしてましたから」
「そういえば、ホークアイもナバール兵にバレないよう顔隠してたっけな」

「でもデュランは気づいたんですよね？」
「それはアレじゃないかしら。デュランって、人の何倍も集中力高いから、気配消しても気取られたんじゃない？」
「なるほど。それなら合点が行きます。戦闘時でない今も、デュランからは凄い闘気を感じますから」
「そんなにか？なら、そろそろクラスチェンジ出来るかもな」
「……どうしてそんなにクラスチェンジしたいんですか？」
「ん、実はな……」

デュランは紅蓮の魔導師との因縁について話した。その悔しさと共に。

「……そうですか」
「ああ！クラスチェンジして、必ずあいつに勝つんだ！」
「クラスチェンジしただけで勝てますか？」
「……どういうことだ？」
「運動能力、経験、技術、力量……。それが高まっても、最後に勝利を決するのはここです」
リースは胸に手を当てて言った。
「『心』ですよ」
「よくわからないな」
「うふふ。大丈夫。頭では解ってないだけで、本当は解っていますよ、デュランは」
リースはニコリと笑い、デュランは疑問符を顔に浮かべ、それを見ながらフェアリーは微笑んだ。
リースは続けて言う。
「でもこれで、私も旅を続ける理由が出来ました。私もフェアリーとデュランの力になります」
「一緒に精霊探ししてくれるの？！」
「はい！司祭様からお話を聞いてから、私も力になりたいと考えて

ました」
「そう、ローラント軍アマゾネスのリーダーが仲間になってくれるなら心強いわ！……じゃあ、ちょっと失礼するわね」
喜びを露にするフェアリーはリースの中に入っていき、しばらくして出てきた。
「今のは何です？」
「仲間のしるしよ。これで私とあなた、今いる精霊たちとつながっていられるわ」
「……そうなんですか？」
「そうッスよ！」
元気いっぱいにウィスプとノームが飛び出してきた。
「これでお主も我らの力が使えるぞい！見たところ、お主はクラスチェンジすれば、仲間や敵の能力を操る魔法を使えるようになる。そのときは儂をたんと使ってくれ！かわいこちゃんの力になれるならいくらでも頑張るからのぅ！」
「ふふ、そうですか。そのときは宜しくお願いしますね」
リースは微笑んでノームとウィスプを見た。
「そろそろ陽が暮れそうだな」
「あら、デュラン。いたの？」
ウィスプとノームの勢いに負け存在感を失っていたデュランにフェアリーが鋭いコメントをすると、皆は大きく笑った。

空が茜色に染まり、二人はブラックマーケットの前まで進んだが、まだ店は開店していなかった。
「ちょっと早かったみたいだな。んっ？」
デュランが不意に海を見ると、一人の青年が海をじぃーと見ていた。少しに気になった彼は、その青年に声をかけた。すると、
「しっ！静かに」
怒られた。
「ほらほら、あそこに明かりもなく浮いている船があるでしょ？あ

れはまさしく幽霊船ですよ！」
この男、名をマタローと言い、何でも心霊マニアなのだそうだ。
そんな男に声をかけたが運の尽き、長々と幽霊話をされてしまった。
「……というわけで、僕は幽霊話観察に忙しいんだ」
「そ、そうか。ご苦労さん。じゃあまたな」
二人は逃げるようにマタローから離れた。
「すまん。思わぬタイムロスになっちまった」
「でも、なかなか面白い話でしたね。ブラックマーケットはもう開いてしまってますけど」
「まあ、まだ夜は長いから閉まることはないだろうが、早く行こう」
中に入ると、流石は闇市場、何人もの商人がいて、珍しいアイテムを売っている。
（こう広いと、手分けして探す方が良いかもね）
「そうだな」
フェアリーの提案を受けて、二人は手分けしてちびっこハンマーを探すことにした。

「へぇ～、いろんなアイテムがあるんだな～」
聞き込みながら、デュランは珍しいアイテムに目移りしていた。
すると突然、
「ひぃ～!?お、おた、お助けを～!!」
という叫び声が聞こえてきた。
声の方を見ると、リースが槍を商人に向けていた。彼女は激昂しているようだった。
デュランは慌てて駆け寄り、彼女の腕を握り止めた。
「やめるんだ、リース！なにがあったんだ?!」
「こいつ、私の弟を!!」
「弟?あの行方不明のか??」
「こいつが弟を売ったんです！」

「落ち着けリース！事情がまるでわからん！」
リースは冷静さを取り戻し、槍を腰に戻した。
「こいつ、奴隷商人なんです」
「奴隷商人？」
「へ、へぇ。そうなんです」
リースに怯えながら、男は話し出した。
「今は全部売れちまって誰もいませんが、さっきまで『自分は王子だ』とか言う生意気なガキを扱っていたんです」
「話を聞く限り、その子はエリオットです」
「……おい、その子は今どこにいるんだ？」
「へ、へへ。タダで教えてくれなんて、この市場の礼儀じゃ……」
奴隷商人が口をニヤリと曲げた瞬間、リースは男の襟首を掴んだ。
「貴様、どこにいるんだと聞いてるんだ！」
普段のリースからは想像もできない顔と声であった。
「ひぃ！売れちまいました」
「誰に？！！」
「赤い目をした義眼の男が買い取っていきました」
「その男はどこにいる！」
「し、知りません。わかりませんよ～」
デュランは、今にも奴隷商人を手にかけそうなリースの腕を掴み、言った。
「リース、もうその位にしておけ……」
最後にリースは力強い目で奴隷商人をキりっと睨み言った。
「人間を売るなんて悪魔みたいなこと、もう二度とするな！もしまたしたら、どうなるか解るわね？！」
「ひっ！わ、わかりました。もうお許し下せぇ」
男が心底怯える姿を見て、リースはその場を去った。
しばし呆けていたデュランだったが、すぐさま彼女の後を追った。

すると、リースは人から離れた場所に立って、泣いていた。

「……リース」
「ぐす。す、すみません。あんなに取り乱してしまって……」
「いや、一人でずっと我慢してたんだろう？俺たちは仲間なんだ。今は無理しなくて良いんだぜ」
「デュラン、ありがとうございます……」
そう言うと彼女はデュランの胸を借りて、泣き始めた。
デュランは困惑しながらも、抱きしめた方が良いのか迷いつつ、せめて頭くらいは撫でてやろうと思い、手をリースの頭におこうとした。
と、その時
「いやぁ、青春しとるのぉ」
嗄れた老婆の声が聞こえた。
デュランは吃驚して周りを見渡そうとしたが、あり得ないほどの勢いで胸を押され、ひっくり返った。
「いててて……」
見ると、リースは真っ赤な顔に手をあて、壁端にいる老婆を見ながら
「ちちち違うんです！私と彼とはそういう関係じゃなくて……」
「まぁ、そういうことにしておこうかの」
老婆はニコニコしながら、リースの顔を見ていた。
デュランは立ち上がりながら思った。
「（この婆さんも商人なのか？それにしても他の奴らとは感じが違うな……。売ってるのも変なハンマーだけだし……。んっ？）なぁ、婆さん。そのハンマーは？」
「おお、これかい？これは死んだ爺さんの宝もんさ。わたしゃね、死ぬ前にこうして商人の真似事をしてみたかったのさ。でも案外やってみるとツマらないもんだね。分けのわからないもんばかりだし、人売り・人買いはいるし……」
「お婆さん、そのハンマー売って下さいますか？」

「あぁ、いいとも。じゃが、お代はいらん。やるよ。いいもん見せてもらったお礼じゃ。そいじゃ、お幸せにの～」
老婆はニヤニヤしながら市場から出ていった。
「これ、もしかして、ちびっこハンマーですかね？」
「そうかもな」
「使ってみましょうか？」
「確かめるにはそれが手っ取り早いな。……ところで、何故目を合わせようとしない？」
リースは少し顔を赤らめた。
「……何故赤くなる？」
「……えい！」
リースは照れながら、ハンマーでデュランを叩いた。すると、デュランの体は一寸程度に小さくなった。
「やっぱりこれがちびっこハンマーですね」
「そうみたいだな。ところで、どうやら元に戻るんだ？」
「……もう一度叩いてみましょう。えいっ」
デュランの体がさっきの大きさに戻る。
「なるほど。これで使い方はわかったな。さて、ジャドに行くとするか」
二人は店を飛び出ると、夜霧漂う港に向かい、ジャド行きの夜行船に乗った。

# 第二話

獣人の支配から解放されたジャドは市民はもちろん貿易商も自由に歩き回り、かつての繁栄を取り戻していた。
「この城塞都市が閉鎖されたのも、もう数ヶ月前なんだよな」
二人は再開された店で武器・防具を整えながら、コロボックルの目撃情報を集めた。すると「ラビの森の西で、コロボックルを見かけた」という話を聞いた。
「さあ、ラビの森の西に行きましょう」
「ああ。そういえばラビの森の西って、フェアリーと出会った場所だよな？」
（そうね）
「アレか、あの湖は変わり者のメッカか何かなのか？」
（ちょっと、それどういう意味？確かにあの付近はマナの力が比較的強い場所だったけどね）
フェアリーは拗ねたように言った。
「ハハハ、気にするな」

デュランたちはラビの森、コロボックルが目撃されたという場所に向かった。

「ラビの森の西っていったらこのあたりだよな」
「あっ！」
リースが驚き指さした場所を見ると、小さな人間が草むらに逃げ込む姿が一瞬だけ見えた。
しかし、
「おかしいですね。ここに入っていったと思ったんだけど……」
リースは不思議がっていた。小人が消えた先には小道すらなく大

きな大樹が生えているだけだったから。
　一方、デュランは違うことを不思議に思っていた。
「なぁ、前も気になってたんだが、この邪神像、怪しくないか？」
　そう言いながら像を調べてみると、邪神像はガコンと回転した。
と同時に、コロボックルが消えた場所に新たな道が現れた。
「へへッ、やっぱりな。さぁ、行くとしようぜ」
（ドンペリは人間嫌いだからね。他の村から来たコロボックルの振りするのよ）
「ああ、わかった」
　デュランとリースはちびっこハンマーを使い、コロボックルになりすまして村に入っていった。
　すると一人の老人が二人を出迎えた。
「おまえら、ここいらじゃ見ない顔だな」
「あ、ああ。他の村からこっちに引っ越して来たんだ」
「そうかそうか。それにしても、随分人間臭いな」
「そ、そうか？！そりゃアレだな。ここに来るまでバカな人間にくっついて来たから、その臭いが移っちまったのかもな」
「そうか。人間のバカにか？！そいつぁ、ケッサクじゃな。ハッハッハ」
「そうそぅ、人間のバカにだ。ハハハ。（くっ。我慢、我慢…）」
　そこにリースが割って入った。
「あの、こちらには賢者ドンペリ様がいらっしゃると伺ったのですが、どちらにいらっしゃいますか？是非ともお会いしたいのです」
「ほぅ、ドンペリ様にか。さぁのう、自分で探してみ」
　意地悪そうに言って老人は去ってしまった。
「仕方ない。聞いて回るか」
　二人は一軒一軒回って聞いてみたが、「ドンペリ？さぁ、ここにはいないね」という返事しか返ってこなかった。

途方に暮れかけたが、最後の一人が「表に誰かいなかったかい？おかしいなぁ」と意味深な言葉を呟いた。
疑問符を浮かべながら外に出ると、入り口で出迎えてくれた老人がニヤニヤした顔で立っていた。
「ドンペリなんて、どこにもいないよ？」
「おるさ。ワシじゃよ」
「んなっ？！」
「いやぁ、ついつい悪戯心が出ちまってな。すまんすまん」
イタい子供のような笑顔を浮かべるドンペリにデュランは言った。
「さ、流石はドンペリ様、奥が深い……（こんのジジイ、一発伸してぇ……）」
デュランの心を読んだかのようにドンペリは更なるニヤつき顔で、
「どうした？顔がひきつっておるぞ？」
（クソジジイ）
デュランの怒りが頂点に達しようとしたその時、一発の掌底が彼の顔面をクリーンヒットし、勢い彼はすっ飛ばされてしまった。
（いってぇ。前にもこんなことあったな……）
きれいな掌掌底を決めたリースはドンペリに言った。
「ドンペリ様、ご存知ですか？ローラントのコロボックル村にネズミが発生して困っているそうです……。何か良い手はありませんでしょうか？」
ドンペリは真剣な顔をして考えを巡らし始めた。
「ローラント、ローラント……。ふむ、思いついたぞい」
「本当ですか？！」
「天かける道を登っていくと風の回廊と呼ばれる通路があり、その奥に風のマナストーンがある。その近くに風の精霊ジンがいるはずじゃ。ジンの力を借り、眠り花の花粉をローラント城に送り込み、寝込んだナバール兵を一網打尽じゃよ。あっかっかっか！」
リースとデュランは目を見張った。
「私たちの正体を見破られていたのですか？！」

「当たり前じゃ。そもそもコロボックル村は世界にはもはやここしかないのじゃ。それにほれ、お主、フェアリーに選ばれし者じゃろ？ワシらには選ばれし者が判るんじゃよ」
「最初からご存知だったのですね」
ドンペリに言われ、フェアリーが姿を現した。
「ホントは人間なんぞに力は貸したくはないが、フェアリーが出てきた以上、ワシ等にも死活問題となるからのぉ」
「相も変わらず、意地の悪いジジイじゃ」
フェアリーに続いてノームも姿を現した。
「出たな、泥ジジイ。おまえさんも、よくこんな若造に力を貸す気になったものじゃ」
「フン、ワシはかわい子ちゃんの言うことにゃ逆らえない質でな」
「ノームはドンペリ様とお知り合いなんですか？」
「知り合いなんてもんじゃないわ。ただの腐れ縁じゃよ。こいつは、昔からのイタズラ好きでな。ホント、質の悪い奴じゃよ」
「ホッホッホ。すまんすまん。しかし、人をからかうのは面白くての。これぱっかりはやめられんのじゃ」
皆はため息をついて、呆れていた。
「それより、早くローラントに戻った方が良いんじゃないのか？」
「そうですね。ドンペリ様、どうもありがとうございました」
リースが礼を言うと、フェアリーとノームはデュランの体に戻った。
デュランとリースはコロボックル村を出ると急いでジャドに戻り、漁港パロを目指して連絡船に飛び乗った。
再びの船旅を終えてパロに戻り、リースはライザのいるパブに向かった。
「リース様、ドンペリ様にはお会いできましたか？」
「ええ。ジンの力を借りて眠り花の花粉を使うように言われたわ。

私たちはこれからジンを探しに風の回廊に向かいます」
「わかりました。その旨、アルマ様たちにお伝えします」
一時の邂逅をすまし、二人は天かける道を進む。
風の回廊は、古代の人が作ったとされる風神像による仕掛けがあり、なかなか先に進めることができない上、ハーピーなどのモンスターが行く手を邪魔した。
二人は何とか歩みを進めて回廊の奥地まで辿り着いた。
すると、
「あっ！？」
円錐を逆にしたような、神々しい巨大な石が姿を現した。
二人が石の前に立つと、フェアリーが姿を見せた。
「これがマナストーン……。私も初めてみるわ」
「なんて神々しいのでしょう……」
「ここに古代世界を滅ぼした神獣が封印されているのね。そしていつか封印が解け、世界は再び……」
「やめて！！」
フェアリーの不吉な言葉にリースは耳を塞いで叫んだ。
「あっ、ごめんなさい。そうならないように頑張っているんだもんね」
「この近くにジンがいるんだな？」
話の流れを変えるべく、デュランが口を開いた。
三人は当たりを見回したが、ジンの姿はない。その代わり、リースは不審な足跡を発見した。
「何でしょう、この足跡。あっちに続いていますけど……」
「怪しいわね。行ってみましょう」
「な、なあ。フェアリー……」
「クラスチェンジは後よ！今はこの足跡を調べましょう！」
女性二人の勢いに負け、デュランはトボトボと足跡を追っていった。そして、入ってきたのとは反対側の穴から外に出ると、そこには黒い甲冑に全身を覆われた大男と、弱っているジンがいた。

男はこれまた巨大な剣を右手に持ち、天に掲げていた。
「ジンになにをするんだ！！」
二人が駆け寄ると、男は剣を振り、弱りこんだジンに何かの魔法をかけた。そして姿を文字通り姿を消してしまった。
「何だったんだ、あの男は？」
（見て、ジンの様子がなんだか変だよ）
フェアリーに言われてジンを見ると、黒いオーラが彼の丸い体から立ち上り、それに反応するかのようにうっすらとジンの姿は消え始めた。そして、完全に姿が消えると同時に、天空からけたたましい鳴き声と共に大きな鳥の翼と手足を持った女が現れた。
「キシェェェ！」
「あ、あれは『ツェンカー』？！！」
リースが叫ぶと同時に、そいつは足の鉤爪で二人を襲ってきた。
「『ツェンカー』？」
とっさに攻撃を避けたデュランがリースに訊いた。
「はい。ローラントに伝わる民話に出てくる、空の怪物です。鋭い爪と魔法で山道に迷った者を襲うと言います。どうしてこんなところに……」
「考えるのは後回しだ！こいつを倒さねえと！」
デュランはツェンカーの攻撃を交わしながら、剣で切りつけた。が、素早い動きに翻弄され、大きなダメージを与えられなかった。
するとリースがデュランに何かを放った。
「これは？」
「モールベアのツメです。それを砕いたら剣に振りかけて下さい。早く！」
説明しながらリースも同じものを槍の刃に塗りこんでいた。
「こうか？！」
「それで攻撃して！」
リースに言われるがまま、デュランはツェンカーの攻撃を交わしつつ太刀を入れた。だが、先と同じようにクリティカルヒットをす

ることはできなかった。しかし、ほんの掠り傷にツェンカーの顔は苦悶の表情を示した。

「モールベアのツメは武器に地属性の付加効果を与えます。ツェンカーは風属性だから、ダメージが増すんです！」

リースはツェンカーと攻防しながら説明した。

流石はアマゾネス軍リーダーだけあって、鳥系モンスターとの戦闘はお手のものといった具合だった。彼女の槍がツェンカーの胸を突くと、キェェェと叫び、空に舞い上がった。ツェンカーが何か呪文を唱えると、突然小さな竜巻がおきる程の風が吹き荒れ、二人を襲った。

「くっ。エアブラストを使ってきましたね。ならこちらはこれを使いましょう」

そう言って、彼女は再びアイテムを取り出した。

「その茶色いコインは？」

「大地のコインですよ。見てて下さいね」

空から勝ち誇るような笑みで二人を見下ろすツェンカーに、リースは大地のコインを投げた。

すると、コインは光を発し、次の瞬間地面からいくつもの結晶が現れ、ツェンカーを襲った。

「これはダイヤモンドミサイルか？！」

「そうです。このコインの効果はダイヤモンドミサイルを発生させることなんです」

「かぁ～！そんなアイテムどこで手に入れたんだ？」

「えっ？ブラックマーケットで普通に売ってましたよ。……それより、デュランもどんどんコインを投げて下さい！奴をこっちに引きずり下ろしましょう！」

二人がコインを投げると、無数もの結晶がツェンカーを襲った。

すると、ツェンカーは羽を痛め、地面めがけて落下してきた。

「しめた！」

そこに、デュランが十文字斬りを決める。

「だりゃあ！」
そして、それに飛ばされたツェンカーを、今度はリースの旋風槍が襲った。
「せいっ！！」
地属性が付加された二人の必殺コンボにツェンカーは断末魔をあげ、深い崖底へと落ちていった。

「「やったー！」」

喜んでいると、姿を消したジンが再び現れた。弱りきった状態で。
そこにフェアリーが姿を現し
「ウィスプ、少し力を貸して」
（ういッス！）
「……ヒールライト」
フェアリーが呪文を唱えると、ジンの体を光が包み、見る見るジンは元気を取り戻した。
「ありがとうダスー！」
フェアリーとリースは、それぞれジンの力を借りたいことを伝えた。
「事情はわかったダス。あんたたちは命の恩人ダス。喜んで力を貸すダスー」
「なぁジン、あの黒い騎士は誰なんだ？」
デュランはさっきからの疑問を口にした。
「オラにもわからないダス。あの男、風のマナストーンを調べていて、オラに気づいたら急に襲ってきたんダス。そして、オラからエネルギーを吸い取って、ツェンカーを召喚したんダス」
「そうか……」
「それよりも、早く秘密のアジトへ戻りましょう。きっとライザから事情を聞いた仲間が待っています」
一つの謎を残しながら、一行はアマゾネスの秘密基地へと向かお

うとした。だが、当初の目的を忘れられない男は急ごうとするリースを止めた。

「ちょっと待ってくれ！クラスチェンジをさせてくれ！」

（そうね。これからもっと強い敵に遭遇するかもしれないもんね。試しにやってみても良いかもね）

デュランはマナストーンの前に立ち、その輝きを見つめた。

# 第三話

緊張して佇むデュランの体から、すぅっとフェアリーが姿を現した。そしてクラスチェンジのアドバイスを始める。

「さぁ行くよ！目を閉じて、精神を集中するの！」

デュランは言われたように精神を集中させた。マナストーンのエネルギーを感じるせいか、はたまたクラスチェンジを行う影響か、大気が荒ぶり大地が揺れるような感覚に陥った。

だが、何の変化もなく、精神が疲弊するだけで、デュランの集中は途切れてしまった。

「くっ。はぁ、はぁ、はぁ……」

「うーん、ダメだったか。まだ修行不足だったみたいね。また挑戦してみましょう」

そう言ってフェアリーはデュランの体に戻っていた。

気落ちしたデュランにリースは手を差し伸べた。

「惜しかったね。でも、まだまだ強くなれるって証拠ですよ。また頑張りましょう！」

彼女の微笑みに応えるように、デュランも口元を緩めて手を握った。

「ありがとう。リースは強いんだな」

「こうでなきゃ、アマゾネスのリーダーは務まりませんから」

二人は改めて秘密基地に向かい歩き始めた。

その道中、精霊たちは彼らに聞こえないようにして話を始めていた。

（ノームさんにウィスプ、久しぶりダスね）

（久しぶりッスー！元気にしてたッスかー？）

（やれやれ、騒がしい二人が揃ったか。時にジン、あの黒騎士、本

当に心当たりがないのか？）
（やっぱりノームさんも気になるッスか？）
（そうなんダスー。オラもどっかで会ったことがあるような気がするんダス）
（そうなんじゃ。あの泥臭さ、前にも嗅いだことがあるんじゃが……）
（オイラも、なんだか懐かしいような感じがしたんスよね）
（しかし、わからんのぉ……）
首を傾げる三人の会話を断ち切ったのは、宿主デュランだった。

「ジン、力を貸してくれないか？」
ジンが外に姿を現すと、そこは眠りの花畑だった。
「わかったダスー！ローラント城はあっちダスね！」
ジンは体に魔力を溜め、一気に放出した。
「ダー！スー！」
強い風が崖の下から舞い上がり、眠り花粉を巻き上げてローラント城へ向かっていった。桜色の花びらが城を包み込む。
「これでナバール兵はぐっすりダス」
そう言ってジンは元の場所に戻っていった。
「さぁ、ローラント城奪還作戦の開始です！」
リースのかけ声にアマゾネス兵は「オッー！」と声を上げローラント城を目指した。

全部隊がローラント城に侵入したのを確認した後、デュランとリースも城の奪還に向けて動き始める。
城の入る前に連絡役が告げた。
「先発隊の報告によりますと、ナバール兵の3分の2は眠りに落ちていますが、まだ戦闘可能な敵もいるそうです。それと……」
「それと……なに？」

「頂部に向かった者が手負いで発見され、鋭い爪痕があったそうです」

「爪痕？ナバール兵にそんな武器あったかしら……。なにやら不穏な動きがあるみたいね。わかったわ、ありがとう」

「リース様、デュランさん、お気をつけて！」

二人が城に入っていくと、至る所にナバール兵が倒れていた。

しかし、歩を進めて行くと、殺気を感じ始めた。そして、二人をバイゼルに飛ばしてくれたメルシーが倒れているのを発見した。彼女に駆け寄ると、

「気を……つけ……ください……そこに……」

彼女が示す場所をみると、黒い影からナバール忍者兵が現れた。

「私は……そこ……金の女神像で……」

そう言ってメルシーは気を失った。

デュランが忍者に応戦しようとすると、リースが槍を二振りして倒してしまった。

「さぁ、今のうちに彼女を女神像のもとに！」

デュランはメルシーをおぶり、金の女神像がある部屋に運んだ。

メルシーの無事を確認し、二人は城の最頂部、闘技の座を目指した。

忍者の素早い動きに翻弄されつつも、一撃の強い二人の快進撃は止まらず、着実に頂部へと進んで行く。

「もうすぐで闘技の座に着きます」

そう言って階段を上がりきると、

「うへっ！なんだよ、こいつら？！」

そこにはナバール兵どころか、チビデビルやイビルソードなどのモンスターまでもが待ちかまえていた。

「敵はモンスターまで召喚できるみたいですね……」

リースは息をのむように言った。

忍者に加え、モンスターとの攻防を繰り広げながら、二人は道を進んでいく。

そして一本道の廊下を進んでいくと、忍者兵がたった一人で、しかも背を向けて立っていた。

「あなたもナバール兵ですね?!覚悟しなさい!!」

リースが叫びながら槍を向けると、その忍者兵は慌てて振り向いた。

「や、ちょっ、待ってくれ!俺は……、って、リース?……それにデュラン?!」

男は慌てて頭巾を剥いだ。

「俺だよ!ホークアイだ!」

「「ホークアイ!?!」」

デュランとリースは意外な人物に意外な場所で再開し驚いた。そんな二人にホークアイは質問を投げかける。

「どうして二人がここにいるんだ?」

「それはこっちのセリフです!どうしてここにいるんですか!パロでナバール兵に捕まったと聞いて心配してたんですよ!ウェンデルでも離ればなれになっちゃうし……」

「すまんすまん。ほら、俺は得意の鍵開けがあるから。すぐ自由の身さ。捕まった後、忍者に変装してローラント城に忍び込んだんだ!そしたらアマゾネスの奇襲だろ?美獣から仲間を救うチャンスだと思ってな!」

「美……獣……?」

「そうだ。イザベラという名を改めて、今は美獣と名乗っているらしい。前にも話したけど、ジェシカの呪いを解かなきゃならないんだ。だから、奴を倒すのは……」

「……わかりました。美獣は父の仇ですが、関係のない人を巻き添えには出来ません……」

リースは何かに耐えるかのように言った。

「流石はローラントの王女様!もうキスしちゃう!」

「えっ？！！！！」
うつむくリースの頬に手をあて顔を上げさせると、ホークアイは素早く彼女の唇を奪った。
「んなっ？！」
デュランは口を開けて絶句。
何が起きたのかわからないと様子のリースであったが、一拍の間の後、
「んっ！」
恥ずかしがりながら、リースはホークアイの体を突き放した。
「な、な、な、なにをするんですか？！」
リースは顔を真っ赤にして周りを見回し、呆れているデュランを見ると、さらに顔を真っ赤にした。
「わ、わたし、先に行ってます！」
余程恥ずかしかったのか、リースは走って行ってしまった。
「あ～あ、まだちょっと刺激が強かったかね」
「『かね』じゃねえよ。いくら何でも、突然すぎるだろ。しかも、人の目があるところで」
「ハッハッハ。でも、ああでもしなきゃ、あいつ泣き出しそうだったからさ」
「（こいつ、リースの表情読みとって、あんなことしたのか。……それでも抱きしめる位で良かったんじゃないのか？）」
「ところで、おまえらはどうしてここに？」
「ああ、眠りの花畑に行ったら、花粉にやられちまってさ。そこをリースに助けられたんだ。ホークアイも、リースとは知り合いだったんだな」
「ああ。ウェンデルに向かう途中な。ナンパした」
「な、ナンパって……」
「キャアア！！」
二人が話をしていると、先に向かったリースの叫び声が聞こえた。
「リース！！！」

緩ませた顔を引き締めたホークアイは目の色を変えて、リースのもとに駆けだした。
外の廊下に出ると、瓜二つの男二人がいて、一人がぐったりするリースを羽交い絞めにし、もう一人が短刀でその首を狙っていた。
「ちっ！仲間が来やがったか。行くぞ、ビル！」
「おぅ！ベン！」
ベンと呼ばれた男はリースを離し、天空廊下の先にある奥の扉へと姿を消した。
「大丈夫か？！」
「うっ。すみません。油断しました。私のことは良いから、奴らを……」
「バカヤロー！！」
ホークアイは叫んだ。
「俺たちは仲間だろう？！傷ついた仲間を置いて先になんかいけるか！……これを飲んで元気を出すんだ」
「ホークアイ……。これは、はちみつドリンク？！こんな高価なものを頂いていいの……」
「良いから、飲むんだ」
ホークアイはリースをだき抱えると、はちみつドリンクを彼女の口に与えた。
「ありがとう、ホークアイ。やはり最高級の回復アイテムね。元気が出てきました」
「そうか。良かった。捕まってた場所の宝物庫にあったんだ」
デュランはふと思った。
（あれ？それって結局ローラントのもんじゃねぇの？）
しかし、二人の姿を見て、細かいことをツッコムのはよそうと、彼は思考を放棄した。
「さぁ、先に進みましょう！その部屋が闘技の座です！おそらくそこに……」
リースが立ち上がると、三人は部屋に向かった。

しかし、部屋に入ると灰色のコンクリートがむき出しの寒々しく狭い空間があるだけだった。
「行き止まりか？！」
「いえ、敵がいます……」
「ジェノア、か……」
リースとホークアイの視線を辿ると、オブジェと思っていた顔の目が紅く輝いていることにデュランは気づいた。
「こいつは……」
「魔法生物、ジェノアだ。いわゆる壁モンスターだな」
「その口は地獄に繋がり、モンスターを吐き出すと言われています」
リースが説明すると、ジェノアの口の中の炎が燃え上がり、そこから二体のシェイプスターが現れた。
「こいつがモンスターを城内に呼んでいたんですね」
「さて、と。……ザコは俺とリースで何とかしよう。ジェノアはデュランに任せたぜ」
「ジェノアを倒すにはあの炎を消す必要があります。このポセイドンのツメを剣身に」
「武器に水属性を持たせるんだな。わかった」
「……散！！」
ホークアイのかけ声に応じて、三人はそれぞれの相手に向かっていった。
デュランは炎をかき消そうとするが、火の勢いとジェノアの防御力の高さに苦戦を強いられた。
ジェノアには手足がないから物理的攻撃は不可能であった。しかし、建物と一体となっているが故に、独特の攻撃方法を備えていた。トラップ攻撃である。ジェノアは額にチャクラを溜め、発動させた。すると、リースの足下から巨大な槍が突き出てきた。リースはトラップ設置に気づき、寸でのところで床槍を交わす。だが、そこをゴブリンに変化していたシェイプスターに攻撃されてしまった。
「リース！」

彼女を心配したホークアイだが、部屋の四方から弓矢が飛んできて、彼を襲った。
素早い身のこなしを特技とする彼であったが、ポロンに変化したシェイプスターに足を取られてしまい、回避できなくなっていた。それでも彼は、自慢のダガーさばきで3つの矢を落としたが、一本だけ彼の腕を傷つけた。
「ぐっ!!」
「リース!ホークアイ!」
「私たちのことは気にせず、デュランはジェノアの火を!」
リースは立ち上がり、シェイプスターに一撃を加えながら言った。
ホークアイもデュランに目で応え、戦いを続けていた。
二人に支えられながら、デュランは休むことなくジェノアに攻撃を加えた。すると、後ろで二体のシェイプスターがやられる音がし、リースとホークアイがデュランに加勢した。
「よし!同時攻撃だ!」
デュランの合図で、十文字斬り、旋風槍、背面斬りが同時に繰り出されると、ジェノアの炎は消え去り、壁となっていた体は崩れ瓦礫となった。

# 第四話

「ふぅ、辛くも勝利……、って感じだな」
デュランが疲れを見せると、リースがポトの油を取り出した。
「これを三人で飲みましょう。体力が回復します」
「そうだな。おそらくこの先にはビル・ベンが待っているはずだ。疲労状態では勝ち目は……」
「そのビルとベンってのは、そんなに強いのか？」
「ああ。双子のニンジャでな、すでにニンジャマスターのクラスなんだ。相当強いぜ。何か作戦が必要かもな」
「そうなのか……」
「なら仕方ありません。これを使いましょう」
リースは今度はいくつかのウロコ状のアイテムを取り出した。
「このバレッテのウロコを体に擦り込めば防御力を、ドレイクのウロコは攻撃力を上げてくれます。完全格闘戦なら、これでいくしかありません」
「ホントはこんなドーピングしたかないんだが、……負けられねえからな！」

三人はそれぞれのウロコを体に擦り込み、作戦を話し合った。
そして、ジェノアの後に開いた穴をくぐり抜けて、闘技の座に入って行った。

闘技場にはさっきのニンジャ二人、ビル・ベンが立ち、その先の王座には美しい美女が腰掛け、妖艶な笑みでデュラン達を見ていた。
「イザベラ……」
ホークアイは憎しみを放つ眼光をその美女に向けた。
リースはビル・ベンを睨みつけ

「あなたたち！私の弟をどこにやったの？！」
「さぁ？」
「知らんな」
二人のニンジャはしらばくれるように言った。そして三人に背を向け、
「美獣様、ここはお任せ下さい」
この言葉にホークアイは叫んだ
「待て、ビル・ベン！俺だ！ホークアイだ！わからないのか？！」
「知らん知らん！行くぞ、ベン」
「おう！」
「「忍法『合』」」
二人が声を揃えて言うと、二つの体が一つになり屈強なニンジャとなった。これまでの雑魚とは違う、禍々しいオーラを放つニンジャに。
「これがこいつらの忍術だ。こっちは三方向攻撃だ！デュランは正面！リースは左、俺は右を攻める！行くぞ！！」
ホークアイの合図でそれぞれが動いた。
しかし、敵はニヤリと笑い、目にも止まらぬ速さで三人に手裏剣を飛ばした。あまりの速さに三人は避けきることができず、ダメージを受ける。
「ぐっ！防御力を上げてなかったら、致命的だったぜ」
デュランは手裏剣の勢いに押され一歩退いたが、再びニンジャに向かっていった。
「ちっ、強化アイテムか！」
「へっ！おまえ等との戦い方は百も承知さ」
ニヤリと笑うホークアイ。
ニンジャは右から来たリースの攻撃を払うが、素早いホークアイの動きには着いていけず、わき腹にダガーの一閃を受けた。そこにデュランが剣を打ち込み、見事な連携攻撃が成功したのだった。
「ぐっ！このままでは……」

合体したままでは分が悪いと判断したニンジャは、元のビルとベンの二体に戻り、三人に応戦した。
「さ、ここからだ！もう連携プレーは通用しねぇぞ！」
ホークアイが叫び、3対2の戦闘が始まった。
しかし、二体に分かれたとは言っても相手は双子。二人の動きはデュランたちを翻弄するほど素早く、攻撃は回避されることが多かった。しかも、ビル・ベンには影潜りという技があり、姿を消したかと思うと、突如足下の影から現れて攻撃してくるのだ。
「やはり、影潜りは痛手だぜ。素早さもさることながら、その攻撃力だもんな」
「クックック……。死を前に口が回り始めたか」
ベンは勝利を得たようにホークアイを見下して言った。
「倒されるのはあなたです！」
一瞬の隙をつき、リースが槍を突いた。だが、ベンは素早くそれを交わす。
「クワッハッハ！遅いわ！」
「ああ、確かにおまえ等の速さはナバールでトップクラスだよ。だが、俺の素速さも忘れちゃいけねぇ」
ホークアイはいつの間にかベンの後ろに回り込んでいた。
「なに？！」
ベンは慌てて腕を交差させて防御の態勢を取ったが、ホークアイは何かを砕いて離脱するだけだった。
「何だ、今のは？！……ぐっ、体に力が入らない？！」
ベンは崩れるように片膝を床に着けた。
「どうした、ベン？！」
ベンの異変にビルは驚き、意識をそっちに飛ばしてしまった。すると、ベン同様、ビルも目の前で何かを割られ、その中の液体をかけられてしまった。
「うっ！力が……抜ける……」
「おまえ等が被ったのは『スライムの瞳』の水だ」

ホークアイが説明した。ベンは忍び装束を確認すると、確かに右袖が濡れていた。
「旅の途中でモンスターから得たアイテムさ。スライムなんか嫌と言う程闘ってきたからな。その水には攻撃力を下げる効果があるんだぜ！」
デュランは強い口調で言う。
「へっ！おまえ等の影潜りも、もう怖かないぜ。行くぞ！」
ホークアイが鼻を鳴らして攻撃に出た。
デュランとリースもそれに続いてビルとベンに向かっていった。
そして激しい攻防の末、遂に二人のニンジャからダガーが落ち、カランという音が闘技場に響いた。

「ぐっ！も、申し訳ありません、美獣さ……ま……」

傷つきながら立つ三人、デュラン、リース、ホークアイは武器を仕舞い、王座に座る美獣に迫っていった。
「美獣！！キサマは何者なんだ？！」
妖艶な笑みを見せる美獣にホークアイは叫んだ。
「フフフ。私は黒の貴公子様にお仕えしている……」
「私たちの城を返しなさい！」
「ウフフ。こんな狭き城、返して上げるわ。当初の目的は達したからね……」
そう言うと、美獣の体はふわりと宙に浮かんだ。
「待て！目的とは何だ？！ジェシカの呪いを解け！」
「ウフフフ……」
最後まで妖艶な笑みを携えながら、美獣は消えていった。
「クソっ！！」
ホークアイは拳を地面に打ちつけた。
そこにライザ率いるアマゾネス軍の部隊長勢が現れた。
「リース様、加勢に馳せ参じました！」

「……ありがとう。でも、もう大丈夫ですよ。戦況は？」
「……はい。すべてのモンスター、ナバール兵を制圧」
「負傷者の収容、手当完了しました」
「城内探索班を出しましたが、エリオット様のお姿は……」
「ないのですね。わかりました。玉座に戻りましょう」

アルマやじぃも含め、皆が玉座に集まった。

「うぅ、リース様がご無事で、じぃはうれしゅうございます……」
「じぃ、また咳込んでしまうわ。もう泣かないで」
「リース様、ナバール兵に壊された城内も奴らの手により修復済みです」
アマゾネスの一人が報告を述べると、再びじぃが話し始めた。
「リース様、どうか我らと共にローラントの復興を。女王として我々を導いて下さいませ」
リースは顔をうつむかせた。
それを見てライザが口を開いた。
「リース様、エリオット様の事が気になるのですね？……リース様、どうか皆様方と旅をお続け下さい！」
「な、何を言っているのじゃ？！」
じぃは驚き反対したが、アマゾネスの心は一つだった。
「リース様、お旅立ち下さい！」
「エリオット様をお探し下さい」
「眠りの花粉も、もう私たちには効きませんから、城は大丈夫です」
アマゾネスたちの気持ちを聞いて、リースは嬉しかった。
「みんな……。もう一歩のところで敵を逃してしまいました。彼らはマナの減少を利用して、大きな悪事を働こうとしています。私はそれを知った以上、敵と闘わねばならないと考えています。そして、必ずやエリオット王子を見つけだし、姉弟でローラントを復興させます！それまで、この城をお願いします」

リースは深く頭を下げた。
「流石はリース様！今は亡きミネルバ女王様、ジョスター王様もお喜びになられております」
アルマが笑顔で言う。
「さぁ、リース様が安心して帰ってこられるよう、全力でローランドをお守りするぞ！皆、いいか！」
「おー！！」
ライザの意志に、皆が決起して声をあげる。それを見てリースは目頭を熱くした。
「みんな……、ありがとう……。本当にありがとう……」

その夜はローラント城で盛大なパーティーか催された。

「デュ、デュランさん、随分食べるんですね……」
メルシーは、料理を皿にてんこ盛りにしてターキーを頬張るデュランを見て言った。
「ん？ああ、こんないい飯は久しぶりなんでな。それよりメルシー、傷はもう良いのかい？」
「はい。ナバールが最高品の治療薬を残していったので、そのおかげで」
「そうか。そりゃ良かったな。ところで、ホークアイを見なかったか？」
「ホークアイさんですか？先ほどリース様とテラスにおりましたが？」
「そうか。なら、今はそっとしておこう」
「？」

その頃テラスでは、大人な二人が語り合っているところだった。

「ホークアイ、どうしたんです？今日は静かですね？」

「いや、な。そのドレス姿が綺麗でつい見入っちまうんだ」
「フフ、相変わらず口がうまいのね」
「ウソじゃねえさ。ホントに綺麗だと、……美人だと思う」
「ホークアイ……」
リースは赤らんだ顔を悟られないように俯き、話を続けた。
「旅に出たときからアマゾネスの戦闘服ばかりでしたからね……。王族ですから、こんな衣装も着るんです」
「そうか。リースはこっちの方が似合ってるよ」
「そ、そうでしょうか……？」
「ああ、だからその顔をよく見せてくれ」
「あっ、ホークアイ……」
ホークアイは一歩リースに近づくと指を彼女の顎に当てて顔を上げた。
見つめ合う二人を覗き見る影がテラス窓の端にあった。
「あ、あの男、リース様になんてことを!?」
「シッ！ライザ班長、声が大きいですよ」
「でも、リース様も嬉しそうですよ」
「何て言ってるのかしら？」
「『君は僕だけの姫だ。もう離さないぞ』」
「『ホークアイ様、わたし一生着いていきます』」
「『じゃあ誓いのキスを交わそう』」
「ホントにそんなことを話していたら、私の槍の餌食にしてやる」
「ラ、ライザ様、顔が怖いです。それに、もう槍に手をかけています……」
「あれ、メルシー？あなたも来たの？」
「はい、先輩達が集まってるのが見えて」
壁の影に隠れて、アマゾネス達が二人を見ていた。さらに
「でもありゃあ、ホントに口づけくらいするんじゃないか？」
「あれ？！デュランさんも来ちゃったんですか？」
「……まあな」

「おまえ達、何をしてるんだい？」
「あっ！アルマ様も？！」
「リース様があのニヤケ面と……」
「はぁ？何を涙目になってるんだい、ライザ。どれどれ？」
「うっ、みなさん、重いですよ……」
「失礼なことを言うんじゃないよ！……あぁ、青春してるんだねぇ」
「アルマ様まで……。良いんですか？リース様に悪い虫が着こうとしてるんですよ？！」
「……」
「ちょっと、押さないで下さい…」
「だって私たちも見たいんだもの！」
「前の人たちばかり、ズルいわ」
「だからって……」
「あっ？リース様が目を瞑られた？！」
「なに？！？」
「……もう限界です」
一番前にいたアマゾネスが圧迫に耐えられず倒れると、後ろにいたアマゾネス達もテラスに転げ出てきた。
「キャア！」
「いた～い！ヒザ擦りむいたー」
「イテテテ……」
リースは目を開いて音と声のする方を振り向いた。
「あ、あああなた達！ここ、こ、こんなところで何をしてるんですか？！！」
「デュラン、おまえまで…」
「あっ！リース様、顔真っ赤ですぅー」
「あれ？アルマ様がいらっしゃらない。いつの間に……？」
「何をキョロキョロしているの、ライザ？」
「ひっ、後生です、リース様……。その怖い笑顔はご勘弁下さい」
「そうねぇ……、私の槍に刺されてくれるなら許してあげる」

「ひぃ、一体どこから槍をお出しに……？みんな、撤退だぁ！」
ライザのかけ声でアマゾネス達は一目散に廊下を掛けだした。
「待ちなさーい！許さないんだからー！！」
リースも逃げるアマゾネス達を追いかけた。

「いやぁ、リースを怒らせると怖いな」
「デュラン……、いい雰囲気だったんだぜ？」
「すまんすまん。だが、ライザがおまえの事を狙ってたぜ」
「なに？ホントか？！」
「ああ、槍でな。『口づけなどしたら刺し殺す』って言ってた」
「そうか……。以後気をつけよう……」
ホークアイは血の気のひいた顔で言った。すると、プンスカ怒りながらリースが戻ってきた。
「全く！ライザ達たったら！」
「おお、おかえり。リース」
「……あれ？デュランもあの中にいなかったかしら？」
「ん？なんのことだ？俺ならたった今ここに来たところだが」
「そうです？おかしいなぁ？……あっ、それより私、デュランに聞きたいことがあったんです！」
「なんだ？」
「今後のことです。ジンの力をお借りして、私たちは次はどこに？」
「ああ、そのことか。一度フォルセナに戻って、英雄王に残りのマナストーンの場所を教えてもらう予定だ」
「え！？　英雄王様にお会いできるの？！」
「ああ。そもそも俺たちは英雄王様に言われてローラントに来たんだ。この先ジンの力が役立つから先に行け、とね」
「わかりました。英雄王様にお会いできるのが楽しみです」
リースは両手を握りしめ、決意を新たにしている様だった。

# 第五話

第五話

次の日、

「リース様、どうかご無事で……、うぅ……」

「何を泣いているの、ライザ。みんなが見てるわよ」

「うぅ……、デュランさま……、リース様をお願いします…」

「ああ、わかったよ（ホークアイの名はださないんだな。通路で無理無理キスしたのは一生胸の内に締まっておこう……）」

「じゃあ、みんな、また会いましょう！」

リースたち三人はローラントを背にして旅立った。数ヶ月前、彼女は枯れるほどの涙を流しながら一人山頂を下っていた。しかし今、彼女は笑顔で、二人の仲間と共に同じ道を歩いていた。

決意と希望を胸にして。

町に着くと、住人達が集まって何か騒いでいた。人だかりを押し退けていくと、群衆の真ん中には大袋を背負い込んだ猫の獣人がおり、みんなから「ナバールの兵士め、おまえらのせいで町は滅茶苦茶だ！」「この野郎！俺たちの怒りを思い知れ！」等の罵声と石を投げられていた。

「ニキータ！！」

ホークアイは叫びながら、その男の前に飛び出た。そして、石を浴びながら頭を地面につけた。

「町のみなさん、すまない！だけど、こいつも操られていて、どうしようもなかったんだ。この通りだ、許してくれ！怒りが収まらないなら、こいつの代わりに俺を殴ってくれ！」

「ア、アニキ……」

パロの住人たちは互いに顔を見合わせた。

「どうする？」
「ここまでするのなら……」
「フガ、フガフガ……」
リースも皆の前に出て行き、頭を下げた。
「私からもお願いします」
「あ、あなたはリース様！」
「リース様、本物のリース様じゃ！」
「リース様にそう言われちゃあな」
「ああ、俺たちももう、な」
住人たちはそれぞれ散っていった。
「ア、アニキ……。アニキー！」
ニキータは涙を流しながら、ホークアイに抱きついた。
「ニキータ、また会えて俺も嬉しいぜ……。どうして、おまえまでパロにいるんだ？」
「う、うぅ……。アニキがナバールを出ていった後、美獣は大っぴらに呪術で皆を操り出したんだにゃ。事前にそれに気づいた仲間たちはイザベラに反抗したんだけど、イザベラが召喚した悪魔にみんなやられてしまったんだにゃ……」
「そんなことがあったのか……」
「ジェシカ様も牢屋に閉じこめられてしまって……。オイラ、助けだそうしたんだけど、アニキの脱走以来牢獄の壁は何重になって、脱獄できないようになってしまったのにゃ……。そしてオイラも捕まって、他の奴らと同様に操られてここに……」
四人は宿屋の喫茶店に場所を変えて話をしていた。
「そうか……、もうナバールに帰るのは危険だな。なぁ、リース。こいつをローラントで預かってもらえないか？」
「わかりました。大丈夫ですよ。私からの手紙を見せれば、快く迎え入れてくれるはずです」
リースは隣の席に移って一筆したため始めた。
すると、ニキータがひそひそ声で質問した。

「あの、アニキ、あの方は……？」
「彼女はリース、ローラント王国の王女で次期女王だ。ちなみにこっちのムサいのがデュランって言って、フォルセナ国の剣士だ」
「ええ！？ローラントの姫様？！アニキ、それはまた凄い人と仲良しなんだにゃ！……でも、ジェシカ様はどうするんにゃ？」
「ん？まぁ、なるようになるさ！ハッハッハ……」
ホークアイが笑っていると、リースが戻ってきた。
「はい、ニキータさん。これで大丈夫のはずよ」
「あ、ありがとうございますにゃ」
ニキータは深く頭を下げた。

宿屋を出て、ニキータは西の天かける道へ、ホークアイ一向は東の港に向かった。
静けさうを取り戻した漁港にはたった一隻の船しかなかった。
「ナバールを追い出したことでパロの貿易も再開したと聞いていたのですが、まだこの程度なのですね……」
リースは少し寂しそうに言った。
デュランが船頭に話しかけると、そいつはにこりともせず陰鬱な顔で言った。
「……船がでる……運賃は０ルク……乗って行け……」
それだけ言うと男は船の中に入っていった。
「お、おい。０ルクなんて、妙じゃないか？」
「そうか？貿易再開の祝いにタダなんじゃねえの？いいから乗り込もうぜ！」
ホークアイは笑いながらツカツカと船内に入っていった。残されたデュランはリースの顔を見た。
「リースはどう思う？」
「わかりません……。でも、船の乗組員があの男以外に見あたらないのも気になります。……今はこの船に乗るしかないようですが」
彼女もどこか妖しんでいだが、ホークアイに続いていった。デュ

ランも周りを確認しながら、それに続いた……。

事件に気づいたのは、彼らが休息の就眠してから大分だった丑三つ時だった。

「ふわ～あ、よく寝たぜ。……ん？まだ夜か。まだマイアに着かないのか？」

そんな疑問は次の瞬間に不安と恐怖に変わった。

「ウギャギャギャギャギャギャ」

この世のものとは思えない、声とも物音ともわからない音が聞こえてきた。

「な、何ですか？！今の音は？！」

「うわわわっ！」

リースもホークアイもベッドから跳び起きた。すると今度は、燭台や絵画が宙を飛び交い始めた。

「うわぁ、な、何なんだよ？！」

「ポルターガイスト現象です！一旦この部屋から出ましょう！」

三人は客室から出た。船内に人がいる気配はなく、それどころか所々が腐食し、白いもや霧が立ちこめていた。

「バタン！バタ、バタ、バタバタバタバタバタバタバタバタバタ……」

何かが廊下を這いずり回る不気味な音と気配がした。

「ギャー、ギャー、ギャー、ギャー……」

どこからか、人のものとは思えない叫び声が聞こえてきた。

「こ、こりゃあ一体……」

「デュラン、もしかしたらこの船、巷で噂になってる幽霊船なんじゃ……」

「幽霊船……！？」

リースの言葉にホークアイが飛び上がるように驚いた。

「冗談は言いっこなしだぜ……」

「でも、今のポルターガイストにしても、船内のこの雰囲気にしても、そうとしか……」

「何にしても、ここから脱出しねぇとな！」

デュランが意気込むと、今度ははっきりと女の声が聞こえてきた。

（ちょっと待って……）

「ひえっ！何も聞こえない、俺には何も聞こえないぞ」

ホークアイはガタガタ震えながら、耳を塞いだ。

「そんなに怖がらないでも……。私よ」

「フェアリー、どうしたんだ？」

「うん。……微かになんだけど、この船の中、ううん、厳密に言うと甲板から精霊の気配がするの」
「精霊？誰だ？」
「わからない……。でも、もしかしたらこの中にマナストーンがあるのかも……」
「わかった。探してみよう……」
「お願い。……何か来るよ！気をつけて！」
そう言うと彼女はデュランの中に戻っていった。
すると、一つの人影がこちらに向かって来た。ズズ、ズズと何かを引きずる音をさせながら。
「なんだ、他にも人がいたんだ。フェアリーめ、脅かしやがって……。すいませーん」
ホークアイは安堵して、男に近づいて行った。しかし、瞬く間にその安心は恐怖に変わるのだった……。

「うひゃあ！ゾ、ゾンビだぁー！」
「あ……あぁああ……ぁあ……ガー！」
うめき声を出すゾンビは近づいてきたホークアに噛みつこうとしてきた。
「あぶない！」
リースが駆け寄り、ゾンビをなぎ払った。
押し倒されたゾンビが立ち上がると、その後ろからスライムやスペクターといったモンスターが現れた。
「ホークアイ、何をしているんですか？！ただのモンスターですよ！」
「それはそうなんだが……」
「何だ、ホークアイはアンデットやスピリット系のモンスターが苦手なのか？」
「だ、だってよ、砂漠じゃこんなやつら見たことないし……」
「そういえば、滝の洞窟でもゾンビに怯えていましたね」

「二人は怖くないのかよ……？」
ホークアイは震えながらダガーを振り回しつつ、バッタバッタとゾンビ共を倒すデュランとリースに訊いた。
「あ～、別に気にしないな。剣で斬れるし」
「私も慣れてしまいましたから。天かける道にも、夜になると山で死んだ人のゾンビが現れますからね！えい！」
「う、羨ましい限りだぜ……」
「ふぅ……、これで粗方片づいたかな。上にはまだゴロゴロいるだろうが……」
「ホークアイ、まだ震えてるんですか？仕方ないですね。手、貸してあげますよ……」
リースは少し顔を赤らめながら、手を差し出した。
「うぅ、すまん」
ホークアイが手を握ると、リースは恐がりの弟を引くように歩き始めた。
「（おいおい、ホークアイ。本当は逆なんじゃないのか？まぁ、遊園地のお化け屋敷じゃないんだけどさ）」
デュランの率直な感想であった。
彼らがいた客室のある階層を1階とするならば甲板は5階であり、彼らはそれだけ上らねばならなかった。
三人はゾンビやグールを倒しながら、船内に入ってきた道を戻っていった。しかし、
「アレ？このドア、開かねぇぞ？」
「本当ですか？えい！……本当だ、ビクともしませんね」
「ひぇ、呪いだ……」
「魔法だろ？どうすっかな？他に階段がないか探しに行くか……」
デュランは今まで来た道を戻ろうとしたが、リースは開かずの扉の前で立ち止まったままだった。
「お、おいリース……。早く行こうぜ……」
「ちょっと待って、ホークアイ。この紙に書いてあるの、どういう

意味でしょう？」
「……紙？ええと『血、死、呪、死』……、うひゃあ！き、気持ちわりぃ……」
ホークアイが驚いていると、
「おーい、何してんだ？！先に行くぞー！」
デュランに呼ばれ、二人は道を戻り始めた。いくら部屋を見ても上に上がる道はなかったが、一つだけ奇妙な部屋があった。
「ここだけモンスターがいないんだな……。あれは……本棚か？」
「……この部屋、廊下の大きさにしては小さすぎやしませんか？……なんだか妙です」
「そういえば、似たような話を聞いた事がある。ある若者が木造のアパートを借りたんだが、外と内で部屋の大きさが違うんだ。調べてみたら、居間に向かう廊下の途中にもう一部屋あるはずで、管理人に内緒で廊下のモルタルを剥がしたら、寂れたドアが釘と板と護符で開かないようにされてたんだ。その若者がそれを取ってドアを開けたら、その中には……」

バサッ！

「ひぇぇっ！？」
「本棚から本が落ちただけですよ。……あれ？この本、『死』って書いてある」
リースの言葉を聞き、デュランは他の棚を見てみた。
「こっちは『血』で、その隣は『呪』だぜ」
「もしかして……」
リースは顎に手を当てると、本棚を行ったり来たりした。
「まずは『血』。次が『死』、そして『呪』。最後にまた『死』。これでどうです？」

リースが本棚を押すと、

ガガガ

と壁が崩れていき、隠し部屋が現れた。

「ここは、船長室か？」

「あれ、なんでしょう？……航海日誌？」

リースが日誌を開けると、そこには白いページしかなかった。しかし、彼女は1ページだけくっついて開かないページがあることに気がついた。そして、ベリベリと、徐にそれを開けるとそこには

「死死死

死死死

彼女は後ろに人の気配を感じた。
「こんばんわ～」
「きゃー！」
「な、なんだ？」
「ひゃあ！ゆ、幽霊だぁ！」
リースの後ろにはどこかで見たことがある一人の青年が立っていた。半透明の姿で。
「ど～も～。幽霊マニアのマタローで～す。ついに念願の幽霊になることができました～。この感動をあなたにも～。さ～よ～な～ら～」
そう言ってマタローは消えていった。そして次の瞬間
バタン
と、糸が切れた人形の様にリースは倒れた。
「お、おい！リース！」
ホークアイは驚き、彼女を抱き起こした。
「お、おい。しっかりしろ、おい！」
顔を軽く叩くが、起きる気配すらない。それどころか……
「息、してねぇぞ……」
「なんだって！！おい、リース！」
「あのぅ……」
「リース！しっかりしろ！死ぬな！」
「あの……、二人とも……」
「うるさい！今はこっちで手一杯なんだ！」
「私ならこっちにいますよ……」
「「えっ？」」
ハモりながら後ろを振り向くと、今ホークアイの腕の中にいるはずのリースが半透明姿で立っていた。

「リ、リース？えっ？こっちにも？」
「こりゃ、どうなってんだ？」
「……ええと、どうやら私死んでしまったみたいですね」
リースは頭を掻きながら言った。
そこにフェアリーが姿を見せた。
「これは、今の人に呪いをウツされちゃったみたいね……。他の人にまたウツせば、呪いは解けるけど……」
「他の人、ですか……？」
不意にデュラン、ホークアイとリースの目があった。すると、男二人は一目散に逃げ出した。
「あ～、ヒドい……。うぅ……」
「……どっちもどっちだと思うな。リースだって、今仲間を犠牲にしようと考えたでしょ？？」
「えへっ、バレちゃいました？」
「呪いを移す他に手はないのか？」
「たぶん、この船全体の術が解ければ……。何しても、この付近にいる精霊に会えればどうにかなると思う」
「この船は一体何なんだ？」
「わかんない。でも、これはここにあるはずではないものなの……」
「よくわからん」
「そんなことより、早く甲板に上がろうぜ！そんで船にかかってる術を解こう！」
「私、待ってます。あっ、そうだ。デュラン、私の道具入れ見てもらえますか？」
デュランはリースに言われ、寝転がっている彼女の道具入れを開けた。
「そこに一通の手紙が入っています。それを英雄王様に渡して下さい。アルマから預かった大事な手紙なんです」
「わかった。取り敢えず、俺が預かっておくよ」
「ありがとう。それと光のコインも入ってますから、もしもの時に

備えて持っていって下さい」
「わかった。ありがとう」
「ではまた、後ほど」

リースと別れた二人は、再び開かずの扉を目指して歩みを進めた。

「さて、開くかな？」
デュランが恐る恐る手をかけると、ドアは
ギギィ～
と不気味な音を立て開いた。
（やっぱり、仲間の魂を触媒に解ける魔法だったのね）
フェアリーの言葉を聞いて、二人は奥の階段を上っていった。
そして、最後の階層にいるゾンビ群を退けて、甲板に駆けあがった。

「すごい夜霧だな……」
（彷徨える船にようこそ……）
どこからともなく声が聞こえた。
「見ろ、デュラン！あんなところに影が浮かんでるぞ」
（呪われた船から降りたければ、この彷徨える影を倒すのだ……）
そう言うと、影はじわりじわりと迫ってきた。
「くっ、早速リースのアイテムが役立ちそうだ！」
デュランは影に向かって光のコインを投げつけた。コインは真白な輝きを発して、光の玉となる。これまで幾度となく見てきたホーリーボールだ。
「ぐぐぅぅぅ」
影は苦しみながら遠ざかり、実体を露わにした。
「ゴーヴァか……。スピリット系のビックモンスターだな」
二人は武器を抜き、ゴーヴァに向かっていった。
幾度かの攻撃を加えると、敵は再び影だけとなり、二人の視界か

ら姿を消した。
「デュラン、もう一度だ！」
ホークアイに言われ、彼はコインを投げた。再び、聖なる光を浴びたゴーヴァは、宙高い場所で姿を現した。
「何か持ってるぞ」
ゴーヴァは骨で作られた笛を吹いた。すると、黒い雨が滴り始める。
すると
「くっ、胸くそわりぃ……」
「これは『ブラックレイン』だ。負の念が溶け込んだ水滴だ。心まで侵されるぞ……」
デュランは頭を振り、悲しみや苦しみといった感情を振り払った。
「くそっ、この高さじゃ攻撃があたらねぇ！」
「デュラン、俺に考えがある。光のコインを貸してくれ」
デュランから数枚の光のコインを受け取ると、ホークアイはそれをゴーヴァの少し上をめがけて投げつけた。
真上から光を浴びたゴーヴァは苦しみながら下、甲板まで降りてきた。
「いまだ！」
降りてきたゴーヴァに、デュランは十文字斬りを放った。
「ぐぅぅぅ」
ゴーヴァが苦しんでいると
「退け、デュラン！」
ホークアイの声を聞いて、デュランは後ろに退いた。そして、その横をホークアイが走り抜け、敵に突っ込んでいった。すると次の瞬間、ゴーヴァの懐でとてつもなく大きな光が爆発した。
その閃光にゴーヴァは浄化され、跡形もなく消え去った。
その一方で、爆発をモロに受けたホークアイの体は勢いよく吹き飛ばされた。
「ホークアイ！」

地面に叩きつけられる寸前、彼の体をデュランが受け止めた。
「へへっ、奴の懐で全部のコイン使ってやったぜ……。さしものゴーヴァも昇天しちまったみたいだな……」
デュランが自分の道具入れを見ると、リースから預かった光のコインが全てなくなっていた。
「隣を抜けるときにな。手癖が悪くてすまない……」
「なんでこんな特攻したんだ!?」
「ふっ……、好きな女のピンチなんだ……、命位ハレねーでどうする?」
「ホークアイ、おまえ……」
すると、再びどこからともなく声が聞こえてきた。
「よくぞわが彷徨える魂を解放してくれた……」

二人が宙をみると、夜霧に浮かぶ一つの影があった。

「あなたは……」
フェアリーが姿を現し訊いた。
「わが名はジェイド……、闇を司る精霊だ……」
「やっぱり……。ジェイド、あなたがここにいるということは闇のマナストーンもこの船に……?」
「いや、ここにはない……。人間の邪な感情が起こした先の世界大戦の折、恐怖と絶望が世界に蔓延したがために、闇のマナストーンの封印が解け神獣が復活してしまったのだ……」
「そ、そんな……、まさか……」
「安ずるな……、マナのエネルギーと強大な闇のエネルギーが生じたことにより時空に亀裂が生じた……。闇の神獣はその中に吸い込まれ、自らマナストーンに姿を変え消えていった……」
「その後、マナストーンは……?」
「わからない……ただ時空に吸い込まれたのだから、違う時代の異なる世界に存在していることは確かだ……。存在すべき場所を失っ

た私は、いつ、どこに出現するかわからない闇のマナストーンを求め、こうして永久なる時の海を彷徨っていたのだ……」

「お願いジェイド……、私たちに力を貸して！」

フェアリーはこれまでと同じように精霊の力が必要という事を話した。

「……良かろう。我が闇の力を貸し与えようぞ……」

「ありが、うわっ?!」

デュランが礼を述べようとした瞬間、船が大きく揺れ始めた。

「人間の怨念から我が魂が解放され、この船はもはや存在しえない……」

「そ、そんな……、このままじゃ海の藻屑だ！」

デュランがそう言った瞬間、甲板も崩れさり、彼らは漆黒の海へと飲み込まれてしまった。

# 第六話

（……起きてよ）
（……誰だ？）
（……起きなさいよ）
（俺は寝てるのか……？）
（起きろって言ってんでしょーが！）
「アンジェラ？！？」

デュランが目を見開き起きあがると、そこには波の寄せる砂浜が見えた。彼は周りをキョロキョロ見回したが、アンジェラの姿は影も形もなかった。
「なんちゅー夢見てんだよ、俺は……」
彼は自分を落ち着かせ、手を額に当てた。それから頭を左右に振り、自分の置かれた状況を確認した。
「ホークアイ！」
少し離れた場所にホークアイを発見したデュランは、彼に駆け寄った。
「ホークアイ、起きろ！おい！」
「……ん、んん」
程なくしてホークアイは目を覚ました。
「デュランか……、リースはッ？！」
「それが見当たらないんだ……」
「そんな……」
ホークアイは立ち上がり、沖に向かって歩き始めた。
「リース！おーい！！どこにいるんだー！？」
「止まれ、ホークアイ！その傷だらけの体じゃ危険だ！」
デュランはホークアイを追いかけ、後ろから彼の体を羽交い絞めして止めた。

「離せ！このままじゃリースがっ！？」
パニックに陥っている彼を諫めようとフェアリーが姿を現した。
「彼女なら、大丈夫だよ……」
「ホントか、フェアリー」
「ええ。みんなと同じように、彼女は私とつながってる……。呪いも解けてるし、命に別状はないみたい……、まだ意識は戻ってないけど、安全な場所にいる……みた……い……」
フェアリーは突然意識を失い、海の中に落ちてしまった。
「フェアリー！？」
デュランは慌てて海中に潜り、彼女を救い上げた。
「どうしたんだ、フェアリー……」
「みなさんを助けたのはフェアリーさんなんスよ」
ウィスプが心配そうな顔をして出てきた。
「二人が意識なくした後、フェアリーさんは残った力で二人をここに移動させたんッス」
「そうだったのか……。ウィスプ、君の魔法で回復できないのか？」
「残念ですが……。フェアリーさんの力の源はマナのエネルギーッスから、僕のヒールライトをいくらかけても元気にはなれないんスよ……」
デュラン。私なら大丈夫だから。少しの間、あなたの中で休めば……」
そう言って、彼女は姿を消した。ただ、最後に
（私が元気になってる時には、この島から脱出しておいてね……）
と力ない声が頭の中に聞こえた。

「島？ここは……、火山島ブッカか？」
「デュラン、あの様子だと噴火は近いぞ……。急いで脱出しないと……」
「そうだな。だがその前に集落を探そう。その怪我だ、手当しといた方がいい」

「……すまない」
二人は砂浜沿いに歩き、獣道を探した。獣道を辿れば、人が通る場所にぶつかるからだ。
砂浜を歩いていると、彼らは目を疑うような生物を目にした。
「……なんだ、ありゃあ？」
おそらくは亀なのだろうが、体長は１０メートル近くあったし、何より甲羅を背負っているという奇妙さを持っていた。そう、甲羅に紐があり、それに腕を通しているのだ。
「……」
「……」
二人は何も見なかったかのように歩を進めた。
そして獣道を見つけ、島の内陸部へと入っていった。獣道を抜けると、密林が広がっていた。そしてそこにはコカトリスやギャルビーといったモンスターが縦横無尽に暴れていた。二人は苦戦しながらも、密林を抜けていき、ついにダークプリースト村にたどり着いた。
モンスター化した部族とは違い、ここにいる土着民たる彼らは争いを好まず、原始的文化のまま生活していた。それはこの島に邪な人間が少なく、未だ強いマナのエネルギーが流れているからだと言われている。
デュランとホークアイの二人は中に入るとまっすぐ道具屋に向かった。
「すまないが、治療薬はあるか？」
「あんらまー、すごい怪我だねー。漂流者かー？」
道具屋の男から治療薬をもらいながらデュランは答えた。
「まぁ、そんなところだ。この島から出たいんだが、どうしたら良

いかな？」
「そんりゃ無理だべー！ここいらの海域は十数年前からおかしくなっちまってー、イカダでなんか海に出てもあっと言う間にどざえもんだー」
「そうか、参ったな……」
「ひさびさのお客さんだから良いこと教えてやるだー」
「何かいい方法でもっ？！」
「そっちの傷だらけの兄ちゃんー、村の真ん中にあるトーテムポールに祈り捧げるだよー。そしたら一気に元気になるよー」
「……そうか。ありがとう」
二人は半信半疑でトーテムポールの前に行ってみた。
「拝めば体力戻るのかねー？」
「わからん。だが、金の女神像と同じ理屈かもしれないぞ」
ホークアイとデュランはトーテムポールに祈りを捧げた。すると見る見る間に傷口が直り、力を取り戻した。
「こりゃすごい！」
「そうか！ブッカはマナのエネルギーが強いから女神像の回復も強いんだ。……って、これは女神像じゃないしな？」
デュランが不思議がっていると、一人の老人が声をかけてきた。
「これは我が神の像じゃ……。おまえたちにとってのマナの女神像と同じじゃよ……」
「そうなのか？」
「ふむ……」
老人はデュランをまぢまぢと見て、そして言った。
「……着いてこい」
デュランとホークアイは顔を見合わせたが、行く宛もなかったのでその老人に着いて行くことにした。
老人は皆より高い位置にあるホロに案内した。
「ここは……、もしかしてあんたは族長なのか？！」
「いかにも、ワシがこの部族の長じゃ。おまえさんたちは漂流者じ

ゃな？」
「そうなんだ。噴火の前にこの島から出たいんだ！」
「ふむ……。島を出てどうするのじゃ？」
「……やらなければならないことがある」
「……なんじゃ？」
「……救いたい命があるんだ。それに、俺は師匠や恩ある人に何も恩返しをしちゃいない。その前に死ぬなんて剣士じゃねぇ！」
「ふむ……。そっちのは？」
「俺も同じだ。救いたい、いや救わなきゃならない人がいる……。守らなきゃならない約束があるんだ！」
「ふむ……。ワシらはこの地で生まれ、この地で育ってきた。故に、ワシらはこの自然と共に朽ちる……。今更逃げ出すことはせん」
「……」
「じゃが、おまえらは違う。正直、ただ単に生に固執するだけならここに残すつもりじゃった。しかし、おまえらは生きる目的を持っておる、使命を決めて生きておる。そんな奴をこの地で死なすわけにはいかん」
「島からの脱出方法を教えてくれるのか？！」
「ふむ。村を出たらひたすら山を登れ。頂上付近に島の中に通ずる岸辺の洞窟への穴があるはずじゃ。そして今度はその洞窟を下り続けるのじゃ！さすれば海の主のねぐらに行き着く。後は海の主に助けを請うのじゃな……」
「わかりました。ありがとうございます」
二人は膝をついて礼を述べ、村を後にした。

急配な斜面をモンスターたちを退けながら進み、遂に彼らは頂上付近までたどり着いた。しかし、
「洞窟に通じる穴なんて、どこにもないぞ？」
「……なぁデュラン、この岩、怪しくないか？」
二人が岩を調べようとしたその時

「ワッヒャッヒャッヒャ！ここはワシの出番のようじゃの！」
「ノーム？！」
「洞窟の穴はここにあったのじゃが、最近の地殻変動で岩が塞いじまったみたいじゃ！ちょっと待っとれ」
そう言うとノームは岩の前に立ち、手をかざした。すると
ベコッ……、ベコベコッ！……ベコベコベコベコッ！
っと岩が圧縮されていき、小さな石礫になってしまった。
「ワヒャヒャヒャ、見たか？！これが地を司る力じゃ！ワッヒャッヒャッヒャ……」
高笑いと共にノームは消えていった。
「流石はノームだな！」

二人は感心しながら洞窟に入って行った。
中は、今では幻獣と呼ばれるポトや、パックンオタマなどの軟体型モンスターたちの巣窟となっていた。
長く複雑な洞窟を先に進んでいくと、段々海水のにおいがし始め、直に海と接する道に出た。
「海の主の寝床はもうすぐだな」
「……なぁデュラン、海の主って、やっぱりさっきの奴かな？」
「さっきのって、あの亀のことか？なんだ、ホークアイにも見えてたのか。良かった」
「よくないぜ。本当にアレが俺たちを助けてくれると思うか？」
「さあな？でも、脱出するにはそれしかないんだ。信じるしかないさ！」
「それはそうだが……」
「着いた！ここが寝床に違いねえ」
デュランが言うと、
ガラガラガラガラ……、と、今歩いていた道が崩れて閉じこめられてしまった。
そして、紅い目をした漆黒のように黒いローブを来た男が姿を現

した。
「……てめぇ、何者だ?!」
その異様な出で立ちから、二人は警戒心を剥き出しにしてかかった。
「……邪眼の伯爵、とでもしておこう……」
「『邪眼の伯爵』……?その紅い目、もしかして、リースの弟、エリオットを奴隷商人から買い取ったのはおまえか?!」
「なにッ?!」とホークアイ。
「……ククククク、我が主、黒の貴公子様の新たな肉体として、アレは必要なのだ」
「『新たな肉体』?どう意味だ?!」
「ちょっと待て、『黒の貴公子』だあ?おまえ、美獣の仲間か?!」
「……予言により、貴様たちは黒の貴公子様の邪魔になる存在とわかった。……よって、今のうちに殺すこととしたのだ」
「パロに幽霊船を呼び込んだのはおまえか?」
「ククククク……、魔の力を用いれば闇の波動を呼び込むことなど容易いこと。コーヴァが倒されるのは予想外だったがな……」
「おまえ、闇のマナストーンの場所を知ってるのか?!」
邪眼の伯爵は口の端を吊り上げると、人差し指を口に当てた。まるでピエロが幼子にするかのように。
「て……め……、バカにしやがって!」
怒りが頂点に達したホークアイはダガーを手にし、伯爵に向かっていった。
「クククククク……」
伯爵は高笑いとともにフワッと宙に浮き上がり、そして言う。
「貴様たちをここで抹殺するよう命じられていたが、その手間も省けたようだ……。噴火に巻き込まれて生き埋めになるがいい……。クク……、クハハハハ……」
そう言って消えていった。
それと同時に、地面が揺れ始め、岩盤が落ちてくる。さらに

「うっ！これは硫黄の臭い、有毒ガスだ……」

デュランとホークアイは膝を着き、だんだんと朦朧としていった。

# 第七話

第七話

徐々に意識が遠のいていくデュラン、ホークアイはすでに意識が混濁していた。しかし、その時、

「ブー！」

浜辺で見かけた海獣が姿を現した。

「なんだおまえ……、助けてくれるのか……？」

「ブー！」

大きな亀もどきは甲羅に二人を乗せて泳ぎ始めた。そして彼らが島を脱出してから少しの後、

ドカーン！！！！

と火山島ブッカは大噴火を起こした。

海獣はしばらく回遊すると、二人をマイアの側の砂浜に降ろした。その頃には二人は元気を取り戻していた。

「ありがとなー！」

二人が手を振ると、海獣は

「ブー、ブー！」

と別れを告げるように沖に泳いでいった。

「さて、俺たちも行くか……」

（約束通り、島から脱出できたみたいね）

「フェアリー！もう大丈夫なのか？」

（ええ、あの島はマナのエネルギーが充ちてたから、思った以上に早く回復できたわ）

「そうか、良かった」

（心配かけてごめんね。ありがとう）

二人はマイアに入り、さも当然のようにボン・ボヤジの家に入っ

ていった。
「親父、フォルセナに飛ばしてくれ」
「おまえら……。まあ、いい。裏庭で待っていてくれ」
裏庭に出ると、すぐさまボヤジが出てきた。
「そうだ。今度はちゃんとフォルセナに打ってくれよ」
「わかっておるわい！」
少しの不安を残しながら二人は大砲の中に入っていった。そして
ドドーン
という音と共にフォルセナは英雄王のところに飛んでいった。

フォルセナ城の箱庭に落ちると、二人はすぐさま玉座に向かった。

「国王陛下、ただいま戻りました」
「おぉ、デュラン。うむ、ジンは見つかったか？」
英雄王の問いに、フェアリーが姿を現し答えた。
「はい。ジンに加えて、途中で闇の精霊ジェイドも仲間にすることが出来ました」
彼女の言葉に合わせて二人の新しい精霊が姿を見せた。
「久しぶりダスー」
「……久しいな、聖騎士よ」
「うむ。元気そうで何よりだ。この数ヶ月の旅はどうだった？」

デュランはリースに出会いローラント城の奪還に力を貸したこと、戻る道中で幽霊船に乗ってしまい、ブッカで生き埋めになりかけたところを変な珍獣に助けられたことを話した。

「その珍獣は『ブースカブー』だな。本来は凶暴な生き物だが、おそらくフェアリーの放つマナの波動を感じ取っておまえ達を助けてくれたのだろう」
「なるほど、そうでしたか」

「ふむ。ならば、デュランにはこの秘宝を授けるとしよう」
英雄王は彼に貝で出来た笛を渡した。
「これは……？」
「『ぴーひゃら笛』と言って、海獣ブースカブーをなだめるのに用いるものだ。砂浜でこれを使えばきっとブースカブーが力を貸してくれるだろう」
「ありがとうございます、国王陛下。私も陛下にお渡ししたいものがございます」
デュランはリースから預かった手紙を渡した。
「ローラントでかつてワルキューレをしていたアルマという者からリース姫を経て預かりし物です。アルマ様は国王陛下と面識があると言っておりましたが……」
英雄王は右手でそれを受け取りながら、口の端をあげた。
「うむ、相違ない。しかし、アルマめ、気付いていたか……」
デュランとホークアイは疑問符を浮かべていたが、フェアリーの関心は別にあった。
「英雄王様、残りのマナストーン、火水月木の場所をお伺いしてもよろしいですか？」
「うむ……」
英雄王はどこか遠い目をしながら語り始めた。
「火のマナストーンは灼熱の砂漠をさらに南下した熔岩蠢く炎の地、火炎の谷にある。そこには武者修行に励む忍者や剣士がおる」
「水のマナストーンは北の大地は零下の雪原を抜けた氷壁の迷宮にある。そこはアルテナの領土だ、気をつけるんだぞ」
「月のマナストーン、それは夜と獣人の世界、月夜の森にあるが、どこにあるかはワシにもわからない。ただ、獣人は類い希なる強さ

を有している。月夜の森に入る前にクラスチェンジをしておくのだ」

「そして最後は木のマナストーン。これは未開の地とされるワンダーの樹海にあると言われている。陸地からワンダーの樹海に入ることはできないが、その近くランプ花の森の奥地にディオールと呼ばれるエルフの国がある。そこには妖精王と呼ばれる賢者がいるから知恵を借りるといい。ただし、エルフは人間を嫌っておるから慎重に行動するんだぞ」

英雄王はすべてを語り終えると、再び三人を見た。それに応えるかのように、フェアリーが口を開いた。

「わかりました、ありがとうございます。その先は私の仕事、デュランの役割です」

「とうとうマナの聖剣を抜くのか……」

デュランが意気込んでいると、どこかで聞いた女の声が響いた。

「なーに言ってんのよ！まだ半分しか精霊集めてないのに、気が早すぎよ。デュラン」

「こ、この声は？！」

デュランとホークアイがキョロキョロしていると、英雄王は笑顔で言った。

「フフ、これからの冒険を支えてくれる新しい仲間を用意しておいた。入ってきたまえ！」

英雄王が叫ぶとテラス窓から見知った女が照れ隠しのような笑みを携えて入ってきた。

「お、おまえ？！」

デュランは目を見開き、声を裏返しながらその女を指さした。

「えへっ、久しぶりだね。デュラン。フェアリーに、ホークアイも」

少し大人になったアンジェラが三人に笑顔で挨拶をした。

「アンジェラ、ど、どうしておまえがここに?!!」
「デュランがマイアに戻ってくるのと入れ違いに、フォルセナに来たんだ。それで、英雄王さんのところで魔法の修行してたんだ」
「”様”をつけないか!」
「よいよい。ワシは基本的には剣術しか出来んのでな、昔の戦争で仲間だった【アークメイジ】から受けた手ほどきをアンジェラ姫に教えただけだ」
「でもすごいんだよ!アルテナ式の魔法と同じやり方を教えてくれて、おかげですぐ上達しちゃったんだがら!」
「は、はぁ」
「何よ、デュラン。あんたも少しは喜びなさいよ!?」
「こいつ、久々に会うから緊張してんだよ!」
ホークアイがニヤケ顔で言った。
「なっ?!ち、ちがっ!?」
「ハッハッハ、まぁ仲良く旅を続けるのだぞ!ハッハッハ……」

英雄王は笑いながら玉座を後にした。
そして書斎に入り、デュランから手渡された手紙を開いた。

『リチャード、ご無沙汰している。先の手紙でローラント城奪還の援軍を要請し、ウェンデル出兵を理由に貴殿はそれを断られたが、貴国選りすぐりの剣士を確かに受け取った。一国の王となると、多くのシガラミもあるであろう。その中でのこの度の力添え、誠に感謝する。

アルマ』

「すまんな、アルマ。だが、デュランをローラントに送って正解だったようだ」
そしていつかのように北を向き

「娘はおまえと同じ【アークメイジ】になるかのぉ？ヴァルダよ……」

その頃、玉座から出た三人は

「アンジェラ、何でこっちに来たんだ！」

「えっ？えっとね、黄金街道で修行してたら、同じように修行してる獣人の少年にあったのよ。それで……」

「ほら見ろ、デュラン！だからあん時に……」

ホークアイがデュランに言うと、アンジェラは慌てて付け加えた。

「ち、違うのよ、ホントただ知り合っただけ！……で、そいつがフォルセナに渡りたくて困ってたのよ！それでボン・ボヤジの大砲のこととか教えたら、無理矢理私まで連れて来られたの！」

「で、序でに英雄王に挨拶したら、魔法の修行をみて頂いた、というところか？」

「そう」

「一緒に来た奴は？」

「そいつは今、宝石の谷ドリアンで修行してるわ。英雄王さんもたまに見に行ってるみたい。『ケヴィン』って言うのよ」

「「なに？『ケヴィン』って、片言で金髪のやつか？」」

思いも寄らぬところで、デュランとホークアイがハモリを見せた。

「なに？！二人とも知ってるの？」

「知ってるも何も、ケヴィンはウェンデルで共に戦った仲間だ。俺とリースとケヴィンの三人でパーティーを組んでたんだ！」

「へぇ、そうだったんだ！デュランは？」

「俺はホークアイ程大それた関係じゃないんだが、ジャドで世話になったんだ。少しだけ……」

「ふ～ん。あっ！そういえば私、デュランの妹さん、ウェンディちゃんとステラさんに会ったたよ！」

「な、なに？！どうして？！」

「英雄王さんに頼まれたの。あんたの妹が、あんたが旅立ってから元気がないから、冒険の時のあんたの話をしてやって欲しいって」
「それで？妹は元気になったか？」
「そりゃあもちろんよ！最後は『アンジェラお姉ちゃん』って呼ばれてさ、仲良しになっちゃったわよ。しかも、昨日まであんたの家にお世話になってたんだからね！」
「『アンジェラお姉ちゃん』って、生々しいな……。なっ、デュラン？」
「うるさい。…って、ちょっと待て。俺の家に泊まったのか？！」
「そうよ！」
アンジェラはあっけらかんと言った。
するとホークアイが
「デュランの家はどんなだった？部屋にえろむごご……」
デュランは慌ててホークアイの口をふさいだ。
「どんなって、普通の家よ。武器屋さんの家を間借りしてるのね？あっ、それとデュランが巨乳好きってのが判ったわ！」
「なっ？！？」
デュランは顔を真っ赤にした。
「ベッドの下なんか一般的過ぎるわよ。もっと捻りなさい！っていうか、旅立つ前に処分しなさいよ！」
デュランは恥ずかしさのあまりがっくり肩を落とし、ブルーなオーラを醸し出した。それを見ながら、ホークアイは大爆笑していた。
アンジェラはデュランに言った。
「あら、そんな凹むことなの？男の子なんだから、それくらいの本持ってるのは普通じゃない。別に恥ずかしがることじゃないわ」
「いやぁ、男としては、な。……アンジェラはそういうの軽蔑しないのか？！」
ホークアイの問いに、アンジェラはまたもあっけらかんと答えた。
「ぜんぜん。少なくとも、あたしはそんなんでデュランを嫌いになったりしないよ」

デュランは少しほっとしていた。そんなデュランにアンジェラは耳打ちした。
「なんなら、今度私の触らせてあげましょうか？」
「んなっ！？　なんつうことを、おまっ？！！」
「アハハハ！デュランったら顔真赤にしちゃって、オカシー！ジョーダンに決まってるじゃない！ジョーダン」
大笑いしながらアンジェラはデュランの背中をバシバシ叩いた。
「（デリカシーのない女だぜ……。ったく、変わってないな）」
二人を見ながら、ホークアイは言った。
「男のそんなの見てもその態度とは、アンジェラはすげぇな。俺がジェシカにバレた時は顔を真っ赤にして怒られたよ」
「ふーん、ホークアイもやっぱり読むんだ……」
「えっ？なんだよ、アンジェラ。俺だけそんな目向けんの？」
「ところでさぁ、デュラン。まだ【ファイター】のままだね。てっきりクラスチェンジして戻ってくると思ってたよ」
「ああ、一回チャレンジしたんだがな、無理だったんだ」
「そ、残念だったね。後さ、最後にもう一個聞かせて」
「今度はなんだよ？」
デュランは質問ばかりしてくるアンジェラに少しうんざりしながら言った。それにかまわず、アンジェラは満面に清楚な笑みを携えていた。しかし、それはまるで作り物のようでもあった。
そして一言。

「『リース』ってだれ？」

恐ろしいまでの冷ややかな笑顔に、デュランは身の危険を感じていた。
「だれって、あの、アンジェラさん、何怒ってるんですか？」

「怒ってないよー。で、誰なのぉ？『リース』って」
「だから、ローラントの姫で、色々力を貸してくれたんだ」
「ホントにそれだけ～？」
「なに疑ってんだよ？　ホークアイ、おまえからも何か言ってくれよ」
「ん～、どうかなぁ？途中俺いなかったし。二人してバイゼルに言ったんだろ？何かあったのかもなぁ」
ホークアイはまるですべてお見通しと言わんばかりに言った。
その言葉を聞いて、たちまちのうちにアンジェラの目は弓を射るようにキツく釣りあがった。
「ほら見なさい！イヤラシい！」
「何だよ、イヤラシいって？！何もないって！」

その後、アンジェラの追及はブースカブーの甲羅の上でも展開され、砂の都サルタンに着くまで続くのであった。
彼女の執拗なまでの質問を受けながら、デュランの冒険は新たな頁へとつながっていくのであった。

～第三章に続く～

# 第三章「精霊の集結」　第一話

「ふう、やっと着いたわね！早く火炎の谷に行きましょう！」
「いや、日があるうちに灼熱の砂漠を歩くのは自殺行為だ。宿屋で休んで、夜になってから砂漠を歩こう。……あいつの為にも」
ホークアイの指さす先には浜辺でぐったりした様子のデュランがいた。
「そ、そうね」
自分の勘違いでこうなった手前、アンジェラはホークアイの意見に素直に同意した。
宿屋に着き、夜に起してもらうように手続きすると、デュランはベッドへ直行してスリープし始めた。
それを見計らって、ホークアイはアンジェラに質問した。
「フォルセナに向ったのは、本当にケヴィンに連れてこられたってだけだからか？」
「へっ？う、うん、そうだよ」
「ウソだな……」
「はぁ～。ケヴィンも似たようなこと言ってたわ。ケヴィンにね、実はあんたたちのことも話したの。そしたら言われちゃった」
「なんて？」
「『自分の気持ちに背向けて好きな人と別れるなんて、おかしい』って」
「ほぉ」
「それにこうも言われたわ。『世の中には、好きな人と別れたくないのに別れなきゃならない人もいる。アンジェラは違う。それは勿体無い』って」
「……おまえの気持ちはどうなんだ？」
「……わかんないよ。私はこう見えても一国の王位継承者。でも、デュランは一傭兵で、、しかも敵国のだよ」

「そんなの関係ないさ。アンジェラがどうしたいか、それが一番大事だし、それだけ十分さ。さてと」
ホークアイはそれだけ言うと徐に腰掛けていたベッドから立ち上がり、外に出ようとした。
「どこ行くの？」
「ちょっくら散歩だ。日が暮れる頃には戻ってくる」
外に出て行ったホークアイ。アンジェラは横になってイビキを掻いて寝ているデュランの寝顔を覗き込んだ。
「ふふ、初めて会ったときもこんなんだったね。……相変わらずかわいい寝顔だな」
彼女はデュランの寝顔を見て微笑んでいた。
「もう一回、しちゃおうかな……」
そう言って、彼の頬に自分の唇を当てた。
「ふぅ……。起きてないよね？」
（大丈夫、ぐっすり寝てるよ）
ふいにアンジェラの頭の中に声が聞こえ、フェアリーが姿を現した。アンジェラは驚き、目をまん丸にして呆然としている。
「アンジェラ、私がいるの忘れてたでしょ？」
「え、あ、あの、ち、違うの、今のは……」
「誤魔化してもだーめ。あなたの考えてることも、私には伝わってるんだから」
「……ごめん」
「謝る事じゃないわ。でも、アンジェラ、このまま自分の気持ちを言わないでいいの？」
「フェアリー、あなたまで」
「ごめんなさい。でも、気になるわ。私は純粋にあなたたちに幸せになってもらいたいの」
「……簡単に言うけど、私にも色々あるのよ。王女として相手を選ばないといけないし……。それに……」
「『それに』？」

「前も同じことがあったの。もう一年以上も前のことだけど、前の彼氏、って言っても一ヶ月位のお付き合いだったけど、その人とは身分の関係で別れなきゃならなかったの。私も悲しかったし、彼もすごく傷ついてた……」

「……」

「フェアリーには正直に言うけど、私はデュランが好き。大好き。だから、同じように傷つけたくないの。絶対に」

アンジェラの瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「そう。……でも、私はそれでもあなたたちには幸せになってもらいたい。そう願っているわ。身分を越えてでも」

そう言って、フェアリーは姿を消した。アンジェラもどこか物憂げになりつつ、ベッドに潜り込んだ。

……

……

……

「……エラ！……ンジェラ！」

アンジェラの耳には、誰かが彼女の名を叫ぶ声が聞えていた。誰だろう、そう彼女は薄い意識の中で思っていた。

「アンジェラ、いい加減起きろって！」

体を思い切り揺さぶられて、大声で名前を呼ばれた彼女が目を開くと、そこにはデュランの顔があった。

「キャ！デュラン！」

「何驚いてんだよ。もう夜になったから砂漠に出るぞ」

「う、うん。わかった。服着るから、向こうむいてて」

「あ、ああ。わりぃ」

壁を向くデュランは衣擦れの音を耳しながら口を開いた。

「アンジェラ、なんで泣いてたんだ？」

彼女はハッとした。涙目で寝てしまったから、目をつぶってる間

に涙が零れ落ちたのだろう。しかし、彼女はその涙の理由を口には出来なかった。
「……なんでもない」
「……そうか。何か悩みことがあるなら、絶対言えよ」
「……どうして？あんたには関係ないでしょ？」
「いや、それは、そうなんだが。その、モヤモヤすんだよ……俺が」
アンジェラもデュランもそれ以上口をあけなかった。アンジェラが泣いていたのは、昔のことを思い出したからなのか、それともデュランとの関係に悲観的になったからなのか。その答えは彼女しかわからない。
二人の会話が途切れた後間もなく、情報収集を終えたホークアイが戻ってきた。そして共に灼熱の砂漠に出て行った。

「ダイヤモンドミサイル！　エアブラスト！」

砂漠を出た三人は風属性のコカトリス、地属性のバレッテに遭遇するも、アンジェラの速攻で難を逃れた。
「すごいな、一気に二つの魔法使えるなんて！それにジンの魔法まで」
「あれ？聞いてないの？」
「何を？」
（私言わなかったっけ？　私とつながる事で、たとえ離れても精霊たちの力を借りる事ができるのよ）
フェアリーは姿を見せずに説明した。
「そ。だから、あんたたちがジンとジェイドを仲間にした時から『エアブラスト』と『イビルゲート』が使えるようになったわ！」
アンジェラは自慢げに言った。だが、彼女の魔法の威力や速さはやはり彼女の魔力と英雄王との修行の賜物であることは確かであった。

モンスターを倒しながら砂漠を進んでいく途中、ホークアイは立ち止まり、ある方向を見ていた。
「どうしたんだ、ホークアイ？」
「……いや、何でもない。先を急ごう」
「？」
デュランとアンジェラは顔を見合わせた。
ホークアイの視線の先には、故郷ナバールがあったのだ。しかし今は憎き敵、美獣の根城……。ジェシカや育ての親フレイムカーンの身を案じつつも、未だそれらを取り返せない自身の無力さを噛みしめ、ホークアイは先に進むのであった。

「ックシュン！……何だか、寒くなってきたわね」
アンジェラが鼻をさすりながら言うと、ホークアイが口を開いた。
「砂漠ってのはそういうもんさ。昼間は陽が照って熱いが、夜になりゃ今度は極寒だ」
「じゃあこのままじゃマズいんじゃないか？」
「いや、火炎の谷は文字通りの火の海なんだ。だから夜中に入るくらいが調度いいのさ」
「ふーん、ちゃんと考えてるんだ、でもホークアイ、これで極寒なんて言われちゃ、アルテナの寒さにあてる言葉がないわ」
「それは失礼、フフ。……お、火炎の谷が見えてきたぜ」
ホークアイの指さす方を見ると、赤茶色の岩が飛び出ている丘が見えた。

彼らは砂漠を進み、火炎の谷の入り口に着く。しかしそこには意外な人物が待ち受けていた。
「おい、あそこに誰かいるぞ……？」
「あれは……！！ジェシカ！？」
「ホークアイ……。ホークアイ！助けて！」

ホークアイがジェシカと呼びかけた女性の顔を、隣にいるあの妖艶な女が力一杯叩いた。砂漠というシチュエーションに最も似合うような服装をした女を、デュランとホークアイは知っていた。

女は肉付きのよい唇の端を引き上げて、

「バカな娘……。呪いを解いてやったんだから、少しは役に立ちな！」

それを見た瞬間、ホークアイはダガー片手に単身立ち向かっていった。

「美獣ー！！」

「フフ。生きていたのね、坊や……。でも残念……」

美獣がニヤリと笑うと、月光に照らされた彼女の影がにゅうと伸び上がり、ホークアイの一閃を受け止めた。

「おまえ……、ビル？！」

「ビル、ベン！この前のカリを返したいんだろ？！最後のチャンスをやるよ……」

「はっ！ここは”我ら”にお任せを……」

「なに？！」

ホークアイが眉を寄せると、今度は自分の影が伸び上がった。そしてそれは人の形を作り、がら空きとなっているホークアイの腹を思いきり蹴りつけた。

「ぐうっ……がぁ……」

強烈な蹴りを食らった彼はデュランたちの足元に体を飛ばされた。

「また出やがったな、ビル＆ベン！？」

「ククク……、美獣様より頂きし闇の力を見せてやろう」

「「忍法『邪神合体』！」」

ローラントの時の様に、ビルとベンは合体して、一人の屈強な忍者となった。

「何なのよ、こいつ？！」

「そうか、アンジェラは初めて見るんだな！こいつらはビル＆ベンと言って、ナバール最強のニンジャだ」

「ふん、ニンジャだかゲイシャだか知らないけど、私の魔法で一発よ！……深い闇に誘え、イビルゲート！」

アンジェラが魔法を唱えると、ニンジャの足下の影が濃くなると共に、そこに闇のエネルギーが収束しダメージを与える、はずだった。

「えっ、ウソ？！ほとんど効いてないの！」

ニンジャはニヤリと笑うと、素早くアンジェラの下に移動した。

「あぶねぇ！」

とっさにデュランはアンジェラの前に立ち、ニンジャの影潜りを変わり身した。クナイに火薬が仕込んであるのか、その素早い捌きに小規模な爆発が起こる。

「ぐわぁぁ！」

「デュラン！？」

「……見たか？強さもタフさも半端じゃないぜ」

「わかったよ」

アンジェラが頷くと、ホークアイが叫んだ。

「デュラン、アンジェラ、これを使え！」

「むっ、またバレッテのウロコか？！小癪な！」

先の一戦で二人の戦略を熟知していたニンジャは放られたアイテムをダガーで微塵に斬り裂いた。ニヤリと笑い、シーフを嘲笑った。

「くっ、しまった。……なーんてな」

「なにっ？！」

ニンジャが驚きながら再びデュランを見ると、二人ともバレッテのウロコを体に擦り込んでいる姿が見えた。

「ここに来るまで山という程バレッテを倒したからな！手渡せなくても、手持ちに腐るほどあるぜ！」

次いでデュランがドレイクのウロコを塗ろうとした瞬間

「調子にのるなっ！？」

ニンジャは手裏剣を放ち、ドレイクのウロコを破壊した。

「くそっ！だが、おまえらにもうアイテム使う必要なんざないぜ！」

「ククク、強がりを……」
「そいつはどうかな!?」
デュランはニンジャに斬りかかり、得意の十文字斬りをお見舞いした。
だが、
「フハハハ、きかんな!」
「なに?!」
「今度はこちらの番だ!」
ニンジャは影潜りで返してきた。再びデュランの体が宙に舞う。
「デュラン!?」
「……効かねえな」
「?!」
砂地に体を落としたデュランは攻撃を喰らう直前に腕をクロスさせ、ニンジャの攻撃を防いでいた。
「バカなっ?!む、無傷だと!いくらバレッテのウロコを使ったといえ、無傷などありえん!」
「へっ、やっぱりな!さっきの影潜りの時に感じたんだが、俺たちにはもうおまえの攻撃は通用しねぇんだ!それだけ俺たちは強くなったのさ!」
「小癪な!」
「デュラン、ジェシカが危ない!一気にまくし立てるぞ!」
「くそっ、そうはいくか!?」
ニンジャはビルとベンに別れ、持久戦に持ち込もうとした。
「ビル、ベン。焦ったな」
「二人に別れたおまえらならこっちの攻撃は効くはずだぜ!」
「しまった!」
デュランとホークアイはそれぞれ刃を入れた。
「ちょっと!私もいるんだからね!……イビルゲート!」
アンジェラが叫ぶと地面が大きく開き、ビルとベンのエネルギーを吸い取った。

「ぐわぁ！？」
「アンジェラ、連携だ！」
「ＯＫ！……闇を照らし出せ、ホーリーボール！！」
月明かりしかない砂漠で、真白に輝く光玉が大きく炸裂し、ビルとベンは目を眩ました。一気に視界がゼロとなり、手で目を覆う。
「いくぜ！十文字斬り！！」
デュランが渾身の力を込めて繰り出した技にビルは
「がはっ！」
と血を吐き倒れた。
「ビル？！ビルー！」
「……すまん、ベン」
「な……、うっ！……く、美獣さ……ま……おゆ……し……を」
ホークアイはやさしくベンの頸を掻き、一人残ったニンジャは膝から崩れ落ちた。
「……」
ホークアイは悲しい目でビルとベンの亡骸を見ていた。
「ホークアイ……」
「大丈夫、ホークアイ？」
一度目を瞑るも、すぐに彼は目を開けた。
「ああ。ジェシカが心配だ。急ごう」
彼は火炎の谷へと走って行き、デュランとアンジェラもそれに続いた。

# 第二話

火炎の谷に入ると、地面や岩の切れ目から炎が噴出し、洞窟内は熱気が充満していた。一瞬にして汗まみれになったデュランは、汗をぬぐいながらアンジェラを見た。

「あ、熱い……。その服装、涼しそうだな、アンジェラ」

「ウフフ、これが涼しそうに見えて？炎で火傷しそうなんですけど？」

薄着のアンジェラは冷ややかな笑みをデュランに飛ばした。人を殺せそうな笑顔だった。だが、その空気は先達の言葉により一掃される。

「しっ！下の吊り橋に美獣達がいるぞ」

見ると、炎の海に掛かる吊り橋を二人の女性が歩いていた。高台にいた三人は急いで下の吊り橋に向かった。

「ほら、とっと歩きな！」

「いやぁ！熱い、怖い！お願い、助けて！」

「ふん、今頃あの坊やたちは砂漠のベッドで永遠の眠りに着いてるだろうさ！」

「いやぁぁ！ホークアイィィ！」

「美獣！そこまでだ！」

嫌がるジェシカと、その腕を無理に引っ張る美獣。その彼女たちの後ろにホークアイたちが迫っていた。険しい顔で立つ男を見ると、美獣は舌打ちをした。

「ちっ！役に立たないニンジャどもだね」

「ホークアイ！……キャア！！」

「ジェシカ！」

「おっと、動くな！一歩でも動いたらこの小娘を炎の海に投げ落とすよ！」

「くっ、卑怯な……」

素早くジェシカの後ろを取った美獣は、彼女の首に腕を絡めて言った。その時、なす術なく立ち尽くすホークアイ達の間を一本のダーツが飛び抜けた。

「ぐあぁぁぁ！私の、私の顔がぁぁぁ！」

ダーツは美獣の目の下に突き刺さった。痛みに悶える彼女はジェシカを離して、その手を顔に当てた。バサッと、ジェシカが吊り橋の上に倒れると、

「チィィィ、他にも仲間がいたのか！くそっ！」

と美獣は右目を手で覆いながらマナストーンの下に駆けて行った。ホークアイがジェシカに駆け寄ると同時に、ダーツを放った男が姿を見せる。

「アニキ！ジェシカ様は大丈夫かにゃ？！」

「ニキータ？！どうして……、いや！そんなことより、ジェシカの様子を見てやってくれ！俺たちは美獣を追う！」

「わかったにゃ！」

ジェシカをニキータに預けた一行はマナストーンの下に走った。しかし、

「ああ、マナストーンが……」

フェアリーが悲痛な声と共に姿を現した。熱気の中、厳としてそびえるマナストーンから弱々しい光が漏れていた。

「クックック……、おまえらが倒したビルとベンの魂を使って、マナストーンのエネルギーを解放する禁呪を使わせてもらったよ！」

美獣は片目を押さえ、興奮しながら言い放った。しかし、もう片方の瞳は獣のように細く研ぎ澄まされ、手のツメは鋭く尖り、その姿もはや人間のそれではなかった。

「『禁呪』……、光の司祭やお母様が言っていた禁断の魔法ね？！」

「本当はあの小娘を触媒にしようとしたんだけどね！」

「それでジェシカの呪いを解いたのか？！」

「どうしてマナストーンのエネルギーを解放するの？！」

「クックック……、決まっているだろ？……聖域へのトビラを開けるのは、我が主、黒の貴公子様なのさ！アハハハハ……」
高笑いと共に美獣は宙に浮き上がり、ローラント城の時のように姿を消した。
「くそっ、美獣のヤロー！いつか必ずイーグル、ナバール団のみんなの仇を取ってやるからなー！！」
ホークアイは誰もいない空に向かって叫んだ。その様子を悲しい目で見ながらフェアリーは悲痛な声で呟いた。
「……アルテナもだったけど、彼らも聖域のトビラを開けようとしている。みんな、マナの剣を狙ってるんだわ……」
「くっそー、早く精霊の力を借りて聖域に乗り込もうぜ！」
デュランが意気まいていると、彼に負けない位熱い男、いや精霊が姿を現した。
「うぉぉ！話は聞かせてもらったぜぇぇ！」
「あなたは、サラマンダー？」
「おうよっ！！あの女、マナストーンをこんなにしやがってぇぇ！許せねぇぇぇ！」
「あの、力を……」
「うおぉぉ！貸すぜ貸すぜ、貸しちゃるぜ！ウオオオ！」
そう言うと彼はファイヤーボールを放ち、自分に当てた。獄炎の火柱が彼を包み上げる。
「ウオオオ、燃えてきたー！！！」
今度は自分の周りに火柱を立たせた。ただでさえ熱い場所がより一層熱くなるのを、その場にいた皆が感じていた。
「デュランみたく熱いやつだな……。なっ、デュラン？」
ホークアイが見ると、彼は小刻みに震えていた。そして、
「うおぉぉ！サラマンダー！俺も燃えてきたぜ！おまえとは気が合いそうだ！！」
「……暑苦しい」
アンジェラはジトっとした目で二人を見た。そして冷めた目で言

った。
「熱くなるは勝手にすれば良いけど、あんたの目的忘れちゃダメよ。するの？クラスチェンジ」
「もちろんやるぜ！今なら何だって出来そうな気がするぜぇぇ！」
「よっしゃあ！デュラン、俺のマナストーンでパワーアップしてくれぇぇ！！」
「じゃあ、マナストーンの前に立って。やり方はわかるわね？」
「おう！目を閉じて集中するんだな？！」
気合は充分のデュランはマナストーンと対峙し、剣をかざして精神を集中させた。空気が共鳴して、重くなるようだった。
「……うん、今度は行けそう！光属性の【ナイト】と、闇属性の【グラディエーター】、どちらかを選んで。一度決めたら後戻りできないから慎重にね」
「……どう違うんだ？」
「光属性に進めば仲間を守ったり補助したりする役割になるわね。闇属性なら、自分が戦いの主軸となっていく感じかな？戦闘力が比較的上がると思ってもらっていいわ」
デュランは少しの間考え、そして言った。
「【ナイト】にしてくれ！」
そう言うと、天空から神々しい光が降り注ぎ、デュランを包み込んだ。だが間もなく光は消えた。
「おめでとう、デュラン！【ファイター】から【ナイト】にクラスチェンジできたよ」
「……これがクラスチェンジか。強くなったのかなぁ？」
「でも、さっきより顔つきが凛々しくなったみたい」
アンジェラがそう言うと、ホークアイが一瞬ニヤリと不適笑みを見せ、裏のあるような疑問を口にした。
「そうかねぇ、凛々しいかねぇ？」
アンジェラはすぐさま答える。
「うん、凛々しいよ！」

「たくましい顔つきに見えるか？」
「うん、たくましいよ！」
「かっこよくなったと思うか？」
「うん、かっこ良くなったよ！」
「自分のダンナにふさわしい？」
「うん、私のダンナに……って何言わせんのよ？！ホークアイ！」
アンジェラは顔を真っ赤にして叫んだ。はっはっはと、笑うホークアイ。彼に、アンジェラは言った。話を逸らすかのように。
「そ、それより、ホークアイもクラスチェンジしたら？」
「んっ、そうだな」
ホークアイもデュランと同じようにマナストーンの前に立ち、精神を集中し始めた。先と同じように空気が振るえ大地が揺れる。
「ホークアイも大丈夫。【レンジャー】と【ニンジャ】、どちらか選んで」
「【ニンジャ】だ」
ホークアイが即答すると、同じように天から光が差し込み、消えた。
「おめでとう。【シーフ】から【ニンジャ】にクラスチェンジできたよ」
「よし！これで忍術が使えるようになったぜっ！次はアンジェラの番だ！」
「あたしはいいわ」
勢いを付けたように発せられた言葉に、アンジェラは飄々と返した。意外な反応にホークアイはキョトンとして、遅れて疑問符を露わにする。
「何で？」
「まだ【マジシャン】としとの魔法を使いこなせないから！」
それが正しいのか正しくないのか判断できなかったホークアイは、とりあえず彼女に同意するしかなかった。
「そうしたらニキータ達のもとに戻ろう」

三人が戻ると、金の女神像の近くに横たわるジェシカとそれを見守るニキータの姿があった。
「ニキータ、ジェシカの様子はどうだ？」
「あっ、アニキ。それが……、ジェシカ様、一年近くも呪いをかけられてたせいで、心も体も弱りきっていて……」
「……起きないのか？」
ニキータは悲しい顔で頷いた。神妙な面持ちで立つホークアイにデュランは訊いた。
「どうするんだ？ホークアイ」
「この近くにディーンというオアシスの村がある。そこに知り合いがいるから、そこに運ぼう」
そう言うと、ホークアイはジェシカを両腕で抱き上げ、四人は火炎の谷から灼熱の砂漠を経てディーンの村を目指して歩き始めた。いまだ夜の明けない砂漠の道でジェシカを抱きかかえるホークアイを見ながら、アンジェラがデュランに耳打ちをする。
「ねぇねぇ、眠れる姫を運ぶ王子様みたいだね、今のホークアイ」
「あ、ああ。そうだな。（あっちの姫はどうすん？ホークアイよぉ……）」
「どしたの、デュラン？」
「いや、何でもない。そういや、ニキータはどうしてここに？」
ややこしい話はしまいと、デュランは話題を変えて二キータに目を向けた。にっこりと笑いながら、猫人はこれまでの経緯を教えてくれた。
「あにゃ。実は、あの後ローラントでしばらくお世話ににゃってたんですが、行方不明の王子様を探しに行く探索班が灼熱の砂漠に行くって聞いたのですにゃ。その時、アニキたちがマナストーンを探してるっていうのを思い出して、火炎の谷で会えるかもしれにゃいと思って、探索班の人たちと一緒にこっちに来てたのにゃ。オイラ、この辺の地理には詳しいから、案内役ということですにゃ」

「そうだったのか……。その探索班たちは？」
「先にローラントに戻りましたにゃ。オイラはこっちで案内の仕事終えて、アマゾネスさん達とお別れしたのにゃ。そしたらさっき砂漠でアニキたちの臭いを見つけて、追ってきたんですにゃ」
「そうか。ご苦労様だったな」
「いえいえ、なのにゃ。……ところで、さっきからオイラのアゴをさすってくれてるこの人は誰なのにゃ？」
デュランから離れたアンジェラが次にとった行動は初めて見る猫型獣人の姿をまじまじと見ることだった。そして、輝くような笑顔を作り、ニキータに抱きつきながら彼の喉元をさすっていた。
「……おい、アンジェラ。挨拶もしないで何やってんだ？！」
「あっ！あたしはアンジェラ！よろしくね、猫さん！」
デュランは手を額にあて、がっくり肩を落とした。
「そうじゃないだろ！？ニキータが嫌がってるだろうがっ？！」
「だってぇー、猫かわいいんだもん！毛もフサフサだしぃ、喉さするとゴロゴロ言うんだよー！」
「だからってなぁ、おまえ……」
「いや、良いですにゃ、デュランさん。実は気持ちいいですから……」
「ウフフ、猫さん、カワイー」
「……ハァ」
大きなため息をついたデュランを見て、アンジェラは二キータに抱きつきながら、さっきから抱いていた疑問を訊いた。
「そういえばデュラン、何で【ナイト】にしたの？あたしはてっきり【グラディエーター】になるもんだと思ってたのに」
デュランはじぃっとアンジェラの顔を見た。その視線にアンジェラはどきりとして、
「な、何よ？！」
「……何でもない。秘密だ！」
「え～、いいじゃん！ケチ～！」

二人のやりとりを聞きながら、精霊たちはクスクス笑っていた。
フェアリーが可笑しそうに話しかける。
（もう、デュランは素直じゃないわね！）
（うるせいやい！あの事、誰にも言うなよ！特にアンジェラにはな！）
（はいはい、解ってるわよ。フフフ、照れちゃって）
（だ、だれがっ？！）
フェアリー達は知っていた、クラスを選ぶ時のデュランの思いを。
彼はこう考えたのだ。

『俺は力が欲しい。たしかに紅蓮の魔導師を倒すには闇の力が必要だ。だが、俺は今、守る力が欲しいんだ。アンジェラを守る力が欲しい！こいつの泣き顔なんざ、絶対見たかねぇ！』

そうこうしているうち、朝日が昇る気配がし始めた頃に一行はオアシスの村ディーンに着いた。朝早く人の少ない町中を歩き、一路道具屋に向かう。
「おーい！ファルコンおばさーん！いるんだろう？！」
少し年季の入った家に入りホークアイが叫ぶと、４０近いおばさんがアクビをしながら階段を上がってきた。
「誰だい？こんな朝っぱらから……、ふぁ～あ」
「ファルコンおばさん、俺だよ！ホークアイだよ！」
「なんだ、あんたかい……。んっ、その子、どうしたんだい？！」
「すまないおばさん、下のベッドを貸してくれるか？！」
「わかったよ。調度いま開いてるから、その子寝かせてきな。私はタオルとお湯を持ってくるから。お風呂もいれてやるよ」
ファルコンと呼ばれた女性が家の奥に歩いていき、ホークアイはジェシカを連れて階段を降りて行った。

「おい、デュラン！ニキータ！手伝ってくれ」
「お、おう！」
デュランとニキータはホークアイに呼ばれ、階段を駆け降りる。
一方のアンジェラもファルコンに呼ばれた。
「ちょっと、そこのあんた」
「えっ？あ、あたし？」
「そうだよ。あんたの他に誰がいるんだい。ぼうっと突っ立ってないで、お湯張るの手伝ってくれ」
「は、はい」
ファルコンの強い口調に押されるように、彼女は家主が消えていった扉へと駆けていった。

「おいら、外で食料買ってくるにゃ」
皆を気遣う二キータと入れ違いに、タオルを入れた桶を持ったファルコンが地下の寝室に戻ってきた。そして、横になっているジェシカを見てから、それを心配そうに見守るホークアイたちに目を向けた。
「いま風呂いれてるから、お湯張ったらその子の体洗ってあげるよ。で、一体どういう事情なんだい？！ロキのガキやヴァルダの娘まで連れてきて」
「あんた、父さんを知っているのか！？」
「『知ってるんですか？』だろ？！質問してんのはこっちだよ！」
「す、すみません……」
「実は……」

ホークアイはナバールに起きたこと、美獣がジェシカに呪いをかけていたこと、デュランたちと共に精霊を探していることを話した。

「はぁ……。そうかい。あんたもまた随分面倒なことに巻き込まれてるねぇ……」

大きなため息と共に、ファルコンは階段を上がっていった。
「なんだ、あの気の強いババアは?!」
「デュ、デュラン……!」
ホークアイが指さす方を見ると、階段でファルコンが顔をひきつらせて立っていた。その顔にデュランの血の気がさぁーと引いていった。フェアリーに選ばれ、幾多の強敵を倒した聖剣に勇者も慄くほど恐ろしい顔がそこにはあった。
「誰がババアだってぇ?」
「いや、その……」
「ったく、親子共々……。風呂入ったみたいだから、ジェシカの体洗ってくるよ。男どもはここで待ってな」
ファルコンはまるでデュランの父、ロキを知っているかのような口ぶりを見せた。しかし、デュランがそのことに言及する前に彼女はジェシカをおぶって階段を上がっていってしまった。一時の緊張から開放された彼は、同じように寝室に残されたホークアイに向かってその疑問を投じた。
「あの人、なんで俺の父さんのこと知ってるんだ?」
「さぁ?ただ、ファルコンおばさんは眼のいい人なんだ。もしかしたらむかし、おまえの親父さんに会ったことがあって、それで判ったのかもしれない」
「むかし会ったって?」
「そこまではわかんねぇよ。だけど、世界大戦では連合国側で戦ったらしいから、そこで会ったことがあるんじゃないか?」
ホークアイは肩をすくめて見せた。その姿を見ながらデュランは新たに浮かんだ疑問を口にする。
「連合国側?……世界大戦って、どんな構図だったんだ?」
「なんだ、デュラン、知らないのか」とホークアイは半ば呆れ顔で言うと、過去の話を語り始めた。それは彼らが生まれる前の話。
19年前に起きた世界大戦、それは今は滅亡したベダン帝国が世

界を相手にした戦争。
　帝国は手始めに、当時台頭してきた獣人の国ビーストキングダムの壊滅に出た。次いでフォルセナ侵略、この時活躍したのがリチャード王子やデュランの父、黄金の騎士ロキ率いる白銀の騎士団。当時、フォルセナとアルテナは連合を組み共に世界大戦に挑んでいたが、ペダンのフォルセナ侵略部隊は同国を攻め立てると、その勢いに乗せてアルテナまで侵攻、その際先代のアルテナ女王は戦死してしまった。
　その一方で、ペダンは言葉巧みにナバール団を援軍に加え、当時まだ国として成り立ったばかりのローラントを攻略させた。ローラントはある情報筋からペダンが自国に侵略してくることを知っていたのだが、統治者ガルラは外交重視の姿勢を取り、侵略に備える手を今一歩遅らせてしまった。その隙に付け入り、ペダン・ナバール軍は難攻不落と言われたローラントを陥落。ガルラも死亡し、その娘も捕虜とされてしまった。アマゾネスとナバールニンジャが不仲となったのもそれが原因とされている。だが、アマゾネス部隊はフォルセナ＝アルテナ連合の傘下に加わり、ナバール軍と立ち向かうこととなる。
　元々ファルコンはナバール兵だったのだが、首領のこのような行動に疑問を感じてナバールを離反、連合国側に着き戦闘に参加した。

「多分、そん時にファルコンおばさんはお前の親父さんを見たんじゃないか？」
「見たって割には、ずいぶん顔見知りみたいだったけどな。それで、戦争はその後どうなったんだ？」
　過去の歴史に興味があったのか、説明から父の雄姿を垣間見たのか、デュランは話の続きをホークアイに促した。彼の口からさらに歴史が語られる。

　勢いに乗るペダン帝国にさらに味方するものが登場する。竜族の

皇帝、竜帝。竜軍まで仲間に入れたペダン軍はは永世中立国ウェンデルにまで侵攻し始めた。文字通りの世界征服がここに明らかとなったのである。

しかし、そんな大戦も呆気ない形で幕を閉じる。戦局の初め、ビーストキング偵察部隊にいた数名が反乱を起こしていた。彼らはフォルセナやアルテナばかりか、ローラントやウェンデル、果てはナバールの人間すらも仲間に加え、最後はペダンを囲むジャングルまで皇帝や将軍を追い込み、彼らを討ち取ったされる。

「頭をなくした虫は死ぬだけだ。その後、間もなくペダンは敗戦、その7年後、つまり今から12年前、弱体化したところを竜帝に裏切られ滅亡しちまったってわけさ」

「父さんたちが竜帝を倒したのは、ペダン滅亡直後ってことか」

「まぁ、そういう事になるな」

次から次へと質問が浮かぶ性質なのか、デュランはさらなる質問を惜しむことなく口にする。

「ペダンの皇帝たちを倒した連中って？」

「不明。報復があるからってことで公表されてないのさ」

「……そうか」

会話が休題となった瞬間、感情を激しくさせた彼らの仲間が闊歩する怪獣のように寝室に続く階段を下りて来た。

「ハァ、何なのよ、あのおばさん?!」

必要最低限の家具しかない寝室にいたデュランたちのもとに、アンジェラが怒りを露に戻ってきた。頭から湯気上っているように見えるほどの激高振りである。だが、それもその姿を見れば当然と言えるのかもしれなかった。

「アンジェラ、おかえ……、なんでそんなにびしょ濡れなんだ？」

「お風呂なんていれたことないもの！その上寝てる人を湯浴みさせるなんて、無理よ、無理！」

「……ご苦労さん。そういえば、ホークアイとあの人との関係を聞

いてなかったな」
　アンジェラに同情を込めた労いの言葉をかけると、デュランはずっと気になっていた二人の関係を当人に聞いてみた。ホークアイは特段感情も見せず、淡々と説明するように言う。
「ああ、そのことか。うーん、何ていうのか、世話になってるっていうか、まぁ言うなればもう一人の母親かな」
「『もう一人の』……？」
　人生背景を滲ませたようなフレーズにアンジェラは首を傾げた。もう一人――それが一体どういうことなのか、家族に悩む彼女の心はそこにひきつけられた。
「そうさ。俺は生まれた頃にナバールに捨てられたのさ。親父の顔もお袋の顔を見たことない。物心つくときには、ナバールで泥棒やってた。今の首領フレイムカーン様が俺の育ての親で、前に話したイーグルは年の近い兄貴、ジェシカは妹ってところだ」
　ホークアイは初めて自分の過去についてを口にした。その顔は懐かしいものに思いを馳せた感慨深さを伴っていた。遠い昔に見た故郷を思い出した旅人のような目で彼は語る。
「幼い時にな、一回ヘマしちまって、この村の側で倒れちまったのさ。そん時に俺を助けてくれたのが、ここのファルコンおばさんだったのさ。動けなくなった俺に付きっきりで看病してくれてな。何でも、昔生き別れたガキが俺と同じ位の歳なんだとさ」
「そんなことがあったのか」
「あの人、口ではキツいこと言って強がってるけど、本当は優しくて、寂しいんだ。それ以来、俺はちょくちょくここに来て、会ったこともない母親のようにあの人に接してるんだ……」
「ファルコンおばさんも同じようなこと言ってた、浴室で」
　アンジェラもどこか寂しい気持ちでファルコンの話を思い出していた。だが、デュランもホークアイもそれを知ることも推察することも出来なかった。
　彼女につられるように、二人もしんみりした空気を感じていた。

その雰囲気を知ってか知らずか、ファルコンがジェシカを抱えてゆっくり戻って来た。そのまま静かに眠る彼女をベッドに降ろす。
「この子、ロクなもん口にしてなかったみたいだね。体が細いし軽すぎる」
彼女はジェシカをベッドに寝かせると、
「あんたたちも疲れたろ、今コーヒーでも淹れるから、休んでいきな」
そういって再び寝室を後にした。
ほんの数分の後、いい香りをさせるコーヒーカップを5つもって彼女は戻って来た。
「ホークアイは砂糖2個で良いんだろ。アンジェラはどうする？ロキの息子は親父と同じでブラック好みかい？ニキータのはぬるくしておいたからね」
買い物から帰ってきた猫型商人から順にコーヒーを渡すと、それぞれが彼女に返答を返した。
「ああ、ありがとう。おばさん」
「いつもすみませんにゃ」
「私は砂糖一つでお願いします」
「……父さんはブラックが好きだったんですか？」
その中でデュランだけが興味津々とした目をしていた。お盆を近くにあった台に置きながら、ファルコンは彼の気持ちを察した。
「そうか、小さい時に竜帝大戦に出ちまったから、あの男の好みは知らないのか」
「……はい」
傷心に馳せる彼にファルコンは声をかけた。たったの一言だけ。
「で？」
「はい？」
「砂糖は入れんのかい、入れないのかい？」
「い、入れて下さい。一つだけ」
ファルコンは盆の上に載っていた小瓶から角砂糖を一個摘み上げ

ると、「ほれ」とそれを放り投げた。デュランはそれを両手でキャッチすると、黒い水面に甘い結晶を沈めた。その様子を見てから、彼女は口を開いた。

「そういや、まだ名前を聞いてなかったね」

「デュランです」

「デュランか……。あんたの親父はコーヒーにはうるさかったよ。あまりのこだわりに自分以外の奴が淹れたコーヒーは飲みやしないんだ。その代わりあいつの淹れたのは旨かったね。あたしも死んだダンナも、よく味合わせてもらったよ」

「世界大戦の時にですか……？」

「ああ、ホークアイから少しは聞いたろ？連合国軍で一緒でね」

「それにしては、随分父さんの事を知ってるんですね？」

その質問にファルコンは両目を閉じ、沈黙を答えとした。そしてゆっくりと瞼を開けると、その目は一人の少女に向けられた。

「アンジェラ、あんた、親父のことは知ってるのかい？」

「……いいえ。でも、小さい時に亡くなったと」

「……そうかい。じゃあ、ヴァルダは一人であんたを育てたんだね」

「あの、もしかして、……世界大戦を勝利に導いた反乱軍にファルコンさんはいたんじゃないですか？母や、デュランのお父様とも一緒に」

ファルコンは目に力を込めてアンジェラをみた。アンジェラも負けじと彼女の眼光を受け止めた。張り詰めた空気を和らげようと、ホークアイは道化師よろしくオドケて言った。

「マッサカー」

「そうだよ」

ホークアイの気遣い空しく、ファルコンは意味深長な答えを口にした。その一言に、その場にいた全員が驚きの表情を見せる。だが、一番の動揺を見せていたのは、彼女に育てられたと感ずる一人の男だった。

「おばさん……」

「あんたももう大人だし、今更復讐にくるバカもいないだろうしね。でもこれはここだけの話にしておいてくれ」
「…わかりました」
「あんな愚かな戦いはないよ。無駄に人を殺し、国を奪い、人を不幸にする。だから私は反戦主義者のダンナと一緒に闘ったのさ。ロキ達も一緒にね」
「……それだけですか？」
ファルコンの説明にアンジェラは苦言を呈するかのように疑問を挟んだ。まるで、彼女がまだ秘密を隠しているかのような質問。だがファルコンはそれを、空気を操り俊敏な動きをする隼のように流した。
「ああ。そうさ」
「そう、ですか……」
引き下がるアンジェラを見ながら、ファルコンはふぅと一息ついてから、話題を違う方向へと切り替えた。
「それにしても、最近は懐かしい奴らのガキによく会うよ。一昨日もミネルバとジョスターの娘に会ったからね」
その一言に三人は目を張った。ここでも一番の驚きと喜びを見せたのはホークアイだった。
「えっ、それって……」
「おばさん！リースを知ってるんですか？！」
「ああ、何でもナバールのアジトに住み着いた魔物を倒しに来たって言ってたよ。あたしがミネルバやジョスター、アルマの話をしたら驚いた顔してたっけねー」
「良かった、リース……。無事だったのか」
ホークアイが心からの安堵を見せると同時に、デュランは彼女の動向を気にかけた。彼女は無事でいるのか。単身で敵地に乗り込んだのではないか。そう彼は考え、一抹の不安を抱いていた。
「ファルコンさん、リースは今どこに？」
「さぁねぇ？しばらくはディーンを中心にナバールを探るって言っ

てたから、しばらくしたら戻ってくるんじゃないかい？あんたたち、リースとも知り合いかい？」

デュランとホークアイはリースと共に旅をしていたが、途中離ればなれになってしまった事を説明した。その時はまだパーティにいなかったアンジェラもファルコンと同じように聞き役に回っていた。

だが、ホークアイの説明が終わるや否や、ファルコンは彼を一括した。

「何やってんだい、ホークアイ！好きな女は命張って守れって、あれ程言ったじゃないか！」

「ひっ！ごめんなさい！」

「相変わらずファルコンおばさんはこわいにゃ…」

本日一番の怒号に、ホークアイだけでなくデュランとアンジェラも身を縮めた。唯一、同じような光景を昔から見てきた二キータだけがその場で身を緩め続けることができた。

心底呆れたような顔をしていたファルコンであったが、ふと壁に掛かっている時計を見遣った。

「全く、この子は……。っと、そろそろ店を開ける時間か」

短針の位置から夜明けを知ったファルコンは店を開けるため、一度階段を上った。だが、言い忘れたことがあったのを思い出し、すぐにきびすを返した。

「それとあんたたち……、ふぅ、まったく……」

ファルコンが戻ると、四人は机に突っ伏すように、あるいは、うなだれるように寝落ちしていた。「世話が焼ける子たちだねぇ」と言いながら、彼女は毛布を用意してそれぞれに掛けた。

「一晩中砂漠歩いて、ビルとベンと闘って、火炎の谷歩いて、色々あったんだ。よく今まで体がもってたもんだよ」

誰に言うでもなく、彼女はつぶやくと再び階段を上がった。だが、直後、彼女の後を追うように階段を上がってきた者がいた。

「ファルコンさん……」

「……なんだい、アンジェラ。あんたは眠らないのかい？」

「大丈夫です。そんなことより、さっきの19年前の話、話してないことがありますね？」
「なんだい、そりゃ？」
ファルコンはすっ呆けるように、手をひらひらと上げて言った。だが、そんな態度もアンジェラには通用しなかった。彼女は間者を問い詰める査察官のように、その抱いた推理を口にした。
「ホークアイのお母さんのこと、あなたの子供のこと。いえ、率直に言えば、あなたがホークアイのお母さんだということです」
ふぅ、と溜息を付いて天井を見上げながら、
「強大な魔力による探知能力かい？参ったねぇ」
「わかりません……。でも、あなたとホークアイはよく似てます」
「あんたとヴァルダが似てるように、あぁ今のは昔のヴァルダにって意味だよ、……あの子も私に似るのかね？」
アンジェラの経緯を知るファルコンは一言フォローを入れながら、彼女の推理に太鼓判を押した。それは最早自白に等しかった。
「アンジェラ、このことは秘密だよ」
「どうしてですか？」
「まだ時じゃない。時が来れば、全てを話すさ。だが今話したところで、あの子の重荷にしかならない。だからまだ伏せといてくれ」
「…わかりました」
「わかったら風呂にでも入っちまいな。まだ温かいはずだからね。冒険なんざしてたら、風呂なんかロクに入れないだろ？」
「わぁ、ありがとうございます」
度重なる冒険に疲労を貯めていたアンジェラは喜びながら、浴室に向かった。さっきまで眠っていたジェシカを入れていた浴室へ。
デュランが目を覚ましのは、それから数十分後のことだった。彼もまたこの長い旅で疲れていた。しかし、気の許せる人の家、平和

な村に身を置いたからか、彼の緊張は緩んでいた。そのため、仲間の一人が寝室から消えていることには気づかなかった。

「んが、寝ちまったのか。……顔でも洗うか」

彼はぼぅとする頭をこんこん叩きながら階段を上っていった。一階で開店の準備をほとんど終えた家主を見つけると、

「ファルコンさん、顔洗いたいんだけど、洗面台貸してもらえますか？」

「ああ、いいよ。そっち真っ直ぐ行って、浴室の隣だよ」

「ありがとうございます」

指示通り進む彼の背中を見ながらファルコンは何かが頭に引っかかる感覚を覚えていた。

「アレ？何か忘れているような……」

そんなファルコンの疑問など露知らず、デュランは洗面台に辿り着き、疲れて重く感じる顔にお湯をかけた。

「（あれ、タオルどっちに掛かってたっけ？右だっけか？）」

寝ぼけ状態で洗面台に来た彼は、タオルが掛けてあった場所を確認せずに顔を洗ってしまった。彼は試しに右手を上げてタオルを探すことにしたのだが、彼が手を上げると同時にピシャっとビニールカーテンが開く音がした。

「（ピシャ？ん……、何だこの柔らかい物は？）」

「あ……」

デュランはいきなり聞こえた女の艶やかな声に驚き、眼を見開いた。するとそこには、入浴を済ませ、髪を濡らし、一糸纏わぬ姿で立つアンジェラが羞恥と激怒で顔を赤らめ立っていた。

「おわっ！す、すまん、アンジェラ！」

「すまんとか言いながら、いつまで触ってんのよっ！」

見ると、タオルを弄っていた手がアンジェラの豊満な胸を揉んでいた。彼は慌てて手を引っ込めた。だが、すでに時遅し。

「いや、これは違うんだ」

「何が違うのよ、このド変態！！」

アンジェラのグーパンがデュランの顔面にクリーンヒットし、彼は仰向けに倒れた。木製の床に彼の後頭部がガツンと音を立てて落ちる。彼は顔を上げて弁解を続けようとした。だが湯に濡れた素足がその目鼻口を覆う。

「ちょ、ちが…、グゲッ！」

「下からどこ見てんのよ！」

アンジェラの足がデュランの顔を床に押し付ける。顔面をなじられながらも、彼は弁明に終始しようと試みた。

「アンジェラ、話を聞いてくれ…」

「変態と話す言葉なんてありません！触らせてあげようかとは言ったけど、まさか本当にやるとは思わなかったわ！この痴漢！」

アンジェラが側にあった桶で思い切りデュランの頭頂部を叩くと、彼は気を失ってしまった。

「フン！デュランなんて、しらないんだから！」

意識を失った顔から足を退けながら、アンジェラはタオルを取ってビニールカーテンを力強く閉めた。

ファルコンがやってきたのは、その数秒後のことだった。

「あちゃー、遅かったかい。すまん、デュラン。アンジェラ」

大事なことを思い出しそれを伝えにきたのだか、すでに事件は起こり、そして終わっていた。彼女は間抜けにノビるデュランに謝意を混めて合掌をした。そして彼の体を担ぎ上げると、ホークアイたちのいる寝室まで運び、何事もなかったように店番に戻った。

しばらくしてデュランが目を覚ますと、さっきの部屋、ジェシカとは反対側のベッドに自分が寝ていることに気づいた。

「よお、デュラン。痴漢したんだって。ククク…」

すでに起床して一部始終の事情を聞いていたホークアイがニヤニヤしながらデュランに話しかけてきた。デュランはベッドから起き上がり、明らかに不機嫌そうな顔でコーヒーを啜っているアンジェラに弁明した。

「違うんだよ、アンジェラ。おまえが風呂場にいたなんて知らなかったんだ。悪気はなかったんだよ」
「フン、あんたの気持ちなんか知らないわよ！でもねぇ、あんなことされた私の気持ちはどうすればいいのよ？！トラウマよ、トラウマ！」
「そ、それは……、すまん。ごめん」
「フンだ！許してなんかあげないんだから！」
「そんなこと言わないで、許してくれよ。ホントに悪かったよ！この通りだ！」
許しを得ようと、デュランは両の手を顔の前で合わせ、アンジェラを拝むように頭を何遍も下げた。彼女をきりっとした目でそれを睨み付けた。そして意外な一言を口にする。
「……じゃあデートして」
「えっ？」
「デートしてくれたら許してあげる」
「え、ええと……」
「行くわよ！」
戸惑うデュランの返答も聞かず、アンジェラはサッと立ち上がり階段を上がり始めた。人生初のデートを申し込まれた男は動揺したまま、その後ろに従い付いていく。
「えっ、今すぐなのか？おい、アンジェラ」
声をかけながら、デュランは一階へと上り、二人はファルコンの家から出て行った。残されたホークアイはブラックのコーヒーを口に添え、弟分に話かけた。
「騒がしい二人が出ていったな」
「アニキも気晴らしに外に出てみるにゃ」
「だけど……」
「ジェシカ様ならオイラが看てるにゃ」
「……すまんな」
「にゃあ」

ニキータが心地よい笑みを見せると、ホークアイは必要最小限の荷物を手にして道具屋を後にした。奇しくもそれはデュラン、アンジェラカップルとは別の方向だった。

その頃アンジェラ達は、

「なぁアンジェラ、どこ行くんだよ？」

「ここよ」

「ここって、オアシスじゃないか」

「そ、日が照ってる場所より涼しいじゃない」

「そうだな」

二人はディーンの外れにある小さなオアシスの前にいた。大きな樹の葉は腕を伸ばした巨人のように空を覆い、その隙間からそそぐ木漏れ日が冷たい水面をきらきらと輝かせた。穏やかな水に、アンジェラは洗ったばかりの足だけを入れた。そして、その雰囲気と同じように、穏やかにデュランに話しかけた。

「これからホークアイ、どうするのかな？ジェシカさんはこの村で休養してるわけだし、リースって人もここに来てるんでしょ？」

「さぁな、俺たちがどうこう言えることじゃないだろ」

「そうだけどさ。でも私は、彼はここに残るべきだと思うよ」

「……そうだな。だが決めるのはホークアイだ」

彼女の言葉に、デュランも同調するところ大であった。だが彼は、ホークアイに意志を最大限に尊重したいと思った。アンジェラもそれを察してか、それ以上の事は言わなかった。いや、それよりも彼女は、この瞬間を大事にしたかったのかもしれない。話すことよりも、穏やかな時を一緒に過ごせるこの一時を。

そうして日が沈み始めた頃、デュランとアンジェラはファルコンの家に戻った。

「ただいま。あれ、ニキータだけか？ホークアイは？」

「それが……、昼間散歩に出てから戻ってこないんです」

「なんだって？！」

突然の仲間の失踪に動揺する三人であったが、そこに一人冷静な大人が姿を見せた。
「あのバカ、何ウジウジ悩んでんだろうね?!」
店を締めたファルコンが階段を降りてきて、そう言った。育ての親は察しうることを口にした。
「どうせ旅を続けるかどうか迷ってんだろ?こういう時、あいつはいつもあそこにいるのさ」
「あそこ?」
「村外れの月が見える丘さ。……それで、デュラン、アンジェラ。あんた達はホークアイはどうすべきだと思う?」
「俺は……」
「私は……」
ファルコンの問いに、二人の仲間は心のうちを明らかにした。彼らが望む展開を、言の葉に乗せて。

ホークアイは夕陽が沈むにつれて輝き出す月を眺めながら物思いにふけっていた。ファルコンが感じていたものと、まったく同じ悩みを心に広げて、冷たい夜空を仰ぐ。
「(あいつらと旅を続けてマナの聖域に行くべきか、それとも……)」
その時、不意に声が聞こえた。
「ファルコンさんの言った通り、ここにいたのか」
「デュラン、アンジェラ……。その格好、次の目的地に発つのか?」
「ああ」
場所を教えてもらった剣士と魔法使いは、新たに揃えた武具を手にして月の照らす丘へとやってきた。片足だけを伸ばして岩の座っていたホークアイは、すっと立ち上がると、自分の荷物を受け取ろうとした。だが、
「そうか、すまねぇ。俺の荷物は?」
「持ってこなかった」

「何だよ?!気が利かない奴らだなー」
「……ホークアイ、おまえはここに残れ」
予想だにもしなかった言葉に、ホークアイは声を大きくする。
「な、何言ってるんだ?!」
「ホークアイ、ジェシカさんはどうするの?やっと会えたんだよ!また独りにさせちゃうの?」
アンジェラの言葉に彼は唇をかみ締め俯く。その言葉は、二人が来るまでもずっと自問していた言葉だった。沈黙するホークアイに、デュランがもう一つの懸念事項を提起する。
「それにリースの事だって心配なんだろ?」
「だが……」
「なぁ、ホークアイ。ここでリースを探して、美獣たちの動きを探ってくれないか?」
「いいのか?」
「もちろんだ!」
「くっ、すまん!」
別れを惜しむように、ホークアイは丘を駆け降りて行った。すれ違う時、月の光に照らせ輝く涙が白い彼の頬をつたうのをデュランとアンジェラは目にした。
寂しさをかみ締めながら、デュランはアンジェラに言う。
「アンジェラ、俺たちも行こう」
「うん」
二人は寒さ厳しい砂漠を歩いてサルタンに戻り、悲しいメロディを奏でてブースカブーを召還した。

# 第三話

魔法王国アルテナ領、雪の都エルランド。そこは大国アルテナへの玄関口であったが、年々の寒冷化により港は凍結し、その役割を失い始めていた。元来、アルテナ領にある都市町村はアルテナ女王の魔力により温暖な気温を保っていた。それ故、年々の寒冷化はアルテナ女王の心が民から離れているのではないかと領民は不安を抱き、街中はなお一層冷たい空気に包まれていた。

「アンジェラ。さ、寒いな……」

「えっ、そう？」

デュランは両手でそれぞれの腕を擦っていたが、さすがは出身地、アンジェラは寒さ一つ感じずケロッとした顔でデュランに言った。それでも、どうにかデュランの気持ちを汲み取ろうとやさしい言葉をかける。

「まぁ、日も落ち始めたし、冷えてくる時間だよね？」

「今日は宿屋に泊まって、明日の昼間に氷壁の迷宮に向かおうぜ」

「あっ、その前に行っておきたい場所があるの」

「？」

予想外のアンジェラの申し出に首を傾げたデュランであったが、ほんのり顔を赤らめる彼女の顔を見ていたら、それを無碍になどできなかった。少し緊張した足取りで進むアンジェラの後に着いていくと、彼女は何の変哲もない普通の民家のドアを叩いた。

「はぁ～い。あら、あなた……」

「ご無沙汰してます。その節はお世話になりました。ろくにお礼もできないままですみません」

木製の厚い扉の向こうから出てきたのは、普通の中年女性だった。驚くその顔に向かって、アンジェラは深々と頭を下げた。いつものおてんばな姿からは想像できない大人びた態度に、デュランは驚き感心さえ覚えていた。女性はにっこりと微笑み言う。

「お礼だなんて……。チチちゃーん、あなたにお客さんよー！」
女性は体をねじらせると、二階に向かってかわいい名前を叫んだ。
すると、7、8歳くらいの女の子が元気に降りてきた。
「はぁーい、あっ、いつかのおねぇちゃんだー！」
チチと呼ばれた幼女はアンジェラを見るなり飛びついた。アンジェラも久しぶりの再会を喜ぶように、少女を抱きしめた。
「ウフフ、久しぶりね」
「わぁ～い！ねぇ、上がって上がって！」
「どうぞ上がって下さい」
家人に促されて、二人は案内されるがままに家の中に入っていった。アンジェラは懐かしそうに、デュランは訳が分からずにどこかおどおどしていた。
「お、お邪魔します」
居間に案内された二人であったが、チチはすぐさま手を引きアンジェラを遊び相手とした。笑顔で子供をあやす仲間の姿を見て、自然と口元が緩むデュラン。手持ち無沙汰となったデュランは近くのテーブル椅子を引き寄せ腰掛ける。そこに、熱いコーヒーを三つに暖かいミルクを一つ乗せたお盆を手にしたチチの母親が同席し、戯れるアンジェラに目を向けながら昔のことを語り始めた。
「一年ちょっと前です、彼女が雪原に行き倒れになっているのを見つけたのは」
「えっ？」
デュランの驚いた顔をちらりと見てから、彼女は話を続けた。彼女たちはアンジェラと知り合った経緯を。
「すっかり体は冷えきっていて、私と娘でここに運んだんです。元気になったと思ったら、急にウェンデルに行くと言って……。その後何の連絡もなくて心配してたんですよ」
「そうだったんですか」
「うちは母一人子一人だから、あんな若い子がいてくれるとチチも喜ぶのよ」

「アンジェラも同じかもしれません。あいつも母一人子一人で育ってきたから、同じ境遇のチチちゃんの気持ちがわかるのかも……」
「そう、あの子も……。うちのダンナは7年前に雪原でモンスターに襲われちゃってね……。その時あの子はまだ赤ちゃんだっから、父親の顔も知らないんですよ」
「……それも同じです」
デュランは砂糖で少し甘味を加えたコーヒーに口をつけて言った。そうして、楽しそうにしているアンジェラを見て、彼女と同じように暖かい気持ちを抱いていた。
すると、女性は興味津々といった顔でデュランの顔を覗き見てきた。
「ところでさっ」
「は、はい」
「あんた、あの子の彼氏？名前は？歳は？あの子とはどこまでいってるの？！」
おばさん特有の好奇的質問にデュランは困惑しつつも、名前と歳、アンジェラとは単なる旅の仲間でおばさんが期待してるような関係ではないことを伝えた。懇切丁寧に。その答えに、彼女は残念そうな顔をして言う。
「なーんだ、そうなの。それで、この後はどうする予定なのかしら？」
「ええと、宿屋に泊まって……」
「宿屋に泊まるくらいならうちに泊まっていって下さいよ！その方がチチも喜ぶわ！」
「いや、でも……」
女性は眩しいばかりの笑顔で、彼らにとってこれ以上ないまでの申し出をしてくれた。だが、その優しさにデュランは気が引けていた。
「いいじゃない、デュラン。お言葉に甘えましょうよ。ねー、おばさま？」

「おねぇちゃんたち泊まってくの？わーい！」
いつの間にか彼らが座っているテーブルに戻ってきていたアンジェラは、笑顔でその申し出を受け入れた。両手でミルクの入ったマグカップを持つチチはそれを聞くと、まるでひまわりのような笑顔を顔いっぱいに咲き誇らせた。それを見て、同じようにアンジェラも微笑む。旅の中で始めてみる彼女の最上級の笑顔にデュランは視線を奪われていた。チチの母はそれを見ると、やっぱりと言わんばかりの微笑みをして、再びチチの方に顔を向けた。
「それじゃあ、夕食は二倍作らなきゃね！今から買い物に行ってくるわ」
「あっ、俺も手伝います」
世話になってばかりでは申し訳ないと、デュランは買い物の手伝いを申し出た。そして、チチのお母さんと共に家を出て行った。
それを見送ってから、
「ねぇねえおねぇちゃん、明日もチチとあそんでくれるー？」
「うーん、ごめんね。明日、あのお兄ちゃんと行かなきゃならない所があるの」
「そーなんだー」
「でもその用事が終わったら戻ってくるから、そしたらまた一緒に遊びましょ」
「わーい？」
「ウフフ」
「ねえ、おねぇちゃん」
「なに？」
「あのお兄ちゃんのこと、好きなの？」
「えっ」
無邪気な顔でされた質問に、アンジェラはどう答えていいかわからなかった。だが、少し考える間を作ってから、彼女は本心を口にすることに決めた。
「うん、そうだよ。でも内緒ね」

「わかったー、ないしょー」
アンジェラが微笑みながら人差し指を口に当てると、チチは元気いっぱいにそれを真似て見せた。そして、優しく小指を絡ませて指きりをした。

その頃デュランたちは、寒さ増す夕暮れの街中を歩いていた。
「いやぁ、やっぱり男手があると楽ね。ホント助かりますよ」
「いえ、泊めていただける、ほんのお礼です」
「そう？ところで、あの子『アンジェラ』っていうの？」
「え？ええ」
「そうなの。いや実はね、前に名前聞いても教えてくれなくて。『アンジェラ』ねぇ、どこかで聞いたことあるような名前ね？」
デュランはアンジェラが理の女王から抹殺命令を受けていたことを思い出した。おそらく彼女は名前から素性がバレて、この母子に迷惑をかけてしまうことを危惧したのだろう。だから、名前を隠してきたのではないか。彼はそう思慮した。
「まぁ、よくある名前ですから。気にすることでもないですよ」
「ええ、そうよね。おっと、そこの店で野菜買わないと……」
「（まだ買うのか……）んっ？」
すでに両手いっぱいに買い物袋を抱えていたデュランは、さらに荷物が増えることに一抹の不安を覚えたが、その不安も隣の防具屋の陳列ケースを見てどこかに飛んでいってしまった。まじまじと、ウィンドウケースに顔を近づけるデュランの姿を見たチチの母親は疑問符を浮かべながら、彼に近づいていった。
「どうしたのかしら？……あぁ、これ？これは黄金の騎士を讃えた黄金の盾なのよ。昔、竜帝の恐怖から世界を救ったフォルセナの白銀の騎士団団長が持ってたのと同じのを、ここいらで取れる銀で作ったものなの」
「へぇ……。（親父の使ってたのと同じ形の盾か……）あの、ちょっといいですか？」

デュランは荷物を渡すと、財布を握り締めて防具屋の中に入っていった。そして大きな盾を手にして彼女の元へと戻ってきた。
「あら、よく似合ってるわね！じゃあ、食材の買い物に戻りましょうか」
「はい！」
デュランは右肩に黄金の盾を引っさげると、両手いっぱいに紙袋を受け取り、再び買い物の従者へとなり代わった。

買い物を終え家に帰ると、アンジェラとお母さんが台所に立ち自慢の腕を振るってくれた。暖炉で温まった居間に手作り料理が運ばれる。だが、デュランはその料理を知らなかった。
「これは何て料理なんだ？」
「お兄ちゃん、知らないのー？」
「ああ、フォルセナじゃ見たことないなぁ」
「これはネイベーって言うのよ！」
アンジェラは得意そうな顔で言った。
「『ネイベー』？」
「本当はこの器の名前で、入れる具材で細かく名前が変わるんです。でも面倒なんでまとめてナベって言うようになったんですよ」
チチの母親が説明――と言ってもアンジェラは料理名を口にしただけなのだから、説明とはいえないであろう――を補足する。
「へぇ～」
「いわゆる土着料理ね！今度暇があったらあんたん家で作って上げるわ！」
「そうかい。そりゃ楽しみだ」
アンジェラとチチのお母さんが代わる代わるに説明をし、仲間の暖かな申し出にデュランは口元を緩めた。二人の様子を見て、チチと母親は顔を見合わせて微笑んだ。秘密だよ、とチチが人差し指を口に当て、その姿は母親の心をより一層温かにしてくれた。

次の日、
「それじゃあ、チチちゃん、またね」
「うん、また遊ぼうね！絶対戻ってきてねー！」
「うん！約束する！」
チチはその姿が見えなくなるまで大きく手を振り、アンジェラも何度も振り返り手を振り返していた。
零下の雪原にでると、サハギンやシーサーペントといった水棲系モンスターだけでなく、雪原で修行中のウィザードがうようよしていた。デュランとアンジェラは互いの力を合わせ、数々のモンスターを倒して、西へ西へと進んでいった。だが、ある場所で二人の足を止まった。
「ありゃ、北と南で道が別れてるぞ。どっちだ？」
「こっち、南よ。北はアルテナの城下町よ」
「そうか。じゃあ、南だな。アルテナには会いたい奴とかいないのか？」
南への道を取りながら、デュランはふと訊いてみた。いたとしても会えるはずはないとは思いつつも、不意にそんな質問が口を付いて出ていた。アンジェラは気分を害するわけでもなく、ただどこか物憂げに言った。
「いない、わけでもないわね」
「へぇ」
「訓練生時代の時に仲良かった奴とかには会いたいわ。紅蓮の魔導師は除いてね」
「なぜ紅蓮の魔導師が出てくる？」
「あいつ、私と同期だったの。私と同じで、てんで魔法が使えなかったのよ。それが、えーと、私が旅立つ一年前だから……、今からだと二年ちょっと前にふらっと旅に出て、半年後ふらっと帰ってきたら強力な魔導師になってたのよ」
「それはまた妙な話だな……」

「なんでこんな話してんだっけ？……あっそうか、会いたい友達の話ね。紅蓮には会いたかないけど、そうね、あの子には会いたいわね」

「『あの子』？」

「私と違って魔法が得意な優等生の友達、名前は……！」

シャンシャンと新雪を踏み鳴らしながら話すアンジェラ。しかし、突如として背面に強固な岩が現れ、前方に吹雪の壁が張られたことに驚き、その言葉が途切れてしまった。閉じこめられてしまった二人の前方、荒れ狂う雪で先すら見えない雪道から一人の女性が近づいてきた。

「まさか、周辺警備をして、またあなたたちに会えるとは思ってなかったわ」

真白な世界から姿を現したのは、一人の女性アルテナ兵だった。彼女もマジシャンとしての証、魔術のかかった杖を握り締めていた。彼女は二人を、特にアンジェラを睨み付けながらそう言った。デュランもその魔法使いに見覚えがあった。

「大地の裂け目ではお世話になったわね。フォルセナ兵、それに落ちこぼれアンジェラ姫」

「おまえ、あの時のマジシャンか？！」

「フフフ、そうよ。……アンジェラ姫、まだ私の顔を思い出せないの？訓練生の時、あんなに仲良くしてあげたのに、随分薄情なのね」

そのアルテナ兵はハットをとり、ニヤリと笑った。それを見てアンジェラは口を開け、愕然とした。

「そんな、まさか……アイリスなの？！」

「誰だ？」

「今話してた友達だよ。ずっと会いたかった……」

「友達？……フフフ、あなたは理の女王様の娘だから仲良くしてあげてただけ。でも抹殺命令が出されているあなたには利用価値なんかないわ。あなたみたい落ちこぼれなんか、誰が友達ですか！アハハハ」

彼女はハットを被りなおし、凍て尽くすような目でアンジェラを見下げ高々と笑い声をあげた。その姿に旧知の友と慕っていたアンジェラの心はずきりと傷んだ。

「アイリス……。あなた、どうして……？！」

「どうしてですって……、フン！私はね、フォルセナ侵攻部隊を任されてたのよ！でもね、あなた達のせいでマシンゴーレムRが破壊されて、その上侵略は失敗……。おかげでアルテナ国周辺警備に格下げよ！責任取ってくれるわよねぇ……」

怒りと憎しみに満ちた顔が二人に向けられる。その突き刺さるような視線にアンジェラは顔を俯かせ、デュランはアイリスに負けじと強い力を混めて言った。

「そんなの、俺たちには関係ないことだろう！逆恨みも良いところだ！」

「だまれ、にっくきフォルセナ兵めっ！……アイススマッシュ！」

「だめっ！……ファイヤーボール！！」

親友の突然の攻撃に驚いたアンジェラであったが、仲間を守りたい一心で瞬時に呪文を唱え、アイススマッシュとは対極に位置する魔法を繰り出した。雪原の真ん中で凍てつく氷の固まりと燃え上がる炎の玉がぶつかり、積もり落ちた雪を舞い上げるほどの爆発が起きる。

「うわっ！」

「キャア」

「くっ！……まだまだ、行くぞ！」

爆風でハットを飛ばされたアイリスは杖で視界を守ると、空を払って杖を向け、第二波を繰り出そうとした。だがその時、彼女の前に黒い甲冑の大男が立ちはだかった。風の回廊最深部でジンを苦しめた、あの剣士がどこからともなく姿を現したのだった。

「退け、アイリス……」

「しかし、黒耀の騎士様！」

「退けと言っているのだ」

「うっ。は、はい」
兜の隙間から見える眼光におののき、アイリスは後ろで吹雪く雪に紛れ、すぐに姿を消した。残された二人が新手の敵と対峙していると、フェアリーの声が頭の中に響いた。
（あいつ……、ジンのところにいた奴だよ！）
まるでその声が聞こえていたかのように、黒耀の騎士と呼ばれた男はデュラン達に言った。それは戦うというよりも、彼らを説得するかのようだった。
「諦めろ……。貴様たちが何をしようと、マナの剣を手に入れるのは、我らが主、竜帝様だ……」
『竜帝』という言葉にデュランは反応し一歩踏み出た。
「『竜帝』だぁ？バカ言ってんじゃねえ！竜帝は父さんが倒したんだ！命と引き替えにな！！」
「……お前、デュランか……」
顔面まで覆う黒い兜で表情は読み取れなかったが、黒耀の騎士は動揺したような声で言った。敵の口から自分の名前が呼ばれたことにデュランも動揺し、声を一層荒げる。
「！？　なぜ、俺の名前を知っている？！テメエ、誰なんだ？！！」
彼は何も言わずに背を向けると、アイリスが消えていった吹雪の中に去っていった。ただ、その大きな背中はどこか悲しさを帯びているようにも見えた。彼を追おうとデュランは一歩踏み出しのだが、
「待て！まだ話は……」
「デュラン、何か来るよ？」
アンジェラが叫ぶと、三体のマシンゴーレムが空間転移により姿を現した。今までいた二人の代わりに、それらの機械人形が敵意を露に腕を伸ばす。
「くっ、竜帝が生きてるなら、俺の父さんは犬死にだってことじゃねえか……」
「あぶない、デュラン！」
アンジェラは咄嗟にその身をデュランに当て、マシンゴーレムの

ロケットパンチを回避した。黒耀の騎士の言葉に心が紛動して呆けるデュランにアンジェラは叫んだ。
「今はこいつを倒さないと！」
雪の上に飛ばされたデュランは彼女の一喝にはっとして、力強く頷いた。
「……ああ！」
「こいつらは『マシンゴーレムS』だよ。大地の裂け目の時より格段にパワーアップしてる新型！旅立つ時には制作図しかなかったのに、もう完成させてるなんて……」
立ち上がりながら、アンジェラは敵の正体を口にした。その声には少しの不安が混じっている。彼女のよると、三体のマシンゴーレムは攻撃力もさることながら、体内にある魔力をコントロールして魔法を繰り出すことも可能だという。それを裏付けるように、一体のマシンゴーレムの周りにバチバチっと電気が走った。
「サンダーストームが来るよ！高位風魔法の！」
たちまち暗雲が頭の上に立ちこめ、強烈なカミナリが二人を襲う。
「くっ！」
「キャア！」
直撃は免れるも、落雷の勢いで吹き飛ばされる二人。だが、二人は即座に立ち上がった。
「こいつら、やっぱりまだ試作段階なんだ。高位魔法なのに、威力が低すぎる！」
「なら、勝機はこっちにあるな！アンジェラ、こいつらに弱点はないのか？！」
「あるよ！マシンゴーレムの構成組織は地系の魔力で繋がれているの。だから……エアブラスト！！」
アンジェラが叫ぶと、小さな竜巻が起こる程の風が吹き荒れた。突風に鉄のボディが吹き倒される。
「地系の対極、風系だな！よぉし！」
デュランはセイレーンのツメを取り出し、剣先に振りかけた。そ

して、一番身近にいた一体に大きく剣を振り上げた。
「でやっ！」
風の属性を持った刃はマシンゴーレムの外層を破壊した。デュランと対峙しているマシンゴーレムは重そうな機械音を出しながら立ち上がると、両腕を赤くして、ロケットパンチを放った。だが、デュラン素早い剣技がその全て叩き落とす。
計算が狂い一瞬動きを止めるマシンゴーレム。デュランはその隙をついた。
「俺の新たな必殺技を見せてやるぜ！三・段・斬りーっ！」
デュランは一歩後ろに飛び退くと、剣先を突き出し駆け抜け、さっと身を翻し下段から上段に斬り返す、さらに上段から剣を振り降ろし、連続に斬りつけた。
その速さにマシンゴーレムは倒れることも出来ず、大ダメージを受けて爆発した。
アンジェラが相手にしていた残りのマシンゴーレムも、エアブラストの連続攻撃を受けて、大破寸前であった。
「ふふん、次で終わりかしら？……エアブラスト！」
強烈な突風に吹き飛ばされ、装甲がボロボロに避けた一体は爆発、四散した。だが、もう一体は立ち上がり、再びアンジェラに向かってきた。
「しつこいわね、……エアブラスト！……あれ、出ない？しまった！もう魔力が……」
マシンゴーレムは胸を開くとそこに収納してあるミサイルを点火した。そして大爆発を起こすほどの火薬をつんだミサイルが彼女に向かって発射される。
「キャア！」
アンジェラは顔を背け腕を顔の前で交差させて防御の姿勢を取った。恐怖で瞼と閉じるアンジェラ。だが、瞼に覆われた瞳は目の前で強烈な閃光だけを捉えるだけであった。彼女がそぉっと目を開けると、噴煙の中にデュランが立っていた。そして、

「十文字斬り！！」
デュランが大きく剣を振り下ろし、さらに横一閃を決めると、最後のマシンゴーレムは数メートル吹き飛び、爆発炎上した。
「大丈夫か、アンジェラ」
「大丈夫だよ。デュランは？ミサイル、まともにくらったんじゃ……？」
「へへっ、これのおかげで無傷だ」
彼は人差し指で鼻の頭を擦りながら、左手に持つ黄金の盾を持ち上げた。よく見ると、表面にうっすらと焦げ痕が見える。アンジェラがほっとしていると、デュランはカッコつけて言った。
「姫を守るのが【ナイト】の役割だからな」
「バカ」
ジトッとした目でアンジェラは言った。そうして、彼から目を逸らす。彼女は本心では嬉しかったのだ。その反面、どこか心苦しくもあった。
アンジェラが改めてデュランを見ると、彼は雪を見ながら苦しそうな顔をしていた。
「どうしたの？やっぱりどこか痛むの？！」
「いや、違うんだ。ただ、竜帝が生きてるんだとしたら、父さんの死は何だったのかわからなくなって……。すまん」
「デュラン……」
悲しく思い悩むデュランの体を、優しく暖かい何かが包み込んだ。アンジェラが彼の首に腕を絡めて、後ろから抱きしめたのだった。
「ア、アンジェラ？」
「昔ね、あたしが泣いてた時、誰かが優しくこうしてくれたの。誰だかわかんないけど、それ以来、私はこうしてもらえると、すごく安心するんだ……」
「アンジェラ……。ありがとう。俺も安心できるよ」
二人は目を瞑り、お互いの存在を確かめ合っていた。
しばらくして、そんな二人の一時に水をさす熱い男がいた。

（おうおう！！デュラン、アンジェラ、悪いんだが、そろそろウンディーネに会いに行かねーか？！！）

精霊たちの存在をすっかり忘れていたアンジェラはドキっとしてデュランから身を離した。、

「そ、そうね！デュ、デュランももう大丈夫でしょ？」

「お、おう！もう大丈夫だ！あ、ありがとよ」

二人は顔を真っ赤にしていた。

みると、行く手を阻んでいた吹雪は忽然と姿を消し、後ろの岩も消えていた。二人はまだ気恥ずかしさを感じながら、すぐ近くの氷壁の迷宮に入っていった。

すると、入ってすぐの所にマナストーンは存在した。だが、

「やっぱり、すでに力が解放されてる……」

フェアリーは悲しそうな顔をして姿を現した。火炎の谷の時みたく、逆三角錐の岩から涙のように光が漏れ、昇天していく。

そう光景を見て、デュランはふとあることに気が付いた。

「……なぁ、フェアリー。いっそのこと奴らがマナストーンの力を解放して聖域のトビラが開くのを待った方が楽なんじゃないか？」

「バカなこと言わないで！そんなことしたら、マナが一気に減少して、神獣が復活してしまうわ！」

「……そうか。ごめん」

「……ううん。解ってくれればいいの。精霊たちの力を早く集められるよう、頑張りましょう！」

デュランの口から飛び出た言葉に感情を高ぶらせてしまったフェアリーであったが、彼が反省の色を見せるや、自分も感情的になってしまったことを反省して、笑顔を作った。その時、どこからとなく女のすすり泣く声が聞こえた。

「う……うぅ……ええ話や……」

「あれは……？」

「あなた、ウンディーネね？……どうして泣いてるの？」

フェアリーが首をかしげて訊くと、人魚に似た姿の精霊は涙を拭

いながら、
「最近、マナが少なくなったせいか妙に涙もろくなってしまって…
…うぅ……」
「ウンディーネ、私たちに力を貸して！」
フェアリーが事情を簡単に説明すると、ウンディーネは腕で涙を
拭いて言った。
「よっしゃ！うちも女や！まかしとき！」
「ウフフ、よろしくね、ウンディーネ姉さん」
姉御肌のウンディーネが新たな仲間に加わった。すると、
「あの、フェアリー？」
アンジェラが前触れもなくフェアリーに話しかけた。そしてふわ
ふわ漂う妖精に意外なお願いをした。
「私もクラスチェンジしたいんだけど、いいかしら？」
「わあ？うちんとこのマナストーンでクラスチェンジしてくれるん
か？！うれしいなぁ！」
「わかったわ、アンジェラ。じゃあマナストーンの前に立って、精
神を集中して」
「……こうかしら？」
アンジェラは魔法を唱えるときの要領で精神を集中させた。する
と、洞窟の中であるにもかかわらず、天井から光が差し込んだ。
「……うん、大丈夫。光の【ソーサレス】か、闇の【デルヴァー】、
どちらか選んで」
アンジェラにはクラスチェンジをしたい理由があった。
（私はいっつもデュランに守られてばっかりだ……。大地の裂け目
の時も、砂漠の時も、さっきだって……。守られてばっかりなんて、
イヤだよ！私も強くならなきゃ！デュランが傷つかないですむよう
に、もっと力が欲しい！魔力が欲しい！だから……！）
「フェアリー、私は【デルヴァー】を選ぶわ！」
「う、うん。わかったわ」
氷壁をすり抜けて天空から差し込む光がアンジェラを包み込むと、

彼女は【マジシャン】から【デルヴァー】にクラスチェンジした。
「やったな、アンジェラ！」
「うん！」
「うちんところで、しかも立派な心意気でクラスチェンジしてくれて、ホンマうれしいわ！」
「えっ、ウンディーネ、心の中読めるの？」
デュランに向かってピースをしていたアンジェラであったが、後ろから聞こえた意外なフレーズに驚き、ぱっと振り向いた。関西弁のその精霊は優しく微笑みながら、
「もちろんや！でも秘密なんやろ？乙女の秘密は守ったるわ、心配しーな！」
「う、うん。よろしくお願いします……」
アンジェラは顔を紅潮させながら、たどたどしく言った。疑問符を浮かべていたデュランであったが、それよりも気になることがあった。
「ところで、ウンディーネ。ここは氷壁の迷宮っていうんだろ？迷宮っていう割には短いんじゃないか？」
「なかなか鋭いツッコミやな、少年！ほな、あそこを見てみ！」
マナストーンの横にふわふわ浮かぶウンディーネは、さっとを身を翻すと持っていたモリの先を洞窟の奥に向けた。
「ホンマはあそこに穴が開いてたんや。でもマナが少なくなったせいで洞窟の氷が一時的に溶けて、あの穴を塞いでしもたんや。あの穴の向こうはクネクネして迷宮になっとるんやで」
わかったか～、と付け加えながら顔を戻しにっこりと笑うウンディーネ。デュランはその笑顔に向かって、
「ああ、よくわかったよ」
「じゃあ、エルランドに戻りましょうか」
そう言うと、フェアリーはデュランの中に戻ろうとした。ウンディーネもそれに続くが、その前に確認しておきたいことがあった。
「なぁ、フェアリー？サラマンダーはもう仲間になっとるんか？」

「うん、この前仲間にしたよ」
「……そっか」
彼女は少し気恥ずかしそうにしながら、デュランの中に入っていった。その横でフェアリーは疑問符を浮けべていた。
彼女らがデュランの中に戻るや否や、ほかの精霊たちが待ってましたとばかりにウンディーネを出迎えた。一人を除いては。
(おっ！ウンディーネさんが来たッス！)
(みんな、久しぶりやな！会いたかった～)
(わしらもじゃよ。じゃが、おまえさんが一番会いたい奴が他にいるじゃろ？)
(えっ、あ、その……)
ウンディーネは顔を赤らめて、両手の指を絡めて下を向いた。
(一番奥で待ってるダスよ。オラたちはあっちで遊んでるから、ゆっくりするダスー)
(えっ、えっ？どういうこと？)
(……フェアリー、今は我らと共にこちらに来なさい)
精霊たちの中でただ一人状況が飲み込めていないフェアリーであったが、ジェイドに誘われその場を皆と一緒に後にした。残されたウンディーネはデュランの精神の最深部、あの精霊が待つ場へと進んでいった。
そして、向こうも待ち人の姿を捉える。
(久しぶりだな、ウンディーネ！)
(ホンマ、久しぶりやね、サラマンダー……。会いたかった、ずっと……)
(俺もだぜ！……って、おい、何も泣くことないだろう？！)
(だって、ホンマ嬉しくて……。ずっと会いたくて……)
(すまん、会いに行けなくて……)
(マナストーン守る使命あったから、仕方ないってわかってたんやけど……)
ウンディーネに触れることのできないサラマンダーは、ウンディ

ーネの瞳からこぼれる涙を熱で蒸発させることしかできなかった。
その頃、フェアリーたちは、
（ねぇ、みんな。どうしてウンディーネとサラマンダーを二人きりにしたの？）
（ヒャッヒャッヒャ、実はあの二人は恋仲なんじゃよ）
（えっ、え～！！？）
（フェアリーさんが驚くのも無理ないッスね。結して結ばれぬとわかっていながらの、大恋愛の果てに互いの気持ちを知り合ったんスよ！）
（へぇ～！でも素敵ね）
（それがそうでもないんスよ）
ウィスプが眉間にしわを寄せてため息をつくと、寡黙な精霊ジェイドが呟いた。
（……はじまったようだ）
その言葉に5人がウンディーネたちの様子を見に行くと、
（なにするんや？！）
（泣いてるから涙拭ってやったんだよッ！！）
（拭うやて？熱で蒸発させるんは拭うちゃう！！ボッて音したやんか！火傷したらどないするんや！）
（じゃあどうしろってんだよ？！泣いてるのをただみとけっていうのかっ！）
（指で拭うとかあるやろ！？なんやねん、熱でボッて！）
（拭えるかよ？！俺が触れたら、それこそ火傷するじゃねぇか！）
（あー、もううるさい！男がギャーギャーと！）
（なんだとこのアマぁ！）
恋仲とは思えないほどの大口論に、フェアリーは口をポカンと開けるしかなかった。
（二人は付き合ってるんじゃが、喧嘩ばかりなんじゃよ……）
（いつもオイラとジンで止めるンスよ。はぁ……）
（でも結局は仲直りして、ラブラブな所見せつけられんダスー。は

ぁ、早くルナさん来てくれないかな、ダス）
（あの者の一言はスルドいからな……）

その頃宿主デュランは零下の雪原を歩きながら手を頭に当てていた。
「どうしたの？顔色悪いわよ？」
「いや、何だか頭がガンガンしてな……」
「やだ、風邪？」
「いや、違うと思う。まぁそのうち何とかなるだろう」
自分の中で火と水の精霊が喧嘩していることなど露知らず、彼らは来た道を戻っていた。そしてしばらく歩き、エルランドへと戻ってきた。たが、町の中は異様に騒がしかった。
「どうしたのかしら……。あっ、そこの人、何かあったの？」
雪原から都への入り口で、アンジェラは逃げるようにこちらに駆けてくる男を捕まえて、事情を訊いた。そして、予想外な言葉を受けたのだった。
「何かなんてもんじゃないよ！サハギンが町の中入ってきたんだよ！それも大群でっ！」
「なんですって？！」
二人は武器を手に取りながら急いで町の中に入っていった。すると、いくつかの民家から火の手があがり、あちこちでサハギンが暴れていた。
「なんで、こんな事に？」
「おい、アンジェラ！あれ見ろ！」
デュランが指さす方を見ると、チチが泣きながら混沌とする街の中を一人で歩いていた。
「う……えぐっ……お母さーん！どこー？！」
泣き叫ぶチチ。その時、民家の影から出てきた一匹のサハギンが彼女を襲おうとした。チチは恐怖で身を縮め、大声で叫んだ。
「キャアー！！」

「あぶない、チチちゃん！……ダークフォース！！」
瞬間、アンジェラはクラスチェンジして使えるようになった高位闇魔法ダークフォースを唱え、チチを襲おうとしたサハギンは吹き飛ばした。彼女に気づいたチチが涙をぽろぽろ流しながら駆け寄ってくる。
「……お姉ちゃん？お姉ちゃーん！わーん！」
恐怖と涙で顔をくしゃくしゃにしながら、彼女はアンジェラの胸に飛びついた。アンジェラが震える頭を優しく撫でる。
「怖かったね。もう大丈夫だよ」
その時、
「チチー！チチちゃーん！どこに……チチちゃん！」
「お母さん、お母さーん！」
同じように娘を探していた彼女の母親が顔に煤を付けて叫んでいた。彼女がアンジェラとその胸に顔を埋める娘の姿に気づくとほぼ同時に、チチも母親の存在に気づいた。そしてチチはアンジェラの胸から飛び降り、母親のもとに駆けて行った。
娘を抱きしめながら、彼女は言った。悲痛な声で。絶望したような言葉を。
「アンジェラさん、ここはもうダメよ！早く逃げなさい！」
「でも……」
「いいから、早く逃げる準備をするのよ！もうこの町は、アルテナ女王様のご加護を受けていないのよ」
「お母さん、怖いよー！」
アンジェラは辺りを見渡した。逃げまどう町の人たち、耳をつんざく悲鳴、燃え上がる家々、泣き叫ぶ小さい友……。
チチの母親の言葉が脳裏を舞う。
『女王様のご加護を受けていない』
本当に母は民を見捨ててしまったのだろうか、……違う、今は出来ないだけで、きっとこの国を守ってくれる、だから、今は、今だけは――彼女は心の中で決意した。

「私が何とかします！」
「えっ？」
「おい、アンジェラ。どうするんだ？！」
「できるかわかんないけど、やってみる！デュラン、ちょっと長い間呪文唱えるから、チチちゃん達とあたしを守って」
決意したアンジェラの目は今までにない力強さを秘めていた。その目に触発されたようにデュランの体にも熱い何かがこみ上げてきた。
「アンジェラ……。わかった、任せておけ！」
アンジェラが地面に杖を突き刺し詠唱に入ると、デュランは剣を構え精神を研ぎ澄ませた。そして呪文を詠唱中無防備となるアンジェラや、戦えないチチ母子を守るため、飛び掛ってくるサハギンたちを全て蹴散らした。ばったばったと冷たい地面に打ち付けられる水棲モンスターたち。
そして、いつもより長い詠唱を終えたアンジェラは力の限り叫ぶ。
「（お願いサラマンダー、私に力を貸して）……彼の邪悪なる者達を焼き払え、ファイヤーボール！！！！！」
地面に突き刺した杖に光が集まると、赤黒く燃え上がる火の玉が一つ、二つ、三つ……、数え切れないほど現れ、町中で暴れ回るサハギンに向かっていった。そして大多数のサハギンが焼き払われ、残りのサハギンは零下の雪原に逃げ帰っていった。
その光景を見た住人達は呆然としながら、中心にいた少女を見ていた。その視線に気づいたアンジェラはどうしたらいいかわからず、ただ気恥ずかしそうに顔を伏すことしかできなかった。
しかし、一人の老人が誰かに語りかけるように呟いた。
「理の女王様は我らを見放したが、女神様はまだ見放しておらぬようじゃ……」
その一言を聞いてアンジェラは叫んだ。母を信じる娘は力を込めて言ってしまった。
「母は民衆を見放したりなどしません！」

アンジェラの言葉に、チチの母親はハッとした。彼女はアンジェラが誰か判ってしまったのだ。そして、その驚きは自然と口をついて内心の外へと飛び出していた。

「母？思い出したわ！『アンジェラ』って、あなた、理の女王様の娘、アンジェラ姫？！」

「あっ……」

アンジェラは慌てて両手で口を覆ったが、すでに遅かった。住人たちのざわつきに、彼女は居たたまれなくなり、背中を向けてその場から逃げようとした。

しかし、去ろうとする彼女の腕をデュランが捕まえた。

「待て、アンジェラ」

するとさっきの老人が一歩歩み出て口を開いた。白い髭の間から見える口から出た言葉とは、

「アンジェラ王女様、いつまたモンスターが襲ってくるかわかりません。どうか我らに平和をお導き下さい」

「でも私は……、その、城から追われていて……」

「お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ！」

チチが叫ぶと、他の住人も大きくうなずきながら声を上げた。

「そうです！アンジェラ様はアンジェラ様です！」

「私たちをお守り頂いたことに変わりはありません！」

「また私たちをお守り下さい、アンジェラ様！」

「でも……」

エルランドの長と思われる老人は言葉を続けた。

「王が民を守るなら、民は王を守るのが役目。アルテナの兵達にアンジェラ様は渡したり致しません！」

「アンジェラ様は我らがお守りします！」

「私は……」

ここまで言われながらも、彼女は脅えていた。自分がここにいたら、いつかこの街の人たちを苦しめてしまうんじゃないか、と。そんな怖さに潰されそうになり俯くアンジェラ。弱々しくなった背中

にデュランは言った。
「アンジェラ、おまえはここに残れ。そしてエルランドのみんなを守るんだ」
「……デュランはそれで良いの？」
思ってもなかった仲間の言葉に、アンジェラは顔を上げて訊いた。
デュランは少しだけ沈黙してから、こう言った。
「……お前は王女なんだ。国民を守り導くのが使命なんだ」
「そっか。デュランがいいなら……」
「はっ？」
ぼそりと呟いたアンジェラの言葉を、デュランは思わず聞き返した。だが、彼女は悪戯な笑みを見せると、下をべーっと出して、
「何でもないよ、バーカ」
「なっ、バカって何だよ？！」
デュランの反応をもっと楽しみたかったが、彼女は真剣な顔つきでエルランドの人々に向き直った。そして優しい口調で言う。
「私で良ければ、みなさんの力になります。でも一つだけお願いがあるの」
「なんでしょう？」
「アンジェラ”様”とか”王女様”って呼ぶのはちょっと……。アンジェラでいいわ」
「わかった、アンジェラおねーちゃん！」
頬をかきながら照れるように言った彼女の言葉に、チチは明るい声で返した。それに街の皆は声を出して笑った。
皆と打ち解けるアンジェラの後ろ姿を見て、デュランは荷物をしっかりと持ち直した。
「さて、と……」
デュランは見えることのない仲間の顔を想像し、その背中に微笑みかけると、ゆっくりと砂浜に向かって歩き始めた。
ぴーひゃら笛を奏でたその時、姿を消したことに気づいたアンジェラが急いでデュランの元に駆けてきた。

「ちょっと待って、デュラン」
「アンジェラ、なんだ？」
笛を右手に握り締めながら、彼はその身をアンジェラの正面に向けた。息を整えながら、彼女は口を開いた。
「う、うん。えっと、ね……」
だが、アンジェラはいつかのようにモジモジするだけだった。
「デュラン、あのね、私ね、あんたのことが……す……」
「また来ていいか？おまえに会いに……」
アンジェラの言葉を遮るようにデュランは言った。彼女は意表を付かれたように瞬きを二、三度して、そして淡く微笑み、言った。
「うん、いいよ」
アンジェラの包み込むかのような柔らかい笑顔をしっかりと瞳に焼き付けると、デュランは見送る彼女を背にしてブースカブーに乗り、冬の国を後にした。

氷が浮かぶ海を進む海獣の背の上から遠く水平線を見るデュラン。だんだんと陽が沈み、海面は燃えるように赤く染まっていた。そんな彼の頭の中にひとつの声が響いた。
（ねぇ、デュラン？）
「（なんだ、フェアリー？前みたいに、アンジェラを仲間から離しちゃだめとか言うのか？）」
（ううん、言わないわ）
「（じゃあ、なんだ？）」
（……この先、必ずまた彼女に会うわ。予言する）
「（……どうしてそんなことがわかる？）」
（うーん、勘かな？でも、あなたもそれを望んでいるんでしょう？）
「（……ああ）」
（だったら、大丈夫だわ）
「（どういう意味だ？）」
（あなたはこの冒険で変わった、成長したわ。そして、それはこれ

からも……。その中で、きっとあなたは自分の気持ちにも、彼女の気持ちにも気づけるようになるわ。絶対大丈夫よ）

それだけ言うと、彼女は再び沈黙した。

# 第四話

エルランドを出てしばらく回遊した後、デュランはフォルセナとジャドの真ん中あたりにある月明かりの都ミントスに通じる砂浜に降り立った。ミントスは都というわりには小さく、反戦的な獣人がひっそりと暮らしているといわれていた。そしてミントスから、常に夜の闇が支配する月夜の森が広がっているのだ。

ブースカブーに別れを告げ、町の方に振り向くと、一本道に一人の男が仁王立ちしていた。たくましい両腕と両足を露にし、ライオンのようなたてがみを持った野性的な顔の男を見て、デュランは驚いた。

「おまえ、ケヴィンか?!」

「そういうおまえ、デュラン?」

「懐かしいなー!ジャドで会って以来じゃないか?!」

ホークアイやアンジェラたちからケヴィンの行方を耳にしていたデュランは、最初見た時より一層立派な風体となっている彼を見て、笑顔で再会を喜んだ。だが、当の本人はどこかキョトンとした顔だった。

「ジャド……会った?」

「なんだ、覚えてないのか……。(まぁ、軽く会話した程度だっからな、仕方ないか)」

「……ごめん」

「いや、いいんだ!……それよりどうしてここに?ドリアンで修行してるって聞いたぜ?」

すっかりデュランのことを忘れていたケヴィンは彼をがっかりさせてしまったことに罪悪感を感じ、しょぼんとしていた。だが、デュランの言葉に元気を取り戻し、

「英雄王に言われた。クラスチェンジ出来たら、デュランたちを助

けて欲しい。だからオイラ、大砲でここに来た。今頃はミントスにいるだろうって言われたから」

「そうか」

デュランは英雄王の心遣いと、それに応えてやってきた新たな仲間に感謝の意を禁じえなかった。そんな思いでまじまじと見ると、デュランはケヴィンの様子が変わっていることに気が付いた。修行でたくましくなったこととは異なる、微妙な変化が彼にはあった。そして、その変化が自分と同様のものであることに気づくのに、そう時間はかからなかった。

「クラスチェンジはドリアンにある土のマナストーンで？」

「そう！【グラップラー】から【バシュカー】になった！」

「そいつぁ心強いな」

歩きながらでいいか――そうデュランは言いながら、ケヴィンとミントスに続く細い道を進み始めた。

「そういえば、ケヴィンはなんでまたウェンデルに行ったりしたんだ？」

「よく聞いてくれた！話は随分昔に遡る。オイラは元々、ビーストキングダムに住んでて、とても大事な友達、ちびウルフのカールがいた。でも、突然カールは凶暴化してオイラを襲ってきた。カールに首を噛まれて、その後の事、覚えてない。でも気がついたら、オイラの手、カールの血で汚れていた。目の前にはカールが横たわっていた。オイラの汚れた獣人の血が、カールを殺した。……カールを弔いビーストキングダムに戻った後、オイラは聞いた。獣人王が変な男の力借りて、カールを凶暴化させたこと。オイラは獣人王に立ち向かっていったけど、返り討ちにあって、月夜の森に飛ばされてしまった。月夜の森をさまよっていたら、カールを操った男、死を喰らう男言ってた、そいつに会って、ウェンデルの司祭ならカール生き返らせる術知ってる、聞いた。だからオイラ、ウェンデル行った、光の司祭に会った」

人語に慣れていないのか、ケヴィンはたどたどしい言葉遣いで説

明した。喜怒哀楽を散りばめるように、表情をころころ変えながら。
「その時にホークアイとリースに会ったのか？」
「そう。どうして知ってる？」
「ちょっと前まで一緒に旅をしていたからな」
「……三人で一緒に司祭に会った。オイラ言った、カールを生き返らせて。でも司祭言った、死んだ者は生き返らないと。あの男、嘘ついた、オイラを騙した！……でも、その後デュランたちのこと聞いた。マナの女神ならカール生き返らせるかも。だから、オイラはデュランたちのこと追いかけた。でも、ビースト兵たちがウェンデルを襲ってきた。オイラたち、戦った。そして、ルガーたちが撤退してから、リースと一緒にウェンデルを出た。リースは自分の国を取り戻すため、ローラントに戻り、オイラはデュランたちに会いたくて、デュランの出身国フォルセナに行くことにした。でも、マイアからフォルセナに行くのに、橋が落ちていて渡れない。だからオイラ考えた、足腰強くして大地の裂け目飛び越えようって」
真剣な顔つきで言うのを見て、デュランは苦笑いをした。荒唐無稽とはこういうことを言うのかもしれない。
そりゃあ、無理だろ――そう心の中でツッコミを入れた彼は、
「それで、修行中にアンジェラに会ったのか」
「そう。大砲でフォルセナに行けること、教えてくれた。それと、デュランに会いたがってることも！」
ケヴィンの口から出た自分の知りえなかったアンジェラの思いを聞き、デュランは動揺した。だが、それを悟られまいと、彼は無言のまま表情を崩さなかった。彼の微妙な変化に気づかないまま、ケヴィンは話を続ける。
「だからオイラ、アンジェラも連れてフォルセナに言った。英雄王にお会いした。でもデュランたち、旅出た後だった。オイラたち追いかけようとしたけど、英雄王に見透かされた、ちゃんと力操れないこと。オイラ、まだ獣人の血をコントロール出来なかった。敵倒すまで戦うだけ、理性もなにもないただの戦闘マシン……。英雄王

はオイラを宝石ドリアンに放った、そして来る日も来る日もモンスターと戦った。獣人の力をオイラの力にするため。半年間の修行で、やっと力をコントロールできるようになった、クラスチェンジできるまで精神高めることできた。だから、オイラここにいる」

彼の語りが終わると、デュランは口元を緩めてうなずいた。

「そうだったのか。月夜の森のモンスターは手強いと聞くから、ケヴィンがいてくれると心強いよ！これからよろしくな！」

「ウガッ！」

差し出された手をケヴィンは満面の笑みをもって力強く握り返した。そして、二人の間に新たな友誼を結ばれたのを見たフェアリーが姿を現した。静かな夜闇の中、小さな光がふわりと浮かぶ。

「じゃあ、あなたとも仲間のしるしをきずきましょう」

彼女はホークアイやリースたちにしたように、ケヴィンのの頭の中に入り、すぐに出てきた。デュランがしたように、フェアリーもニコリと微笑み新たな仲間を迎え入れた。

「これからよろしくね、ケヴィン」

英雄王からフェアリーのことを聞かされていたケヴィンは特に驚くこともなく、同じように笑顔で答えた。

幾重にも折り重なった木枝に覆われたミントスに入ると、人の姿をしたままの子供たちが走り回っていたり、普通の女性が買い物をしている姿が飛び込んできた。人の姿をしていても彼らは獣人。血をたぎらせれば、いつでも獣へと姿を変えることができる。それを示すように、ちらほらと獣化した子供や男性が見て取れた。ビーストキングダムに住む戦闘的な者たちと違い、ミントスの獣人たちは穏健的だった。彼らは言う、人間と獣人は理解し合える、と。今のデュランとケヴィンが友になったことが、それを証明しているのかもしれない。

常に夜が支配する都で彼らは武器を揃えた後、獣たちがうごめく月夜の森に入って行った。歩を進めながらも、彼らは武器屋で聞いた情報が気になっていた。

武器屋の男は言った――デュランたちが来る前に、アルテナ兵が月のマナストーンを探しに来て月夜の森に入っていった、と。そして彼女たちは森の奥にそびえ立つ月読みの塔を目指していったのだと。

二人はアルテナ兵を追うように月読みの塔に進路を取っていた。月夜の森、闇夜を照らす月と不気味さを漂わす霧の中で、狼の泣き声と蝙蝠の羽ばたく音ばかりが聞こえていた。ウェアウルフ、ブラックファングといった獣人のみならず、闇をねぐらにするスペクターやバットムといったモンスターが闊歩している。やはり獣人は強かったが、獣化してブラックファングへと変わったケヴィンのおかげで苦戦しながらも着実に先へと進むことが出来た。ケヴィンは野生のモンスターたちと違い、人間としての理性を保っていた。それが英雄王の修行により得られたケヴィンの強さだった。

だが、道中で彼らは目を覆いたくなるような光景を目にした。所々に、アルテナ兵の戦闘服の切れ端が落ちているのだ。

それを見ながらケヴィンは言う。

「たぶん、獣人にやられた。亡骸もウルフたちに食われたんだと思う」

「ひどいな……」

「ここはそういう世界……。骨も残らない……」

「ここでだけは気絶したくないぜ」

脅かすようなケヴィンの言葉に、デュランは背中がぞくりと冷たくなるのを感じた。死んでもなお、肉体が壊されていく。果て無き苦しみのような気がした。

すると突然、

「ん？……くん……くんくん……この臭い！」

ケヴィンは鼻をひくひくさせ、何かの臭いを嗅ぎつけた。獣人の彼は人間より五感が優れており、一度嗅いだことのある臭いであれば、それが一キロ先であっても嗅ぎ取ることができる。

ケヴィンは顔を怒りで歪めると、一人森の奥に走っていった。

「お、おーい！どこ行くんだよー？！」
静かな森に木霊する叫び声。デュランの声も空しく、彼は一人残されてしまった。
襲いくる野狼を一撃しながら走るケヴィンが向かう先、月読みの塔の前で人間討伐隊元隊長ルガーが唯一生き残っていたアルテナ兵の首を片手で絞め上げていた。鋼のように硬い拳に爪を立てる少女、その足はぶらりと地面の上に浮き、その近くには先に息の根を止められたアルテナ兵が無残に転がっている。
「う……く……おかあ……さ……ん……」
まだあどけなさを残す少女は呼吸の出来ない苦しみと死の恐怖で、顔を涙でぐしゃぐしゃにしていた。
そして、バギッ、という生々しい音が響くと、少女のか細い両腕がぶらんと下に垂れ、強兵は猛々しい腕を緩ませて少女の体を地面に落とした。冷たい地面に横たわる二つの死体、そして塔の門前に建つ柱のかげで死を喰らう男が震えていた。
ただのたんぱく質の塊へと化した魔法使いに冷たい目を向けて、ルガーはフッと口の端を吊り上げる。
「俺に敵うとでも思っていたのか。愚かな人間め」
目の前の惨劇に腰を引かせた道化師がそそくさと近づき、言う。
「ル、ルガー様、この娘達の死体はわたくしめが始末しておきますので、お先にビーストキングダムにお戻りくださいまし」
「……貴様、俺たちの知らぬ所で何を企んでいる」
諂う弱腰の男にぎろりと眼を向け、ルガーは凄味を利かせた。その姿になお一層引き腰となった道化は冷や汗を垂らしながら、
「へっ？いや、何も企んでなんかいやしませんよ。そんな恐れ多い」
「……ふん、勝手にするがいい」
殺気を込めた目を向けていたルガーであったが、死を喰らう男の飄々とした態度を見ると、すぐ横に脱ぎ捨ててあった軍服を手に取り、月夜の森に出ていった。
しばらくしてルガーが行ったのを確認すると、死を喰らう男は不

気味にニヤリと笑った。
「やっと行きましたか……。クックック、獣風情が生意気なことを……。さてと、お食事の時間ですかね……」
彼は目を細めると、まだ死体の周りを浮遊していた少女の魂を鷲掴みし、口の中に放り込んだ。物質ではないはずなのに、彼の口の中からは食べ物を噛み潰す音が聞こえた。
「（くちゃくちゃ……ごくん）プハー、やっぱ死にたての魂はおいしいですねー。さてもう一個、……は流石に仮面の同士様に献上しないとネー。途中で私がピンハネしてるのがバレたら殺されちゃいますからねー」
死を喰らう男は右手を天に掲げ、左手を地面に伸ばし、それを対照的に動かして円を描くと、今度は呪法を使って先に冷たくなった死体の魂をガラス瓶に詰め込んだ。そして誰に言うでもなく呟く。
「仮面の同士様は聖域へのトビラを開くのに多くの人間の魂を必要としてますからね。ククク……」
とその時、月明かりだけが光源となる闇夜のなかで不気味に笑うこの男に、いきなり飛び蹴する男が現れた。
「キサマはッ!?」
死を喰らう男はさっと身を翻し、突然の急襲をかわした。さっと地面に付く裸の足。男は怖い顔をして、道化姿の悪魔を睨み付けた。悪魔は嘲笑の顔でそれに対峙する。
「おっと、獣人王のボンクラ息子のお帰りですか。随分長い旅路でしたネー」
「お前、カールの命戻る嘘ついた。それに何、今の？この子たちの魂、食べた?!」
「クックック、秘密を見られちゃあ生かしておくわけにはいきませんね。……アブソーブウィンド」
不気味な男が呪文を唱えると、生暖かい風がケヴィンを包み込み、彼の体から力を奪った。がくりと膝を突くケヴィン。
「くっ、力入らない……」

「では、死になさい……」
死を喰らう男がどこからか取り出した大きな鎌をケヴィンの首に当てたまさにその時、
「待て！」
フォルセナの剣士デュランが現れた。
「また変なのが出てきましたネー。……おや、あなたもですか？」
死を喰らう男は眉間にしわを寄せてデュランを見ると、すぐにその視線を外し彼の後ろから歩み来る大男に向けた。それを確認するようにデュランも後ろを見た。すると、２メートルを越す屈強な男が鋭い目つきで立っていた。
地に伏し顔を歪めながらケヴィンは口を開く。
「ル、ルガー……」
「何をしているかと思えば、死を喰らう男よ、人間の魂を集めて何をしている？……最近俺の部下がが行方不明になっているのも、おまえの仕業か？」
「ルガー隊長殿、どうしてこちらに？」
「答えぬ気か……。まぁいい。森の中でケヴィンを見かけたんでな、追ってきたのだ。死を喰らう男、キサマへの制裁はこいつを倒してからだ」
「そうですかッ。では楽しみに待っていますよ」
死を食らう男はケラケラ笑いながら聳える塔に走っていった。そして門前の柱によじ登ると腰を下ろし、これから始まる拳闘ショーを見守る観客となった。
地面に這いつくばりながら、ケヴィンは問う。
「ルガー、おまえ平気で人殺す、どうして？」
「クックック、だからキサマは甘いのだ。弱者は所詮強者の糧にしかならない。今まで人間がやってきたことだ。今とて、そこに横たわる女共の首を圧し折った所、涙とよだれで顔を汚し、最後は母を求めて朽ちたわ。これほど面白いことはあるまい。アッハッハッハ！」

「おまえ……、人違う！ここで倒す！！！！」
怒りに震えるケヴィンは叫びながら立ち上がり、ブラックファングの姿をさらけ出した。みなぎる闘志が見開かれた目に溢れている。
その姿にルガーは喜悦の表情を浮かべると、右手で上着を破り捨てた。
「さぁ来い！わがライバルよ！！！」
人の皮が破れ、黒い毛をした獣の体が露になる。同じブラックファングとなったルガーにケヴィンが突っ込む。岩をも砕く勢いで二つの拳がぶつかり、堅いもの同士がぶつかる音が静かな森に響いた。相打ちになった拳はパッと離れると、互いの掌を握り合い、力比べに出た。太い腕に血管が浮かぶ。その様子を見て、デュランは加勢の姿勢を取った。
「ケヴィン！」
「デュラン、これオイラの闘い！手、出す、ダメ！」
「くっ！」
叫ぶケヴィンの隙を突き、ルガーは彼を放り投げた。地面に叩きつけられた体に、追撃の一拳が落ちる。ケヴィンは紙一重でそれを交わす。ルガーの攻撃力はすさまじく、空振った拳は硬い地面の土をえぐるほどであった。
「これが獣人同士の闘いなのか……」
二人の戦い、否殺し合いにデュランは息を呑んだ。だが、それ以上にデュランは迷っていた。ケヴィンとルガー、因縁のある二人の闘いに関係ない自分が手を出していいのかどうか。
優勢に拳を繰り出すルガー。対するケヴィンはすれすれのタイミングで手拳をかわし、時折反撃の一打を打つだけだった。どう見ても、彼は劣勢に立たされていた。
打撃を連打しながらルガーは叫ぶ。
「どうしたケヴィン、なぜ獣人王様直伝の殺人拳を出さない？！」
「あれは使っちゃいけない拳法、絶対使わない！」
両腕でガードしながら応えるケヴィン。追い込まれながらも、い

まだ甘いことを言う彼の姿勢にルガーは激高した。
「キサマ、なめやがってぇ……。うおぉー！！」
渾身の力を込めた拳がケヴィンの腹に食い込む。強烈な一発に彼は二、三歩退き、顔を歪めた。
その時、デュランはふと気が付いた。
「ケヴィン、おまえ、まださっきの魔法がっ？！」
「大丈夫……、どんな状況でも、オイラ闘う！！」
口元を緩めて言うケヴィンであったが、ルガーは容赦なくさらなる必殺拳を繰り出そうとする。
「フハハ、バカめ！本来の力も出せない状況で俺に勝てると思ったか！ぬおぉぉ、真空水月斬！！」
「くっ、間に合え！」
デュランは剣を抜きさっと空を斬ると、小声で呟いた。
それを目に捉えることもなく、ルガーは全身に力を込めると素早くケヴィンの前に立ち、目に見えない速さでの連続打撃を加えた。その威力にケヴィンの筋肉が軋む。そして、トドメと言わんばかりにバク転蹴りを食らわせるルガー。
その攻撃をまともに受けたケヴィンは思い切り飛ばされ、不気味に微笑む死を喰らう男が座るのと対をなす門扉の柱に激突した。
「ぐっ……ぶっ……」
崩れんばかりに、モニュメントが欠ける。破片が落ちる中で、ケヴィンのの口から大量の血が吐き出された。そしてがくりと首がうなだれる。
それを見てルガーはにやりと笑う。
「死んだな……」
「……まだだ、ルガー」
「なにっ？！」
ケヴィンは吐血しながらも、膝に手を置きながらゆっくりと立ち上がった。ハァハァと肩で息をしながら、彼は自分に起きた事を理解できずにいた。だが、その中でデュランだけが口の端を上げてい

た。
「へっ、何とか間に合ったな！」
「貴様、一体何をした」
人狼の敵は殺気に満ちた目をデュランに向けて静かに問う。デュランはニヤリと不適な笑みを作りながら、
「ヒールライトだ！おまえが技を出す前にかけさせてもらった。イーブンじゃねぇこの戦い俺も参戦させてもらうぜ！」
「デュラン……」
決意を込めて叫び、剣をルガーにかざす姿を見て、ケヴィンは最早何も言えなかった。仲間の有り難味を彼は感じていた。だが、ルガーもそれにひるむ事などなく、ニヤリと笑ってみせた。
「ククク、そうでなくては面白くない！さぁ来るがいい！！」
隆々とした胸の前で手をこまねきするルガーにデュランは突っ込んでいき、剣を振り降ろした。人間なら頭から真っ二つになるくらいの勢いであったが、ルガーはそれを二の腕で防いだ。まるで岩を打ったような歪な音が木霊する。
「なにっ！」
「甘いわっ！」
剣を振り下ろそうと柄を握り締めるデュランは一蹴を受け、吹き飛ばされた。ズザザザと、地面に流れるデュランの体。
だがルガーも無傷ではなかった。彼の腕はざっくり切れ渡り、血が滴っていた。
「これは闘気か？……なかなかやるな、剣士よ！」
ルガーは楽しそうだった。闘いに身を置き続けた獣人のエリートは、この闘いに今までにない何かを感じていた。
ケヴィンは痛みを堪えて立ち上がると、あやしい笑みを見せるルガーに立ち向かって行った。彼が受けた同じ技を繰り出しながら。
「ルガー！真空水月斬！！」
頑強な拳が幾度も繰り出され、鋼のような体に打ち込まれる。連続の打撃にルガーは顔を歪ませた。そして、サマーソルトキックが

彼の顎を捉えた。
「ぐあぁぁぁ！！」
骨を砕かんばかりの衝撃に、さすがのルガーもはじき飛ばされ、地面に背をつけた。その隙を突こうと、ケヴィンは追撃に走る。だが、ルガーは両手をバネにして瞬時に立ち上がると、全身に闘気を溜めた。
「頭にのるな！ぬぅん、朱雀昇天の舞！！」
ルガーは強靭な足で高く飛び上がると、体内に溜めた闘気を一気に放出した。その波動にデュランとケヴィンは吹き飛ばされる。
「ぐぅ！……なんて技なんだ！」
デュランは地面に倒れ上半身を起こすのがやっとであったが、ケヴィンはすかさず立ち上がり、再びルガーに立ち向かっていった。
「まだまだぁ！！」
「フハハハ、その意気だケヴィン！もっと俺を楽しませろ！！」
二人の激しいぶつかり合いが始まった。ケヴィンが右手に拳を作りルガーの顔面を狙うと、相手はさっと身を低めてそれを交わし、大きく開いたボディに拳を見舞った。だが、ケヴィンは怯むことなく両手を握り締め、それをルガーの大きな背中にたたき付けた。がくんと彼の片膝は折れ、土を付けた。
「ケヴィン、退け！！3段斬り！！」
デュランが叫ぶと、ケヴィンは片足で地面を蹴り離脱した。一瞬の間を与えることなく、ケヴィンの影からデュランが必殺技を打ち込む。だがザコモンスターと違い、ルガーを倒すことはできなかった。ただ、いくら攻撃しても壊れなかった体に深い傷をつけることはできた。ルガーのわき腹から大量の血が滴り落ちて、黒い地面を湿らせる。
そんな大ダメージにもかかわらず、彼は闘志に満ちた目を二人の勇者に向ける。
「どうした、そんなものか？！」
闘う中で血がたぎり始めたケヴィンはこれまでにないほどの闘志

を燃え上がらせた。全身に力をみなぎらせ、再び幼きころからの友に向かう。

「ウオォォ！！」

「来い、ケヴィン！」

ルガーがそれを向かえ打ち、二体のブラックファングは力比べに出た。傷を負いながらも、ルガーの力はケヴィンを圧した。

「ぐ、ぐぐぐ……」

「うぐぐ……、どうした。キサマの言う拳心はこの程度か？やはり生かす拳より、殺す拳が強いということか！」

ルガーは叫んだ。どんなに追い詰められようとも獣人王直伝の殺人拳を使おうとしないケヴィンに。まるでそれを責めるかのように。だが、彼が力を込めるのに比例して腕やわき腹から血が吹き出ていく。

彼の言葉に、ケヴィンは負けじと全身に力を込め直した。優位にいたはずのウルフは徐々に圧されかえされる。だが、同じくケヴィンも骨が軋み、全身に激痛が走っていた。

傍からその様子を見ていたデュランは思った――次で終わる、と。そして、それは当事者が一番察していたことだった。

「これで終わりだ！ケヴィン！」

「うぉぉ！ルガァァー！」

ルガーが名を呼びケヴィンが叫ぶと、二人は互いに一歩跳び退いた。そして、両足が地面に付くや否や、二人は全力で向かっていった。同じタイミングで堅く握られた拳が放たれる。

「うわっ！」

ぶつかり合い、空気を揺らす二つの拳。その衝撃は側にいたデュランを吹き飛ばす程だった。体勢を立て直し顔を上げると、二人は拳を突き出しながら立ち尽くしていた。そのまま動く気配を見せない二人は、さながら決闘を表現した彫像のようだった。

だが、一瞬の後、先に動いたのはケヴィンだった。

「グ……ウウ……」

ケヴィンの拳が割れ、血しぶきが飛沫すると、彼は顔を苦しそうに歪めて一歩後ろに退き、膝を着いた。ぶらりと垂れ下がった右腕、その先からポタリポタリと血が落ちる。

それを見て、ルガーはニヤリと笑った。だが、

バタン！

と、彼は仰向けに倒れ、見る見る間に人間の姿に戻った。右腕の骨は砕かれ、浅黒く変色している。

門柱に座り高みの見物を決め込んでいた死を喰らう男は意外な結果に驚き叫んだ。

「キィー！この役立たずが！！覚えといで！！」

パッと飛び降りると、彼は逃げるように高く聳える月読みの塔の中に入っていった。厳かに構える門扉を足蹴にして開けて。

だが、そんな言葉や行動を気にも留めず、ケヴィンは獣化を解いてルガーに近づき膝を着いた。息を切らしながら、幼馴染の友の顔を覗き込む。

「はぁ……はぁ……、ルガー……」

ルガーの目は最早光を失い、すでに虫の息であった。だけれども、彼の顔はうっすらと笑みを携え、満足気だった。

力なく、彼は言葉を口にした。これまで誰にも言わなかった、彼の心の内を。汚い命の側面を。素直に。あるがままに。

「……ケヴィン。俺は……おまえが……羨ましかった……」

「えっ……」

「生まれながらにして……獣人王の子……大陸最強と言われる……殺人拳を……骨の髄まで教えこまれた……おまえが……」

「ルガー……」

「だがおまえは……たかがウルフに心奪われ……その拳を……いかそうとはしなかった……。俺は悔しかった……、その殺人拳を……ノドから手が出るほど……極めたかった……から……」

見る見るうちに、彼の目は生気を失っていった。呼吸もだんだんと浅く消えていく。儚いその瞳に、ケヴィンは言った。

「ルガー……、獣人王の後継者、おまえが相応しい……」

賞賛にも似た言葉に、ルガーの口の片端が上がる。

「フッ……ありが……と……よ……その言……聞け……だけで……生ま……変わったら……も……いちど……」

血を吐き出しながらも彼は喋り続けたが、その言葉が最後まで行きつくことはなかった。彼は薄らとした微笑を浮かべながら、事切れたのであった。。

ケヴィンを羨望し、獣人王に認められたいがため、幼い日から闘いに明け暮れたウルフ、ケヴィンの幼馴染で古き友だった男、獣人ルガー。彼の短く儚い生涯がここに幕を下ろした。

冷たい土の上で、静かに眠る友にケヴィンは叫び、涙した。

「うっ、うっ……、ルガー！！！」

ケヴィンの声が静かな森に響くと、あたりを不思議な明かりが包み込みこんだ。柔らかく不可思議な月の光が眩き彼らを照らすと、近くの泉から月の精霊ルナが現れた。それに呼応するかのように、フェアリーも姿を見せる。

「ルナ！あなた、月の精霊ルナね！！」

「ええ、そうです……。あなたたちが来るのをずっと待っていました……。もちろん力をお貸します……」

ルナはすべてを知っているかのように何も言わず、デュランたちの仲間になることを了承した。月の精霊ルナが仲間になった。

そんなルナに、ケヴィンは涙を流しながらすがりつくように言った。

「お願いルナ！ルガーを助けて！！」

「……わかりました」

一瞬の沈黙を経て、彼女は答えた。そして、皆が驚くような一言を付け加えた。

「曲がりなりにも、彼は月のマナストーンを守ってきましたから…

…」

「!?」

驚くデュランたちを目の端に捉えながら、彼女は呪文を唱えた。すると、燦々と輝く月の光が息絶えたルガーの亡骸に降り注ぎ、その体は見る見る間に縮んでいき、あどけない乳飲み子へと変貌した。

小さな子供となったルガーはゆっくりと目を開くと、見守るケヴィンに向かってきゃっきゃと笑いかけた。その様子を見て唖然とするケヴィンたち一向。

「ル、ルガー……?」

「彼を助けるには、彼の願い通りにするしかなかったの……。新たな生を受けたこの赤ん坊は、成長して再びあなたに闘いを挑んでくるわ……」

ルナが予言するように言うと、ケヴィンはその赤子の体を抱き上げ、そして告げた。それはまるで、ルガーに願いを託すようでもあった。

「そうか……。ルガー坊や、強くなる。オイラももっと強くなる。そしたら、また拳を交える。敵同士じゃなくて、ライバルとして、友達として……」

その言葉を理解したのか、赤ん坊は楽しげな笑みを見せた。そしてケヴィンが彼を地面に下ろすと、赤子は月夜の森に進んでいった。

一人で狼がうろつく森の中へとハイハイしていく赤ん坊を見ながらデュランは焦るように言った。

「お、おい。あの子大丈夫なのか?」

「大丈夫、獣人の赤ん坊、野生のウルフが育てる、これ獣人のジョーシキ」

「す、すげぇな!」

ケヴィンはニカっと笑うと、デュランは目を見開いた。驚きを通り越し狼狽にも似た反応を示すデュラン。それを尻目にフェアリーは言う。

「ルナ、月のマナストーンは？さっきルガーが守ってたって言ってたけど……」
「月のマナストーンはこの月読みの塔の中にあります。死を喰らう男の暗躍を警戒したガウザー、現獣人王は私たちを守るために、部隊最強のルガーをこの塔の守り目に当てました。だから、月のマナストーンは無事だったのです」
「でも、いまその死を喰らう男が塔の中に……。急ごう！」
デュランが月のマナストーンを案じると、フェアリーとルナは姿を消し、一行は急いで月読みの塔の中に入っていった。
縦長の塔の内部は正方形の一室となっていた。その中には固く閉ざされた扉を持った部屋が四つ。それらに囲まれ守られるように、月のマナストーンが聳えていた。厳かに、何の異常もなく……。
「これが月のマナストーン……。そうか、塔の中に隠されてたことでこの森は常に夜なんだよ」
デュランたちがマナストーンの前に立つと、再びフェアリーが現れて説明を加えた。彼らは死を喰らう男の奇襲を警戒していた。だが、
「あの不気味な男、いねぇな……」
「あの人、すごく邪悪な気配してた……」
「死を喰らう男、仮面の同士が聖域のトビラ開ける、言ってた」
周りを見渡し、誰もいないことを確認する仲間たちにケヴィンはぼそりと告げた。その言葉を受け、フェアリーはこれまでに明らかとなった、マナストーンを狙い聖域の扉を開こうとする者たちを思い返した。
「仮面の同士、竜帝、それに黒の貴公子……。彼らは何者なんだろう？」
その言葉にデュランは胸の前で両腕を組み思考を巡らせたが、答えを見つけることは出来なかった。ただ、これだけはわかっていた。
「……何にしても、そいつらより先にマナの聖域にいかねーとな！」
「そうね。デュランの言うとおりだわ！残っているのは木の精霊の

ドリアードだけよ。英雄王様が仰っていた、ランプ花の森のどこかにいるという、ディオール村の妖精王様を探しに行きましょう！！」
「おう！！」
フェアリーの言葉を受け、一行は月読みの塔を出て、次の目的地に足を向けた。
月読みの塔を出て小さな階段を下りながら、ケヴィンは不思議そうな顔で言った。
「あそこ、獣人王の匂い、した」
「獣人王の？」
「そう。しかも、今の今までそこにいた、それくらい強く匂いが残ってた」
「そりゃあ一体どういうことだ？」
ケヴィンの言葉にデュランは疑問符を浮かべるばかりだった。その答えはケヴィンにもわからなかったが、ただ一言こう言った。
「死を喰らう男もあそこにいた。匂いが残ってた。でも、獣人王はあいつが入ってくる前からそこにいた。でも、二人とも一緒に匂いを消してる。不思議」
そう言いながら、ケヴィンは首を傾げていた。一つの謎を残しながら、彼らはアルテナは東、ランプ花を目指して海に出たのだった。

# 第五話

ルガーとの戦闘で疲労した体をブースカブーの甲羅の上で癒したケヴィンとデュランはランプ花の森に通じる砂浜に降り立った。そこから森へと通じる道に入ったところで二人は早々に立ち往生を強いられることになる。奇妙な野草が生い茂り、先に進むことができなくなっていた。デュランは眉根を寄せて言う。

「夜のうちにドリアードに会いたいんだけどな。どうしたもんか……」

「早速私の力が必要みたいですね」

途方にくれる二人の前に、新たな仲間、月の精霊ルナが姿を現した。彼女はにっこりと微笑み、言う。

「この植物は月夜草ね。私の力で何とかできそうですよ！」

ルナが瞳を閉じると全身から優しい不思議な光が放たれた。月の光が暗い夜道を照らすように、神々しく輝く月の精霊。

月光を浴びた植物はたちまち枯れてしまった。

太陽の光で成長する一般的な植物と違って、月夜草は月の光を糧としている。太陽光の浴びすぎで朽ちてしまうのと同様に、この植物にとって月の光を強く浴びることは有害となるのである。

「ありがとう、ルナ」

「どういたしまして。さ、早く戻らないと。あのバカップルを二人きりにするのはマズいわ」

意味不明な言葉を残してルナは消えていった。

バカップルって誰だろう――そんな疑問を感じたデュランとケヴィンは首を傾げた。

いや、考えても特段価値もないだろう――不意にそう感じた二人は朽ちた植物を踏み越えて歩みを再開した。

すると、一人の幼女が道の真ん中で二人に背を向ける形で立って

いるのが見えた。その小さな後姿に見覚えがあったデュランは思わず声を張って叫んだ。
「シャルロット？　シャルロットじゃないかっ！？」
「……あり？　でゅらん、でちか？」
名前を呼ばれて振り向いた少女も意外な再会に驚き、目を皿のように丸くしていた。どこかの誰かと違って、自分のことをちゃんと覚えていてくれたことにデュランの口元は緩んだ。
「って、どこかの誰かってだれ？」
「おいおい、ケヴィン。俺は何もイッテイナイゼ」
目を泳がして苦笑いをするデュラン。話を逸らすかのように、彼は堅い笑顔を目の前の幼女風少女に向けかえ、尋ねた。
「シャルロットはこんなところで何をしてるんだ？」
「ふふーん、聞いて驚かないで欲しいでち。なんと、あたちは禁呪で倒れたおじいちゃんを助けるべく、でぃおーるに住むよーせーおーしゃんに会いに行くのでち！」
「妖精王？なんだ、君もか」
「むむっ！　ということはあんたしゃんたちもでちか？！」
驚愕の反応を期待していたシャルロットであったが、デュランたちも同じ目的を持っていることに逆に驚かされてしまった。
デュランは頷き、驚く少女に質問を重ねる。
「でも、どうして司祭様を助けるのに妖精王に会いに行くんだ？」
「よくぞ聞いてくれまちた！」
シャルロットは自慢気に語り始めた。光の司祭が獣人の人間討伐隊を駆逐した後、彼女が辿った道筋を――。
「おじいちゃんが倒れた後、あたちはいろんな本を読んでおじいちゃんを助ける方法を探したんでち。そしてついに、とある魔術の本にあの呪いを解く方法が書いてあったんでち。それにはえるふのよーせーおーさんの力が必要なんでち！」
「そうか。それでここまでやって来たのか。女の子一人で大変だっ

たろうに」
「うぅ、まったくでち」
「そうだろうな……」
「大砲で飛ばされた時は死を覚悟ちまちたよ」
「ってつまりはジャドから定期船に乗ってマイアからボン・ボヤジの大砲を使っただけじゃないか！」

うぇんでるを出たの４日くらい前でち――悪びれる様子もなくシャルロットは補足した。
３ターンの会話で終わる冒険譚に、デュランは呆れてしまった。その反応を楽しむように、シャルロットはけらけらと笑っている。そんな二人のやり取りを訝しげに見る男が約一名。ケヴィンは素直に訊いて見た。
「デュラン、このちっちゃい子、だれ？」
ケヴィンがシャルロットと面識がなかったことを失念していたデュランはハッとして、彼女を紹介しようとした。
「ああ、この子は――」
「むっ、誰が『ちっちゃい子』でちか！」
「シャ、シャルロット？」
頬を膨らませて怒りを露にするシャルロット。
「こう見えてもあたちは１７歳になるんでちよ。そりゃあ、デュランと会った時はまだ幼くて可愛いらしい美少女でちたけど、今は立派な美女でち！」
「（うわっ、自分で美女とか言っちゃったよ！）」
「１７……オイラと同い年……」
デュランが長い旅路に思いを馳せ、ケヴィンが目の前の幼女に若干引いていると、自称大人の美女シャルロットはぷんすか頬を膨らま続けていた。
「ふーんだ、この森は複雑に入り組んでいる上、えるふの魔法でぃおーるには着かないようになってるんでち！でも、すでにちょう

しゃ済みのあたちはでぃおーるへ辿り着く秘密を知ってるんでち！」
「ディオールに辿り着くための秘密？」
どうでもいいけど頬を膨らませて怒ってるあたりが小さい子供っぽいんだよなぁ――口に出していけないと思う感想を抱きながらデュランは訊いた。
「ふんだ、失礼千万なあんたしゃんたちには教えてあげないでち！せいぜい道に迷うんでちね！」
ベーッと舌を出し右手の人差し指で下瞼の裏を見せると、シャルロットはすごい勢いで走っていってしまった。
「あっ、おい！……行っちゃった」
デュランは猪のように猛進する小さい背中に向けて叫んだが、その足が止まることはなかった。

シャルロットが駆けて行った道を歩き始めデュランは、ケヴィンにシャルロットのことや滝の洞窟で別れたことなどを話した。
「そうだったか」
「あぁ。まったく、助けてやったんだから、ディオールへの行き方くらい教えてくれたっていい――」
「きゃーっ！」
愚痴をこぼしていたその時、天を衝くような悲鳴が二人の耳に聞こえた。ほんの少し前まで彼らが耳にしていた、あどけない声の悲鳴が。二人は顔を見合わせると急いで悲鳴の聞こえた方向へと駆けて行った。

薄気味悪い草木が茂る森の中に足を踏み入れると、二匹のクロウラーに襲われて倒れているシャルロットの姿が目に入った。倒れる少女に糸を巻きつけ毒針を突き刺そうとする巨大なイモムシにケヴィンは飛び掛っていった。デュランも剣を抜き、後に続く。
豪腕が繰り出す一撃と鋭い刃の斬撃に、二匹のモンスターは一目散に逃げ出した。デュランは切先で器用に肢体に絡みつく糸を断ち

切ると、急いでシャルロットを抱き起こした。
「大丈夫か!?」
「う……う～ん……」
シャルロットは目をゆっくりと開け、ピンチを脱したことを認識した。そして、それが
いま瞳に映る二人のおかげであることも即座に察した。
「うぅ、ひどい目にあったでち」
「ランプ花の森は凶暴なモンスターでいっぱいだ。一人で進むなんて無謀だよ」
「たちかに、そうみたいでちね」
言いながら立ち上がると、彼女は砂を払い服を調えてから二人に向かって礼を述べた。
「あんたしゃんたちのおかげでたすかったでち」
「行く先、一緒。だから、一緒に行く」
ケヴィンの申し出に、少女は一瞬悔しいそうな顔をした。だが、程なくして小さく頷き返した。負けん気の強い彼女としては、さっきの手前すんなり彼らを頼りたくなかった。だが、一人で進むのは困難であることを身をもって知った彼女に、それを拒む余裕はなかった。
「シャルロット、さっき言っていた『この森の秘密』って何なんだ?」
「ぢつは……」
そこまで言って彼女はあたりを見渡した。何かを探すようにキョロキョロと。そして、薄いピンクに染まった一輪の花を見つけるやそれを指差して、こう言った。
「ありは月夜草と言って、月の光を養分としている植物なんでち」
「あぁ、知ってるよ。さっきもこいつの世話になった」
着いて早々のイベントを思い出し皮肉を込めて言ったのだが、その経緯を知らないシャルロットはきょとんとするだけだった。
傾げた首を元に戻しつつ、彼女は話を続けた。

「この先、えるふの魔法で無限にるーぷする道があるんでち。でも、この赤く光る月夜草を道しるべに辿っていけば、えるふの村でぃおーるに行くことができるんでち」
「へぇ、よく知ってるな」
「さすがは光の司祭様の孫娘」
二人の言葉に気をよくした少女は、胸を反らし、説明にもう一言添えた。
「全部おじいちゃんの日記に書いてありまちたから！」
「って、受け売りかいっ！」
そんなツッコミをいれると、シャルロットはにへらと笑ったのである。

シャルロットが仲間になり、三人でランプ花の森を進み始めた。
最初のクロウラーとの戦闘では油断し負けてしまったシャルロットであったが、道中はフレイルをぶんぶん振り回し、昆虫型モンスターを殴りつけていた。

夜が更けていき、紅の輝きを増した月夜草を道しるべに森の奥深くへと足を踏み入れていくと、これまでとは違う町並みをした村が見えてきた。小さい村だが、不思議な感じがする村だった。
「これがエルフの村、ディオール……」
三人は神妙な面持ちでディオールへの入り口に立っていた。英雄王の話では、ここに妖精王がいる。彼ならば木の精霊ドリアードがどこにいるか、どうすれば会えるのかを教えてくれるに違いない。
だが、村の静けさがそんな期待を不安へと変質させていた。
そう、この村には活気というものがないのである。夜の静寂に支配されていたミントスでさえ年端のいかない子供たちが走って遊んでいたというのに、この村はまるで誰かの死を悼んでいるかのように、侘しかった。
デュランが村の様子を伺っていると目の端に小さなお墓を捉えた。

村の入り口に、まるで追放されたかのようなお墓がひっそりと建っている。彼はゆっくりと近づくと、膝を地面に着いてその小さな墓石に刻まれた文字を見た。

“リロイ”と“シェーラ”……？どうしてこんな所に――難しい顔で墓石を見つめるデュラン。その後ろで幼さを残す少女がぼそりと呟く。

「あたち、ここに来たことある……」

そう言ってシャルロットは何かに引き寄せられるかのように村の中に入っていった。

「お、おい！」

ふらふらと歩いていく少女の後ろをデュランとケヴィンは追いかけるように着いていった。

村の中に入ると、人間より一回り小さく、耳がピンと尖ったエルフたちが彼らを奇異の目で見ていた。まるで奇妙な怪物を見るかのような目で、彼らを見ている。それどころか、皆、デュランたちを避けるように歩いている。目が合えば、そそくさと逃げ出す者もいた。

だが、シャルロットはそんな周りの反応も気にせず、一心不乱に歩みを進めていた。自分たちが、いや、自分がどこにいけば良いのかを知っているかのように。

「ここでち…。この館にようせいおうは住んでるんでち…」

黙々と進むシャルロットがようやく立ち止まったのは、村のはずれにある二階建ての民家だった。他の家よりかは少しだけ大きかったが、王が住んでいるとは思えない外観である。

だが、シャルロットは確信を持ってドアを開けた。

「どちらさまで……ひぃ！にっ、人間?!」

女中らしきエルフは姿を見せるや、一目散に逃げ出してしまった。

デュランにもケヴィンにも、どこに向けたらいいのか分からない怒りにも似た感情が沸き起こっていた。だがシャルロットだけは動

じる様もなく、静かに奥の部屋へと通じる扉を開けようとしていた。
デュランたちは不思議な顔をして互いを見てから、無言のまま彼女に着いて行った。

部屋の中は客間程度の空間が広がり、その真ん中に一人の老エルフが目を瞑って椅子に腰掛けていた。シャルロットは何も言わず、何もせずにじっとその老人を見つめているだけだった。
「あの、すいません……」
ただ立っているシャルロットの横を過ぎて、背中が丸くなっている老人にデュランは話しかけた。しかし、帰ってくるのは沈黙だけであった。
「俺たち、木の精霊ドリアードを探しているんだけど……」
「……人間なんぞに話すことはない。とっとと帰りなさい」
老人の冷たい反応にデュランが困りあぐねていると、シャルロットが一歩を踏み出した。
老人はうっすらと眼を開けて、近づいてくる少女の顔を見た。その瞬間、老人は目を見開き、椅子から立ち上がって叫んだ。
「シャルロット！シャルロットではないか！！」
名前を呼ばれた彼女は少し困惑しながら、
「あんたしゃんは……」
彼女には何故見ず知らずの老人が自分の名前を知っているのかわからなかった。老人はそれを察したのか、
「そうか、無理もない。お前がこの村から、ウェンデルに引き取られていった頃は、まだ幼すぎて何も覚えていないんだろう……」
老人は悲しいを目をして、うつむいた。悲しみと共に胸の奥に仕舞い込んだ何かがこみ上げてくるの我慢するかのように。
その様子を見て、シャルロットは遠い遠い記憶が甦るのを感じた。
「あんたしゃん……ようせいおう、しゃん？」
「おぉ、思い出してくれたか。しかしなぜシャルロットがこんな所に……？　光の司祭殿の身に何かが起こったのか？　あの司祭殿が

シャルロットがこんな所までくるのを許すとは思えないが……」
　困惑している妖精王の前に、小さな光を纏ったマナの使い、フェアリーが姿を現した。
「妖精王様！私達にお力をおかしください！」
「何と、お前達はフェアリーに選ばれし者だったか！」
　シャルロットとの再会のみならず、フェアリーの登場に妖精王は驚きを隠せなかった。フェアリーは妖精王に事情を説明した。
「光の司祭様は、聖都を守る結界をはられた時に禁断の古代呪法をお使いになり、呪文にかけられた呪いによって、不治の病にかかり倒れられたそうです」
「そうだったのか……司祭殿とは、2度と関わり合いになる事は無いと思っていたが……」
　そこで妖精王は再び目を瞑り、何かを感じていた。そして一拍おいてから、
「リロイとシェーラがあの世で導いているのかも知れん……」
　リロイとシェーラ、入り口にあった墓に書かれていた名前だ――
　デュランはあの寂しいお墓を思い返していた。
　そして、次のシャルロットの言葉を聞いて、デュランの体に緊張が走った。
「ぱぱとままが！？」
　妖精王は言う。
「そうだよ、シャルロット。リロイとシェーラは、ずっとその事で悲しんでいた……」
　デュラン以上にシャルロットは動揺し、妖精王の目を強く見つめた。驚きの色を隠せない小さな瞳に向かって、妖精王は語りかけた。
「エルフと人間の恋は禁断の恋。たがいの命をちぢめるため、ワシも光の司祭殿もふたりの結婚には反対したのじゃが……」
　妖精王の言葉が紡がれるたびに、シャルロットの目は熱くなっていった。胸がしめつけらるような痛みを感じていた。
「リロイとシェーラは『命よりも大切なものがある』と、このディ

オールの村に駆け落ちして、結婚しおった。実に幸せそうな彼らを見て、ワシは説得を諦めたのじゃ」

彼はまた一呼吸を置いた。娘夫婦の幸せそうな顔を思い返していたのかもしれない。

「それからしばらくして、リロイもシェーラもシャルロットを産むとすぐに他界した。しかし彼らは決して後悔はしていなかったよ……。だが光の司祭殿は、最後まで息子のリロイを許してやれなかった自分を責め、償いにシャルロットを大事に育てる事を近い、この村からシャルロットを引き取っていったのじゃ。そしてワシは、再びこのような悲しい事が起きないよう、このディオールの村を人間界から隠し、エルフ達だけでひっそりと暮らしておったのじゃ」

妖精王がすべてを語り終えたとき、シャルロットの頬には熱い涙がつたっていた。17年間知ることもなかった両親のことを知り、自分を大切にしてくれた祖父がどんな思いでいたのか知り、父親に許されないまま逝ってしまった両親の気持ちを考えると、彼女はどうしていいかわからなかった。ただただ、涙が溢れてくるだけだった。

「えぐっ、えぐ……ぱぱ……まま……うわぁぁぁぁ！」

シャルロットは逃げるように部屋を飛び出していった。

勢いよく開けられ、閉じることのない扉をデュランとケヴィン、そしてフェアリーの三人は無言で見つめた。

「しばらく、そっとしておいてやろう……。司祭殿の不治の病、マナが少なくなった今、おそらくこのワシにもどうする事もできん……」

彼は目を閉じて、心の中で光の司祭の回復を祈った。

「やはり、マナの剣を手に入れ、マナの女神様の復活を待ってお願いしてみるしか方法は無さそうね……」

フェアリーの口から光の司祭を救う唯一の手段が提示された。デュランたちの旅の最終目的、そこにシャルロットの願いも加わった。すべての願いを叶えるため、デュランは妖精王に尋ねた。

「妖精王さん、フェアリーと俺達は聖域へのトビラを開くため、各地の精霊達を探しているんだ。木のマナストーンの近くへはどうすりゃいけるんだ？」

「ランプ花の森の北西にマナの女神像があるはずじゃ。そこで、月の精霊ルナの力を使いなさい。夜に反応するランプ花は、自ら道を開くであろう……」

妖精王はドリアードに会える途を彼らに教えた。それが孫娘の願いを叶えることに通じることになるから。

その時、急いで走ってくる足音が聞こえた。音の主は開きっ放しの扉から妖精王の部屋に駆け込んできて、照れくさそうに笑っていた。

「シャルロット！」

「……えへ、シャルロットかっちょわりいでち、おじいちゃんやヒースにわらわれちゃいまち……」

目を真っ赤にしながらも彼女は言う。

「まなのつるぎ、はやくみつけて、ヒースやおじいちゃんをたすけなきゃいけないんだよね？　シャルロット、それまでもうなかないよ」

部屋を飛び出した彼女は思い出したのだ。2年前、デュランやアンジェラと共に滝の洞窟に向かった時の気持ちを。あのときの気持ちを忘れなかったからこそ、難しい祖父の本を読み明かし、勇気を出してウェンデルから一人旅立ったのだ。だから……、

「さぁ、はやくせいれいをみつけにいこう！シャルロットは、もうへいきだよ！　ようせいおうのおじいちゃんも、いろいろありがとう！」

いろいろな思いがこもった笑顔でお礼を言う孫娘シャルロットにシェーラの影を感じながら、妖精王は生まれたばかりの頃の彼女の姿を思い出していた。幸せそうに娘を抱く、シェーラとリロイの姿を。短いながらも幸せに満ちていたあの日々を。

「シャルロット……、大きくなったな。がんばるんだよ！」

娘の成長をリロイとシェーラもどこかで喜んでいる――彼はそう思わずにいられなかった。

三人は妖精王の館を出ると装備品を調達してから再びランプ花の森に足を踏み入れた。妖精王との会話後、すぐさま妖精王のお達しが村中に回り、エルフ達は「仕方がない」と言いながらも、自慢のアイテムを渡してくれたのだった。

妖精王の言葉通りに森の北西に向かうと、蔦が絡みつくマナの女神像があった。デュランが土埃を吹き落とすように女神像に手を置くと、フェアリーの声が三人の頭に中に響いた。

「（これが妖精王様が言っていた女神様の像ね！）」

「そうみたいだな。……ルナ」

デュランが名前を呼ぶと、ぽぉっと不思議な光を纏った月の精霊が姿を現した。彼女は女神像に絡みつく蔦や花をじぃっと見たり、香りをかいだりしてから、

「ふーん、これはめずらしい植物ね！でも、とってもいいかおり……このあたりなのね？　わかった、やってみるね」

デュランが頷くと同時に、ルナが持つ玉が輝き始めた。辺りの植物たちが月光に包まれると、女神像に絡み付いていた植物だけが逃げるかのように縮んでいく。そしてそのまま新たな道が現れた。

光がだんだんと弱まっていき、ルナは改めて、目の前の道に目をやった。

「これでいいわね。あ、おみやげにこのお花一輪いただいていいかしら？　とってもいいかおりなんですもの、気に入っちゃった！」

誰に断ったのか、彼女は誰の返事も待たずに、他の植物の影に隠れて月光を浴びずにいた花をそおっと摘みとった。

そのまま耳に一輪に花を飾ると柔らかな笑みをして姿を消した。

現れた新たな道を進み、メガクロウラーやポロビンフッドなどのモンスターを蹴散らして行くと、奥地に待っていたのは巨大な球根のような植物であった。行き止まりとなる自然の壁の前に、しっかりと地面に根を張り不気味な花を咲かせている植物。

気持ちワリィな――そう思った瞬間、

ザザザザッ！

彼らの来た道が茨の植物で覆われ塞がれてしまった。

何が起きている？――武器に手をかけるデュラン。その時、どこかで嗅いだことのある甘いニオイがした。

彼はハッとして、シャルロットとケヴィンを見た。ケヴィンは何ともないような顔をしているが、シャルロットは眠そうな顔をしていた。重くなった瞼を今に閉じてしまいそうだ。

「シャルロット！？」

「……あれ……ねむ…い」

「このニオイ……スリープフラワーだっ！」

ふわっと風に乗ってきた甘い香り、それはローラント領天かける道で嗅いだことのあるものだった。眠り草の花粉を利用し、相手を眠らせる木属性の魔法である。

「眠らせて、おいらたち食うつもり？！」

「くっ！そうは行くか！」

デュランは剣を抜くと、颯爽と目の前の巨大植物へと向かっていった。ケヴィンがうつらうつらしているシャルロットの頬を軽く叩くと、彼女はハッと我に返り、頭をぶんぶん振ってデュランに続いていった。

ケヴィンはすっと夜空を見上げ、獣の血をたぎらせた。

だがその時、背後から耳障りな羽音が聞こえてきた。薄い羽を擦り合わせるような、嫌な音が。

振り返ると、そこにはアサシンバグやメガクロウラーたちが湧き

出るように集まっていた。巨大植物が発する甘いニオイに惹かれる昆虫系モンスターが召喚されようとしている。

「ケヴィン！」

手を止めて後ろを振り向くデュラン。獣化したケヴィンはフッと微笑みと、拳を突き出して親指を立てた。

「大丈夫。この虫たち、オイラがどうにかする！　二人はそいつを！」

そう言うや否や、飛び掛ってきたをアサシンバグを一撃で粉砕した。ブラックファングとなったケヴィンにとって、昆虫は昆虫でしかない。

次々と襲い来るザコモンスターを彼は造作なく倒していた。鋭い針が彼の首を狙おうとも、彼の目には止まって見えたに違いない。素早くかわし、太くて長い腕がその肢体を引きちぎっていた。

安心したデュランは目の前の敵を倒すことに専念した。しかし、その敵の動きはどこかおかしい。花びらが開いては閉じ、開いては閉じ――それを繰り返している。一定のリズムで。まるで呪文を詠唱しているかのようなリズムで。

呪文詠唱――デュランが気づいた瞬間、花弁が大きく開き、ケヴィンの方へと向いた。まるで明確な意思を持っているかのように。

そして、青紫色の液体をケヴィンに吹きかけた。

「うっ！ち、力が入らない」

「しまった！ポイズンバブルかっ！」

見ると真っ黒なブラックファングの体はやや紫ががった色味を帯びていた。立つこともできないのか、彼はその場に膝を着いてしまった。

デュランはヒールライトでケヴィンの体力を回復しようとしたが、植物のツルがムチのようにしなってデュランを襲った。

「くそっ、呪文を唱えられねぇ！」

しかもヒールライトじゃ状態異常は治せねぇ――歯噛みしながら、剣を振って襲いくるムチを払うデュラン。

間合いを計りながらケヴィンに目をやると、身動きのできない彼をアサシンバグのするどいカマが狙っていた。
「ケヴィン！！」
叫ぶと同時に、アサシンバグが突っ込んでいく。
万事休す――そう思ったとき、聖水のような雫がケヴィンの体に降りそそいだ。
ガシィ！と、厚い獣の手がアサシンバグのカマを捉えた。その力で今度はアサシンバグの方が身動きを取れずにいた。
「ティンクルレインでち！」
デュランが振り返りながら見ると、シャルロットがフレイルをはらい呪文の詠唱を終えていた。
ティンクルレイン――聖なる水滴によって体を蝕む病を治す光系補助魔法である。
彼女はそのまま詠唱を続けると、あっという間に魔法が発動した。今度は聖なる光、ヒールライトがケヴィンを包み込む。
「は、はやいっ」
「へへ、だてに光の司祭のまごをしているわけじゃないんでち！」
「だが、この数はどうするよ？！」
シャルロットは得意げにしていたが、集まってきた無数のモンスターを倒す術はなかった。
「オイラに考えあるっ！」
力を取り戻したケヴィンは叫ぶと、勢いよく宙へとジャンプした。
「バスタードスラムっ！」
そして、掴んでいたアサシンバグを地面へと投げ飛ばした。ザコモンスターが集まる中心地を目掛けて。
物凄い勢いで地面に叩き付けられた敵は潰れ、砂埃が舞った。その勢いに他のモンスターは恐怖し、動きが止まる。
「デュラン、いまだ！」
叫びながら着地をしたケヴィンはそのままの勢いでデュランたちの方へと跳んだ。一歩、二歩と巨大植物との距離を縮める。

「あいつらを集めてるの、この植物。一気にこいつをやるっ！」
植物とゼロ距離となった瞬間、
「ハァァ、真空水月斬ッ！！」
花を支える茎を下から上へと昇るように無数の拳が襲い、そして花弁をブラックファングの鋭い蹴りが切り裂いた。
「三・段・斬りーッ！」
それに続き、デュランが飛び上がりながら鋭い一刃を茎に捉え、壁を蹴っての切り返し様に花の付け根を二刃が襲い、地面に着地すると素早く跳びあがり花本体に三刃目を与えた。
二人のコンビネーション攻撃に、はらりと花弁が散った。
「よっしゃあ！」
勝利の叫びをあげるデュラン。
意思をもっているかのように動いていた花はぴくりとも動かなくなり沈黙した。三人の勝利が決定した、と思えたその時、

「まだでち！まだ動いてるでち！」
シャルロットが叫ぶと同時に、何かが球根のような体の中から花を支える細い茎の中を移動し始めた。
ボゴッ、ボゴボゴッ！と気味の悪い音を立てながら膨れ上がる茎。そして、鋭い目と牙を持ったワニのような顔が花の付け根、子房を突き破って姿を現したのである。
それを見て、剣を握る拳に再び力を入れるデュラン。
「これがこいつの正体か！？」
「この姿……こいつはギルダーバインでち！」
シャルロットは叫んだ。
ギルダーバイン――どこかの森に根付き人間を捕食するという植物系モンスター。甘い香りを放ち、近くにいる昆虫系モンスターを操って人間を森の奥地へと誘い込む。普段は綺麗な大きな花と球根のような体だけでじっとしているが、人間を食べるときや危機が迫ったときは体の中に隠している顔を外に出し、攻撃をしてくる。

「しょこで呼んだ本に似たような絵がのってたでち！」
ギルダーバインは威嚇するかのように牙を露にし、今にも噛み付こうかとしていた。しかし、ケヴィンはそれに怯むことなく、太くなった茎の部分、いやギルダーバインの首に強烈な跳び蹴りを見舞う。
「ぐっ！」
しかし、見た目以上に防御力を増した敵の体に、ブラックファングの蹴りは弾かれてしまった。
デュランも一撃を放とうとするが、ケヴィンが着地すると同時にギルダーバインは口から粘液を二人に吐きかけた。
「それはリンジェットでち！」
「また……毒……」
「いまティンクルレインをかけるでち！」
シャルロットが詠唱に入ると、ギルダーバインの鋭い牙が彼女を狙った。彼女を頭から一飲みしそうな勢いで迫る毒牙ッ！
「シャルロット！」
間一髪のところで、彼女に伸びる首にデュランの剣が突き刺さり、敵は後ろに仰け反った。だが、剣を握るデュランもまたポリンジェットによる毒に蝕まれている。うまく力が入らず、ギルダーバインが首を振ると、切先はするりと抜けてしまい、デュランは地面に落ちてしまった。
「デュラン、大丈夫か！？」と駆け寄るケヴィン。
「ああ。だが、俺の剣もきかねぇみたいだ。思いっきり剣を突いたのに、ほんの少ししか刺さらねぇ」
そう言った瞬間、二人の体は紫の液体に包まれてしまった。
「（ポイズンバブル？！しまっ……）」
ポリンジェット以上に強力な猛毒が二人を襲う。だが、
「ティンクルレイン！」
聖なる雫がデュラン、そしてケヴィンへと降り注ぎ、体を元の状態に戻す。そして、間髪いれずにシャルロットのヒールライトが失

われた体力を回復してくれた。
「サンキュー、シャルロット！」
「てへへ。二人は攻撃に専念するんでち！回復はあたちにまかちて！」
ケヴィンとデュランは頷くと、ギルダーバインをにらみ付けた。よだれの様な液体を牙から垂らし、まるでほくそ笑んでいるような敵の目が二人に向けられる。。
「デュラン、あいつの首、切り落とす！」
「そうしてぇけど、あの硬さじゃ」
「大丈夫、作戦ある」

デュランは特攻するかのようにギルダーバインに正面から挑んでいった。走りこんでくる剣士に、ギルダーバインは再びポリンジェットを吹きかけようとする。しかし、彼は直前で後ろに跳び退き、粘液は冷たい地面を溶かすだけであった。
第二波を放とうとするギルダーバイン。しかし、その眼前に闘気を溜めたブラックファングの姿が飛び込んできた。ギルダーバインがデュランに気を取られている間、その首の下に回りこんでいたのだ。
「ガァァァ！」
意表をつかれ怯むギルダーバイン。その首にケヴィンの堅い拳が目にも止まらぬ速さで打ち込まれる。滞空時間の続く限り、何発も。
いくら硬いとはいえ、何度も同じ場所に攻撃をくらえば脆さが生じる。ケヴィンはそこにしか勝機はないと考えた。
「ケヴィン！」
彼が着地する直前、助走を始めたデュランが叫ぶ。その声を聞くまでもなく、ケヴィンは彼の方へと向き直り、片膝を着いて仲間が駆け込んでくるのを待った。
そして、軽く跳んだデュランの踵を両手で持ち上げ、真っ直ぐ上へと放り投げた。全力で。脆くなった部分を目掛けて。

そして、強く握り締められた剣先が歪みのある首筋へと突き刺さった。

「キシャアアア！！」

剣先が首の裏まで飛び出るほど、剣の根元まで突き刺さっていた。傷口から血のような緑色の液体が溢れ出てくる。しかし、ギルダーバインに致命的なダメージを与えるものではなかった。

「デュラン！しっかり剣を握ってる！」

「おぅ！来い！」

なお一層の力を拳にこめたデュランを目掛けて、ケヴィンは思い切り大地を蹴った。大きな体がデュランを飛び越えるくらいの勢いで舞い上がる。

そして、本当に飛び越える直前、デュランの胴をケヴィンの腕が掴んだ。その跳躍力の勢いで体が引っ張られ、突き刺さった剣がズブズブズブッ！と上っていく。

「やった！」

ギルダーバインの首を切り裂き、ドバァと緑色の液体が溢れ出てくる。二人はそのまま重力に従って地面に落ち、雨のように降り注ぐその液体を全身に浴びてしまう。

「これ、毒……」

「くそっ……」

「……ティンクルレイン！」

猛毒の原液を浴びるも、すぐにシャルロットの魔法が二人の命を繋ぐ。

三人は互いの顔を見て、それぞれが無事であることを確認した。それからギルダーバインを見上げた。

絶命し、だらりと下がる長い首は文字通り首の皮一枚で繋がっているだけだった。

今度こそ彼らの勝利が決まった。

だが、危険を示すような声が三人の頭の中に響いた。

「（見て！まだ何かいるよ！）」
デュラン達に再び緊張が走る。警戒しながら、ギルダーバインの体を見ると、中から弱い光を放つ何かが姿を見せようとしていた。
そこにフェアリーも姿を現し、驚きの表情を露にする。
「！？」
目の前に現れたのは、樹木のような体に生気溢れる草のような青々とした髪を持った小さな女性だった。樹木のようでありながら柔らかそうなその体は美しくもあり、艶やかだった。
「あ、なんだ。あれドリアードだよ！」
安心したフェアリーの言葉にデュラン達の緊張も一気に緩和した。しかし、ドリアードの表情はどこか物憂げであった。
「ああ……私、助かったのですね？　ギルダーバインの触手につかまって、飲み込まれてしまい、力を奪われ続けていたのです……」
「だから、ふつうの植物がこんなに巨大化したのね……」
「あ、ありがとうございました……こんな私のために……ご迷惑をおかけして……すいません、すいません……」
ずっと顔を俯かせたまま、誰の目を見ようともしない。長い間ギルダーバインの体の中に閉じ込められ他人に会うのが久しくて恥ずかしがっているようにも見えるし、自分を必要以上に責めているようにも見える。
そんな彼女に、フェアリーは優しく励ますような力をこめて言う。
「いいのよ、気にしなくて。さあ、私達に力を貸して！」
しかし、ドリアードはなお一層暗い表情をする。
「滅相もない、私はすっかり力を吸い取られてしまい、もう何も残っていません、私なんか何のお役にも立てず、みっとみなさんの足手まといになるだけです……」
自信なくうな垂れるドリアードにデュランたちは優しく言う。
「ドリアードは木の精霊だろ？　マナの力を、一番秘めているはずだ。決して足手まといになんかならないよ！」
「そうでち。現にほら、あんな化け物に長年飲み込まれていたのに、

ぴんぴんしているじゃないでちか！」
「オイラたちと一緒、行く！」
三人の言葉を聞いて、ドリアードは初めて顔を上げた。その瞳に優しい四人の顔が映る。
「……そうでしょうか？」
「一緒に行きましょう！私達にはあなたが必要なの！！」
フェアリーが力強く言うと、ドリアードはポロポロと涙を流し始めた。
「うう……こんなみじめな私に……みなさんありがとうございます……私にできる限りの事はさせていただきます……」
彼女は頭を下げ、一人ひとりの顔を見た。
ただ、シャルロットを見たとき、「あっ」と声を漏らし、少しだけ驚いたような表情をした。
「？　どうかしたんでちか？」
ドリアードは口を開いて、何か言おうとした。
だが、何か憚られる思いがして、
「いえ、何でもありません……」
それだけ言って、すぅっと姿を消した。消える瞬間、シャルロットの目には精霊の瞳が潤んでいるように見えた。

ともあれ、木の精霊ドリアードの力を手に入れた。

フェアリーはやや興奮気味に三人の方を向いて、
「ついに8精霊がそろったね！」
無言で頷く三人。
そう。とうとう8精霊がデュランのもとにそろったのである。
「さっそくブースカブーで、忘却の島に渡りましょう！　マナが減り続けているから、もう時間があまり無いよ。これが最後のチャンスかも！」
『忘却の島』という初めて聞く単語にデュランは首を傾げた。そ

の島と聖域との間に何の関係があるのか。
「忘却の島には何が……？」
その質問にフェアリーが説明を始める。
「忘却の島は、各地のマナストーンのエネルギー流が一ヶ所で交わる、マナエネルギーの中心地……」
彼女は何かを思い出すように説明を続ける。
「昔、マナストーンをコントロールする古代魔法が封印された時、あの島の事も人々の記憶から忘れ去られてしまったの……。でも、今でも中心地である事に、変わりはない」
ふと空を見上げるフェアリー。もうすぐ夜が明けるのか。うっすらと夜空が白くなり始めていた。
「私が聖域から最後の力を振り絞って、最初にこっちの世界に出現したのも、あの島の上空だったの……」
「わかった、急ごう！」
デュランが気合を入れるように手のひらに拳を打つと、フェアリーも彼の体の中に戻っていった。
ギルダーバインの絶命と共に朽ちた植物を踏み越えて、三人は砂浜を目指した。その道中、デュランは考えていた。

「（マナの聖域に行って、マナの剣を抜いたら、フェアリーとはもうお別れ……なのか？）」

# 第六話

デュランたちがランプ花の森の海岸から忘却の島を目指して出発したその頃、何年ぶりに集結した8精霊たちは……

「うぉぉぉ、ドリアードぉぉ！久しぶりだぜぇぇ！」

「あぁ、サラマンダーさん。お久しぶりです、仲良くして下さいね。あ、熱い」

久しぶりの再会に喜ぶサラマンダーは自分に火柱を立て、その身に纏う炎を大きくした。その熱がジリジリとドリアードの体を焦がそうとする。

それを見て水の精霊が間に分けて入った。突如視界に入ってきた槍の切先に身を引く火の精霊を睨むウンディーネ。

「こら、サラマンダー！ドリアードが熱がってるやんか！？」

「い、いえ、いいんです。ウンディーネさん。光がないと、私、枯れちゃいますから」

聖母のような微笑みを携えながらもドリアードの額には汗が浮き上がっていた。ヤセガマン？

「ほら、ウンディーネ！ドリアードもこういってんだ！！」とサラマンダーは腕を伸ばす。

「あ〝っ～！！どさくさに紛れてなに手ぇ肩に回そうとしてんねん！」

抱き寄せようとドリアードの肩に手を伸ばしたサラマンダーにウンディーネのメガスプラッシュの氷柱が飛び掛る。

「ちょ、おまっ！あぶねーだろう！」

「うっさい！光やったらウィスプやんかっ！」

手をひっこめた火の精霊はツバを飛ばすくらいの勢いで叫び、水の精霊は右手にもつ槍で光の精霊をひょいと持ち上げてドリアードの眼前に突き出した。

傍からそれを見る他の精霊は巻き込まれたウィスプには悪いと思

いながらウンディーネのツッコミに、そりゃそーだと同意していた。
会話に強引に参加させられたウィスプは困惑しながらも思ったことを口にする。
「何慌ててるッスか？ウンディーネさん」
「ち、ちがっ！慌ててなんか、」
「あっ、ウィスプくん……。また仲良くして下さいね」
白い光が注ぎ、ドリアードは嬉しそうに微笑みながら、言う。ウンディーネの言葉を遮りながら。
チッス――と差し出された手を握るように光を当てる光の精霊、ウィル・オ・ウィスプ。
それを見て、ジンがイタズラな一言を告げる。
「ドリアードさんはウィスプのこと大好きダスねー」
「そそそんな、私なんか……」
恥ずかしくなって俯ドリアード。その声が段々小さくなって聞こえなくなったのとは反対に、ぶつぶつとウィスプのセリフをずっと否定しているウンディーネの声……というか独り言が聞こえてきた。
「そ、そうや、今のは怒っただけや。あわ、慌てたんとちがっ……」
「そうじゃな。慌ててるんじゃなくて、妬いとるんじゃよな？」
ノームがのほほんとした声で言う。どうでもよいという感じで指を鼻の穴に突っ込みながら。
その言葉にウンディーネの顔が真っ赤になった。サラマンダーに負けないくらい真っ赤にして、叫ぶように言い訳をする。
「ノームのじいちゃん、アホなこと言わんといてやっ！だ、誰がこんな火トカゲなんかに――っていうか言い訳でもなんでもない！」
槍の先端が火とかげ――もといサラマンダーに突きつけられる。
「おうおうっ！誰が火トカゲだ！人をどこかのモンスターみたいに言うんじゃねぇ！」
いや、お前、人じゃないだろう――と周りの皆は内心でツッコんでいた。
そんなことを思われているとは知らないサラマンダーは、額に血

管が浮き上がらせながらウンディーネを怒鳴りつける。それにひるむことなくウンディーネも怒鳴り返している。
二人の喧嘩のような様子に、ドリアードはオロオロと取り乱し、
「あ、あの、私のせいで……ごめんなさい」
ついには目を瞑り、心底申し訳なさそうな声で謝罪の言葉を述べた。その横に月の精霊がやって来て言う。
「ドリアード、別にあなたのせいじゃないわ」
「ルナさん……」
「このアホ人魚とバカトカゲはこうやって夫婦漫才を見せてくれてるだけなんだから」
ルナが冷ややかな眼差しを向けながら言うと、言い争いはピタリと止まり、二人そろって顔を燃え上がらせるように真っ赤にして叫んだ。
「「だ、誰が夫婦だぁ！！」」
ジェイドが陰気な声で言う。
「ふむ。相も変わらずルナの一言は的を得ているな……」
ルナの言葉を聞いて、ドリアードは安心した表情で微笑んだ。
「なぁんだ、そうだったんですか。よかった。私、ウンディーネさんから水貰ってますから、嫌われちゃったらどうしようかと……」
木の精霊だけにドリアードは天然のようだった。
そんな精霊たちのやり取りにはまったく参加せず、一人離れたところでフェアリーは深刻な顔をして佇んでいた。その様子に気付いたジェイドがスゥーと移動して彼女に話しかける。
「どうしたのだ、フェアリーよ……」
「マナの減少が激しいの……。もしかしたら、もう……」
「大丈夫だ、この者ならきっと……」
ジェイドは宿主をさして言う。
「おまえもそう思っているのだろう……？」
「……うん」
フェアリーは不安と希望の狭間で揺れながら頷いた。デュランは

きっと間に合う。でも、もしかしたら、神獣の封印が解けてしまうかもしれない。そうしたら……。

緊張しながらデュランを見守るフェアリーに、風の精霊が静かに告げる。

「……フェアリーさん。風が、動き出したみたいダス」

その言葉が全てを言い当てるように、邪悪なる者たちも最終段階へと動き始めようとしていた。

しかし、それと同時に他の勇者たちも新たなる動きを見せようとしていた。

「それじゃあ、みんな、行ってくるね！」

ウィンテッド大陸北西部の港町のはずれ、零下の雪原に接する雪道で数人の男女が集まっていた。たくさんの荷物が乗った台車の荷台に隠れるように乗る女性がにっこりと微笑んでいる。

数ヶ月前、この雪の都、エルラルドに残り住人を守ることを彼女は約束した――幼い友人と。彼女の大切な人と。

その大切な人は、別れ際にこう言った――また来ていいか？おまえに会いに。

彼女は頷き、微笑んだ。すごく――自分に正直だった。

その人が会いに来てくれるのはきっと戦争が終わってからだろう――だから――早く戦争が終わって欲しい――平和になって欲しい――彼女はそう思っていた。

そんなことを思いながら、毎日を送っていた。

「アンジェラ姫、これを上にあげてもらっていいですかね？」

「えっと、この木材ね」

確認してから、彼女――アンジェラは風の魔法を使い、地面に置

かれている木材をふわっと屋根の上まで運んだ。
デュランと別れてから数ヶ月経ったある日、彼女はエルランドの外れにある廃れた教会にいた。数人の大工とともに。
「今思えば、ひどい話ですよね」
「えっ？」
男ばかりの大工の中で唯一の女性であるマーラが隣に立って言った言葉に、アンジェラは疑問符を投げ返すだけだった。マーラは右手に持つハンマーをピコピコ振りながら説明を加える。
「この教会、元々マナの女神様を奉ってたのに、前にいたシスターがいなくなってからずっと放置して、荒れっ放しなんて、ヒドイです。私が小学生まっしぐらしてた時だから……もう１０年くらい前からですよ。そりゃあ、女神様も怒って港が凍っちゃいますって！」
マーラとは今日初めて会うのだが――もちろん彼女の方はアンジェラを知っていた――彼女はアンジェラが自分と同い年だと知ると気軽に声をかけるようになった。
１０年くらい前、ちょうど彼女たちが１０歳前後だった時である。
「シスターさん、どうしていなくなっちゃったの？」と尋ねるアンジェラ。
「たしか……誰も教会に来なくなっちゃったからですよ」
それまでは皆からの寄付と自分で稼いだわずかーなお金で食事とかしてたんですけど――マーラは親指と人差し指の先で小さな隙間を作りながら言う。
「みんな来なくなって、食事も満足に取れなくなって、それでアルテナの城下町に引っ越していったんです。そういえば、シスターさんと一緒に私の友達も城下町に行っちゃったんですよね。あーあ、元気にしてるのかなー？」
マーラが間延びした声で言うと、遠くから声が聞こえた。
「アンジェラ様ー！」
道具家の男が走りながら、アンジェラの名前を呼ぶ。
ちなみに、アンジェラは“姫”とか“様”をつけて呼ばないよう、

エルランドに住むようになった日に住人達にお願いした。だが、下宿先の母子（おやこ）以外はその約束を守ろうとしない。やはり気負いしてしまうそうで、彼女自身も段々と慣れ始めていた。

「どうしたんですか？」

道具家の中年男性に応答するアンジェラ。彼は息を切らしながら、一度宿屋の広間へ来て欲しいと言う。

宿屋には、チチの母親とエルランドの村長までいた。ホールの端にある四角い机を挟んで座っている。

汗っかきなのか、小太りの道具家の主人はいまだに汗を拭きながら、アンジェラにも座るよう促した。自らも汗を拭きながら村長の横に座る。

「どうしたんですか？」

「う……うむ……」

村長は顔を強張らせて頷き、そっと道具家に説明を促した。男も重そうにしながら口を開く。垂れる汗が段々と冷や汗のように見えてきた。

「実は荷物の配送で城下町に行ってたのですが……」

彼の話によると、いま王宮は臨時の兵士を募集しているとのことだった。それだけであれば、戦争に充てる兵士がいなくなったから領民から新兵を募ろうとしているだけだと思うし、彼も最初はそう思っていた。しかし、その任務は城内の警備や見回りという簡易かつ単純なものであった。

これはちょっと妙だな――そう思った彼は得意先だった軍人の家の家政婦に訊いた。すると、近いうちに主要な戦力すべてをある場所に集結させるらしく、どうやらそのために城内の警備が手薄になるから、ということで今回異例の募集をかけているのだという。

「そう、ですか」

アンジェラは胸が痛んだ。

主要な戦力をつぎ込んだ、大きな戦が起ころうとしている。その

結果次第では、戦争は終わるかもしれない。誰かが不幸になって自分達が幸せになるのか、誰かが幸せになって私自分達が不幸になるのかは、わからないけれど。

「それと、これは本当かどうかわからないのですが……」

道具家の主人は身を乗り出して、声を潜めた。すでに汗は引いていたが、変わらず顔は緊張している。

彼の聞いた噂に、アンジェラは思わず立ち上がった。すごい勢いで木の椅子が後ろに倒れる。受付にいる男性やホールにいる他の人たちもアンジェラの方へと顔を向ける。

「そ、そんなの出てきたら。デュランが死んじゃう……」

蒼白した顔で彼女は呟いた。

道具家の話で、彼は母――理の女王がどんな命令をしたのかを悟ってしまった。そして、彼らがどこに向かい、戦力をつぎ込むのかを。

彼女は意を決し――瞳に力を込めて、村長に向き直った。

「村長さん、お願いがあります！」

その日から数日経ったある日の朝、アンジェラは道具家の主人が引く台車の荷台に乗っていた。

杖に手を預けながら立つ村長。その横には、心配ながらも薄ら微笑む女性と無邪気に満面の笑みをした小さな女の子が立っている。

「アンジェラ様、どうかご無事で」

「おねえちゃん、また遊ぼうねー！」

「うん！約束するわ！」

アンジェラも元気いっぱいに応えて、自分の小指と少女の小指を絡ませる。

再会を信じているからこそ、そこにいる誰もが別れを惜しんでいない。ただただ、彼女の無事を祈るだけである。

北の大地で、青のローブに身を包んだアンジェラが決意を秘めて

雪の都を後にしていた。

時をほぼ同じくして、灼熱地帯の中、唯一のオアシスとなる村の一民家では四人の人間が木製のテーブルを立って囲んでいた。長髪を後ろで縛っている男性が大きな紙を机の上に広げる。

「リース、この図を見てくれ！」

広げられた紙には方舟のようなものを解析したような画、それに留まらず詳細な数字、材料等の走り書きが書いてあった。

「これは……設計図？」

リースは図画を見て、それが何のために造られるのか、すぐに感づいた。

目を見開く彼女を見て、ホークアイはもう一枚紙を広げる。ここ数日、ナバール団のアジトに潜入を繰り返して書き上げた地図、配管工から壁の厚さまで、事細かに書かれている。

そのうちの一点を指でさし、彼は説明を続ける。

「この場所から侵入する。その後は……ここを通って、それから、こいつに潜入する」

「こいつは一体何なんですにゃ？」

深刻な顔をしながら猫の獣人は疑問を投じた。長年ナバールにいたが、こんな船の存在など、彼は知らない。

ホークアイは口の端を上げる。

「ナバールの秘密さ。ニキータ、俺がいない間ジェシカを頼むな」

「まかせるにゃ！」

ニキータは自信に満ちた笑みを作った。

その様子を目の端で捉えながら、ファルコンが手に持っていた一着の服を取り上げる。

「潜入するには、私の忍び装束使うんだろ？」

「あっ、はい、ファルコンさん。でも、それは……？」

初めて見る忍び装束にリースは戸惑いを隠せなかった。彼女の不

安を取り除こうと、ホークアイは柔かな笑顔を作る。
「大丈夫、安心してくれ！俺がファルコンさんの奴にチョイチョイと手を加えてあるからっ！」
白い歯を見せながら、親指を立てるホークアイ。
それを見て、リースは冷や汗を一滴流しながら言う。
「……逆に不安なのですが」
「それに、いざとなればクラスチェンジして覚えたリースの魔法があるしな」と破顔一笑するホークアイ。
頼りにしてるぜ、と言いたげな顔に彼女は追及できず、照れるように赤面するだけだった。
「ともかく、あんた達にかかってるんだから、しっかり頼むよ」
ファルコンが二人の顔を見ると、決意を込めた瞳でホークアイとリースは頷いた。
恐怖で足がすくみそうにもなるけれど、自分達がやらなければならない！――その思いが二人を前へと進める。

世界の命運をかけて、それぞれの物語が新たな章へと進んでいく。
とある剣士が剣術大会で優勝を決め、プライドを粉々に砕かれたあの日のように、６人の勇者が新たなる旅に立とうとしていた。

～第四章に続く～

# 第四章「悪しき者たちの策略―神獣の再来―」　第一話

デュラン、ケヴィン、シャルロットの三人は誰の記憶からも忘れ去られた小さな島に上陸した。

砂浜から進むと、女神像が何本も立っている道へ出た。神殿へ誘(いざな)うように一定の等間隔で置かれてる女神像。潮風のせいか、所々風化している。

元々は大きな島だったのかもしれない。元々は神殿があるような聖地だったのかもしれない。元々はたくさんの人が住む町があったのかもしれない。

だが、誰もそれを知らない。

来訪者を導く一本道の前に立ち、彼らは固唾を呑んだ。

「とうとうここまで来たんだな！」

デュランは緊張しながら言うと、すっと瞳を閉じて、今日までのことを思い返した。それに続くように、シャルロットもケヴィンも瞳を閉じる。

それぞれが旅立った日のことや旅の中で刻んだ記憶を思い出す。

滝つぼに落ちそうになった事、祖父が倒れた事、大砲で飛ばされた事、妖精王から聞いた両親の事、そしてヒースが連れ去れた事……。

ホークアイやリースと共に戦った事、涙目でデュランに会いたいと言ったアンジェラを無理やりフォルセナに連れて行った事、宝石の谷での死に物狂いの修行の日々、ルガーとの死闘、ランプ花の森でのシャルロットとのケンカ、そしてカールを女神像の下に埋めたあの日の事……。

紅蓮の魔導師に敗北を喫して大地の裂け目にかかる大桟橋を渡ったあの日の事、眠り草にやられた時に助けくれたリースの悲しい顔、ミントスの浜辺で再会したケヴィンの笑顔、滝の洞窟で引っ張り上げたシャルロットの引きつった顔、ジャドの牢屋で見たホークアイ

のダガーさばき、流れ落ちる水の向こうに立つアンジェラの顔、そしてアストリア湖の畔で助けたフェアリーの弱々しい姿……。
それぞれがこの旅の大切な思い出を瞼の裏に見ていた。
瞳を開けてデュランは言う。
「いろんな事があったけど、これでやっと聖域へのトビラが開かれるんだ」
そして頷く二人を見てから、
「さあ、行こうぜ！」
パシッ――と手を叩き、走り出すデュラン。その後に続いていくケヴィンとシャルロット。
走っていくと、すぐに道はなくなってしまった。まるで大地が切り取られたかのような断崖絶壁に出くわす。
海を臨む崖の上に並ぶ三人、その前に妖精（フェアリー）が現れる。これまで一度も見たことのない神妙な面持ちをして。
「みんな、今までどうもありがとう！これでやっと聖域のトビラを開く事ができるよ！！」
柔らかな微笑みをして、彼女は言った。
「旅の間にもどんどんマナが少なくなっていったけど、今ならまで何とか間に合うかも知れない……」
じゃあ、やってみるね！――そう言って彼女は三人に背を向けると、スッと右手を天に掲げた。
「さあ、精霊のみんな、力をかして！！」
フェアリーが叫ぶと、颯爽とノームとジンが現れた。一人は飛び跳ねるように、もう一人は風に運ばれるようにして。
「わひゃひゃ、いよいよじゃな！ワシの力の全て、お前さんにたくすぞよ！」
「がんばるダスー！！」
すぅーっと崖下に降りていくノームとジン。
それに次いで、サラマンダーとウンディーネが勢いよく現れる。
竜のように猛々しく、人魚のように華麗な姿で。

「うーしっ！やるぜ、やるぜ、やるぜ！うりゃあぁぁっ！」
「ウチの根性、見せたるわ！行くでー！」
宙を泳ぐように降りていく二人。
そして今度はジェイドとウィスプが静かに現れる。ゆらゆらと影のように。ゆらゆらと蜃気楼のように。
「わが闇の力、全てここに集結せん……」
「ちぃっす！オレもがんばるッス！」
二人がゆらりゆらりと降りていくと、最後の二人も姿を見せた。人を惑わすような神秘的な姿で。全てを包み守るような大樹のような姿で。
「さあ、私立ちで最後、もう一息でトビラが出現しそうよ！」
「すいません。こんな私で、どれだけお力になれるかわかりませんが、できるかぎりの事をやってみます……」
そう言うと、ルナは気品よく、ドリアードは枝を伸ばすように他の精霊たちの元へと飛んでいく。
八精霊は宙で円を作るように並ぶと、フェアリーを呼ぶように崖の上を見た。こくりと頷いて、彼女も円の真ん中へと舞い降りる。
フェアリーがいる所を忘却の島だとすれば、八精霊の並びはそれぞれが司るマナストーンの位置と重なっていた。
フェアリーが精神を集中し始めると、八精霊の体からそれぞれの色を模したオーラが立ち込めた。一人ひとりのオーラがゆらりくらりと揺れ始め、次第に風になびくように左へと流れて行く。そうして次第に左回りの渦へと変わっていった。すべての色が織り交ざった虹色の渦はぐるりぐるりと、中心にいるフェアリーへと集まっていく。
フェアリーが額に汗を浮かべながら詠唱を続けると、虹の渦は段々と穏やかな水面のように変わっていった。
泉が湧くように水面の淵が揺れている。その水面の中には、緑の木々と古代の遺跡がある世界が見えていた。
「あれがマナの聖域……」

湖のようなトビラは膨張と縮小を繰り返し、安定しない。
成功したかのように拡大するも、何かの力に負けるように縮小していき、消えてしまった。
円の真ん中でフェアリーがぐったりした様子で肩を落としている。
「……はぁはぁ」
苦しそうな彼女の表情見て、
「はちゃーっ！こりゃオシイ！でも、だいじょうぶ。このシャルロットがついてまち！」
「大丈夫、もう一回！」
「フェアリー、諦めるな！もっと自分を、仲間の精霊達を信じるんだ！」
まだまだこれからだぜっ！――フェアリーさん、わたしももう一度頑張りますから――諦めるのはまだ早い……――さぁ、もう一回やっ！――周りの精霊たちも異口同音にフェアリーに励ましの声をかける。
その言葉にフェアリーの胸が熱くなる。
「みんなありがとう……予想以上にマナが減少しているの。なかなか広がらなくて」
呼吸を整えて、言う。
「もう一回やってみるね！……マナの女神様、私達に力をお貸し下さい！！」
そう言うと、彼女は瞳を閉じて胸の前で指を絡ませるように両手を合わせた。
すると、今度はフェアリーの頭の上で再び虹の湖が現れ、再び拡大と縮小を繰り返した。
閉じた瞳を開け、顔を上げるフェアリー。彼女の瞳には波打つ虹の湖が映っている。
そして皆が息を飲み見守る中、虹の湖は拡大していき、ある程度の大きさに達するとその形を維持した。そして、ふわっと天高く浮かんでいく。

ついにマナの聖域へのトビラが開いたのだ。

「やったでちー」

「やった！」

「やったなフェアリー！！」

三人は飛び跳ねたり、拳を握るなど、三者三様に喜びを表した。

だが、精霊達は顔を不思議そうに互いの顔を見合わせていた――そんなまさか、と口にしている。

フェアリーも苦悶の表情をうかべている。

「ううん、違うの、みんな……」

「えっ？」

精霊達は暗い顔をしてデュラン達の前に戻ってくる。ドリアードが涙を流しながら自分を責め始めた。

「うぅ、私がいけないんです……」

「ちゃう。仕方なかったんや」

「ウンディーネの言うとおりよ。誰の責任でもないわ」

ドリアードを挟むようには寄り添うウンディーネとルナ。二人は肩を寄せ合うように声を掛け合った。

状況が飲み込めないデュランは尋ねた――どういうことだ。聖域のトビラは開いたんじゃないのか？

首を左右に振るフェアリー。

「……私、まだ何もしてないの。聖域へのトビラが自然に開いちゃったの……。きっと各地のマナストーンが全てエネルギーを放出させられているんだわ」

「そ、そんな？！」

「マナストーンのエネルギーが私や精霊達の力と重なったせいで、あんなに巨大化して空中に舞い上がってしまったわ。これじゃ地上からは入れないよ……」

万事休す――まさに彼らの状況を言い表す言葉だった。

皆が呆然と空を見上げていると、ゴウンゴウンという轟音が響いてきた。三人が耳を塞いで音の主を探すと、一機の戦艦がこちらを目指して飛んでくるのが見えた海を走る船のようだが、船体の両脇に羽根が着いていて、空を飛んでいる。動力は魔力――であろうか。

「何、あれ!?　気をつけて!!」

フェアリーが叫ぶと、魔導戦艦の砲台の一つがこちらを向き、エネルギーをチャージし始めた。そして、なんの警告もなく、エネルギー砲が発射される。

直撃はせずとも、すごい爆発と爆風が巻き起こる。

「うわあああ!」

爆音にやられ、無音となる世界。

だんだんと音を取り戻すと、腹を火掻棒でぐちゃぐちゃにするような不快な笑い声が聞こえてきた。

「アハッハッハッハ……」

「こ、この声は死んでも忘れねぇ、紅蓮の魔導師!!」

爆発で地面に伏せている三人のうち、デュランだけは力を振り絞り立ち上がろうとする。だが、歯を食い縛っても、足が言うことをきいてくれない。

地に伏す彼らを嘲笑するように、紅蓮の魔導師の声が忘却の島に響き渡る。

「ハッハッハ、古代魔法をかけただけでは起動しなかったマナストーンが、おまえたちのおかげでエネルギーの放出を始めてくれたよ!」

「なに?!」

「これで、わがアルテナが誇る空中魔導要塞ギガンテスで、聖域への侵攻を開始できるようになった。お礼に私からのプレゼントだ。取っとき給え!」

ギガンテンスに装備されている数台の砲台が光り輝き始め、二弾、三弾とエネルギー弾をデュランたちに浴びせた。

それを見て愉しんでいるような笑い声が響き渡る。
爆音と笑い声、そして自分達の絶叫の声だけが彼らの鼓膜を震わせた。
「うわあああああ！」
「アッハッハッハッハ……」
笑い声を残しながらギガンテスはゆっくりと前進していった。そうして、空に漂う虹の湖の中へと姿を消していった。
三人の意識はそこで完全に途切れてしまう。

※　※　※　※　※

ギガンテスがアルテナを飛立ったのと時を同じくして、ビーストキングダムの広い屋上では無数の獣人が整列していた。後ろには巨大なコンドルが用意されながら。
彼らの目の前には石で出来た王座に座り右手の甲にアゴを乗せて瞳を閉じている獣人王、そして不気味な笑顔をさらけ出しながら演説を始める道化師の姿があった。
「ウヒヒヒ！獣人王並びに獣人のみなさん、ついに聖域へのトビラが開かれましたぞ！」
キレイに整列する最強獣人部隊の前を右に左に移動しながら、男は語る。
「今こそマナの剣を手に入れ、人間達に復讐し、獣人の獣人による獣人のための世界国家を打ち建てようではありませんか！」
よろしゅうございますね、獣人王様？――顔を覗き込むように発せられる死を喰らう男の問いに、獣人王は目を開けることなく答える。
「……フン、くだらん。好きにしろ」
どうでもよさそうに言う獣人王。
獣人兵に背を向けているのを良いことに、彼はニタァは口の端を千切れんばかりに引き上げる。

「ははー！それでは……」
ほくそ笑んでいるのを誰にも気取られないようにしながら、言う。
そして、顔を元の人畜無害な道化に戻し、再び屈強な獣人兵たちに向かって、
「さあ、獣人兵のみなさｎ！いざ出陣でございますよ！！」
その音頭に、すべての獣人兵が雄叫びを上げる。そうして後方で待機する大コンドルの足にしがみ付き、大空へと舞い上がっていった。
一人残る獣人王は、瞳を一度も開けることなく、フンと息を漏らしていた。

※　※　※　※　※

忘却の島では、ケヴィンとシャルロトが意識を取り戻そうしていた。彼らの視界には爆雲の上がる青空だけが写っていた。おそらく島に残る僅かな木々が燃えているのだろう。
ややもすると再び意識を失ってしまいそうだったが、彼らの目に飛び込んできたある男の姿がそれを不能にした。
獣人兵がしがみ付く何羽もの大コンドルが聖域のトビラへと入っていくのが見えた。屈強な獣人がしがみついている大コンドルの大群。その中に、赤い服を纏う滑稽な道化師が一人。
「死を……喰らう……男……」
「ひーすを……かえせ……」
ケヴィンもシャルロットも唇を噛みしめていた。今すぐ体を起こして、あの男を殺してしまいたい。だが、それは叶えられるほどの力は一欠けらも残っていなかった。
再び彼らの意識が途絶える。

※　※　※　※　※

ナバールのアジトでも同様に事が動いていた。
首領の椅子に座る薄紅色のショールを絡ませた妖艶な美女。彼女の目の前に漆黒のマントを羽織った銀髪の男が突如として現れた。
だが、近くいるニンジャ兵も悪魔も驚きはしない。
闇が実体化したような無気味な男に、妖艶の美女――美獣が口を開く。
「……邪眼の伯爵、どうした？」
「ついに聖域へのトビラが開かれた！……準備は出来ているだろうな？」
男の言葉に女性は顔を歪ませた。大きな瞳は突如として獣のように細まり、威嚇するように声を張り上げる。
「誰に向かって言っている！？当たり前だ！お前こそ随分遅かったじゃないか！」
しかし、男は動じる事もしない。
美獣は猫のような鋭かった瞳を透き通る瞳へと戻し、落ち着いた様子で話を続ける。
「……それで、黒の貴公子様のご様子は？」
「聖域へのトビラを開くため、闇のマナストーンを魔界から現世に出現させるのに力を使い切って亡くなられた……」
「……そうか」
少し寂しそうに美獣は答えた。だが、邪眼の伯爵は顔色一つも変えない。
だが、美獣はフッと口元を綻ばせる。
「では、黒の貴公子様のお考え通りに進んでいるわけだな。聖域へのトビラに入るための船は用意した。さっそく出発だ」
「後は我々が予定通り、マナの剣を入手し、黒の貴公子様を復活させ、現世を魔界に変えるのだ。失敗すれば黒の貴公子様は戻らぬぞ」
男は感情のない冷ややかな声で言うと、美獣の瞳は再び細く研ぎ澄まされ、妖しい光を放った。そして、二人はふわりと宙に浮くと、霧のように姿を消してしまった。

その数秒後、操られたナバール兵が不眠不休で造らされた方舟が、魔力の込められた風船に吊るされてナバールのアジトから飛立った。

※　※　※　※　※

「アルテナにビーストキングダムときたら、あれはナバールね……」

小人ほどの大きさしかないフェアリーは誰よりも傷が浅く、いち早く目を覚ましていた。そして場が落ち着いたのを確認しながら立ち上がった。

彼女の眼前にはエネルギー砲で傷つき、無残に倒れる三人の仲間の姿があった。

「フェアリーさん」

呼ばれる前から姿を現した光の精霊、ウィル・オ・ウィスプ。彼は目に力を込めて言う。

「早くみなさんを起こさないといけないッスね」

「そうね。また力を貸してちょうだい」

「うちも手伝うでッ」

飛び跳ねるように姿を現したウンディーネの申し出にフェアリーは無言で頷く。

光と水の精霊がそれぞれのエネルギーをフェアリーに送ると、彼女は独特の詠唱を始めた。

「……ヒールライト！ヒールウォーター！」

言わずも知れた聖なる光の回復魔法、それと清らかな水を使った水の回復魔法により、デュランたちの傷が癒えていく。

すぐに意識を取り戻す三人の勇者たち。

「うっ、う～ん……」

「気が付いた?！」

くらくらする頭をブンブンを振るデュラン。

意識を取り戻した三人に、フェアリーはアルテナに続いてビーストキングダム、それにナバールの船が聖域に侵入していった事を告

げた。
「早く後を追いかけるでち！」
「だが、どうやって聖域に乗り込めばいいんだ?!」
デュラン達が困り倦ねていると、フェアリーがぼそりと呟いた。
「翼あるものの父……」
「えっ?」
「ローラントの山頂、天の頂と呼ばれる所に、翼あるものの父と呼ばれる山と空の守護獣がいるの！彼に頼めば、後を追いかける事ができるかも……」
「本当か!?だったら、急がねぇと！」
三人は今いる崖からも見えるローラントの山を見た。天に届かんばかりに高く聳えるローラントの山、そこに彼らの希望がある。
フェアリーが姿を消すと、三人は砂浜へと走っていった。

※　※　※　※　※

「シャルロット、あの道化姿の男、知ってる?」
漁港パロの砂浜から天かける道を登る最中、ケヴィンはシャルロットに語りかけた。だが、彼女はキョトンとした顔を作るだけだった。
「忘却の島でコンドルに掴まってた変な男のこと。さっき、知ってるような口ぶりしてた……」
ケヴィンの補足説明を聞いて彼女は初めて要領を得たように、「ああ～」と頷いた。どうやら彼女はあの男の名前を知らなかったようだ。
聞いていたんでちね――と前置きをしてから、シャルロットは過去の事を語り始める。彼女が旅に出た、根本的な理由――出来事を。
「……あたちにはひーすっていう大事な人がいるんでち。でも二年前、ラビの森でさっきのヘンテコおやぢにひーすはさらわれてしまったんでち。あたちはひーすを取りもどちたいんでち。だから、あ

たちも……」

マナの女神様にお願いしたい――シャルロットが言おうとした言葉をケヴィンが引き継ぐように口にする。

瞳を閉じて、その言葉を心の中で反芻するケヴィン。

「オイラ、シャルロットの気持ち、よくわかる。オイラも会いたい友達の為に女神様に会いたい」

「ケヴィン……」

悲しみや希望、様々な思いを込めながら言うケヴィンの顔をシャルロットはじっと見ていた。

彼らの会話が終わる頃には、目の前にローラント城が迫ってきた。

世界最大の山岳地帯の中腹に居を構える風の王国ローラント、その居城は少し前までナバールに占拠されていたが、今は亡きジョスター王の娘、リース姫の活躍によって無事奪還されている。後に『風のゆりかご作戦』と名付けられたこの奪還戦にデュランや、今は姿のホークアイも参戦していたのだが、ケヴィンやシャルロットはそれをまだ知らない。

知らないが故に、門前を警備していたアマゾネス兵がデュランの名前を呼びながら駆けて来た事に、二人は若干の驚きを覚えていた。

「デュランさーん！」

「あれは……メルシー！メルシーじゃないか？！」

駆け寄ってくるアマゾネス兵にデュランも小走りで近づいていく。それに戸惑いながら、ケヴィンとシャルロットも駆けて行った。

だが、アマゾネス兵は三人をしっかりと視界に捉えると、フッと笑顔を消してしまった。喜びの笑顔が一転、疑問を浮かべた顔になり傾げられる。

「……あれ？リース様は？」

メルシーから3メートルほど手前でデュランの顔面は笑顔で固まる。スッと背中に汗が滲んだ。咄嗟に彼は言う。

「リ、リースはホークアイと一緒にナバールにいる美獣を監視してるんだ。あっ、でもこれは他の人には内緒な」

ふ～ん――とメルシーは納得しているようなしていないような、むしろ何かを考えているような顔を作る。

このわずかの間で、デュランの心臓の鼓動がいつもより早く打たれていた。

すると、メルシーはニコニコと微笑み、

「そうでうよね！ライザ様に知れたら、ホークアイさんどころかデュランさんも串刺しにされちゃいますもんね！」

メルシーの無邪気な笑顔を見て、デュランは顔から血の気が引くのを感じた。

言葉だけなら冗談とも取れそうだが、ここを出るときのライザの顔を思い出すと、その言葉は身の危険を感じさせるのに十分な効力を持っていた。

以下、デュランのセリフ。

「あ、ああ。そうだな」

以下、デュランの本音。

『ホークアイ、頼むからリースと合流しててくれよぉ。でも、お願いだから変なことしないでくれよな……！』

デュランがダラダラ冷や汗を流し乾いた笑い声を口にしていると、城の中からリースの乳母、アルマが姿を見せた。

「おや、デュランじゃないか？どうしてこんなところにいるんだい？」

「そういえば、どうしてなんですか？」

アルマの問いかけにメルシーも再び首を傾げる。

聞かれたデュランは真剣な表情を取り戻し、ここに来た理由を告げる。

「ああ、実は……」

八精霊を集め聖域のトビラを開こうとしたこと、自然にトビラが開いてしまい空高くに浮かんでしまったこと、マナの剣を狙う大国がマナの聖域に侵入したこと、そして、自分たちも聖域に行くために翼ある者の父の力を借りたいことを告げた。

「そうかい。あんたたちも翼ある者の父の力を借りるのかい。いやね、私も昔、翼ある者の父の力を借りたのさ。飛べなくなった空母をペダンまで引っ張ってもらうのにね」

ペダンに？――思いもよらず出てきたアルマの言葉にデュランは思わず聞き返してしまった。

思い出に浸るように瞳を閉じたアルマもはっとして、

「あっ、いや、何でもないよ。翼ある者の父はアマゾネスの秘密の修行場、天の頂の最頂部にいる。メルシー、秘密の通路を開けとくれ。この者たちなら心配はないだろ」

「はい、アルマ様」

アルマの指示にメルシーはにっこりと微笑み、天の頂への隠し通路を開いた。

その上で、三人の勇者に告げる。

「翼ある者の父は私達にとっても大切な聖獣です。どうかよろしくお願いします」

「わかった」

デュランも微笑みながら、深く頷いた。

秘密の入り口から天の頂に入ると、アマゾネスの修行場と言われるだけあってモンスターのレベルも相当高かった。天かける道にいるハーピーやニードルバードたちと違う、俊敏な攻撃を仕掛けてくる。

山頂に近づく度に空気が薄くなっていく過酷な環境の中でモンスターたちをなぎ払いながら、最頂部へとたどり着いた三人。

強い風が吹く中で、シャルロットが山の下を覗き見る。

「ひょえ～、高いでち……。漁港があんなに小さいでち……。落ちたらしんじゃうでち……」

思わず目が回りそうになったところで、デュランは何かを指差し叫ぶ。

「おい、あれを見ろ！あそこに何かいるぞ！」

三人がゆっくり近づいていくと、そこには四枚の羽根と美しく輝

く体毛を纏った動物がいた。
その姿を捉えてフェアリーが姿を現す。
「あれよ！翼ある者の……うーん、父って呼ぶには小さいわねぇ…
…子供、かしら？」
四人は顔を見合わせる。
白い毛を全身に纏う動物はかわいい瞳で四人をじっと見つめていた。
「ねぇーボクー？私たちを乗せてくれないかなー？」
ギャース！！！――フェアリーが優しく頼むと、空と山の守護聖獣らしき動物はけたたましく吠えてきた。可愛かった顔が急に凶暴に見える。
「おっ、おい。何だか怒ってるみたいだぞ？大丈夫なのか？」
「えっ、うーん……。あっ！」
威嚇するような咆哮と口の中に見えるギラギラした牙に、デュランは脅えながらフェアリーに訊いた。
彼女は最初、何に怒っているのか見当もつかなかったが、じっくりその姿を見て、はたと気づいた。そして申し訳なさそうに言う。
「ごめ～ん！あなた、女の子だったんだね？お詫びにかわいい名前付けてあげる！」
フェアリーは考える仕草をしてから、
「……そうねぇ、フラミーちゃんなんてどうかしら？」
そう言うと、彼女――翼ある者の父は再びかわいい顔に戻り、
「きゅーん！」
と嬉しそうに鳴いた。どうやら喜んでいるようだ。
「そう、気に入ってくれたみたいね。よかった。じゃあ、私たちをマナの聖域に連れて行ってくれるかな？」
「きゅーん」
フラミーと名付けられた守護聖獣は軽快に頷くと、背中を向けてしゃがんだ。三人は恐る恐る、その大きな背に乗る。いつの間にか、フェアリーの姿はなかった。

三人が乗ったのを確認してから、彼女は四枚の翼を羽ばたかせて、空に上昇した。そして、凄い速さで飛行を開始したのだ。しがみ付いていないと落ちてしまいそうだった。シャルロットに至っては、絶賛トラウマ植え付け中といわんばかりで、体毛に顔をうずめて震えている。

彼女は人を乗せて飛ぶの好きみたいで、喜び表すかのように世界狭しと飛び回った。あれだけ時間をかけて巡った世界を数分も経たないうちに制覇してしまう。

「わ、わかったフラミー！もうマナの聖域に入ってくれ！」

手が痛くて落っこちそうだ――デュランが焦った様子で言う。

「きゅー！」

すると彼女は、デュランの要求に応えるように鳴き、誰からも忘れられた小さな島へと向かっていった。

そして、蜃気楼のように天空漂う虹の泉を潜り抜ける。

その瞬間、彼らの視界に知らない風景が広がった。大きな島、だろうか。緑の木々が溢れ、所々に遺跡のような建物が見える。まるで、忘却の島で途絶えた道の先がここであるかのように。

辛うじてだが人間が住んでいたような痕跡が見て取れる。だが、それも昔の話なのだろう。もしかしたら、失われた伝説の一つなのかもしれない。

三人が唖然としながら、目の前に広がる幻想のような世界に目を奪われていると、どこからか、ギャース！という叫び声が聞こえてきた。フラミーのそれとは似ても似つかぬ、威嚇する敵意丸出しの動物の泣き声。

「あれでちっ！」

シャルロットが指差す方向を見ると、獣人が移動手段に使っていた大きなコンドルがこちらに迫っていた。足の爪を向けて、フラミーを襲おうとしている。

マズイ――そう思った瞬間、フラミーが上半身を起こした。三人は振り落とされないように、その大きな背中にしがみつく。

それが一層の功を奏する。
彼女の四枚の翼が大きく羽ばたいた。巻き起こる風、否、突風に大コンドルたちは体勢を崩し、一定の距離を取り出した。
「お、落ちるかと思った」
「（まだだよ！しっかり捕まっていて！）」
フェアリーが言葉を代弁すると、守護聖獣は急スピードで大コンドルを追撃する。
逃げ遅れた一匹に追いつくと、大きな両手でその体をつかみ、急上昇を開始する。
聖域の天高くまで上ると、今度は落ちるように急降下を始めたフラミー。その落下速度に手の中のコンドルはバランス感覚をなくす。そしてフラミーは動けなくなった一体を他の大コンドルへと投げつけた。
大きな衝突音を上げ、絡まり合い落ちる凧のように地面に落下する二匹のコンドル。
その先を見やったとき、デュラン達は地上で何が起きているを知った。
「見ろ！ナバール兵と獣人が戦ってるぞ！」
「それだけじゃないでち！アルテナ兵もいるでち」
「三勢力、混戦だ……」
聖域の大地では魔法対肉体対忍術という壮絶な戦いが展開していた。
一人のウィザードが手を掲げると、地面に突き刺さっている杖から猛熱の炎が拭き出した。それをかわした忍者が印を結ぶと、土がうねり、ウィザードを包み込む。
視界を少しズらすと、それぞれの手でニンジャの首を締め上げる屈強なウェアウルフの姿も見える。その背後から一人のマジシャンが魔弾で彼を狙い打つ。無数の魔力の塊が、屈強なウルフの体に穴を開けていき、敵はバタンと倒れる。
固唾を呑む三人。

するとフラミーは急激に体をくねらせた。驚く三人の近くを魔力の波動が通り抜ける。フラミーが気付いていなければ、魔力により作られた高エネルギーが直撃していたであろう。

エネルギー砲が発射された方向を見ると、忘却の空で彼らを襲った魔導要塞がゆっくりと前進してくるのが見えた。全ての砲台がこちらに狙いを定めている。

「あれとやり合うには、流石に分が悪いぞ……」

一旦距離を取って――そうフラミーに指示しようとするが、彼女は真っ直ぐギガンテスへと突っ込んでいった。

戦艦から放たれる無数の砲弾。しかし、フラミーはその全てをかわして、真っ直ぐ進んでいく。

すると、主砲とおぼしき砲口が段々と光り輝き始めた。忘却の島で彼らを瀕死に追いやった最初の砲台である。

ギガンテス最大の武器は原動力である魔力を転換、圧縮して放たれる高エネルギー砲だった。かつての戦争では次々襲い来る腐敗海獣を圧倒したという戦歴を持つ。大戦の局面を変えた最高峰の兵器、それが今、デュラン達へと牙を剥く。

段々と輝きを増し、空気まで焦がすような程に圧縮されていくエネルギーが、今にも放たれようとした。だが、その時、

「!?」

真っ直ぐ突っ込むように飛んでいたフラミーが９０度近く方向転換をした。

直角に近い角度で上昇していく聖獣。船内の魔術師たちは一瞬彼女を見失ってしまった。

彼女は天高い場所で止まり体勢を整えると、大きく口を開けた。そして、その口からエネルギーの一閃が放たれる。

レーザー砲のように鋭い一閃がギガンテスの主砲へと直撃する。そして砲台自体が白く輝いたと思うと、耳をツンざく轟音と共に、主砲が爆発を起こした。

大量破壊兵器は怪しい煙を上げながら、空に浮く大陸へと沈んで

いく。
「へへっ！この前のお返しだぜ！お釣は要らねーよ！」
森の中へ不時着する巨大戦艦。大破はしなかったものの、戦闘は不可能であろう。飛べればまだ良い方だと、そう思えるくらいの状態である。
一方でフラミーは空を飛ぶ数頭のコンドルを相手にしようとしていた。
「フラミー、俺達を降ろしてくれ！」
キュキューン！と、吠えるフラミー。
彼女が地上スレスレを飛ぶのを見計らって、三人はその背中から飛び降りた。無事着地を決めるデュランとケヴィン、そして全身で着地するシャルロット。
「イタタタ」
「だ、大丈夫か？」
泥を払いながら立ち上がるシャルロットにケヴィンは口に手を当てながら問いかける。見るからに痛そうな彼女の着地に心配しない者はいなかった。
「大丈夫じゃないでち！次はあたちのことをしっかり抱えて降りるでち！」
そう涙目で叫んだ彼女は、周りを見渡し、その惨状に段々と顔を青くしていった。無残に転がる多くの亡骸。ビースト戦士、アルテナ魔兵士、そしてナバール忍者。
しかし、そこには亡骸だけではなかった。
「デュラン、あぶない！」
ケヴィンの耳を突くような声に顔を上げるデュラン。すると、四方からダイヤの塊が飛んできた。
彼が身を転がしてそれをかわすと、地面に鋭いダイヤの塊が突き刺さった。
「チッ！」
近くにいた一人のウィザードが舌を打つ。

大きなハットの下に見えた顔にデュランは眉根を寄せた。
「おまえはアイリス!?」
「雪原以来ねっ!今度こそ、その命を頂くわ!」
目を思い切り開き、デュランを睨むアイリス。彼が剣を抜き応戦しようとすると、
「新たな侵入者か!者共、始末しろ!」
小部隊を任せされているリーダー格のブラックファングが右腕をデュラン達へと向ける。その先には鋭く尖った爪があり、真っ赤な血が滴っていた。
生き残っているビースト、アルテナ、ナバールの軍勢が三人を襲い始める。
「くそっ!時間がないっていうのに」
振り下ろされた太い腕を大剣で受け止めるデュラン。ケヴィンも人間の姿のままでニンジャ兵の攻撃をかわす。ウィスプの刻だったために、獣化はできない。
フレイルを振り回し敵を寄せ付けないようにしがら、シャルロットは叫ぶ。
「そそそりより、こんな大人数ぢゃ、勝ち目がないでち〜」
彼女の言うとおり、敵は残党といえ三国合わせてざっと１００人近くいた。
くっ――歯をかみ締めるデュラン。生き残った猛者が１００人。それをたった三人だけで相手にできるか。
ウルフを剣ではじき返すと、違うウルフが襲い掛かってきた。彼は身を翻し、その男を切りつける。剣を振り下ろしたのとほぼ同時に、
「フォルセナ兵め、覚悟!」
アイリスの叫び声が聞こえたかと思うと、赤黒く燃える――燃え上がる３つの炎玉が宙を舞い、デュランを狙った。
「しまったっ!!」
隙を衝かれた攻撃に、彼は回避行動を取れなかった。

# 第二話

やられる！――そう覚悟した瞬間、どこからともなくもう一組フアイヤーボールが現れた。すごいスピードで飛んできた三つの火炎弾は高熱であるはずのアイリスの炎球へとぶつかって行き、破壊した。拮抗する力に相殺された炎の塊。五月雨のように、はらりはらりと火の粉が降り落ちる。

「な、にっ？！」

デュランが振り返ると、自分を挟んでアイリスに対峙する一人のマジシャンが見えた。詠唱を終えた直後なのかか、小さな頭蓋を戴いた杖が宙に浮かび、両手を左右にぴんと伸ばしている。マジシャンズハットを目深に被っているせいで顔は見えないが女性のようだ。無気味なスカルロッドがゆっくりと持ち主の手元に戻っていく。マジシャンには似つかわしい武器だった。

ハットの縁からわずかに見える口元がフッと緩んだ。

「フフ、久しぶりだね、デュラン！」

「そ、その声はっ？！」

デュランは驚きの声を上げる。アイリスも口を開けて絶句するだけだった。

マジシャンは勢いよくハットを投げ捨てた。そして、デュランのよく見知った顔が顕わになる。

「アンジェラ！」

「ア、アンジェラ……、どうして？！」

意外な登場に驚愕しながら、アイリスは当然の疑問を口にして叫んだ。

だが、アンジェラは毅然とした態度で声を張る。

「アイリス！撤退しなさい！」

その言葉にアイリスは歯噛みし、顔を醜く歪める。

「そうはいかないわ！あなたみたいな落ちこぼれに負けるわけには

いかないのよ！……セイントビーム！」
瞳の色を変える程の形相でアンジェラを睨み付けるアイリス。彼女がスラリと呪文を唱えると、ミスリル銀製のロッドから高位光魔法、セイントビームが放たれた。
「どいて、デュラン！……ダークフォース！！」
セイントビームが発射される寸前、デュランは横に飛び退いた。彼が視界から消えると同時に、アンジェラは高位闇魔法、ダークフォースを発動させた。空間に真っ黒な穴が開き、その中から闇の波動を纏った黄金の矢が何本も射られる。
アイリスの青白い光とアンジェラの漆黒の矢が空中でぶつかると、爆風と衝撃波がドーナツ型に拡大していく。
「くっ！また！」
左腕で顔を庇い爆風を避けるアイリスはさらに酷く顔を歪めた。そして、爆風がやまぬうちに、次の呪文を詠唱する。
空気中の水分が凝縮していき、氷の塊となる。噴煙を破り勢いよく飛び出る氷塊。しかし、より大きな氷塊が彼女の攻撃を破壊する。アイリス同様、アンジェラもまた噴煙の中でアイススマッシュを唱えていた。
アンジェラの大きく純粋な氷は爆発四散するも、勢い止まらずアイリスに襲い掛かる。石つぶてのような氷がいくつも彼女の体に食い込む。
「ぐっ……！」
痛みに肩を握り締め、その場にうずくまるアイリス。一瞬だけ生じた余裕に、アンジェラはデュランに微笑みかけた。
「どう？デュラン！」
デュランは口の端を上げ、親指を立てて応えた。だが、彼女の背に迫る危機の気が付き、瞬時に顔の筋肉が強張った。
「あぶねぇ、アンジェラ！」
「えっ？」
アンジェラが振り向くと、牙を剥き出した大柄の狼男が立ってい

た。ウェアウルフは両手を組み合わせて大きな拳を作り、彼女の頭部に振り下ろそうとしている。

「きゃあ！」

身構えるアンジェラ。だが、その瞬間、一本の剣が宙を飛び、獣人の腕を切り飛ばした。その光景にデュランたちは唖然としてしまう。

鉄のように頑丈な腕を斬った細身の剣は弧を描き、デュランの目の前に突き刺さった。屈んで剣身を見ると、魔力を秘めたミスリル銀で出来ている。

「ミスリルソード？」

デュランは呟き、その柄を取って地面から引き抜いた。

それとほぼ同時に、アンジェラは腕を失くしたビースト兵から距離を取った。彼は身を震わせながらゆゆっくりと腕を降ろし、綺麗な切断を見つめた。あまりの出来事に理解が追い付いていないようだ。それから同じようにゆっくりと首を捻り、数メートル先に落ちている二本の腕を恐る恐る見る。太い木の枝のように、Ｖの字をした自分の腕だ。獣人はそこでようやく自分の腕が吹き飛ばされたことを理解した。

彼の額から大粒のべたつく汗が噴き出す。そして叫び声をあげようとした。だが、声が出ない。ゆっくり顔を胸に向けると、喉の下から尖ったミスリル銀製の片刃が突き出ていた。

「――！」

空気が漏れるような、声にならない声で叫ぶと、魔力を秘めたミスリル銀の刃が引き抜かれ、ドプっと大量の血が噴き出た。男はそのまま膝から崩れ落ち、しばらくしないうちにピクリとも動かなくなってしまった。

「俺達もいるんだぜっ！」

遠くから長剣を投げたニンジャ姿の男が叫びながら、顔につけた頭巾を剥がす。同時に、後ろから獣人を刺したニンジャ――格好からしてクノイチ――も頭巾を引き剥がした。そこから現れたのは凛

とした女性の顔だった。
「リース！……ってことは」
「真打ち、登場！ってな」
遠くでおどけた様に言う男にデュランは驚きと喜びの声を上げる。
「ホークアイ！」
「あんたたちも来てたのね！」
アンジェラも喜びを隠さずに声を張る。
その声にケヴィンとシャルロットも増援者の姿を捉えた。かつてウェンデルで共に戦った仲間の参戦にシャルロットは思わず敵に背を向けてしまった。その隙を就こうと忍び寄るニンジャが一人。
「おっと、あぶねぇ！」
ザ、ザザザ！――ホークアイの投げた三枚の手裏剣がシャルロットの後ろに迫っていたニンジャの顔と胸に突き刺さる。倒れるナバール兵を見て、瞳をパチクリさせるシャルロット。
その頃、リースは目の前に立つアルテナの王女に微笑みかけていた。
「あなたとは、『はじめまして』ですね」
そうは言いつつも、リースの言葉は全く知らない人間に向けられた雰囲気ではなかった。ホークアイから何かしらの情報を聞いていたのかもしれない。そしてそれは、アンジェラも同じだった。
彼女も挨拶の言葉を発しようとした。だが、何かに気付いた彼女はハッとした顔を作り、慣れ切った呪文を素早く唱えた。無数の光の球が現れ、リースの方へと飛んでいく。
それに動じることなく口元を緩めたまま立つリース。その横を通り過ぎる光球（ホーリーボール）が彼女の後ろに近づいていたニンジャを一撃する。
「どうやら挨拶してる暇はなさそうね！」
「そうみたいですね！」
知り合ったばかりの二人の王女は互いに背中を預けて、周りを囲む敵兵を見渡した。

自分達を囲む敵兵の向こうで、苦戦を強いられるデュランやケヴィンの姿が見える。アンジェラはわずかに口元を緩めると、近くに置いてあった二つの武防具入れに目をやった。そして素早く呪文を唱えると、自分達の周りにいくつもの竜巻を発生させた。巻き上げられる砂と吹き荒れる疾風に敵兵たちは身動きを封じられる。それだけに止まらず、小さな竜巻はアンジェラが見た二つの武防具入れを空に浮かせ、それぞれをデュランとケヴィンの下に運んだ

ガシャン！――と、地面に落ちた袋から金属女が響く。

「これは……」

二人は敵の間合いに気を配りながら、足下に転がる道具入れを見る。その疑問が聞こえたのか、アンジェラが叫んで説明する。

「アルテナから持ってきた武器と防具よ！どうせ合流してると思ってケヴィンのも持ってきたわ！感謝しなさいよ、二人とも！」

二人は襲いくる敵を蹴散らし隙を付いて、道具入れの紐を解いた。中には天馬の鎧や力の腕輪、バトルスーツなどの他、数枚のコインが入っていた。

「それと、アタシ特製の魔法のコインも入ってるから！」

アンジェラの付加説明を聞いたデュランはニヤリと笑い、一枚の真っ赤なコインを指で弾いた。ケヴィンも同じように土色のコインを発動させる。すると、いくつもの金剛石（ダイヤモンド）と火弾（ファイヤーボール）が宙を舞った。

アンジェラは叫び説明を終えると、静かな声で真後ろに立つリースに話しかけた。

「さて、こっちはどうしようかしら？」

するとリースは穏やかな声で答えた。余裕があるのか、声に僅かな微笑の気配がある。

「アンジェラさん……」

彼女は背を預ける顔の見えない仲間に語りかけた。敵には聞こえない小さな声で。それを聞いて、アンジェラは満足気に微笑む。

「フフ、オッケー。やってみましょう」

そういうと、彼女は少し長めでリズムよく詠唱を始めた。そして、

無数の光の塊が宙を舞い、凝縮されていく。
「ホーリーボール！」
彼女が叫ぶと、光の波動が凝縮された球が弾け、１０キロルクスもの光が周辺の敵を包み込んだ。あまりの光の強さに敵兵たちは目を押さえ、一時的に戦闘不能となった。
「マインドアップ！」
一秒も立たないうちに発動するリースの魔法。清らかな水が伝える知性によってアンジェラの魔力が高まる。そのまま続けてリースは呪文を詠唱した。
その間にアンジェラが叫ぶ。仲間のみんなに聞こえるように。
「いまリースが【ワルキューレ】の魔法でみんなの能力を上げるわ！デュランとケヴィンはパワーを、ホークアイはスピード、シャルロットは知性と精神を！いいわね！ダメって言ってもやるからね！」
「是非もねーやっ！」
デュランが叫ぶや否や、炎のエネルギーにより彼の体が活性化していき、全身に力がみなぎっていった。同じようにケヴィンも大きく力を得た。
「これ、まるで変身したときみたい！」
近くにいた獣人が繰り出す拳を右腕で防ぎ、彼は回し蹴りでその兵士を一蹴した。思い切り大地に倒れるビースト兵。ケヴィンはそのまま暴れるように獣人たちへと挑んでいく。
風の力で素早さを増したホークアイは戦場を駆け抜け、すれ違うマジシャンやニンジャを得意のダガーさばきで次々と倒していく。切られた方も気付かない――気付いたときには、足から崩れ落ちていくだけだった。
そして、ケヴィンに近づいて安全を確保したシャルロットは、タイミングを見計らって仲間の回復を行うことに徹していた。
この瞬間、６人全員が同じ事を考えていた――このメンバーならイケる、と。

リースを守るように魔法を繰り出すアンジェラ。しかし、彼女の詠唱リズムを悟ったモンスターがいた。戦闘に慣れた獣人の一人が攻撃のタイミングをずっと見計らっていた。

そして、魔法の発動と詠唱の間の数秒の隙をついて、その男はアンジェラに奇襲をかけた。

「きゃあ！」

跳ぶように接近し、拳を振り上げるブラックファング。岩石のように硬い拳がアンジェラの体を捉える直前、

「プロテクトアップ！」

大地のエネルギーが彼女の防御力を高めた。

振り下ろされた拳の勢いに地面に叩きつけられるアンジェラ。しかし、彼女はむくりと立ち上がり、あまりのダメージの少なさに驚いていた。

しかし、彼女よりも驚いていたのは、むしろ攻撃を繰り出したブラックファングの方だった。口を開け愕然としていると、すぐそばで耳触りの良い澄んだ声が聞こえた。

「パワーアップ……」

声の方を見ると、詠唱ばかりしていた女性が槍を頭上で回転させていた。よく見ると、全身から炎のオーラ立ち上がっている。

「旋風槍！」

回転により生まれる遠心力を利用した渾身の一突きが敵の腹部に命中する。衝撃に胃液を吐き出し吹き飛ぶブラックファングは、地面に伏したまま動かなくなってしまった。

リースはフッと口の端を上げ、

「私も戦闘要員なんですよ」

お見知りおきを――そう言って、足を止めたじろぐ敵兵達に槍を向けた。

アンジェラにとっては新しい仲間となるリース。その強さに彼女も思わず口元を緩めてしまう。

その瞬間、凄まじい勢いの突風が彼女を襲った。見ると、一人のウィザードの前に空気が集まり、小規模ながら人ひとりを吹き飛ばすには十分な程の竜巻が作られていた。

「エアブラスト！」

「くっ！……エアブラスト！」

急襲してくる竜巻は弾き返そうとアンジェラも同じ魔法を使うが、相手のエアブラストは時間をかけた分だけ精巧、緻密で、威力が強かった。

即座に作られたアンジェラの竜巻は脆くも敗れ、勢いの留まらないもう一つの竜巻が彼女を吹き飛ばす。

「きゃああ！」

皆とは離れた場所に飛ばされたアンジェラ。膝をついて体勢を立て直そうとすると、突然彼女の頭上に妖しく黒めく雷雲が立ちこめた。

直感的に危機を感じた彼女がサッと右手を挙げると、地面の岩や砂がアンジェラの頭の上へと集合していった。そして大きな土の塊と化すと同時に、黒雲から雷（いかずち）が落ちる。バチバチと音を立て、土の塊に拡散していく電流。

「ハァ、ハァ……」

魔力を一気に消費したアンジェラの額（ひたい）に汗がにじみ、呼吸が乱れる。

息を整える彼女のもとに、エアブラストを仕掛けてきたウィザードがゆっくりと歩いてきた。

「ダイヤモンドミサイルの応用であんなの作っちゃうなんてね。咄嗟の事とはいえ、今のは誉めてあげるわ」

手を叩きながら近づいてくるその姿にアンジェラは見覚えがあった。キュッと結んだ口で、その名を告げる。

「アイリス……」

「さぁ、決着を着けましょう！私はあなたを殺すためにここに来たのよ！」

それが私の答えだわ――アイリスは誰かに言うように、そう言った。

彼女の言葉にアンジェラは苦しそうな顔をする。そして言うのだった――どうして。

「どうして、こんな事になっちゃったの？」

「どうして、ですって？笑わせないで！」

怒りを露にするアイリスは、スラスラと呪文を詠唱する。

「ホーリーボール！」

彼女が叫ぶと、白い光の塊が頭上に形作られていく。

それに応戦するため、アンジェラも呪文を詠唱する。

「イビルゲート！」

飛んでくる光の球を吸収する闇の扉。内部の圧縮にビリビリとプラズマが発生している。

「なによ、それ！そうやって私をバカにしてるつもり？！」

「ちがっ」

「あなたはそうやって、いつもいつもいつもいつもっ！私をバカにしていたわ！……ダイヤモンドミサイル！」

「違うわ！……エアブラスト！」

襲い来るダイヤの結晶を突風が吹き飛ばす。怒りを増すアイリスは手に持つミスリル銀製のロッドを握り締めた。

「アカデミーでもそう！あんたは理の女王様の娘であることを利用して入学して、私達を見下ろしてた！」

「違うわ！」

アンジェラの瞳が潤み始める。精一杯の思いを込めて、彼女は叫ぶ。

「あなたが違うって、言ってくれたじゃない！」

彼女の脳裏に浮かぶアカデミーでの思い出。

地位を利用して入学したという噂、陰口が叩かれていた毎日、その中でアイリスは他の学生に向かって叫んだ。叫んでくれた――ア

ンジェラはそんな事していない、と。

「そうね、騙されていたわねっ！……ファイヤーボール！」

「アイリス……」

だが、アンジェラの言葉はアイリスには届かない。胸の痛みを堪えながら、彼女は詠唱する。

「アイススマッシュ！」

氷の塊と炎の塊が衝突し、蒸気を上げて消滅する。その衝撃波に二人の魔導師は身を構えた。

そこでアイリスはクスりと笑う――アンジェラ、問題よ。

「私はさっきセイントビームを放ったわね。これがどういうことか、わかるかしら？」

アンジェラは眉根を寄せて、望まぬ答えを口にする。

「……あなたが【ソーサレス】にクラスチェンジしたってこと」

その答えを聞き、口が裂けてしまいそうな凄惨な笑顔を作るアイリス。

「ご明察。つまり、私には高位魔法があるわ。基礎魔法しかないあなたには、私を倒すなんて無理よ！」

そう言い放ち、アイリスはアンジェラの知らない呪文を詠唱する。

「……サンダーストーム！！」

アンジェラの頭上を覆うほどの巨大な黒雲が広がる。先ほどの局地的なものとは違う、厚く、広範な雷雲。

そして、何発もの雷（いかずち）が地面に降り注ぎ、土が舞い上がる。

さっきの方法じゃ連続の雷撃には耐えられない――そう判断したアンジェラは素早く移動して、雷を避ける。だが、

「きゃぁぁ！」

絶え間なく落ちる雷の衝撃に体のバランスを失ったアンジェラは瞬く間に土埃の波の中に飲み込まれてしまう。

広範な黒雲から落ちる雷は彼女だけではなく、周りの獣人やニンジャ、果ては仲間のアルテナ兵まで襲う。誰もそこには近づけない。

轟音と噴煙だけが立ち込める黒雲の下で狂人的に笑うアイリス。
「アーハッハッハッハ！落ちこぼれの王女様には勿体ないほどの散り様ね！！」
鳴り止まない笑い声。それとは対照的に雷撃の雨はやんでいく。
直後、うごめくように舞う土煙の中から無数のダイヤモンドミサイルが飛び出し、アイリスを狙ってきた。バチバチと僅かながら帯電している。
「なっ？！」
彼女は杖に魔力を込めてダイヤを弾くが、いくつかの結晶は彼女の体を掠めていった。驚きと戸惑いの色を浮かべた瞳で噴煙を見るアイリス。
晴れていく噴煙の中から、火傷と切り傷を負ったアンジェラが立っていた。
「なんで……、なんで生きてるのよ？！」
勝利を信じたアイリスは驚愕の声を上げる。
アンジェラは肩を上下させながら、
「さっきの一撃は強力だっけど、今のは範囲を広げてから一つ一つの威力が弱かったわ。だから、ダイヤモンドミサイルで雷の軌道を変えたの！」
それでもマシンゴーレムSのよりは強力だったけど――そう付け加えるように言うアンジェラに、アイリスの身体は怒りで震える。
「私に高説たれる気？バカにするんじゃないって言ってるのよ！……メガスプラッシュ！」
空気中の水分が魔力で圧縮され、アンジェラへと襲い掛かる。
このままいけば、目標の足元で魔力が解放された水滴は一気に冷え固まり、巨大な氷柱（つらら）となってアンジェラを襲うことになる。
窮地に立たされたアンジェラはスッと目を瞑り、呪文を唱え始める――いつもより長く。複雑に。
そして、
「……ダイヤモンドミサイル」

高位魔法を相手に基礎魔法を用いても勝てるはずはない、それが魔術者にとっては常識だった――だが、アンジェラに常識は通用しない。

金剛石は高圧の水滴に触れた瞬間、崩壊した――崩壊して、炎上した。

それを見てアイリスは目を見開く。

「なっ！？」

突如として空気が燃えて、壊れるはずのない水滴が蒸発した。

「ど、どういうこと……！メガスプラッシュの種水は魔力でコーティングされてるのよ！ファイヤーボールでだって壊せないのに？！」

彼女は頭をブンブンと振り、冷静さを取り戻そうとする。目の前の敵を倒すためには、目の前の敵に集中するしかない。この現象を分析する余裕は、今はないのだから。

「……アースクエイク！」

アイリスは人差し指を伸ばした右手を天に掲げた。すると、地面に転がる石が指の延長線上の宙に集まり、瞬く間に巨大な岩石を作り上げる。

アンジェラは呪文を詠唱する。先ほど同様、長く複雑な呪文を。

それはアイリスですら初めて耳にする呪文だった。否、断片的には彼女の知る呪文ではあった。彼女が気付くと同時に、アンジェラの魔法が発動する。

「……ファイヤーボール！」

ゆっくりと迫り来る岩石に向かって、無数の紅玉が向かっていく。

本来ならば、火の玉は岩石に弾かれ掻き消されてしまうだろう。

しかし、アンジェラの放った火炎弾は違った。岩石に当たるや、その表面を破壊して内部に侵入、そして爆発を起こした。

無数の紅弾により、岩石はバラバラに崩壊し、軌道を変えてアイリスを襲う。

「きゃあああ！」

燃える岩塊がいくつも降り注ぎ、地面が揺れる。それはまるで、

封印された古代魔法の一つであるかのようだった。
揺れが収まり、辺りに炎がくすぶる中、アイリスは膝を着きながら言う。
「あなたのデタラメな魔法の正体が解ったわ」
「……」
「さっきの呪文、初めて聞いたのに、どこかで聞いたことがある気がしたわ。それはそうよね。あれはファイヤーボールとエアブラストの呪文を混合させたものだもの」
あなたの言うとおりよ――アンジェラは頷いた。
「エアブラストの疾風を纏ったファイヤーボール、か。疾風で岩石の表面を切り崩していたのね」
「そう」
「じゃあさっきのはダイヤモンドミサイルとファイヤーボールってとこかしら？」
再度こくりと頷くアンジェラ。それを見て、アイリスは口元を綻ばせる。
「なるほど、圧縮されたメガスプラッシュの種水も攻撃を受ければ、壊れはしなくても不安定にはなるものね。ダイヤの中にファイヤーボールの種火を仕込ませて、不安定になった種水を破壊した」
心なしか、アイリスはこの状況を楽しんでいた。自分でも何故そんな不謹慎な感情を持つのか解らなかったけど、それを否定する気にもならなかった。
「新たな魔法を作っちゃうなんて、魔術師じゃなくて魔導師じゃない」
魔導師――その言葉にアンジェラは動揺した。
アイリスともう一人、アンジェラには仲の良い友人がいた。その友は修業の旅に赴き、帰ってくるなり『私を魔導師と呼べ』と言った。
魔術アカデミーではアンジェラとてんで変わらない程の成績――オチこぼれだった彼は王室の大魔術師達の前で、誰も知らない魔

法を披露してみせた。新しい魔法だけでなく、基礎魔法も上級兵士以上に使いこなせるようになっていた。

だが、彼は魔法の技術よりも人格的に変貌していた……。全くの別人であるかのように……。

とある魔導師――かつての友人――の顔が脳裏をよぎったアンジェラ。アイリスは彼女に向かって問い掛けた。

「アンジェラ……あなたは何のために戦うの？」

「えっ……」

アンジェラが困惑の色を浮かべていると、突然アイリスの周りを強風が舞い始めた。砂ぼこりや小枝を巻き上げながら。その様子を見て、彼女は叫ぶ。

「アイリス！もう高位魔法を放つ魔力は残ってないはずだよ！」

だから退いて――そう言おうとしたアンジェラはアイリスの瞳を見て口をつぐんだ。決意に満ち満ちた瞳が彼女を黙らせた。

そうして、アイリスの全身から薄緑色のオーラが立ち上がり、風に流れていった。

「知ってるわ！だから……自分の命を使う！」

命を司る大樹のような色を纏う竜巻の中心で、アイリスは呪文を唱え始める。

風は彼女の身体から漏れる生命力に反応し、吹き荒れたのだった。

「悪しき穢れ（けが）を焼き付くせ……セイントビームッ！！！」

すべてをかけたアイリスの高位光系魔法が放たれる。

他方アンジェラも、セイントビームを放たれることを予期していたかのように自身の最大魔法を発動させた。

「魔に染まりし光を討ち滅ぼせ……ダークフォース！！」

研ぎ澄まされた青白い一本の光線と魅惑的な漆黒を纏った一本の矢がぶつかり合う。両者のもつ強大な力によって突風が吹き荒れ、衝撃波が生まれる。近くにいる者の肌はビリビリと疼き、誰も近づ

けない。ただ見守ることしかできない。
聖なる光線（セイントビーム）と漆黒（ダークフォース）の波動は当初拮抗しているように見えたが、生命力を秘めた光の方が強かった。
徐々に光の波動が闇の波動を飲み込んでいった。
刃のような光線がアンジェラの後ろに立つ木々や地面を焼く。だが、その中でも彼女は負けていなかった。勝利の光を秘めた瞳に悲しみの色を滲ませて、ぼそりと呟く。
「もう終わりにしよう、こんな争い……。ジェイド、私に力をちょうだい！！」
そう言って、スカルロッドを力強く握りしめるアンジェラ。その瞳は輝きを増していく。
その輝きに呼応して、闇の力は光を飲み込み、術者アイリスに集約していった。

「キャアアア……」

闇の爆発の中、アイリスの瞳に映っていたのはアンジェラの哀しい表情だけだった。
地面に叩き付けられた親友に、アンジェラは涙を流しながら近づく。生命力を魔力に変えてしまったアイリス。彼女には最早指を動かす力さえ残っていない。
膝を折って身をかがめたアンジェラは、アイリスの虚ろな瞳から零れる涙を指でぬぐった。
「どうして、こんな事になっちゃったの……？」
アイリスは答えない。答えられない。
ただ、伝えたい言葉があった。
「知ってた……」
「……えっ？」
「あなたがズルなんかしてないことも……ブライトとのことも……」
「アイリス……」

「私はアイツの事が好きだった……でもアイツはあなたを選んだ……それが……悔しかった……」

言いながら、アイリスの瞳からぶわっと涙が溢れ出る。アンジェラはそっと彼女の手を取った。

後ろで刃の交わる音が響くが二人には聞こえない。

「ここに、来る前に……ホセ先生に言われたわ……何のために戦うのか……って」

「……ホセが？」

「思い、出した……守りたかったから……私の故郷（ふるさと）……エルランド……を……」

アイリスは言葉を途切れさせながらも、ゆっくりと紡いだ。光を映さぬ瞳をアンジェラに向けて、紡ぐ。

「……わたしの……代わりに……」

「約束する……」

彼女が言い切る前にアンジェラは答えた。それは決まりきった願いだったのかもしれない。すでに果たされた願いだったのかもしれない。

「私も同じだよ……守りたいもののために、戦ったわ……」

アンジェラが言うと、アイリスはゆっくり瞼を閉じた。最後の言葉がアイリスに届いたか、わからない。

だが、アンジェラはアイリスの手をギュッと握って問いかける。

「戦う理由が同じなのに、どうしてこんな結末（こと）になっちゃったの……」

ねえ、アイリス？――アンジェラの問いに、彼女は答えない。返事がない。ただの……。

「うっ……うぐっ……うわああ……」

アンジェラの口から嗚咽が漏れる。両手で押さえるが、止まらない。止められない。涙で空が滲む。

戦場で泣き崩れる少女の背後に、ゆっくりと怒れるビースト兵が近づいていた。彼女はまだ、戦意を取り戻せない。

そうして、太い腕が鋭いツメと共に振り上げられる。

「待てよ、獣人のおっさん！」

今にも振り下ろそうとされる拳は、その言葉にピシャリと止まった。

言葉はただの言葉に過ぎない。だが、そこには色んな想いを込めることが出来る。感謝。責め。愛情。そして――殺意。

かつて、どこかで聞いたことのある声と言葉だったが、今度は戦慄を覚えさせる程の凄みと重みを伴っていた。

凍り付いたように動かない獣人の後ろにゆっくりと迫ってくる声。その主はそのまま言葉を紡ぐ。

「そんなガタいした男が泣いてる女に手を挙げるとは、獣人ってのも情けない種族だなっ！」

一歩近付いて来る度に嫌な汗が額に滲む。まるで、一本の線を両端からキリキリと引っ張られるような感覚。いつ切れるか判らない恐怖。

ビースト兵はその緊張感に耐えきれず、振り向き様に声の主を急襲した。だが、

「……う、うおぉぉぉ！」

斬（ザン）ッッ！！！

「ぐわぁ！」

振り返るや否や、鋭い刃に袈裟切りされる。ぶわっと血が吹き出し、糸が切れた操り人形のように崩れる獣人。彼は一振りで地に伏した。

「アンジェラ」

打って変わって、優しい声が少女の名を呼ぶ。その言葉に、ちょこんと座っていた彼女は振り向き顔を上げた。

「デュラン……」

「へへっ。出会った時みてぇだな？」

男はミスリルソードを肩に担ぎ照笑いを浮かべると、左手の人差し指で鼻の頭を掻いていた。
その笑みにつられるようにアンジェラの顔も緩む。彼女は一度、袖口でごしごし涙を拭うと、
「今度はちゃんと助けてくれたね」
と、燦々とした太陽のような笑顔を作った。
「さぁ、行こうぜ！」
ゴツくて厳つい手が差し伸べられる。
「うん！」
アンジェラがその手をしっかりと掴むと、デュランはぐっと彼女を引っ張り、立ち上げた。
するり――アンジェラの手からアイリスの手が解(ほど)かれる。そのままデュランはアンジェラの手を引き、戦禍の中へと駆けて行く。
離れるアンジェラは眠るアイリスに心の中で語り掛けた――私、行くね。大切なみんな、大切な人を守りに。バイバイ、アイリス。

# 第三話

数十分の後、聖域の森、南西の広間で起きた小規模な紛争は6人の青年たちによって収められた。ミスリルソードを鞘に戻したデュランが、額の汗を拭う。

「これで粗方は片づいたな……」

彼の言う通り、アルテナ、ナバール、ビーストキングダムの兵士たちの多くが地面に倒れていた。中には戦意を喪失し、戦場から逃げ去った者もいた。侵入艦――ビースト兵に限っては大コンドル――のもとに帰ったのかもしれない。

辺りを見渡してから、デュランは仲間の一人をジッと見ていた。当の本人も戦闘後からずっと、恥ずかしそうにして丈の短いスカートを押さえていた。

「あ～。なんだ、リース……その、服の趣味が随分変わったな」

その言葉に、リースの肩がビクンと震える。

「いえ、その……。これは……」

顔を真っ赤にする少女、いや、もう大人の香りを漂わせているあたり少女という表現は正しくないだろう。なにせ彼女は――くノ一でありながら――強調気味の胸、網目のインナーがモロに見えている上着を羽織り、下は明らかに不釣り合いな程短いスカートである。膝上から数えるより、おヘソから数えた方が長さの数字は小さくなることは明白だった。それはリースの足がモデルのように長いというのも一因ではある……あるのだが、それにしても際どいスカートだった。

デュランだけでなく、ケヴィンやアンジェラ、シャルロットまでが無表情でリースを見る。皆の視線を一身に集めるリースの顔はますます朱に染まっていく。

ああ、リースって子は普段はこんな感じなのか――そんなあらぬ誤解が生じようとしていた時、ホークアイが割って入るように助け

舟を出す。
「よく似合うだろ?くの一が色香の術で使う忍び装束でさぁ、ファルコンおばさんのお下がりなんだせ!俺が選んで、チョイチョイと手を加えたのさ!」
ホークアイの説明に感謝したリースであったが、その中に混じる不穏な単語を聞き逃すはずはなかった。その忍術(テクニカルターム)の名前を聞き、真っ赤な顔が青々しく豹変していく。
「えっ、色香の術って……これ、一般的な忍び装束じゃないんですか!」
「まぁなー」
飄々とした感じで答えるホークアイ。リースはあ然として、彼の説明を聞く。
「いや、だってこんな格好して暗躍しても、目立って仕様がないじゃん。こんなに胸の谷間見せて、丈の短いスカート履いてたらさ。そりゃニンジャじゃない……て、あの、リースさん?」
見ると、リースはわなわなと全身を震わせていた。恥ずかしいとかではなく、全身を力ませているような感じだ。それは、さっきまでポカンと開いていた口が、今はギリギリと歯噛みする音が聞こえてくるようかのように、キツく結ばれている事からも想像がつく。リースの背中から黒いオーラが見えるようだった。その姿に、デュランたちは一歩二歩と後ずさりする。ホークアイだけを残して。
「ホ、ホークアイ~!!」
怒りの感情が極まり、リースの持つ槍が振り上げられる。阿修羅のようなリースを見て、ホークアイが早口で弁解する。
「いやでも戦闘時には敵の集中力反らせる効果もあってだな……うわぁ」
弁解(言い訳)虚しく、ミスリル銀の刃が振り下ろされる。反射的に身を引いたホークアイの鼻先数センチの空を斬る。
彼はそのままの勢いでリースに背を向けて走り出した。文字通り、逃走である。

「嘘ばっかり！」
怒りに顔を真っ赤にしたリースも、ホークアイを追って走り出す。
それを見ながらデュランは、
「あ～、ありゃしばらく話を聞けなさそうだな」
呆れた口調で言う。そこにアンジェラが近寄り、声をかける。風になびく髪を押さえ付けながら。
「ねえ、デュラン」
「……」
だが、彼女の言葉に若いフォルセナ兵は反応しない。
疑問符を浮かべながら、アンジェラはデュランの視線の先を追った。そこには、聖域の大地を走る男女が二人いるだけだった。だが、

ヒラッ

逃げるホークアイを追うリースの超ミニのスカートが風でめくれそうになっていた。
「デュ～ラ～ン～」
「へっ、な、何だよアンジェラ」
彼の横にも、黒いオーラを纏った女性が一人。こっちはお淑やかな怒りというよりも、顔に血管が浮かぶような強圧的な怒りだった。リースは静かで無気味に恐いという感じだったが、アンジェラの場合はストレートに恐い。
「ギガンテスが出るっていうから心配して来たっていうのにぃ～」
髑髏（ドクロ）を載せる杖が震えていた。いや、杖を握るアンジェラの手、というか拳がわなわな震えていた。
「な、何を怒ってるんだ、アンジェラ」
やっとの思いで絞り出したデュランの声も震えていた。だが、その言葉を耳にしたアンジェラは力任せに杖を振り上げた。一打目は彼の額に、二打目は隙だらけの脇に放たれた。
「ぐえっ！」

魔力のこもった硬い杖である。上と右からの衝撃に、彼は地面に突っ伏した。土だらけの顔を上げると、アンジェラが鬼神のような足取りで離れていくのが見えた。

「今のは【マジシャン】が近接格闘戦で使う“ダブルアタック”という技でち」

「解説ありがとう、シャルロット。でも今は、申し訳ないのだけど、ヒールライトを掛けて欲しい」

「いやでち。魔力（マジックポイント）がもったいないでち」

「……風で声が聞こえなかっただけなのに」

それだけ言って、デュランは上げた顔を再び地面に戻した。力尽きる直前、駆け回るホークアイの前に立ったアンジェラが右ストレートを繰り出し、優男の顔面に食い込んだのが見えた。

アーマー越しに杖で殴られるのと、素手で顔面を殴られるの、どっちが痛いんだろう――そんなことを考えながら、デュランは大地に身を委ねていた。

しばらくして、質量的には１０ｔくらいはありそうな重低音ボイスがデュランの鼓膜を震わせた。

「置きなさい、デュラン」

「は、はい」

彼は慌てて立ち上がろうとした。だが、後頭部に何か布切れが被さったのに気付き、動きを止めた。何だろう――そう思いながら目を開けると、眼前に白くてキレイな女性の大腿部と布地があった。

が、次の瞬間膝頭がデュランの鼻に突き刺さった。零距離からのニーキックに、デュランは亀のようにひっくり返った。今度は仰向けの状態で聖域の住んだ空を見上げながら、ああそういえば血の味ってこんなんだったっけ、などと考える。

だが、いつまでも寝転がっているわけにも行かない。とっとと立てや、ごるぁ――そんな感じの視線を浴びている気がしたデュランは、慎重に立ち上がった。もちろん、アンジェラがそんな事を言うはずないので、今のデュランの被害妄想なわけである。

次はきちんと二本の足で立つと、左からムスッとしたアンジェラ、ボッコボコに殴られたホークアイ、そしてむくれっ面のリースが並び立っていた。事前に用意していたのか、彼女の服はプロテクターのようなものに変わっていた。“白ワシの胸当て”という防具らしい。

腫れ上がった顔で、ホークアイが口を開く。

「いやぁ、デュランとアンジェラは相変わらずだなぁ。ディーンでも同じようなこと、ぐふっ」

分かりづらい笑顔を見せるホークアイのわき腹に、今度はアンジェラの肘が突き刺さる。苦しむホークアイをわき目に、ふぅっと呆れ気味に溜め息をつくアンジェラ。デュランは恐々としながら、彼女に話しかける。

「エルランドの人たちはどうしたんだ？守るって約束したんだろ？」

「ちゃんと話し合ってきたわ。あそこにいても、大戦になったら守れないもの。大戦にならないように、ここに来たのよ」

さっき感情的に言った説明とは微妙に違う返答だった。

「俺たちもそんなところだ」

ホークアイが言うと、リースも微笑み頷いた。

「ナバールが近々マナの聖域に侵攻するって情報を掴んだんです。ジェシカをニキータとファルコンおばさんに任せて、リースと一緒にナバールの船に忍び込んだってわけさ」

ホークアイが説明を終えると、リースはアンジェラに向き直り微笑みかけた。

「アンジェラさん、さっきはバタバタしてしまったので改めて自己紹介します。私は風の王国ローラントの王女、リースです」

「“さん”はいらない、アンジェラでいいわ」

「では私も“リース”で。うふふ、ホークアイから聞いた通りですね。アンジェラもアルテナの王女なんですよね？」

「まあね。王女なんてやってても、面倒くさいだけじゃない？」

「そうですか？私は結構楽しいですよ？」

ふーん――意外な反応にアンジェラは若干戸惑いの色を見せた。
すると突然、二人のやり取りを見ていたシャルロットが頬を膨らませて抗議の声を上げた。
「ちょっと、お二人しゃん！あたちへの自己紹介はなちでちか？！」
「あっ、ごめんなさい。リースです」
「自己紹介ってあんた、前に会ってるじゃない！？」
呆れ顔で言うアンジェラ。シャルロットは目を細めて彼女の顔を見た。だが、中々思い出せない。細まった視線は段々と下に向かう。
そこで初めて、シャルロットはハッとした。
「そうでちた！そのボインには見覚えがあるでち！」
アンジェラの体の一部が勢いよく指差された。反射的に皆の視線が差された先に集まる。
「だから、そのボインって言うの止めてちょうだい！」
胸を両手で隠しながら、顔を赤らめて叫ぶアンジェラ。
男性陣も赤らめた顔を背ける。それから一人の青年が、コホンと咳払いをして、
「と、ともかく自己紹介はそれくらいにして、マナの剣のとこに行こうぜ」
彼は遠くに聳える巨大樹を指差した。皆が瞳に決意を込め、目指す場所を見据える。
一人不安の色を浮かべるリースの肩に腕を回し励ますホークアイ。
彼が微笑みかけると、リースの強張った表情が緩まった。

6人は旅の終焉へと足を踏み出した。

「……あの、リース？」
歩きながら、アンジェラはリースの名前を呼んだ。
「あ、ごめんなさい……」
謝るリース。しかし、すぐにアンジェラを困らせる動きを見せる。
特段何するわけでもないのだが、リースはジィッとアンジェラの

胸を見ていた。釘付け、熱視線という表現がそのまま当てはまる程、見ている。

アンジェラも同姓ということもあって最初は気にしていなかった。いなかったのだが、全く目を離さない観察に恥ずかしくなり、耐えかねて声をかけた。

言われて一旦は視線を外すのだが、すぐに元に戻る。この繰り返しがすでに何回も行われていた。

そして遂には、リースは自分の胸に手を当て呟いた。

「……小さい」

「リ、リース？！」

思っていたことをつい吐露してしまったリース、その瞳はまるで死んでいるかのようだった。戦闘の時に見せた華麗な姿からは想像も出来ないアクションに、アンジェラの声は軽く上擦った。

しかし、リースも流石に恥ずかしくなったのか、手の平を見せるようにして真っ赤な顔をブンブン左右に振った。

「い、いえ、何でもありません！」

リースの否定の言葉も軽く上擦り気味だった。アンジェラは大きく溜め息を付く。今日何度目の呆れ顔だろう。

「あのねぇリース、自分の胸に手を当てて、人の胸をなーんども見ながら『何でもありません』って言ってもねぇ……」

彼女はおでこに手をあて、オーバーアクションで言う——気にしてるってバレバレよ、と。

ここで『何を』気にしてるのかを明かにしないところがアンジェラの気遣い……いや、言うまでなかったことだった。

彼女の言葉に、うっ……っと言葉を詰まらせるリース。その様子を見て、アンジェラは言う。

「別に気にしなくていいんじゃない？17歳にもなってツルペッタンな子もいるわけだし」

ビシッ、と真ん前を歩くシャルロットに指を向けるアンジェラ。

今の言葉が自分に向けられたと背中で感じたシャルロットはくるり

と振り向き、いつものふくれっ面を作る。
「だ、誰がツルペッタンでちか?!」
両手を上げて叫ぶシャルロット。アンジェラはニヤっと笑う。
「よし、決めた。シャル～、あんたが私のこと変な風に呼ぶんなら、あたしはあんたのことツルペッタンって呼ぶからね」
「うっ、そりは……いやでち。アンジェラしゃん」
「よしっ!」
渋々アンジェラの名前を呼ぶシャルロットに、力強く首肯の言葉をかけるアンジェラ。二人のやり取りを見て、リースは静かに――クスクスと――笑っていた。
女性陣の睦まじい会話を背中で聞く男性陣も、肩をすくめたりしながら微笑んでいる。
ケヴィンとホークアイはウェンデルにビースト兵が攻めて来た際にパーティーを組んで共闘しているので、互いの名を名乗り合う必要はなかった。付言する必要は全くないのだが、ケヴィンがホークアイの事は覚えていたのに、自分の事を忘れていた事にデュランは若干凹んでいた。ほんの若干ではあるが。
道を進んでいくと、異国で言う鳥居のような石の建造物が何個も並んでいた。所々欠けた太い石柱が何本も続いている。
その先に祭壇のようなものが見えた。階段の両脇には、装飾品のように金の女神像が置かれているようだ。
とそこに、6人の頭の中にフェアリーの声が響いた。
(みんな、あれを見て)
階段の先、儀式場の真ん中には厳かに祭られたマナの女神像があった。金や銀ではなく、石で出来ている。だが、ここに来るまでに見てきた橋などの建造物とは違う石から造られているようだった。
彼らは階段を上がり、他のものとは違う女神像に近づいた。
そこに姿を見せたフェアリー。デュランは彼女に問い掛ける。
「この女神像がどうかしたのか?」
「これは地上のマナストーンと同じ石で出来てるの。だから、これ

でクラスチェンジすることが可能よ」
ふわふわと浮遊しながら、像を見つめる妖精（フェアリー）。彼女はくりりと振り返ると、最も小柄な少女に話し掛けた。
「この中でクラスチェンジしてないの、シャルロットだけだけど、クラスチェンジしてみる？」
シャルロットは少し考える素振りを見せて、
「そうでちね。せっかくだち、やってみまちょう！」
「じゃあ、像の前に立って、精神を集中して」
シャルロットはパーティーの中から歩み出て、言われるがまま精神を集中した。
「いくよ、光の【プリーステス】か、闇の【エンチャントレス】か、どちらか選んで」
「えっ、んーと……」
迷うシャルロットを見て、デュランは思った――みんな、ここで迷うんだよなぁ、と。だが、存外、シャルロットはすぐに結論を出した。
「【エンチャントレス】でお願いちます！」
そう言った瞬間、フェアリーの顔が曇った。いつもなら直ぐに天空から光が差し込むのに、今回は間が空いている。フェアリーとシャルロットの間で、何らかの会話があったのかもしれない。
一瞬の間を置いてから、天空から清くて聖なる光が降り注ぎ、シャルロットを包み込む。天空から光が差し込み、シャルロットを包んだ。そしてシャルロットは【クレリック】から【エンチャントレス】にクラスチェンジした。
エンチャントレス――信仰の道を外れた聖職者のなれの果て。物体に仮初めの命を吹き込むのできる呪術師である。
「やったね！」
フェアリーが微笑みかける。だが、シャルロットはペタペタと胸を触り、不満げな様子だ。
「ありり？おっぱいがまだツルペッタンなまんまでち」

残念な空気がその場を包み込む。
「あんた、まだ気にしてたの？」と呆れ口調で言うアンジェラ。
「フェアリーしゃん！おっぱいがペッタンこなままでち！失敗でち！」
「……クラスチェンジしても外見的特徴は変化しないの」
「がーん！」
顔に影が差し、目に見えたショックを受けるシャルロットであった。
「おまえ、そんなことでクラスチェンジしたのかよ……」

いつまでもショックを引きずるシャルロットと共に、聖剣の勇者たちはマナの木の下に向かった。
すると程なくして、巨大な樹木が６人の目に飛び込んできた。
「あれがマナの木？！」
「そうよ。そしてそこにあるのがマナの剣、世界を創りし『黄金の杖』の仮の姿…」
「これが……、よおーし！！」
デュランは力づくで木の根に刺さる剣を抜こうとした。だが、一向に抜ける気配はなかった。
フェアリーは言う。
「焦っちゃダメ！心を落ち着けて。剣と対話するのよ」
対話って言われても――デュランは戸惑うも、剣の柄に手をかけながら瞳を閉じた。周りの５人も同じように目を瞑る。
その瞬間、デュランの中に何かが流れ込んできた。フェアリーが語りかけてきた時は違う、不思議な感覚だった。フェアリーを介して、アンジェラたちも剣から発せられる波動――意志――を感じていた。頭の中に見えるのは、黄金街道に咲く花、バイゼルで商いする人、月夜の森で修行する獣人、森で木の実を食べるラビ、ウェンデルで走り回る子供たち、ローラントに吹く一陣の風、パロ沖で泳ぐ魚たち、熱砂の中の一握の砂、オアシスの水、大地の底で蠢く溶

岩、雪原に降るか弱い雪、風に運ばれる花びら……。ありとあらゆる自然が現世にあり、すべてが密接に絡み合って、互いの存在を確かにしている。不要なものなどどこにもない――そう感じさせるイメージだった。

マナが減少し、世界が混沌（カオス）に覆われそうになっているのに、世界は何一つ変わらない。皆、ありのままであり続ける。生き続けようとしている。

そう感じた時、マナの剣はすぅっと抜けた。全てをデュランに預けるように、その剣身を露わにしたのだ。

「抜けた……。これがマナの剣……」

デュランも含め、皆が剣を見ていた。

「それで、次はどうするんだ？……フェアリー？フェアリー、どこにいるんだ？！」

呼んでも返事がない。瞳を閉じるまでは、デュランの目の前をふわふわ飛んでいたのに。

6人が忽然と姿を消したフェアリーをキョロキョロと探していると、マナの木の前に清らかな出で立ちをした、純白の巫女が現れた。皆が驚き、その美女を見つめる。

《私はマナの女神の幻影……。聖剣の勇者、デュランよ……。フェアリーは邪悪な者の手によってさらわれてしまいました。どうか、フェアリーを助け出して下さい……》

マナの女神の澄んだ清らかな声が、6人の頭の中に響く。どうやら本物の女神はマナの木として眠っているようだ。

女神の願いにデュランは力強く頷いた。彼らも同じ気持ちだったから、それを断る理由はなかった。ただ、

「わかった。だけどその前に、ここにいる者の願いを聞いてあげて下さい。皆、その為にここに集いました」

《……マナが失われ、マナの樹は間もなく枯れ果ててしまいます。

私もそれと同時に消える定め、もう私にはどうする事もできません……》

申し訳なさせうな声が響き、皆の顔が曇る。

マナの女神の幻影は、すぅとデュランに近寄り、オルゴールのような箱を手渡した。

《最後に、あなた方にこれを授けましょう……》

箱を開けると、3つのでんでん太鼓が入っていた。それが何か解らず、困惑の表情を浮かべるデュランに女神は告げる。

《これは『風の太鼓』と言って、フラミーをなだめあやす物……。これがあれば世界中どこにいてもフラミーの力を借りることができます……》

「どうして3つも？」

《3つ、必要になるからです……》

そう言いながら、マナの女神の姿が消え始めた。もともと半透明の体が、霧が晴れるように消えていく。

「あっ、待って……」

《フェアリーをお願いします……。あの子が最後の希望……》

デュランの制止の声も届かず、女神の姿は完全に消え去ってしまった。遺言のような言葉を残して。

立ち尽くすデュランにアンジェラが話しかける。

「デュラン、早くフェアリーを探しに行こう！」

「……ああ！」

彼は振り返りながら頷いた。

この一帯にフェアリーはいないと判断した6人は来た道を戻ろうとした。すると、ガサガサッ――と、人の気配がした。音の方を見ると、

「紅蓮の魔導師！？」

小さな石橋を背にして立つ木の影に紅いマントが翻るのが見えた。

デュランとアンジェラは即座に駆け出したが、すでに姿は消えていた。だが、誰かの視線や気配を感じる。

「皆、気を付けろ……」
彼らは石橋を渡り、道を戻っていく。シャルロットがクラスシェンジを果たした祭壇を越え、何本もの石の鳥居をくぐり抜ける。
すると、屈強な水中花の草の上にケタケタと不気味な笑みを浮かべる死を喰らう男が立っていた。
「キサマっー！！」
ケヴィンとシャルロットが飛びかかったが、死神のような男はケケケケと笑いながらどこかに走り去って行った。
6人はそれを追うように道を進む。
すると今度は川を渡るための掛けられた長い石橋の上に、妖艶な美女が一人。
「美獣ッ！！」
「フェアリーをさらったのはあなたですか?！」
ホークアイとリースが駆け寄るが、美獣は嘲るような笑みを残して消えた。
「くそ、どこへ……、あそこだっ！」
ホークアイが辺りを見渡すと、聖域の森を抜けた開けた場所に美獣が歩いていくのが見えた。そこは彼らが降り立ったのとは別の場所だった。
ホークアイの声と共に駆け出す6人。すると、そこには意外な人間が集まっていた。

# 第四話

６人の聖剣の勇者たちの前に姿を見せた、彼らに因縁のある者たち。６人がその後を追って入り込んだ広場、そこには予想をはるかに超えた画があった。

「おまえ、たち……」

彼らの前に並び立つのは、美獣、邪眼の伯爵、黒耀の騎士、紅蓮の魔導師、死を喰らう男、そして初めて見る細身で顔の白い男。

感情のない顔をした男を見て、エンチャントレスとなったシャルロットが声を震わせて呟く。

「ひ、ヒース……なんで……」

その言葉に他の勇者たちは驚きを露にする。それとは対照的に笑みを堪えようとする一人の道化師。押さえ込まれる笑みは邪悪そのものだった。

シャルロットは瞳を潤ませながら叫んだ。

「ヒース！シャルロットだよ！わからないの？！」

「……」

だが、帰ってくるのは無表情で無言の言葉だった。冷めた瞳が幼さをいまだ残す少女に向けられる。

それを見て、耐えかねたように腹を抱えて笑い出す男が一人。

「ヒーヒッヒッヒ、無駄無駄ぁ。最早こいつは仮面の同士様のお力によって記憶も人格も別人に変わっていますヨ。あなたがご存知のヒースはもうこの世にはいません。ここにいるのは『堕ちた聖者』です」

「そ、んな……」

涙を浮かべる瞳に絶望の色が浮かぶ。

彼らの眼前に並ぶのは、これまで彼らの行く手を阻んできた者達。その中央に立つ紅蓮の男が口を開く。薄く笑みを浮かべながら。

「クックック……、遅かったな。聖剣の運び任、ご苦労……」

「どういうことだ、これは?!」
不適な笑みを見せる魔導師にデュランは叫んだ。その質問に、右端で胸を強調するように腕を組む美獣が答える。魔導師と同じように余裕のある笑みを携えて。
「ウフフ……、解らないかしら?見ての通り、私たちは手を組んだのよ。ぼうや」
「なにっ?!」
「アナタたちの行動を見る限り、ワタシたちにとってアナタ方の存在はイクブンか脅威ですからネー。アナタ達が手を組んだように、我らの主も共闘することを決めたのデスヨ」
左端で憎たらしく笑いながら、死を喰らう男が言った。右手に自分の背丈をはるかに越える程長く、刃が不気味に曲がった鎌を携えている。
聖剣の勇者6人の目の前に立つ、邪悪なる者たちに仕える幹部6人。
彼らは不適な笑みを浮かべ、目に見える余裕を漂わせている。それは、彼らの力が聖剣を抜いた勇者たちをいまだに凌駕してるという自信がある――だけではない。彼らの――紅蓮の魔導師の手の中で意識を失っている人質の存在があるからだ。
デュランはリーダーのように振舞う魔導師を睨み付け言った。
「フェアリーを返せ!……それとも、6対6でやり合おうってのか?!」
「アッハッハッハ!随分乱暴な提案だな。それにその程度の力で我々に勝てると、本気で思っているのか?」
「て、めぇ……」
「まあ待て。そう怖い顔をするな。ここは取引をしようじゃないか?」
「取引、だと……?」
そうだ――紅蓮の魔導師は頷いた。
「私たちはマナの聖剣が欲しい。君たちはこのか弱い虫が欲しいん

だろ？」
　紅蓮の魔導師はそう言うと、ぐったりと弱ったフェアリーを握る腕に力を込めた。弱々しい顔が痛みに歪む。
「フェアリー！」
「あ、あぐ、う……」
　苦しそうな声を聞き、デュランは思わず足を踏み出そうとする。
「おっと、動くな。動いたらこいつの体を一ひねりだ……」
「卑怯者め……」
　罵りの言葉に紅蓮の魔導師は瞳を閉じで人差し指を振った。フェアリーを持つのとは逆の手で。
どこまでも余裕のある態度である。
「さて、取引に応じるか？それとも、潰れたフェアリーを返してもらいたいか？」
　威圧的な鋭い眼光が聖剣を持つデュランへ向けられた。朦朧とする意識の中で二人のやり取りを聞くフェアリーは力を振り絞り、言葉を発する。
「デュラン、ダメ……。ギ……ア……アアァ！」
　紅蓮の魔導師の手に邪悪な波動が宿る。まるで自然発火したような、ゆらゆらとした闇の炎がフェアリーの体を包み込み、彼女の意識を完全に奪い去る。
　フェアリーを黙らせた男は変わらず微笑んでいた。邪悪な力がフェアリーを蝕むのを見て、デュランは苦しそうに叫んだ。
「やめろ！……マナの聖剣は渡すから、フェアリーを解放しろ！」
「そう、それで良いのだ……」
　魔導師が満足げな表情を浮かべると、手に宿っていた黒い炎が消えた。
　デュランの後ろにいる勇者たちも、彼と同じ気持ちでいた。
　紅蓮の魔導師はゆっくりデュランに近づき、マナの剣を奪い取った。それからゆっくりと元の位置に戻ると、フェアリーをデュランへと放り投げた。

デュランは飛んできたフェアリーを優しくキャッチすると、彼女をどこまでもぞんざいに扱う紅蓮の魔導師に怒りの瞳を向けた。だが、魔導師の意識はそんな事では動じない。彼の興味はその手の中にある物に向けられていた。

「これがマナの聖剣……。フ、フフフ、フハハハ！ついに……ついに手に入れたぞ！」

冷静だった魔導師が聖剣を手にした途端、新しい玩具を手にした子供のように笑い出し、声を荒げた。……だが、

「……ぐっ、なんだこれは……。苦しい……」

紅蓮の魔導師は胸を押さえと痛みに顔を醜く歪めると、力尽きて倒れた。

突然の出来事にデュラン達は目を見張った。それから事態を飲み込み、口元を引きつらせて笑う。

「へ、へへっ。ザマー見ろ！剣の方がお断りだとよ！！」

デュランは動揺しつつも、勝ち誇ったように言った。だが、敵の表情は何一つ変わっていない。余裕のある不敵な笑みはまだ消えていなかった。

すると、横たわる魔導師を見下ろすように立つ黒耀の騎士がマスクに声をくぐもらせる。

「マナの剣は使い手の心を移す鏡……」

彼の言葉を継ぐように、美獣が唇を動かす。

「善にも悪にも染まるわ」

「我らが主から授かった闇の力によってマナの剣も暗黒剣として生まれ変わる……」

最後に堕ちた聖者が無気味な言葉で締めくくる。

「どういうことだ？！」

彼らの言葉に聖剣の勇者たちを眉根を寄せる。

「こういうことだ、デュラン……フンッ！」

黒耀の騎士が右手に持つ大剣を掲げて振り下ろした。それと同時に、美獣の瞳の細まり、

「フギャアア！！」
威嚇する獣のような声を上げ、
「……」
堕ちた聖者がぶつぶつと気味の悪い呪文を唱えた。
その瞬間、青冷めた顔をした紅蓮の魔導師の体の下に、真っ黒な闇の泉が沸き、彼の体を闇の波動で包み込んだ。闇はマナの剣をも飲み込み、その眩しかった剣身を闇色へと染め上げる。
そして、あ然とするデュラン達の前で、死んだはずの魔導師がゆっくりと立ち上がった。
彼は漆黒に輝く聖剣を見ると、口の端が裂けるような醜い笑みを浮かべた。
「フフフ……、フハハハハ！これで我らが思惑通りになった！後は神獣を復活させて……」
「神獣を復活させるだと？！」
予想もしてなかった言葉にデュランは声を上げた。他の5人も動揺を隠せず、開いた口を両手で覆ったり、顎を震わせるなどしていた。
「おっと、口が滑ってしまったか。まぁいい」
ククッ、と笑う魔導師に一人のデルヴァーが意を決して叫ぶ。
「紅蓮の魔導師！私のお母様はどうしたの！」
「あぁ、理の女王ならまだ使い道があるのでね、こちらで預かっている。完全体になられた竜帝様の生贄としてね」
「生……贄……」
アンジェラは魔導師の言葉を繰り返すことしか出来なかった。母をさんざん利用した挙げ句、生贄にするなど考えもしていなかった。頭の中で言葉を繰り返し、生贄となる母の姿を無意識にイメージする。人の腕程あるキバが腹に突き刺さり、肉が割け、臓物と血液が垂れ下がる、真っ赤な母親の姿を。
アンジェラは血が出そうな程に強く奥歯を噛み締め、叫んだ。
「そんなこと、させるもんですか！」

「フハハハ、自分を殺そうとした母が恋しいか？……あぁ、あれも私が操り言わせたのだったなぁ」

アハハハハ――凄惨な笑い声に、アンジェラの理性がプチンと音を立てて切れる。

「あんただけは許さない！ファイヤーボール！！」

怒りに我を忘れたアンジェラが放ったファイヤーボールは、マグマのように赤黒く、珠玉のごとく連なっていた。これまで見てきたものより、はるかに高熱で威力も比ではなかった。

「フッ、愚かな……」

だが、紅蓮の魔導師はニッと口元を緩めると、名を表す真っ赤のマントを翻した。火球は真紅のマントに弾かれると、火の粉となり、やがて消えていった。

「そ、そんな……」

力の差をまざまざと見せ付けられ、愕然とするアンジェラ。口を開けて硬直する彼女など気にかけない様子で、魔導師は静かにスラスラと、分析と感想を述べる。

「ファイヤーボール、レベルは6、いや7と言ったところか……短期間でよくここまで。……だが、私にはまだまだ及んでいませんよ、アンジェラ姫」

侮蔑と嘲笑を交えた声に、アンジェラは怒りで顔を歪める。彼女を囲む仲間たちも、敵のケタ違いな強さに身を強ばらせてしまっている。敵が手を組んだのなら、それぞれの力は拮抗していると考えるべきであり、それならば紅蓮の魔導師の隣で笑う道化や妖艶な女も同じくらいの力――高レベルのファイヤーボールを容易く粉々にしてしまう力を持っていると考えるのが普通である。

「ウフフ、その程度で私たちと戦おうとしていたの」と美獣は妖艶に笑う。

「くっ……」

「さて、行きましょうか……」

腸を煮えくりかえすような不快な笑みを浮かべる魔導師がそう言

うと、隣に立っていた道化師がケラケラと不気味に笑い始めた。
「そうデスねぇ。我らの目的は達しましたしネェ」
彼らの目的が何かはわからない――聖剣を奪う事か、彼らの力を見せ付けることか、それとも……。
道化師が言うと、白い顔をした無表情の青年と共に姿を消していった。砂の城が風で消えていくように。幻覚だったかのように。姿が消えていく。
その時、デュランの右下に構えていた少女が叫んだ。
「ヒース！ヒースゥ！」
駆け出して行きそうなシャルロットの肩をケヴィンが掴む。獣人の力で押さえられ、一歩も動けないシャルロットはただ叫ぶだけだった。
「放して！ヒースが、ヒースがぁ！」
肩を抑えられながらも、手を伸ばすシャルロット。小さな掌の向こう側で、いつも隣にいた青年が知らない顔をして、知らない瞳をして姿を消していき――やがて完全に消えた。
「あいつの言った通り。もうアレは、シャルロットの知ってるヒース、違う……」
感情のない、死者のような瞳を見て、ケヴィンは感じていた。あれはシャルロットが話してくれた人間とは別人である――と。
うな垂れるように、シャルロットの手が、腕が降ろされ、力んでいた全身が緩んでいく。その様子を見て、ケヴィンの手が小さな肩から離れていった。
そんな事に関心も興味もない様子の妖しい美女と吸血紳士も闇の中へと姿を暗ませようとしていた。黒い絵の具をパレットに落とし無造作に掻き混ぜたような闇の穴にまず邪眼の伯爵が姿を消す。次いで、美獣がその中へと足を踏み入れようとする。
だが、彼女は足を止め、余裕のある微笑みで振り向いた。その妖艶な瞳がローラントの王女へと向けられる。
「リース姫、あなたの小生意気な弟も同じよ。黒の貴公子様の新た

な肉体として、私たちが保管しているわ……」

「なっ……エリオットを返して！」

フッと微笑んだ美獣は何も言わずに、闇の渦へと消えていった。

その姿に、いつの間にか握られていたリースの拳はワナワナと震える。強張るリースの肩にホークアイが優しく手を置く。だが、それでもリースの怒りは収まらない。

黒耀の騎士はジッとデュランをあるいは睨み――あるいは見つめ――デュランはそれに気付かない程に紅蓮の魔導師を睨めつけていた。魔導師もまた、向けられた鋭い眼光を真っ向から受け入れる。それだけのまま、騎士と魔導師は消えていった。足元からスゥッと、透明人間になるかのように。

敵の大将とも言える連中が全員姿を消したのを確認して、デュランは手の中で苦しそうに眠るフェアリーを見た。

「フェアリー、だいじょう……」

大丈夫か――そう言いかけた瞬間、目の端に変なものが映りこんだ。鮮血のような、業火のような、紅蓮色の何かが。それからの出来事は、まさにコマ送りのように彼の目には映り、脳に刻まれた。

「あぶねぇ！」

確かそう叫んだはずである。おそらくデュランはそう叫んだのだ。殆ど反射的に、無意識のうちに発せられた言葉は記憶に残らない。後に思い出して、状況の合わせて脳が情報を補完する。

それから、彼は思い切り大地を蹴った。これもほぼ無意識だった。だが、それは逃げるためではない。

消えたはずの紅蓮の魔導師は彼らが向いていた先の約９０度近く、距離はおよそ５、６メートルくらいの所にスゥッと現れた。そうして彼がした行動は右手を胸の高さまで挙げ、指を前に伸ばしただけ――“だけ”だったのだが、その指先が問題だった。ピンと伸ばされた、まるで銃口のような人差し指はアンジェラに向かって伸ばされていたのだ。

デュランが動き始める直前に、魔導師の指が眩く光った。青白く。

神々しく。
彼がアンジェラの近くに行く前に、指から高熱のレーザーらしきものが放たれる。光の速さで進む聖なる光（セイントビーム）に、彼が追いつけるはずもない。ましてや、敵の再出現に気付くのがワンテンポ遅かったホークアイたち間に合うはずもない。
敵の奇襲に、両腕で体を守ろうとするアンジェラ。それすらも間に合うか危うい。
だが、その瞬間、思いもよらない人物がアンジェラの前に立った。
所々破けてボロボロになった微風（そよかぜ）の衣を纏い、先端が砕けたミスリル銀製のロッドを握り締めたウィザード。
焼き尽くすような一閃が彼女の胸へと突き刺さり、消える。そこにいた誰もが目を見開き、体を強張らせた。
「アイリス！」
そう叫んだ刹那、我が身を盾とした少女の口から血が吹き出た。
ゴフッ――と、喉に詰まった血がドロリと口から溢れ出てくる。
虚ろな瞳をした少女は半眼の表情で、膝から崩れ落ちていく。落下する彼女の体を、すぐ後ろに立っていたアンジェラが支えようとする。同じ姿で地面に落ちる二つの影。
チッ、と舌打ちをした紅蓮の魔導師は、さらに追い討ちの一撃を地面に座る二人の魔術師に放とうとする。
「ふ、ふざけんなーっ！」
頭の中が真っ白で真っ赤になったアンジェラは我を忘れて叫んだ――叫びながら右腕を振るうように突き出す。そうして、闇のオーラを放った黄金の矢が敵の胸を目掛けて撃たれる。大きく、眩しいほどの黄金。光をも消し去るような闇の波動。
ダークフォースが撃たれた瞬間、アイリスも力なく腕を上げた。
そうして一瞬遅（ワンテンポ）れて放たれるセイントビーム。繊細で、汚れのない純粋な色。闇夜を裂くような光の波動。
その光は螺旋を描きながら、闇を纏った矢と一体化した。聖なる光を纏った闇の一矢が紅蓮の魔導師を襲う。

予想以上の勢いで放たれた反撃に、彼は身を捩じらせのが精一杯だった。だが、それでも彼の体を貫くことは必至だった。だからこそ、彼は先ほどファイヤーボールを砕いたようにマントを翻した。千年以上も生きた竜の体毛から作られた特別のマント。それを破ることが出来るのは、それ以上の力を持つドラゴンくらいだろう。……だが！

「なっ！」

遠心力をも味方につけた聖なる光にマントは焼き裂かれ、闇と光の波動を纏った黄金の矢は紅蓮の魔導師の胸に穴を開けた。

「ぐっ、そ……」

だが、黄金の矢が貫いたのは胸の中心ではなかった。狙いから数センチそれた肩の付け根に大きな穴を開けただけであった。ドクドクと溢れ出る血、傷口を押さえる魔導師にデュランは追撃を加える。だが、剣筋が斬ったのは、苦悶の魔導師が姿を消した後の空（くう）だった。

アンジェラは紅蓮の魔導師が姿を消したことなどにも気にかけず、アイリスの体をかかえるように抱きしめて彼女の右手を握っていた。

「アイリス、なんで……あなた……」

アンジェラは気が動転していた。自分でも何を口にしているのかわからない程に。何を言って良いのかわからない代わりに、瞳から涙が止まらなかった。

「アン……ジェラ……」

呻くように絞り出される言葉。誰しもが、彼女が忌の際にいる事を察していた。いや、そんな事は胸の真ん中に空いた穴から黒色に近い血が溢れ出ていることからすれば、明らかだった。

「アイリス！……デュラン、シャルロット、ヒールライトをかけて上げて！お願い！」

涙を流しながら懇願するアンジェラ。だが、デュランもシャルロットを顔を曇らせるだけで、呪文を詠唱しようとはしない。

その代わりに、重たい口を開いたシャルロットから絶望的な事実が告げられる。

「ヒールライトは、回復魔法でち。だけど限度というものがあるんでち。致命傷には……」
「そんな……」
「意識を保ってるのも不思議な事なんでち……」
シャルロットの言う通りだった。胸を、心臓を破られ、まだ生きているというのは奇跡だった。いくら魔術師として魔法攻撃に耐性があったのだとしても。
「アンジェ……」
「アイリス！」
止まらぬ涙でグシャグシャになった顔を親友へと向けた。変わらず、親友の顔は穏やかで、微笑を浮かべている。
「女王様の命を……やっと果たせた……」
「お母様の！？」
意外な言葉にアンジェラは驚いた。その顔がちゃんとアイリスの瞳に映っているか、わからない。だが彼女は僅かに頷いて見せた。
「もう……ずっと前……の事だけど……」
今にも眠ってしまいそうな幼子のように、彼女は瞳を閉じた。
「『いつか、その力で、私の娘を守って』って……ゴふッ！」
再び大量の血がアイリスの口からこぼれ、溢れ出る。その様子にアンジェラの顔から血の気が引いていく。
「もういい！喋らないで！」
その言葉は彼女の耳には届かなかったのかもしれない。
「アンジェ……ラ……みんな……守っ……」
言葉にならない声で、アイリスはお願いした。懇願した。そうして――それ以上――何も言わなかった――立ち上がることも――瞳を開けることも――何もなかった。
何もない代わりに、アンジェラはわんわん泣いた。枯れる程に涙を流した。その嗚咽を聞いて、フェアリーが意識を取り戻す。
「う、うーん……」
「フェアリー、大丈夫かっ？」

パタパタと透明の羽を動かし、手のひらから飛び立つ妖精にデュランは言った。

「みんな、ごめんなさい…」

フェアリーは瞳を伏して謝った。今にも泣き出しそうなくらいに、申し訳なさそうに。

「あなたのせいじゃないわ、フェアリー」

リースは優しく、なだめるように言った。

それを聞いて、ゆっくりと目蓋（まぶた）を開けるフェアリー。彼女の瞳に、胸から血を流し幸せそうな表情で眠るアルテナ兵と、その子を抱きしめながら子供のように泣き崩れるアンジェラの姿が映った。

「何が、あったの？」

彼女は皆とつながり意識を共有できるが、自分の意識がなかった時のことまでは認識できない。だから、何故アンジェラがさっきまで死闘を演じていた敵兵を抱きしめ泣きじゃくっているのか、わからなかった。

誰かから説明されるのを待とうとするフェアリーに、涙の止まらないアンジェラが叫ぶ。

「おねがいフェアリー、アイリスをたすけて！」

その切ない叫びを聞いて、フェアリーは困惑しながらもアイリスの様子を調べ始めた。デュランの掌から飛び立ち、ふわふわ飛びながら、眠っているような安らかな顔をじっと見つめている。

難しい顔をしている妖精（フェアリー）に、ケヴィンが一つ提案した。

「ルガーのときみたく、赤ちゃんにできない？」

あの場にいなかったアンジェラ達にはケヴィンが何を言っているのか皆目見当がつかなかった。だが、それでアイリスが死なずに済むなら、とアンジェラも懇願するような瞳でフェアリーを見つめた。

……だが、

「無理よ……」

フェアリーは瞳を伏して、静かに言った。

「あの時はルガーも生を望んでいたし、魂も現世に残っていたわ。

でも、この子はそうじゃない。未練なく、清らかな心で逝ってしまった。魂ももう、冥府に行ってしまったわ」

「そんな。いや……いやぁぁ！」

アンジェラはアイリスの体を思い切り抱き締めた。抱き締め、彼女に叫んだ。まるで子供のように――動物のように。

「アイリス！お願いだから戻ってきて！また私に魔法を教えてよ！ねえ、アイリス……ねえったら！アイリス……」

「もう止めるんだ、アンジェラ」

何回もアイリスの名を呼び、叫び続けるアンジェラの肩を掴むように、ホークアイが彼女の前に膝を折った。その横にリースも腰を降ろし、そっとアンジェラの手を取り握る。哀しげに瞳を潤ませながら。

「『死んだ者は、生き返らない』」

アンジェラの後ろから聞こえたケヴィンの言葉。それは、かつてウェンデルで光の司祭に言われた言葉だった。当時の彼には理解の出来ない――いや、理解は出来ても納得のいかない言葉。その言葉を、彼はアンジェラに向けた。

友の死を、受け入れさせるために。

「私たちは、大切な人を亡くしてきました」

リースはそれだけ言った。

父と仲間を殺された者、大切な親友を殺めた者、そして同胞を手にかけた者。彼らには、アンジェラの痛みがよく解っていた。解っているからこそ、言うのだった。

「彼女は……君の親友は使命を果たしたんだ。もう十分に闘い切った。だから、もう休ませてやろうぜ」

「使……命……」

「そうだ。彼女が言っていただろう？『女王様の命令をやっと果たせた』って。彼女は嫉妬とか、憎しみとか、そんな醜い心じゃなくて、“親友”を守りたいって綺麗で素直な心で動いたんだ。きっと無意識だったんだと思うぜ。見てみろよ、その顔を」

ホークアイに言われて、膝の上に乗る柔らかなアイリスの頭、顔を見る。そこには何の憂いもなく、満足げな表情が映し出されていた。うっすら微笑んでいるようにも見える。綺麗で幸せそうな顔だった。

「アイリス……」

「彼女は生き切ったんだ。命を使ってまで、自分のすべきこと、したいことを成し遂げたんだ。だから、もう休ませてやろう……」

柔らかな声でホークアイは言った。その言葉がアンジェラの胸に響くと、彼女の瞳から再び涙が零れ落ちた。眠るようなアイリスの顔に、ポツリ、ポツリと大粒の涙が零れる。

そしてアンジェラは、小さな声で言った。

「ありがとう、アイリス……」

静寂が彼等6人を包み込んだ。黙祷のような沈黙だった。

数秒の沈黙を経てから、ケヴィンはフェアリーに語りかけた。

「奴ら、神獣復活させる言ってた」

その言葉にフェアリーは苦悶の表情を作る。それから何かを感じ取るように瞳を閉じた。

「うん……。あぁ、もう封印が解け始めてるみたい…。今デュランの中に戻って見せるね！」

フェアリーは急いでデュランの中に戻って行った。そうして姿の見えない妖精の声が6人の頭の中に響いた。

（目を閉じて……）

フェアリーの声に従い目を閉じると、6人には世界各地の7つのマナストーンの姿が見えた。いや、“見えた”という表現は的確ではないのかもしれない。感じた――マナの剣を抜いた時のように世界を感じたのと似た感覚で、彼等は世界各地にあるマナストーンの姿を感じ取ったのだ。

その姿は、最初はいつか見たような逆さまの三角錐のような石の塊だった。だが、少しずつ亀裂が生じたかと思うと、だんだんとマ

ナストーンは崩れ始め、中から光の粒子が溢れ、吹き出した。そして、
「封印が解けた！！」

６人は目を開け、パニックに陥った。
「こいつはヤバいぜ！！」とホークアイは両手を頭に乗せた。
「神獣が復活してちまったでち！！どうするんでちか？！」
「みんな、落ち着いて！！」
フェアリーの一喝に彼等は冷静さを取り戻した。彼女は言葉を続ける。
「神獣は本来一体なの。今はまだ８体に分かれてる。それに目覚めたばかりの神獣は不完全で１００％の力を出せないわ」
詳しく説明すると――彼女は小さく咳払いをすると、そう言って神獣の正体を語った。
「８体の神獣、土の神獣ランドアンバー、水の神獣フィーグムンド、火の神獣ザン・ビエ、風の神獣ダンガード、光の神獣ライトゲイザー、木の神獣ミスポルム、闇の神獣ゼーブルファー、そして月の神獣ドラン。彼らが一匹の神獣になるにも手順があるの」
「手順？」
「正確に言うと、順番ね。まず、二体同士が合わさって凶獣というモンスターになるの。それから四体の凶獣が一カ所に集結して、一匹の神獣になるの。こうなってしまったら、もう……」
手立てはない――恐ろしくて口に出来ない言葉が６人の頭の中に響いた。
「あっ。てことは、一匹でも倒せばいいのか？」
閃いたように言うデュラン。しかし、フェアリーの顔は変わらず曇っていた。
「一匹だけ倒しても、彼らは時間の経過によって強くなっていくわ。一匹でも残せば、時間が経って最終形態の神獣と同じ力を手に入れる」

「それだけでゲームオーバー。つまり、全滅させなきゃならねぇってわけだな」
ホークアイが手を顎に添えて考察する。
「全滅させる……神獣を……」
ホークアイの言葉を反芻するリースの顔は青ざめていた。かつて世界を滅亡寸前まで追いやった神の獣（最強のモンスター）を全て倒さなくてはならない。そんなことが自分たちに出来るのか、たかが人間の自分たちに――
リースの心は不安にかられた。
彼女の気持ちを察してか、ホークアイがリースの肩に手を置いた。
それを目の端に捉えながら、フェアリーは説明を続ける。
「さっきも言ったけど、いまの神獣は不完全、今なら倒せる可能性があるわ。しかも、凶獣になるペアのうち一匹を先に倒せば１００%の力を手に入れるのを遅らせることが出来るわ！」
「ええとでちね。ようは、先に特定の神獣を倒せばいいんでちね？」
「そう言う事ね。まず、土の神獣と水の神獣が合体した凶獣が『ランドムンド』、同じように火の神獣と風の神獣が『ザンガ』、光の神獣と木の神獣が『ゲイラム』、闇の神獣と月の神獣が『ゼードル』よ」
「じゃあ、６人でそのペアの片方を倒していけば」
希望の色を滲ませたリースの言葉だった。だが、
「そうじゃない……そうじゃないんだよ、リース」
アイリスを抱き締めて沈黙を守っていたアンジェラがリースの言葉を遮った。一人座り、低い位置にあるのに加えて顔を俯かせているのでどんな表情をしているかは判らない。だが、その言葉には――リースと打って変わって――恐怖の色が滲んでいた。まるで、気付きたくなかった、最悪の終曲（フィナーレ）を知ってしまったように。
「みんな、思い返してみて。それぞれのマナストーンがどこにあるのかを……」
アンジェラの静かな言葉を聞きながら、他の５人はそれぞれマナストーンの場所、すなわち神獣のいる場所を思い出していた。そし

て全員がハッとした顔を作った。
「火のマナストーンは火炎の谷……あっ、ナバールやディーン！ジェシカやファルコンおばさんがあぶない！」
「ビーストキングダム、ミントスの人、あぶない…」
「フォルセナもドリアンに近いな……英雄王様やステラおばさん、それにウェンディも……」
「アルマ、じぃ、みんな……」
「ウェンデル、それにディオールのおじいちゃんたちがあぶないでち！」
「氷壁の迷宮もアルテナに近いし、エルランドのみんなも……」
彼らの故郷（くに）や大切な人たちに危機が迫っていた。のんびりしていたのでは、間に合わない。この事実に、６人は驚愕や不安、恐怖、パニックなど、それぞれが危機感を顕わにした。
「ど、どうすりゃ良いんだ!?」
一人慌てふためくホークアイ。いや、皆が冷静さを欠いていた。その中で、デュランだけが荷物から３つのでんでん太鼓を取り出した。
「フェアリー、これ、マナの女神様から貰ったんだけど……」
「これは“風の太鼓”じゃない。三つも……？そうか、マナの女神様はこれを予測されてたんだわ……」
「どういうことだ？」
「簡単なことよ。あなたたちにはこれから二人一組（ツー・マン・セル）の三組に分かれてもらうわ。目覚めたばかりって言っても、流石に一人じゃ神獣には敵わないわ」
「でしたら、さっきの神獣の組合せに対して、私達に縁（ゆかり）のある土地を合わせましょう。それと、水の神獣、火の神獣、それから月の神獣を優先的に倒した方がいいと思います」
恐怖に脅える心を抑えながら、冷静に言うリース。
「それは構いまちぇんが、どうしてでちか？」とシャルロットは首を傾げた。

「それぞれの神獣の近くにある国、アルテナやビーストキングダムは聖域での先頭で兵力の殆どを失ってしまっています」
「たしかにその通りだ！」
「それに、ナバールも」
リースは言った。自分の故郷を一度は壊した敵の名前を。
ホークアイも、彼女の言葉を受け入れ、説明を付け加える。
「ナバールはほぼ壊滅。バイゼルは商人とバカな王様ばっかだし、ディーンには女子供にじいさんやばあさんだけだ。神獣なんかと戦える奴はいない。アルテナやビーストキングダムも、兵士はここに来てたんだ。神獣の相手なんか出来やしない」
「その通りよ」
フェアリーは頷いた。５人も異を唱える事などしない。
彼らはそれぞれペアとなる人間を見つめた。
「じゃあ、あたしとデュランが一組目ね」
「俺とリースが二組目だな」
「オイラとシャルロットが三組目？」
フェアリーは一人ひとりの決意に満ちた顔を見ながら、言う。
「そうよ。倒す相手は……」
「俺たちが水と土の神獣」
「私たちは火と風を」
「あたちたちは月と光と木でちね。……あり、あたちたちだけ多いでち。おじいちゃんたちが危ないのにぃ」
じたんだを踏むシャルロット。だが、彼女にフェアリーが優しく声をかける。
「大丈夫よ、シャルロット。木の神獣ミスポルムは大地に根を張るから移動できないの。だからディオールに危険は、すぐには及ばないわ。月の神獣、光の神獣、それから木の神獣を倒せばいいわ」
「わ、わかったでち」
「なあ、闇の神獣はどうするんだ」
皆が大なり小なり感じていた疑問をデュランは口にした。

「闇のマナストーンが失われてしまったから……。取り敢えずは後回しにしましょう」
「そうだな。それじゃあ早速……」
風の太鼓をリースとケヴィンに渡したデュランは、手元に残した一つで聖域の空を自在に舞い飛ぶフラミーを呼ぼうとした。
「あっ、ちょっと待って！不完全と言っても神獣は神獣、これまで戦ってきたどのモンスターよりも強いよ！だから、焦らず、しっかり道具を揃えて、体力も完璧にして戦って。それと、もし私や精霊と意志疎通したかったら、深く念じればいいから！私はデュランから離れることが出来ないけど、声だけなら送れるし、皆の声も聞こえるわ。それに精霊の皆は実体化も出来るわ」
「わかった！それじゃあ、みんな！神獣討伐に出陣だ！！！」
そう言ってデュランは風の太鼓を突き出すように天に掲げた。

## 第四話（後書き）

こんにちは、丸猫です。

この度は稚拙な私の文を読んでいただき、ありがとうございました。

この話は、「【改訳】　聖剣伝説3～挿話「虹の欠片〈後編〉」～」とリンクしています。よろしければ、こちらも読んでみてください。少しは面白味が増すと思います。

さて、形式的には第四章の第四話となりますが、実質的には次回から「神獣討伐編」へと突入します。まあそうすると、第四章第一話からこの第四話までは「聖域突入編」と題するの適当なのですかね？

それはさておき、もうすぐ三月が終わりますゆえ、そんな多忙さの開始にこの先更新の速度が遅くなると思います。というか、七月まで更新できないのではないかと思います。

頑張れば今月中にもう一話投稿できそうなのですが、神獣討伐編の一話だけ投稿して、しばらく更新できないというのは何だかキリが悪いかなと思っています。

なので、神獣討伐編はしばらくお待ち下さい。

出来る限り筆を進めて、時間をまとめて取れる時期が来たら、一気に投稿していこうと思っています。以前のように、一年も更新しないということはしません。ましてや、完結させずに終わらせるということは絶対しません。

どうか少しの間だけお待ち下さい。そして願わくば、次話が投稿されたらまたのご愛読をお願い致します。

――皆様への感謝の気持ちを忘れずに――

2011．3．23　丸猫

# 第五話―A

聖域を飛び出し、常世へと舞い戻った6人の勇者。彼らがまず目指したのは南西方角、月読みの塔である。

だが、鬱蒼と生い茂る月夜の森の木々に阻まれて、フラミーは降り立つことが出来ない。

「どうする、ケヴィン？いったんミントスに降りて……」

「いや、ここで降りる」

「……はい？」

月夜の森上空を旋回するフラミーの上で、ケヴィンは言った。フラミーの背から地上を見下ろせば大抵の者は目を回してしまうだろうし、ここから飛び降りれば衝撃で体がバラバラになりそうな予感がする。

そんな状況で、ケヴィンは『ここで降りる』と言ったのだ。

「いや、いくらおまえが頑丈でも……」

「大丈夫、あれ」

ホークアイが半ば呆れ気味に言うと、獣人の少年はフラミーのほぼ真下に聳える大きな城を指差した。

「ありは……ビーストキングダム？！……って、ありり？」

ケヴィンの言葉に困惑するシャルロットであったが、彼女はさらに驚きの声を漏らした。突然、彼女の体が宙に浮いたのだ。

彼女の声に反応して、皆が視線をビーストキングダムからシャルロットへと向け変える。すると、ケヴィンが小柄な少女を脇に抱えているのが見えた。そして、

「じゃっ！」

心地良い顔で手のひらを見せるケヴィン。脇に抱えられたシャルロットはジタバタと暴れている。

あまりに自然な様子で言うものだから、残りの4人も思わず右手を上げてしまった。キョトンとした顔は変わらずのままで。

そうしてケヴィンはフラミーの背から降りた。いや、身投げした。
「え……えぇ!?」
フラミーの背から顔を出して、落ちる二人を見ると、そのすぐ下はビーストキングダムの屋上だった。たしかに屋上だったら、まだケガはしないであろう。シャルロットもケヴィンに抱きかかえられていれば、無事なような気がする。予想外かつ突然のヒモなしバンジージャンプでパニックになって泣きじゃくっているけれども。
屋上に二本足で降り立ったケヴィンを見てから、デュランは言う。
「さて、次は火炎の谷だな?」
「ああ。だが、まだルナの日だ。一旦ディーンで戦闘の準備をしながらウンディーネの日を待って、それから火の神獣と戦う」
「なるほど。考えたわね、ホークアイ」
アンジェラは言った。
「まあな。だから、まずディーンに」
「よし、わかった」
デュランが頷くと、フラミーは東の果て、オアシスの村ディーンへと飛んだ。

冷たい石床のビーストキングダムの屋上。そこにケヴィンは落ちた。衝撃で床は壊れてくぼみ、月夜の森に落下音が響き渡った、近くの木から鳥がザワザワと飛び立っていく。
ケヴィンの腕に抱えられていたシャルロットは目をぐるぐる回しながら、久しぶりに感じる床の存在を確かめている。
「も、もうこんな着地は二度としたくないよ……でち」
あれ、イマ一瞬普通のしゃべり方してた?——ケヴィンは疑問に思ったが、考えても仕方がなさそうなので、呵呵と笑うことにした。
「わ、笑いごとじゃないでち!」
シャルロットがあたりを見渡すと、そこは暗く寂しい雰囲気が漂

っていた。月夜の森の木々の下に入れば、そこは闇夜が支配する獣人の世界。ビーストキングダムの屋上は森の木々より高いところにあるが、ここにも森の闇が届いていた。

「あれ、でもここ、月のマナストーンが塔の中にあったからで……あれ？」

（それはきっと、月のマナがあの塔に蓄積されているからね）

「その声は、ルナ？」

（そうよ。お久しぶり、になるのかしら）

「月読みの塔に月のマナが蓄積ってどういうことでち？」

（あの塔は本来、月の魔力を呼び込んだ上、月のマナストーンを内部に安置することで、あの塔自身を満月の変わりにしていたの。でも、満月が輝くのは夜だけ。月は自ら光を発しないから。言ってること、わかるかしら？）

ケヴィンはさっぱりという感じで首を傾げた。しかし、ここでシャルロットが意外な反応を見せる。

「つまり、月読みの塔を満月の変わりにすることと引き換えに、この森全体は夜であり続ける、ということでちか？」

（その通り、なんだけど、あなたが理解できるなんて意外ね。ケヴィンも驚いているわよ）

大きく頷くケヴィン。シャルロットは得意げ顔をして言う。

「ここで二人してわりまちぇんってなったら、話が進まないでち。あまりに長い文章は飽きられてしまうんでち」

（よくわからないけど、説明を続けるわね。このシステムを作ったのは、古代の獣人たち。もうずっと前、人間の記憶からも忘れる程昔に獣人がこの世界にやってきた頃の話ね。ずっと月の魔力を放出してきたのが自然の摂理になってしまったの。だから、月のマナストーンがなくなっても、この森だけは夜の闇が広がっているのよ）

「ちょ、ちょっと待ってほしいでち！獣人がこの世界にやってきたって、どういうことでちか？獣人族も最初からこの世界に存在していた種族ではないんでちか？」

（良い質問だわ。でも、それは私じゃなくて彼に聞いてみて。ねぇ、ガウザー？）

耳慣れぬ名前を聞き、困惑する二人。他に誰かいるのかと思い、辺りをキョロキョロと見渡す。すると、屋上の端に一つの椅子があることに気がついた。ゴツゴツとした石の椅子である。

そこを見た途端、ケヴィンの目が鋭く光った。いつもの調子とはまったく違う、目は血走り、殺気を漂わせる。

「オマエ……」

「やっと帰ってきたか、バカ息子め」

屋上の石イスに座っている男は後ろを振り向きもせず、ケヴィンに話しかけた。腹に響く重低音だった。

「獣人王、オイラ、あんたを許さない！」

瞬間、ケヴィンは地面を蹴りブラックファングへと姿を変えた。拳を握り締めて強烈な一撃を放つと、獣人王の座る石イスを粉々に砕いた。衝撃に噴煙が舞い上がる。

「まだまだだな。だが……」

いつの間にか宙を舞っていた獣人王。

バサっというマントが翻る音と共に、彼はケヴィンと対峙する位置に降り立った。

「いい目をするようになった」

「黙れ！よくもカールを……」

「ハッハッハ、その早とちりがおまえの悪い癖だ」

「何を言って……カール？」

獣人王はマントの下から腕に抱いたウルフを見せ、足元に放した。そのウルフは尾をふりながらケヴィンの下に駆けていく。

「どうしてカールが？！」

「死を食らう男の呪術でそいつは仮死状態にあったのだ。それをおまえはよく確かめもせずに埋めてしまった。後でワシが掘り返さねば、今頃本当に死んでいただろう」

「……獣人王、オイラ、あんたのこと誤解してたよ。……ごめん」

（ガウザー、ケヴィンもいい大人よ。そろそろ本当の事を教えて上げたら？）

ルナの言葉が彼らの頭の中に響く。獣人王の頭の中にも。

彼は険しい顔のまま瞳を伏して考えた。そうして瞼を開け、遠い目をしながら語り始めた。

「……人間への復讐とか、マナの剣とか、そんな事にはワシは関心がない。このビーストキングダムを建てたのも、それまでの獣人達があまりに情けなかったからだ。憎しみは人に力を与える。獣人達に人間への憎しみを抱かせることで、それまでの獣人達を変えたかったのだ」

「獣人……王……」

「この弱肉強食の森を支配するのは力だ。類い希なる力を秘めたおまえにはこの世界を正しき方向へ導く使命がある。そのために、ワシは母親は出ていったのだと嘘をついた。ワシへの憎しみを煽るために」

「？！？　どうしてそんなことを？！」

「将来、おまえがワシを殺すためだ。この森を支配するには、ワシを倒さねばならぬ。だが、かつてのおまえはワシには到底勝てなかっただろう」

二人の会話にシャルロットが口を挟んだ。

「どうして急にそれを話すんでちか？」

「ケヴィンが強くなったからだ。憎悪を自分の中に取り込み力にする。強い力を手に入れた以上、こんな嘘に何の価値もないからな」

「とう……さん……」

「……いいか、ケヴィン。自分の信じた道を進むのだ」

「わかったよ、父さん！」

「最後に、【バシュカー】となったおまえにこれを託そう」

獣人王はマントを脱ぐと、うちに秘めた野獣の力を解放し始めた。これまでに感じたことのない雰囲気が二人の肌を包み込む。全身がビリビリと刺激され、気迫だけで身体が潰されそうな錯覚に陥る。

「くっ！父さんの獣化、初めて見る……」
　獣人王の放つ気にシャルロットは恐怖のあまりヘタリ込み、ケヴィンも身動き一つできなかった。二人とも嫌な汗が止まらない。
「ぐおぉおお！」
　全身真っ黒で、悪魔のように赤い目をしたウルフに変身した獣人王、彼は右手の爪を胸に突き刺した。心臓を鷲づかみするかのように。サバイバルナイフのようにギザギザした爪が、分厚い胸の肉に穴をあけ、そこから浅黒い血をドクドクと流す。
「ガァァアア！！」
「と、父さん！？いったい何を？」
　ゆっくりと抜かれる血まみれの指、ドプリッとあふれ出る黒血、そして心臓を中心に開いた丸い穴。そこからまばゆい光がポツポツと浮かぶ。５つの小さな光の結晶が集まり一個の光となると、紅色の水晶へと変化した。
「ハァァ……。これは『死狼の魂』だ。歴代の獣人王が極めし戦闘の真髄ともいうべき技法が入っている」
　彼は獣化を解きながら、レアアイテムをケヴィンに授けた。獣人王が息を切らすところなど初めて見るケヴィンは声にならない声を出して、それを受け取った。
「必ずおまえの力になろう……持って行け……」
　彼は息とタイミングを整えるため、目を閉じて深く呼吸する。それからフッと目を開けると、ルナに促された話を口をにした。

　ケヴィンたちが獣人王から真実を聞いていた頃、デュランたちを乗せたフラミーは灼熱の砂漠を飛んでいた。
　木々の茂る月夜の森とは違い、オアシスの村ディーンは砂漠の中にある小さな村である。村の外れの砂の大地にフラミーはゆっくりと足を降ろす。
　何人かの村人が駆け寄ってきたが、先を急ぐデュランたちはホー

クアイとリースを降ろすと、次の目的地をフラミーに告げた。彼女が砂の大地から飛び立とうとする直前、

「ホークアイ！リース！」

「ん？なんだよ、デュラン？」

「ケヴィンとシャルロットには伝え損ねたけど……」

そう言ってデュランは拳を突き出す。

「無事に、また会おう！」

「……もちろんだ」

突き出された拳にホークアイも拳をぶつける。それを見ながら、リースもデュランとアンジェラに微笑み、頷いた。

フラミーは四枚の翼を羽ばたかせ、ふわりと空に舞い上がった。彼女が空に消えていくとほぼ同時に一人の女性が人の垣根を分けて前に出てきた。

「ホークアイ、それにリース、こりゃあ一体どういうことだいっ？聖域で何があったんだ？」

「ファルコンおばさん、大変なんだよ！」

「詳しくは、おばさんの家で！」とリース。

二人はファルコンの家へと駆けて行った。

灼熱の地から極寒の地へと飛ぶ聖獣の背でデュランはアンジェラに問いかけた。

「アンジェラ、本当に行くのか？」

「行くわ。この子も連れていかなきゃいけないし」

アンジェラは胸に抱く少女の体をより強く抱きしめた。

「でもあそこは……」

彼女は一旦目をつぶりと、それから決意に満ちた瞳をデュランに見せた。

「行くわよ。アルテナに」

アンジェラは現アルテナ領国治者・理の女王の一人娘であり、第一皇位継承者である。だが同時に、抹殺命令の出された身でもある。

理の女王――実の母――に出された抹殺命令。いまだにその命令は取り消されていない。そんな中、彼女はアルテナに戻る事を決めた。それは自身の命を危険にさらす行為であったのだが、それでも彼女は故郷に戻らなければならない理由があった。

彼女は決意に満ちた瞳を開けると、腕の中で眠る少女の顔を見た。

デュランはアルテナの領空に入ると、フラミーの降りられそうな場所を探した。下では、突然現れた怪獣――フラミー――に驚く城下町の人々が、彼らを指差したり、家の中に逃げ込むなどしている。

「デュラン、あそこ」

アンジェラは少し先にある、開けた場所を指差した。自己主張のつよい煌びやかな花々が咲く大きな庭である。

「でもあそこは……」

「あたしが良いって言ってんだから良いのよ」

彼女の言葉を受けて、フラミーは降り立った。アルテナ城の中庭に。

すぐさま、城内警備をしていたアルテナ兵が集まり、警戒の陣を展開する。だが、彼らを囲む兵士のほとんどは十代半ばほどの新兵、いや正規の兵士であるかも疑わしい。ついこの間まで単なる市民だったのかもしれない。

だからだろう――皆が武器を向けるのだが、脅えた顔で誰一人として立ち向かってくる気配がない。ただ、不安の混じった声で言う――アンジェラ様だ――フォルセナ兵も一緒だ――あの抱かれている人は、隊長じゃないか――等々、と。

その中から一人の老人が姿を表す。頭は秀でて、腰は曲がっているが、どこか威厳が漂っている。

「ア、アンジェラ……さま……」

「ホセ……」

老人は駆け足気味にアンジェラに近付くと、涙を浮かべて彼女の肩を両手で叩いた。彼女がホンモノであることを確かめるように。

ここに彼女が存在していることを確かめるように。

「よく……よくぞ、ご無事で……」
「ホセ、アイリスをお願い……」
アンジェラは哀しげ表情で顔を落とした。ホセも同じように顔を落とし、安らかに眠る教え子を見た。
「おお……アイリス……」
「『守りたいものために闘った』って、アイリスは言っていたわ」
ホセはアイリスの頬をなでる。冷んやりとした感触が手のひらから伝わってくるのがわかった。
「そうか。答えを見つけたのか」
静かに、ホセの右目から涙が伝い落ちた。彼は何度も頷き、何度も彼女の頬をさすった。
「ホセ……それにここにいる皆も聞いてちょうだい！」
アンジェラは叫んだ。そして宣言した。
「第一皇位継承者、アンジェラの名の下において、私は私自身に出された抹殺命令を破棄します！」
その言葉に皆はざわついた。抹殺命令の対象となっている者が抹殺命令を取り消すと言っているのだから、当たり前である。
遠巻きからアンジェラ達を伺うように見ていた一人の青年が戸惑い言った。
「しかしアンジェラ様、いくら何でもそれは……」
「ヴィクター、黙りなさい」
「ひっ！じょ、女王様！？」
氷のように冷たい瞳が青年を射抜く。その鋭い視線に思わず彼は理の女王を想起してしまった。
アンジェラは驚き目を見張るホセをそっと見て、
「全ては紅蓮の魔導師の仕業、あいつがお母様を操っていたのよ」
「な、なんと！？」
さらに驚くホセ。
だが彼の後ろから、またも違う声が響いた。
「なりませぬ、ホセ様！」

皆が声の主を見やる。そこにはメガネをかけた、目のキツい中年の女性が一人いた。

「アンジェラ様は命令の対象者なのですよ！そんな人間が抹殺命令を破棄するなど許されません！さあ誉れあるアルテナ魔術兵よ、アンジェラ様とあのフォルセナ兵を捕らえよ！」

彼女は毅然とした態度で叫んだ。

彼女の言った事は正当である。間違ったことは言っていない。正しい理屈である。だが、

「どうした、何をしている?！早くあの反逆者を捕まえなさいっ！」

すると一人の少女兵が訴えた。手にしていたステッキを、カランと地面に落として。

「もう……戦いたく……ない……」

「きさま、なにを……」

「あ、たしも……」

涙声で言った彼女に続いて、違う少女が言った。ポロポロと涙を流しながら。

すると、次々と兵士は武器を捨て、涙ながらに呟き、訴えた——もう嫌だ——家に帰りたい——お母さんに会いたい——お姉ちゃんに会いたい——もう人が死ぬのは、イヤだよぉ、と。

「ピアーニモ、これが皆の意志よ」

アンジェラは静かに、語りかけるように、言った。それを継いで、ホセも口を開く。

「おぬしも、もう良いのじゃ。戦略室室長の任はもう解く。ワシらの侵略戦争は、もう終いじゃ。さあ、聖域に行った妹を迎えに行こうの」

ホセの優しい言葉を聞き、ピアーニモと呼ばれた女性は瞳を濡らすと両手で顔を覆った。

「は、い……うっ……うぐ……」

皆の様子を見て、アンジェラはホセに尋ねた。

「ねえホセ、お母様はこの城にいるの?」

「いえ、それが……ギガンテスがアルテナを発ってから姿が見えず……」

行方不明。いや、紅蓮の魔導師が連れ去ったのだと、アンジェラは知っていた。

「理の女王様がいない以上、第一皇位継承者の私が全権を持つのよね？」

「う、うむ……暫定的ではあるが、それがこの国の決まり事じゃのお……」

だったら命ずるわ――そう言って、アンジェラは息を吸った。

「今、ここで、非正規の者の兵役を解きます！正規兵も家に戻り、待機しなさい！以上よ！」

それから、アルテナ城に兵士は一人もいなくなった。

静かな城の中、アンジェラはアイリスを彼女の部屋に連れて行った。

アイリスはアカデミーを卒業した後、そのまま王室の兵士となっている。王室の兵士は城下町ではなく、城の敷地内にある特別の生活棟で寝食をするから、アイリスの部屋も城内にあるのだ。幸か不幸か、彼女は天涯孤独の身の上であり、訃報を知らせる相手はいなかった。ただ、彼女を慕う友や部下は静かに涙を流していた。

こじんまりとしたベッドにアンジェラはアイリスの体を置いた。初めて入る親友の部屋、机の上には一枚の写真が飾られている。アカデミー時代の写真、アイリスとアンジェラと、それから茶髪の男の子が笑いながら仲良く写っている。

「姫さま……」

手に取った写真を見つめるアンジェラにホセが話しかけた。

「わかってる。すべてを話すわ」

アンジェラはそう言って、顔を上げた。そして彼女を見守るホセ、ヴィクター、ピアーニモ、そしてデュランを見た。

玉座に移動したアンジェラは、ホセたちにすべてを話した。紅蓮の魔導師が理の女王を操っていたこと、神獣の封印が解けてしまったこと、そして、これまでの旅のことを。

「私をここまで守ってくれたのは、ここにフォルセナ兵デュランです」

「ハハ、ど、どうも」

ホセたちの視線を一手に浴び、デュランは照れながら固い笑顔を作って手を上げた。無意識に頭の後ろを左手で掻いている。すると、ピアーニモと呼ばれていた女性がアンジェラに視線を戻し、メガネのブリッジを上げながら言った。

「アンジェラ様、あなた様の旅の経過はわかりました。しかし、どれ程まで腕を上げられたのか、示して頂けませんか？」

「ピアーニモ様、まだそんな事を言うのですか。先ほどの“氷の瞳（め）”をご覧になられたでしょう。アンジェラ様はもう立派な魔術師ですよ」

氷の瞳？――聞き慣れぬ言葉にデュランは首を傾げた。だが、他の人たちは彼の疑問に答えるよりも、ピアーニモの提起した問題の方に関心が集まっていた。

「しかしねヴィクター、あれだけではアンジェラ様が魔法を使えるようになったとは……」

「わかりました」

確信を欲しがる軍事長にアンジェラは答えた。そしてブツブツと呪文を唱え、

「エアブラスト！」

たちまち玉座に疾風が舞い踊り、いくつもの竜巻が巻き起こった。

「うわぁ！」

「むっ……これは……」

室内で吹き荒れる突風にヴィクターの体は転がり、ホセやピアーニモは身を構えた。デュランも腕で顔を守る――守りながら目の端で目を見開くアンジェラの姿を捉えた。驚きの表情が徐々に不思議

そうな顔へと変わっていく。
「わ、わかりました、アンジェラ様！もう結構です」
ピアーニモに言われるまでもない――それはアンジェラにもわかっていた。だが、風はやまない。
「フン！」
魔法を解除する間を与える前にホセが床を思い切り蹴りつけた。すると、荒れ狂う風がかき消されるように静まった。
老いてもアルテナにその人ありと言われた大魔術師である。高レベルであろうと基礎魔法程度なら魔力を拡散させることで、これを破ることができる。
静まりかえる玉座で、元大魔術師が口を開いた。
「これでわかったじゃろ、ピアーニモ」
「はい。十分です」
ピアーニモは薄く微笑み、玉座を後にした。
アンジェラは残ったホセとヴィクターに言う。
「明日の朝、水の神獣を討ちに行きます。全軍に通達を。それと同時に聖域に残されている兵士を回収します。ホセ、ヴィクター、立案をお願いしますね」
「お言葉のままに」
ホセは落ち着いた様子で言う。それとは対象的に、ヴィクターはあたふたと焦っていた。
「デュラン、こちらに来なさい！」
「あっ、お、おう」
自分を呼ぶアンジェラの声にデュランはビクッと緊張し、駆け足で玉座を出る彼女を追いかける。
久し振りの自室に戻るアンジェラ。その後ろを歩くデュラン。いつもと様子の違う彼女にデュランは声をかけられなかった。
「ここがあたしの部屋よ」
「お、おう」
「あんたの部屋が用意出来るまで、あたしの部屋にいなさい」

「お、おう？」
謎の緊張感で声が上擦るデュラン。
アンジェラは部屋に入ると、
「さっさとドアを閉めてちょうだい」
そう言いながらベッドへと歩いていく。
デュランは後ろ手でドアを閉める。それと同時に間延びした声が聞こえた。
「ふぁあ～、緊張したぁ～」
さっきまでと打って変わり、いつもの調子に戻るアンジェラ。誰かが整えていたのか、埃一つないベッドに倒れこむように身を任せる。
ふわっふわした枕を引き寄せてあごを置くアンジェラ。彼女は首を動かしてデュランは見た。
「みんなの前だからあんな風にしたけど、今はいつも通りでいいわ」
「いつもはあんな感じなのか？」
「ううん。でも、リースを見てて、王女ならこうしなきゃって思ったのよ……ってデュラン、何ニヤツいてるのよ」
「えっ、そ、そうか？」
「ニヤついてるわ。その癖は治した方が良いわね。見てて気味が悪いわ」
ツン、とアンジェラはそっぽを向いた。
デュランは何だか嬉しかったのだ。いつまでもお転婆な魔法使いのままではなく、王女としての自覚を持ち、王女として生きることを決意したアンジェラの姿を見て、なぜだか嬉しかった。
だがそれは、彼にとって新たな関門となることを意味した。彼はそれに気付かない。いな、気付いていて、あえて気にしないでいるだけなのかもしれない。
そこに部屋の扉を叩く音が響いた。
「アンジェラ様、入ります！」
そう言って、一人の女中が部屋に入ってきた。兵士には待機命令

を出したが、王侯貴族の世話をする女中たちは変わらず城内であくせく働いていた。
「なに？」と尋ねるアンジェラ。
気が付けば、身を起こし、ベッドに腰かけるように座っている。
「食事の準備と、デュラン様のお部屋の準備が整いました」
「そう。この者とこれからのことを話してからすぐに行きます」
「かしこまりました」
気品良く女中は出て行った。
「ふぅ、びっくりしたな」
「ホントね。みんなの前にいる時は、あんたもそれなにの接し方しなさいよ」
ふむ、とデュランは一拍おいてから、片膝を付いた。
「仰せのままに」
「ふふ、よろしい」

二人は食事の用意された大きな部屋に向った。
扉を開けると、そこには大きな空間が広がっていて、白い布が引かれた長いテーブルの端に食事が5人分用意してあった。すでにホセやピアーニモ、ヴィクターが席に付いていたのだが、アンジェラが入って来たのを見て、立ち上がった。
「お二人とも、どうぞこちらに」
ホセの言葉に従い、二人は用意された席へと座る。ヴィクターは一人席離れ、アンジェラに用意された真ん中の椅子を引いた。
「アンジェラ様はこちらに」
「ありがとう」
「アンジェラ様、随分大人しくなられましたね」
「この旅で多くを見てきたから」
「アンジェラ様の世話役をしていた頃が嘘のようにございます」
ヴィクターのすすり泣きを背で聞きながらアンジェラは腰かけた。
それを目の端に捉えながら——あのお転婆だもんなぁ、大変だっ

たろうに、と同情しながら、デュランは自分で引いた椅子に座った。
「それより、今のアルテナの現状を教えてちょうだい。神獣との戦いに備えて策を考えたいの」
「でしたら私が」
そう言ったのは、つい先刻まで軍事室室長の任に就いていたピアーニモだった。彼女はきれいに扱っていたナイフとフォークを皿の上に八の字に置くと、メガネを中指でくいっと上げ、
「兵士は先ほどご覧の通り、ほとんどが町民から集めた者で、正規の者は３４名のみです。そこから救助隊に人員を割きますので、残るのは２０名ほどになるかと」
「……そう。魔法生物部隊はどうなの？」
「特装型マシンゴーレムのほとんどは紅蓮の魔導師が聖域に持って行ったはずです。ユニコーンヘッドや量産型マシンゴーレムなども残っていますが……」
「神獣相手には心許ない、かのぉ？」
言い淀んだピアーニモにホセが言った。その言葉に彼女は頷くだけだった。
オカシイわね、どうして……――アンジェラは小さな声で呟き、眉間に皺を寄せた。その様子を目の端で捉えたホセは、ゆっくりと食事の手を動かしていた。

デュランたちがアルテナの危機的状況で動いた頃、ホークアイたちは砂漠の小村、質素な道具屋の中で作戦会議に徹していた。テーブルを囲むのはホークアイ、リースの他、店主のファルコン、ホークアイの弟分ニキータである。
ホークアイとリースが、聖域での出来事や神獣が復活したこと、そして復活した神獣をホークアイたち６人が討伐すると決めたことを説明すると、
「わかったのにゃ。オイラに考えがあるのにゃ！」

と言って、ニキータが砂の都サルタンに向けて旅立ってしまった。旅立つと行っても、灼熱の砂漠を越えるだけの小さな冒険。ナバールで培った技術や、これまでの冒険で得てきた経験をいかせば、散歩に等しい程の旅である。

残されたホークアイたちは、

「ファルコンおばさん、神獣と戦う前にナバールの宝物庫から武具を取ってきたいんだ」

「そいつは構わないが、ナバールのアジトは魔界のモンスターや自我を失った兵士でいっぱいだよ」

「わかってる。だから、ファルコンおばさんにも手伝ってもらいたいんだ」

「あたしに、かい？」

ファルコンは怪訝な顔をした。戦力で考えればファルコンを連れていくより、リースを連れていく方が得策である。一年近くも戦火を共にした二人のコンビネーション、ナバールの残党兵など一捻りだろう。それをわかっていながら、ホークアイはファルコンとのパーティを望んだ。

「ファルコンおばさんは元ナバール兵だろ？ナバールの宝物庫の場所とか、鍵の開け方、それにナバール兵の戦法も熟知してるはずだ」

「ナイトブレードだって楽に倒せる自信があるね。わかった、あたしがあんたをサポートしよう」

「サンキュー、ファルコンおばさん」

「だが、あたしたちが出払っちまってる間ここに残るのはリースだ」

ファルコンはリースの方へと視線を移した。

「ジェシカの世話、頼めるかい？」

「……わかりました」

ファルコンの鋭い視線から逃げるように目を逸らし、リースは頷いた。

そんなやり取りがあったのが、ルナの日の昼間。

日が暮れて、ディーンの村がひっそりとした中、ホークアイとファルコンは潜入ミッションに取り掛かろうとしていた。
「それじゃあリース、ジェシカのこと頼んだよ……て、どうしたんだい、人の格好をまじまじと見て」
懐かしいシノビ装束に腕を通したファルコン。ニホン刀を背負い、髪もポニーテールのようにまとめられている。敵を斬り颯爽と掛け抜ける姿が想像できる。
「ああ、この格好に慣れないんだね。久し振りに着てみると何だか気合いが入っちまってね、思わず昔の装備にしちまったよ」
「むね……」
「はっ？」
「やはり色香の術というのは嘘なのですね」
リースは聖域で胸が大きく開いた、中まで見えそうほど裾の短いニンジャ服を着ていた。ホークアイに騙されて。
「リース、安心しなよ。あんたには需要があるからね。あいつも遊び心であんな事をしちまったんだ」
リースはファルコンが言っていることをよく理解できなかった。キョトンとしているリースを無視してファルコンは言う――１０年以上経ったってのにこの子だけは大人気だからね、不思議な魅力ってやつなのかい？
それを聞く二人は最初、キョトンとするだけだった。だが、ファルコンのセリフがメタ発言であることを察知し、ホークアイは焦り始めた。
「さ、さあ、おばさん！ナバールのアジトに向かおうぜ。ゆ、ゆっくりはしてられないんだ」
「ん、そうするかい」
二人は出ていった。闇に消えるように音もなく――気配を消す。流石はニンジャ、である。
残されたリースは軽く溜め息をもらしながら、地下の寝室に向かった。

ホセらとの作戦会議を兼ねた食事が済むと、デュランとアンジェラはそれぞれ浴場に向った。長い旅の垢を落とすいい機会であり、デュランにとっては天国のような時間だった。

風呂からあがり、ランニングTシャツとゆるいズボンというラフな格好で廊下を歩くデュラン。用意された自室に戻る途中にある渡り廊下に差し掛かると、アンジェラの世話役、ヴィクターが夜風にあたっているのが見えた。

「よお！」

「デュラン様……」

「そんなに変わったのかい？アンジェラ王女は？」

「え？ええ、そりゃもう。王族らしさといいますか、以前はそんなもの犬にでも食わせてしまったかのような性格だったのですが……」

嬉しそうに言うヴィクターを見ながらデュランは再び内心で同情した――ホントは今も変わってないんだぜ、ドンマイ！

「しかし今は、氷の瞳をなさるほどになり、僕はもう感涙ものですよ」

「氷の瞳？」

またも出てきた耳慣れぬ言葉にデュランは首を傾げた。

「はい。別名アルテナの瞳とも呼ばれ、代々アルテナの統治者が持つ瞳なのでございます。理の女王様も先代の女王様も、その瞳をもって我らを導き、国を治めてきたのです。デュラン様もごらんになったでしょう？　あの冷たい瞳のことですよ」

「ああ、あれか」

二人が話していると、そこに一人の女性が駆けてきた。シルクのバスローブ姿という、色気のある格好で。

「こんな所にいたのですか、デュラン」

「ひ、姫様。そのようなお姿ではお風邪を召してしまいます」

慌てふためくヴィクターと、困惑して絶句するデュラン。アンジェラは世話役の言葉を無視して、一兵士に言う。
「デュラン、今宵はわたくしの部屋で寝なさい」
「っい？！」
流石にこれにはデュランもヴィクターも驚いた。デュランはこれまでの旅の中で彼女のアグレッシブな行動を見てきたし、ヴィクターもまた長く世話役として彼女に関わってきたから、その傍若無人な性格はよく知っていた。だが、しかし。しかしながら。
「いいいいけません、姫様！いくら命を救われしお方でも一傭兵を王女の部屋に連れ込み一晩を共にするのは」
「そ、そうです。それはマズイぜ、いやいやよろしくないかと……」
「黙りなさい！わたくしがいいと言っているのです！ほら、行きますよ！」
「いや、ちょ……」
アンジェラは困惑しているデュランの腕をとり、強引に引っ張って行った。
ヴィクターは自分一人ではアンジェラを止められないと考えたのか、二人とは反対の方向に走り出した。ホセを呼びに行ったのだろう。

緊張というか、焦りというか、よくわからない理由でパニックとなっているデュラン。アンジェラを制止すること能わず、彼は夕刻にも訪れた王女の部屋に連れ込まれた。
「ふぅ。やっと邪魔者はいなくなったわ。さ、いくわよ、デュラン！」
部屋に着くなり、アンジェラはやおら服を脱ぎ始めた。
「ちょ、待て待て待てっ！おま、なに言ってんだ！」
デュランは両手で目を塞いで叫んだ。対称的に、アンジェラは落ち着き払っている。
「変な事言ってないで、さっさと服を脱ぎなさいよ。それじゃあ何

にもできないわよ」
「えええ、何言って……」
決心した女性はこうも強いものなのか――と、どこか感心するデュランは恐る恐る目を開ける。すると、バスローブの下には【デルヴァー】の防具、そよかぜの衣がアンジェラの肌を隠していた。周りにはデュランの荷物、自室に置いてきたはずの武具まで置いてある。
「これは……？アンジェラ、何するつもりだ？」
「何って脱走よ、だ・っ・そ・う」
「脱走？なんで？」
一線を超えずに済んだことに安堵する暇なく、さらに予想外な展開に驚くデュラン。
「さっきの戦力聞いたでしょ？あんなんじゃ勝てるわけないわよ。今から私たちで倒すしかないんだよ、水の神獣」
「だからって、何で今なんだ？」
「デュラン、今は何曜日？」
「ええと、ルナの日だな」
「そ。んで、あと数時間すればサラマンダーの日。水属性モンスターの力が衰える日よ」
そう言いながら、彼女は窓を開ける。すると、年季の入ったロープが下まで垂れ下がっていた。アンジェラの説明に合点がいったデュラン。手慣れた様子で用意された脱出ロープを見て目を細める。
「……おまえ、さては常習犯だな？」
「へへぇ、ばれたか」
デュランがささっと防具を身につけると、二人はロープを使って城を抜け出した。夜の闇に潜みながら城から城下町へ、そして雪原へ通じる門へと走る。
門前に着くと、意外な二人がデュランとアンジェラを待ち伏せていた。
「お待ちしていましたよ、アンジェラ王女」

「ホセ！それに、ヴィクターまで」
「水臭いですよ、アンジェラ様」
「……ごめんなさい。でも、神獣倒せるのは私たちしかいないんだよ。もうアルテナの兵士やその家族に悲しい思いさせるわけにはいかないよ、王女として」
「わかっております。……どうぞこれを持っていってくださされ」
苦しそうに言うアンジェラに、ホセは小さな道具入れを二つ渡した。
「これは？」
「一つは僕たちからのプレゼントです。そっちの青い袋がそうです」
「こっちの赤い袋は、アイリスからじゃ」
「えっ、どういうこと？」
「アイリスの部屋に置いてあったのじゃ。どうやら、アカデミー卒業のプレゼントに用意していたらしい」
アンジェラはゆっくりと二つの袋を受け取った。特にアイリスからという赤い袋に気が取られる。まじまじと赤い袋を見ると、後ろに日付が刺繍されていた。アカデミーを卒業したら、三人でお祝いのプレゼントを渡し合おうと約束した。だが、卒業式の“アノ日”にアイリスだけは二人に何も送らなかった。送れなかった。
それを思い出しながら、アンジェラは二つの道具を仕舞った。アイリスは用意したプレゼントを捨てずに持っていた。いつかまた三人で笑い会える日が来ると願い、信じていたのかもしれない。
「ありがとう。アルテナのみんなをよろしくね……」
「アンジェラ様、ご自身のお力を信じるのじゃぞ」
「えっ」とアンジェラは不思議そうな顔をした。だが、誰もそれに気づかない。そして、ヴィクターが別れの挨拶を口にする。
「姫様、御武運を！」

二人は日の落ちた雪原に出て、氷壁の迷宮に足を踏み入れた。入り口の穴から入れば、すぐ目の前にマナストーンがあったのだが、

やはり今、マナストーンはない。だがその代わり、
「ねぇ、デュラン……このおっきな足跡、なんだと思う？」
「さぁな。それよか俺は、このどでかい穴を開けた奴を知りたいぜ……」
アンジェラは巨大な動物のいた痕跡に声を震わせた。そして、以前ウンディーネが言っていた、氷ついて塞がってしまったという壁には、巨大な何か通った跡がポッカリと開いていた。
「きっと、この先にいるんだね」
二人は恐るその穴をくぐり向け、迷宮の奥に入って行った。
「ねぇデュラン……」
「なんだ？」
「……寒い」
「そりゃあ、そんな格好してくるからだろう。前にも来たんだ、寒いのはわかってただろう」
「だって前来たときはこの中、こんなに寒くなかったんだもん……」
そのとき、水の精霊の特徴ある声が二人の頭に響いた。
（確かに、夜とはいえこの寒さは異様や……）
「でしょ？それになんだか、さっきから誰かに見られてる気がして、ゾクッとするんだよ……」
「ぶ、不気味なこと言うなよ」
二人は周りをキョロキョロと見渡した。しかし、そこには凍りついた壁しかなかった。しかし、遠くで何かの気配がした。
（気ぃつけぇ！何か来るで！）
ウンディーネの声が消えると同時に、洞窟の闇の中からフロストドラゴンやプチポセイドンといった上級モンスターたちが姿を現した。
「いくぜ、アンジェラ！」
「うん！」
デュランは剣を抜き、アンジェラは杖をしっかりと握り、襲い来るモンスターに立ち向かっていった。

「くっ！こいつら、雪原のモンスターより全然強いぞ！」
フロストドラゴンの冷たく固い尻尾が剣を弾き、デュランの手を痺れさせる。
「任せて！……ファイヤーボール！」
アンジェラはシードラゴンの冷たい吐息（フローズンブレス）を交わすと、素早く炎の呪文を唱えた。
彼女の周りに赤い火の玉が九つ、姿を見せた。だがそれは、聖域で見たマグマのように大きく黒い炎の塊ではなかった。蛍火のように儚く、小さい炎の塊。
多少のダメージを与えることはできるが、モンスターを圧倒するほどの威力は見せない。
「アンジェラ、ない手加減してんだ！？」
「う、うん、ごめん！」
小さな紅玉に気を取られるなどした敵の隙をついて、デュランが剣技を見舞った。
その後もデュランたちは苦戦しながらも、水棲モンスターを倒して、氷壁の洞窟の最深部へと向かっていった。

# 第五話―B

ルナの日が更けていく時刻、ケヴィンとシャルロットは月のマナストーンがあった月読みの塔の中を昇っていた。
「ケヴィン～。あと何階あるんでちかぁ？」
「もうちょっと」
「もうちょっとってどれくらいでちかぁ？」
「今が８階だから、あと４回くらい階段を上がる」
「……うへぇ」
シャルロットは口を半開きにしてうなり声を上げた。月の塔の中には、シルバーウルフやブラッディウルフ、カーミラといった強豪モンスターが跋扈していた。それと戦ってここまでやって来たのだ。体力や魔力をすり減らし、足は棒のように痛んでいた。
「ちょっとだけ休憩でち」
シャルロットは足を止め、モンスターのいない階段に腰を降ろした。
「それにちても、さっきの獣人王の話には驚いたでち」
「オイラたち獣人、魔界から来た……」
「ずっとむかちの話でち。獣人だけじゃなくて、カーミラとかもでち。知能の高い魔族がこの世界に進出してきたんでちたね」
シャルロットはまんまるドロップを口にしながら言った。
「魔族の血薄まって、オイラたちは獣化能力だけ、カーミラは相手の力を減少させる能力だけ残った」
「他にも魔界から来た、モンスターもいるかもちれないでちね」
シャルロットたちが休憩していたルナの日の夜中、リースはある家屋の地下にいた。
マナの減少により、砂漠化が広まるファ・ザード大陸の南東地域。

水がより一層貴重な資源となっているのはディーンでも同じであった。

そのディーンの道具屋の地下、長い時間、美獣の呪いで苦しみ続け、いまもなお意識を失っている少女、ジェシカ。彼女はナバール盗賊団首領フレイムカーンの娘であり、ホークアイの幼馴染でもあった。

彼女が眠るベットの脇に、リースは静かに座っていた。神獣の封印が解け、世界に終末の危機が迫っていることなど知らずに眠るジェシカの顔を見つめながら、リースは悶々としていた。

この砂漠で修行しているときも、彼女――ジェシカとは同じ家にいたのだが、こうやって二人きりになるのは初めてのことだった。二人きりと言っても、彼女は長い間掛けられていた呪いで衰弱し、意識を失ったままである。

だからだろう。リースはその場に居続けることができた。だが、

「うぅ……ん……」

ゆっくりと開かれた瞳、そこに映るのは驚きを隠せずにいる自分（リース）の姿だった。

意識を取り戻したジェシカはしばらくの間リースの顔を見つめ、

「あ……あ……」

と唸るような声、いや音を口にした。

リースは最初、ジェシカがどうしたいのかがわからなかった。何かを言いたいのだろうけど……、と推知するも何故喋ろうとしないのか、わからない。しかし、

「あっ！」

喋ろうにも喋れないんだ！――と彼女は思った。長い間眠りについていたのだ、喉が渇いてうまく発声できないのも仕方がない。

「ちょっと待っていて、下さい」

リースは飲み水を取りに走った。

彼女はコップ一杯の水を差し出す。すると、ジェシカは勢いよくそれを飲み干した。
そうして、ケホンケホンと咳払いをすると、
「ありがとう。でも、あの……ここはどこ？あなたは誰、なのかしら？」
「ここはオアシスの村ディーン、道具屋の寝室です。それで、ええと、あたしは……リースと言います」
リースは正直戸惑っていた。相手は、父や仲間を殺め、一時とはいえ故郷を滅ぼした人達の首領の娘であり、そして何より……。
「リース、さん。あなたが私をここに？」
「……ホークアイが、あなたをここに運びました」
何より、ホークアイの幼なじみ。
「ホークアイ……ホークアイがここにいるの？どこ？どこに！？」
ジェシカは勢いよく跳ね起きると、リースの肩を掴んだ。目に涙を浮かべ、リースの痛みなど考えられない程に、彼女の肩を握る。
痛みに顔が歪むリース。それでもなお、ジェシカはホークアイの名を呼ぶのだった。
「ねぇ教えて！ホークアイはどこにいるの！？ホークアイ！」
リースの答えを聞こうともせず、ジェシカはホークアイを求める——求めて、叫ぶのだった。
彼女の口からその名が出てくる度に、リースは心を抉られるような不快感を覚える。見えない拳が彼女のミゾオチを殴るような、それでいて直接心臓を掴まれている、例えるならそんな感覚だ。
耐えられず、リースは叫んだ。

「いい加減にして！」

その瞬間、ジェシカはビクンッ、と体を強ばらせた。
騒がしかった寝室が、シンと静まり返る。沈黙がその空間を支配する。叫んだリースも、二の句が言えなかった。なぜなら、彼女自

身が自分の叫び声に驚いていたからだ。
彼女には、叫ぶ気など最初から毛頭無かった。ちゃんと事情を説明すれば、ジェシカも落ち着いてホークアイの帰りを待つだろう――理性はそう言っていた。だが、リースは感情に負けて、怒りを込めて叫んで、いや怒鳴っていた。実に王女（リース）らしからぬ振舞いである。
一瞬の沈黙を経て、彼女は我に返って口を開いた。
「あ、あの、ごめんなさ……」
その瞬間、道具屋の扉が勢い良く開く音が響いた。
リース、どうした！――階段の上から耳慣れた青年の声が聞こえた。だが、誰よりも早くその声に反応したのは、彼の幼なじみの少女だった。
「ホークアイ！」
ジェシカの声を聞いて、ホークアイはさらに足を早めて寝室へと飛び込む。ジェシカもベッドから飛び出すようにして階段へと走った。
そして、階段の下で顔を合わせた二人。ジェシカは瞳に涙を溢れさせてホークアイの胸の中に顔をうずめた。
「ホークアイ！わたし、わたし……」
「大丈夫だ、ジェシカ。俺が付いてる。もう、大丈夫だ」
ホークアイは幼なじみの少女を優しく包み込む――拒絶することなどなく――憚る様もなく――見せ付けるように、リースの目の前で、抱き締め合う二人。
リースはすっと顎を引いた。長くて細い、綺麗な髪が彼女の顔を隠す。その表情を覆うように。悲しかったのかといえば、そうではない。歪な感情が、彼女の心を奪う。
奥歯を噛み締めるリース。こんな思いなど、ローラントの王室では味わったことなかった。
再開を喜ぶ二人の横を通り、リースは逃げるような思いで寝室を後にした。階段を上がり、道具屋の出入り口から外に出る。途中でファルコンとすれ違わなかったのは、彼女が店舗の奥で着替えてい

たからだろう。
月の光りで若干明るい砂の地面を踏みしめながら、今度はリースが夜の闇に消えていく。

ホークアイに教えてもらった月が見える丘へと彼女は向かっていた。
別に目的があったわけではない。自然と足がそっちに向いていたのだ。この村で修行していた数ヶ月間、よく二人で月を見に行った丘に。
歩きながら、彼女は自分のした事を省みていた。
リースは風の王国ローラントの王女であり、アマゾネス部隊の隊長である。【ドラゴンマスター】で、ローラント女王でもあった母ミネルヴァは、弟が生まれた数日後に亡くなっている。幼くして母を失ったリースを育ててくれたのは乳母のアルマであり、共に槍術を磨いてきた仲間たちだった。
アルマの厳しい指導に泣いた事もあった。モンスターに勝てず苦悶する日もあった。だが、今日みたいに我を忘れて感情のまま叫ぶなど、一度たりともなかった。
途中のオアシスで、リースは顔を洗う。涙の跡は、もうない。水面に映る顔は思っていたよりも普通だった。
１６歳の時、戦禍に追われ世界に旅立つという過酷な運命を背負わされた王女。とはいえ、まだ少女である。好きな人が他の女の子を抱き締める姿を見れば、思うところがあって然り、である。まして初恋である。失恋という初めての感情を制御する術など、知るはずもない。
そこまで考えて、リースは首を振った。
「わ、わたしはまだ振られたわけではありません……よね」
好きな人が幼なじみを抱き締めたということが、即自分の失恋というわけではない――と、自分に言い聞かせるように思い返す。
まだ終わったわけではない。そう思えると、一片の希望が見えて

くる。リースはほんの少し、自分らしさを取り戻しつつあった。だが、

『ホークアイはどこ？どこにいるの！？』

そう叫んだ少女の瞳は、純粋で綺麗だった。一途にホークアイを想っている瞳だった。そんな瞳をした少女を、彼は抱き締めたのだ。彼女（リース）の目の前で。

やはり彼は、彼の本当の心はジェシカのことでいっぱいなのだろうか――そう思うと、深い溜め息が出るのであった。

「というか……」

今さらだなぁと思いつつも、リースはある事を確認した。大事な大事な前提事実を。

「私はこんなにまでホークアイの事を、好きでいたんですね」

ここでホークアイと再会し、邪眼の伯爵、美獣、そして黒の貴公子を倒すために修行を積んできた。その時間は、およそ一年。

それまでもウェンデルでビースト兵を相手に共闘し、ローラント奪還のときも力を合わせてくれた。ローラントを旅立ってから随分と同じ時間を過ごしてきたと、彼女は思う。

彼女がホークアイを異性として意識し出したのは、ローラントで唇を奪われてからであろう。あの瞬間、ホークアイがただ軽いだけの男ではなく、本当は優しく、強い男性なのだとわかった。それから、彼とずっと一緒にいたいと思うようになった――そして実際、長い間一緒に居続けてきた。だからこそ、彼女は満足していた。

目覚めない幼なじみ。共に戦うことで通じ合う心。

ホークアイの存在に甘えていたリースは、幸せだった――自分でも気付けない程に。

しかし、彼女の幸せな戦い（にちじょう）の日々は、ジェシカの目覚めと共に失われる。いや、正確には失われる危険が生まれたのだ。

いつの間にかたどり着いた月の見える砂丘の上で、リースは腰を降ろして熟考を続けた。

こんな気持ちのままで、神獣と戦えるのだろうか。

明日、サラマンダーの日の夜にディーンを出る。灼熱の砂漠を越え、火炎の谷に入る。火の神獣を見つけ出す頃には、日付が変わってウンディーネの日、つまり火系モンスターが弱まる日になるであろう。

その時までに、自分の精神を落ち着かせることが出来るだろうか。自信は全くない。だけれど、精神を安定させるしかない。生半可な状態で神獣――世界を滅ぼしうる程のモンスターに勝てるはずはない。

正確には、世界を滅ぼしうる存在となる前のモンスターである。火の神獣ザン・ビエは風の神獣ダンガードと合体し、凶獣ザンガードとなり、その後に他の凶獣と合体し、完全な神獣となる。だから、今のザン・ビエに世界を滅ぼす程の強さはない。

しかし、そうは言ってもマナストーンに封じられしモンスターである。不安定な精神状態、集中力を欠けば一瞬で消し炭にされるかもしれない。

「いっそのこと……」

「リース！」

少女が何かを決意しようとした瞬間、不意に彼女の名前が呼ばれた。驚きながら声の方を見ると、走ってきたのか、息を切らしながら立つホークアイの姿があった。

「やっぱり、ここだったのか」

「私を探しに来たのですか？」

「そうだ。それに確認したいこともあって」

「確認、ですか？」

リースは首を傾げた――わざわざ走ってまで確認したいこととはいったい何だろう。

「ジェシカを怒鳴りつけたっていうのは、本当なのか？」

「……」

「別に責めるつもりはないんだ。本人も気ばかりが焦ってたって反省してる。でも、どうしたっていうんだ？いつもの冷静なリースらしくないじゃないか」

「いつもの私、ですか……」

リースはフッと笑った。

いつものリース（自分）とは何だろう。自分自身でも、どうしてあんな大きな声を上げたのか、わからない。怒りにも似た感情が起きたのか、わからない。感情を制御（コントロール）できなかったのか、わからない。

もしかしたら、自分勝手でワガママな人間というのが、自分なのかもしれない。

そうだとしたら、ホークアイの言う“いつものリース”とは、誰のことだろう。ホークアイは“リース”という人間をどこまで知っているのだろうか。

自分でも自分（リース）という人間のことが、わからないのに。

リースはそう思うと、何だか可笑しい気分になった。

口元を緩めた彼女を、ホークアイは訝しい目で見た。するとリースはきれいな笑顔を作って、言った。

「さあ、私にもわかりません」

「わからないって、そりゃどういう……」

ホークアイの言葉は途中で止まる。彼の言葉など耳に届いていないかのように、ゆっくりと砂丘を降りてくるリースの姿が神秘的だったから。その姿に、最早畏怖すらしてしまう。

ホークアイと同じ目の高さになるような位置でリースは立ち止まった。無表情な女性の顔がホークアイの網膜に映し出される。

感情豊かなリースの無表情など初めて見るホークアイは、ただただ彼女の顔を見つめるしかなかった。

すると、リースの暖かな手がゆっくりとホークアイの頬へとあてられた。

「……リース？」

「あの時のように……」

「えっ？」
「あの時のように、唇を重ねては頂けませんか？」
「な、に……」
ホークアイは唖然とした。
リースがこんな事を言うとは思いもしなかった。長い間一緒にいて見てきた彼女に、こんな台詞を口にする要素など微塵もなかった。
そう、あの時――ローラント城の廊下で口付けをした時だって、うぶな少女だとしか感じなかった。
だが、今は女性の顔をして、甘い雰囲気を作り出している。
まるで別人のようなリースの姿、ホークアイは初対面の女性と見つめ合っているような気分になった。
だからだろうか、瞳を伏したリースの肩を押さえ、
「明日は神獣討伐なんだ。こんな事してるときじゃ、ない」
瞳を開けるリース。ホークアイの反らされた横顔に向かって、ポツリと呟く。
「やはり、私は……」
振られたのですね――口ごもった声は、ホークアイの耳には届かなかった。
ただ彼の目に映ったのは、今にも泣き出しそうな少女の顔だった。女の顔になったと思ったら、今度はやはり少女の顔をする――ホークアイは混乱に陥った。
そこで事態は急変する。彼は急激な眠気に襲われたのだ。
「こ、れは……スリープ……フラ……ｚｚｚ」
崩れるように砂の地面へと倒れるホークアイを見て、リースは慌てた。
敵？どこから？いったい誰なの？――様々な疑問が沸き起こると同時に、どこから狙われているかわからない緊張感で体が強張るリース。
そんな緊張感を一瞬でほぐすような声が彼女の耳をついた。
「リースさ～ん、大丈夫かにゃ～？」

「“にゃ～”？その声は、ニキータ？！」
声の方を見ると、大きな商い袋を担いだ猫型獣人の姿が見えた。
走ってくるのだが、如何せん早足程度のスピードしかない。背負っている荷物が重いのだろう。
「いまのスリープフラワーは、あなたが？」
「そ、そうだにゃ、ハァ……」
やっとリースの前に着くやいなや肩で息をするニキータ。
「火炎の谷で美獣にダーツを投げたのが誰か、覚えてて欲しかったのにゃん！」
ニキータはカッコよく笑う。だがリースはキョトンとするだけだった。
「時間の流れ的には、私はその時ナバールのアジトで捕まっていたの。だから、火炎の谷での出来事は知らないはず、ですよね？」
「んにゃあ～！そうだったのにゃ、忘れてたのにゃ！」
「それでニキータ、あなた、いったい何が言いたいの？」
「はう！何だか今日のリースさんは厳しいのにゃ、Ｓっ気があるのにゃ」
「……早く話を進めて頂戴」
不名誉な評価を頂いたリースは静かな声で言った。アニメやらマンガやらなら、リースの頭に大きな怒りマークがついていることだろう。
「実はオイラ、【レンジャー】にクラスチェンジしてたのにゃ！」
「……？……え、ええ！？」
リースは一瞬、ニキータが何を言っているのかわからなかった。
唐突すぎる設定の展開に、驚愕するだけだった。
「【レンジャー】だから、ダーツという特殊攻撃が出来たのにゃ！」
「じゃ、じゃあ、私が【ワルキューレ】になったときにはもうクラス２に？！」
「先にクラスチェンジしたって、にゃんだか言い辛くて」
ニキータはにへらと笑う。

「それより、大丈夫だったかにゃ？リースさんを襲うとは、いったいどこのバカだにゃん？」

ニキータは砂に突っ伏す男をひっくり返して、その顔を見た。

そして、だんだんと顔を青ざめていった。いや、毛むくじゃらの顔なので色は見えないのだが、ホークアイの顔をジッと見つめて硬直している姿が、彼の心境を物語っていた。

「……ニキータ、ホークアイって気付かないでスリープフラワー、使ったの？」

「……だだただって、月の光が逆光してリースさんの顔しか見えなくて、リースさんが襲われてるって思って……にゃー！」

混乱に陥り頭を抱えるニキータ。おそらく事情を説明すればホークアイは許してくれるだろうが、ニキータにとってホークアイは兄貴分、そうでなくともパロで町の人に絡まれていたのを助けてもらったりした事を思い返せば、彼がホークアイにした事は無礼極まりない。ニキータは忠義に厚い猫なのである。

自害しようかと考え始めた矢先、リースがニキータに優しく語り掛けた。

「ニキータ、落ち着きなさい」

「うぅ」

「取り敢えず、ファルコンさんのところまで運びましょう。ニキータも手伝って」

リースがスゥスゥ眠るホークアイの右腕を首の後ろに回すと、ニキータは左腕を同じように首の後ろに回した。二人でホークアイの腕を担ぎ上げ、引きずっていく。

道中でもニキータの不安の色を露わにしていた。

「目を覚ましたら、オイラ、怒られるかにゃ？」

「大丈夫よ、ホークアイもニキータには気付いていなかったから」

「だと、良いのですけどにゃ」

「それに、わたしも助かったし……」

リースは呟くように言った。小さな声で。

その姿を見て、ニキータは冷静さを取り戻す。助かった――とは、どういう意味なのか、これを訊いても良いものなのだろうか。そんな疑問が彼の思考を落ち着かせいく。

一拍の間を置いて、彼は口を開いた。

それは――。

「それは、さっき泣いていたのと関係があるのかにゃ？」

「えっ？私、泣いていた、かしら？」

自覚はなかった。ホークアイに拒絶された時、自分がどんな顔をしていたかなど、わからなかった。

「オイラ、リースさんが泣いているから、暴漢に襲われてると思ったのにゃ」

「泣いたつもりは、なかったのだけど……」

「オイラには泣いているように見えたのにゃ！それに……」

力を込めて言うニキータ。リースは何も言えず、彼は口ごもりつつも言葉を続けた。

「それに、女の子を泣かすなんて最低だって、ホークアイのアニキも言っていたのにゃ」

「……そう」

それ以上リースは何も言わなかった。ニキータも何も言えなかった。だが、彼には一つだけ伝えておきたいことがあったのだ。以前から感じていたこと。

「美獣のことにゃんですが」

「えっ？」

「あのおんにゃ、オイラたち猫型獣人と同じニオイがするのにゃ」

「それって、どういうこと？」

敵の正体につながる大きなヒントのようであるが、いまひとつ要領を得ない。

「わからないのにゃ。ただ猫族とは違うのにゃ。にゃあ、にゃんだか矛盾してるみたいだけど、つまり美獣はオイラたちに似ているけど、オイラたちとは違うのにゃ」

リースはニキータの言葉がすごく大きなヒントになっていると感じていた。だが、彼女はそのヒントを理解することができなかった。彼女の知識にもう一欠片の情報があれば、美獣の正体を知ることができるのだが……。

# 第六話―A

ホークアイが目を覚ましたのは、ジェシカが眠るのとは反対側のベッドの上だった。若干くらくらする頭で、何故ベッドの上にいるのかを思い返そうとする。

意識を取り戻したジェシカから話を聞いて、それからジェシカがまた眠ったのを確認してリースを探しに出た。リースに会った後……

「……ちっ」

彼は舌打ちをした。思い出したのは、月夜に照らされる女性の顔と、泣き出しそうな少女の顔。

悲痛そうなリースの顔を思い出すと、彼の心は荒れるのだった。怒りに任せて拳を奮いたくなるのをぐっと堪える。

我ながら、ヒドいミスをしたな――そう思った瞬間、耳慣れた女性の声が聞こえた。

「やっと起きたのかい、この阿呆」

「ファルコンおばさん……」

コーヒーの入った愛用のマグを片手に、階段下に立つファルコン。いつもと変わらぬ姿だが、心なしか苛立ったオーラを出しているような気がした。

「まったく。リース探しにいかせたのに、うっかりマイコニドの瞳で眠っちまうなんて、情けない」

マイコニドの瞳なんて持ってたか？――ホークアイは記憶を辿る。だがそんなレアアイテムを拾った記憶を見つけ出すことはできなかった。

眉根を寄せるホークアイを無視して、ファルコンは話を続ける。

「明日は神獣討伐だからね。無意識のうちにチャクラを解放してたのかもしれないねぇ」

「……おばさん、リースは？」

マイコニドの瞳云々はもう追及しないことにした。それよりもホ

ークアイはリースのことが気になって仕方がなかったのだ。
「先に寝たよ。あたしの部屋で」
「そうか……」
ホークアイは険しい顔をして顔を落とした。いま、彼女は何を思っているのだろうか。あんな顔をして、辛い思いをさせてしまったんじゃないか。ホークアイは自分を責めるように己を省みた。
その姿を見て、ファルコンは言う。
「何度も言うけど、明日は神獣討伐なんだ。何を考えてんだが知らないけど、今日はさっさと寝ときな。寝不足で負けましたなんて、シャレにならないからねえ」
「……そう、ですね」
わかってはいるが、気になる事について思考を止めるというのは一苦労である。ホークアイは変わらず険しい顔を俯かせたままだった。
「ホークアイ、神獣討伐だからこそ、言っとくことがある」
「……えっ？」
「日付がウンディーネの日に変わってから火炎の谷に入りな。あそこは火系のモンスターも多い。サラマンダーの日のうちに入ったら、神獣のもとに辿り着く前にゲームオーバーなんてこともありうるよ」
現在日付が変わり、ルナの日からサラマンダーの日となっている。サラマンダーの日の次がウンディーネの日、その次がドリアードとなり、順次ジン、ノーム、そしてマナの祝日となる。マナの祝日は全般的に、その他の曜日では、それぞれ対局に位置する系列のモンスターの力が弱まる。たとえば、サラマンダーの日には水系モンスターが、ノームの日には風系モンスターが力を弱めることになる。その逆に、サラマンダーの日は火系モンスターが、ウンディーネの日には水系モンスターが力を増幅させる。
ホークアイたちは、それを見越して神獣の属性に合わせて決戦の日を決めている。ケヴィンとシャルロットはその攻略法に全く気づいていないのだが。

「いいかい、日付の変わり目に気を付けるんだ」
「わかってる」
ファルコンのアドバイスにホークアイは頷いた。彼の中で一気に緊張感が高まるのだった。
だが、ここでファルコンの悪い癖が出る。以下、メタトークになるので、不慣れな方は数十行飛ばして欲しい。
ファルコンは言う――良いかい、よくお聞きよ。
固唾を飲むホークアイに、彼女の口が開かれる――日付が変わったかどうかは緑のボタンを押してメニューウィンドウに切り替えて確認するんだ。曜日の欄にサラマンダーの姿があったら、まだサラマンダーの日だ。ウンディーネの姿になったのを確認してから火炎の谷に突入するんだよ。
ファルコンの説明にホークアイはベッドからずり落ちた。
「お、おばさん、そのメタトークはダメだって。それに、だいぶストーリーが進展してるのにそんなゲーム開始時にすべき説明をされても……」
たしかにそうだねぇ――ファルコンは顎に手を起き、反省したような声で――初期設定は緑ボタンだけど、人によっては赤色のボタンをメニューウィンドウの切り替えにする人もいるねえ。この時点でボタンの位置設定を変更してる人を無視するような発言は不適切だったよ。
「もう、いいです……どうでも……」
ホークアイはがっくりと肩を落とした。
ファルコンはくすりと笑い、一言。
「とにかく、早く休みな！」
部屋から出て階段を上っていく音が聞こえる。ホークアイはベッドに戻り瞼を閉じた。　だが、そこで次の問題が生じる。
「……今の今まで寝てたのに、これ以上どうやって休めってんだ」
全然眠くならないのだ。
反対側のベッドからジェシカの寝息が聞こえる。

静かな寝室。真っ暗な天井を見つめながら、ホークアイは仲間の事を考えていた。ステータス画面を開くわけではないが、もうルナの日からサラマンダーの日に変わった頃だ。うまくダンジョンを攻略していれば、デュラン達は今頃水の神獣と戦っているはずだ。

そう考えながら瞳を閉じた。

ホークアイが眠くない目を閉じた頃、氷壁の迷宮をクエストするデュランとアンジェラ。奥に進めば進むほど、気温が下がり、モンスターも強度を増していた。ソードマスターといったモンスター化した人間すらもいた。

そうして彼らは、全面が氷に覆われた開けた空間に出た。

「この上、たぶんアルテナの城下町、下手したらアルテナ城かも」

そう言いながら最深部の空間に入った途端、入り口の穴に固い氷の板が張られ、二人は閉じこめられてしまった。

「見て、デュラン！氷の下に何かいるよ！！」

叫ぶアンジェラの言うとおり氷の下に赤くギラつく二つの瞳があった。そしてその瞳は、すぅーっと氷の壁を登り天井まで上がった。そして、

ドスン！

と、その大きな巨体と共にデュランたちの前に姿を表した。

「こいつが神獣……」

（水の神獣、フィーグムンドや！）

「でかいトカゲだせ！……もしかして、入り口からずっと感じていた視線の正体は、こいつかっ？！」

フィーグムンドはニヤリと笑った。まるでデュランの言葉を理解しているかのように。

背筋にゾクリと悪寒が走る。デュランは一歩退いて距離を取ってから、ドレイクのツメを使って剣に火の属性を付加した。

「でりゃああ！」
一気に距離を詰めて、先手の一撃を放つ。
ガキィィンッ！
彼は渾身の一撃を繰り放ったつもりだったが、フィーグムンドの固い鱗に阻まれ、大きなダメージを与えることはできなかった。
水の神獣はその大きな前足を上げデュランを押しつぶそうとした。

バスン！

それを紙一重で交わすデュラン。
「デュラン、離れて！……ダークフォース！」
アンジェラの高位闇魔法がフィーグムンドを直撃した。だが、水系モンスターに闇魔法は大きな効果をあげず、敵は変わらずピンピンしている。
フィーグムンドは口から二つの冷気の塊を吐き出した。デュランとアンジェラはそれを交わしたのだが、冷気の塊はまるで意志を持っているかのように宙を舞い、再びデュランめがけて飛んできた。

ガキーン！

デュランは盾でそれを回避したが、フィーグムンドは続けてメガスプラッシュを唱えた。氷の床から無数の氷柱が突き出す。
「うわっ！」
「きゃあ！……このぉ、ファイヤーボール！！」
聖域での戦闘以来進化するファイヤーボール、今度は禍々しいほどに黒い炎の塊がフィーグムンドを襲った。アンジェラに変な感触を残しながら。
「グガアアア！！」
初めてフィーグムンドにダメージらしいダメージを与えることが出来たが、致命傷に至るまでではなかった。

「アンジェラ、もう一発どうだ?!」
「ダメ!あいつの鱗、すごく固くて……冷たいの!」
「くっ、外からじゃだめなのか……。そうだ!ならこれはどうだ?」
デュランはアンジェラに耳打ちし、作戦を伝えた。
「でも、デュランが……」
「大丈夫だ。行くぞ!!」
アンジェラはデュランと共にフィーグムンドに向かって突っ込んで行った。フィーグムンドは前足を氷の床に落とし、二人を蹴散らした。そして、氷の床に倒れこむアンジェラに牙を剥いた。その瞬間、デュランがその大きな口へと飛び込む。
黄金の盾で上顎を押さえ、下顎にミスリル銀の剣を突き刺して、開口状態を保つ。
「アンジェラ、いまだ!」
「……ファイヤーボール!」
アンジェラはデュランの背中めがけてファイヤーボールを放った。デュランが気配を察して紙一重のタイミングでフィーグムンドの下顎を蹴りファイヤーボールを避けると、炎の塊がフィーグムンドの口に飛び込んで行くのが見えた。だが、それは今さっき目にした赤黒いものではなく、明らかに威力の低い火の玉でしかなかった。
それでもフィーグムンドは体内での高熱に悶え苦しんだ。
「やったか?」
(全然、まだやっ!)
叱責するようなウンディーネの言葉が二人の頭に響いた。
フィーグムンドは不気味なまで真っ赤な瞳を大きく開き、怒りを露にする。
「くそっ!」
突然、巨大な氷の塊が落ちてくる。水系の基礎魔法、アイススマッシュである。
二人は身を右へ左へと投げて、それを交わす。だが、氷の塊は次第に鋭い氷柱へと形を変え、二人を襲うのだった。床に落ちて割れ

る氷は鋭い刃となり、二人の皮膚を切り裂く。
「そんな、これ、『アイシクル』！？」
アンジェラは氷の結晶を交わし、ダメージを回避した。だが、神獣が『アイシクル』という魔法を使ったこと自体に、恐怖を覚えているようだった。
デュランは表情を凍らせるアンジェラを目の端に捉えながら、再びフィーグムンドへと向かっていった。だが、フィーグムンドは彼の一振りを交わすと、床を蹴り氷の壁に跳びついた。そして自由に壁を歩くと隙間から氷壁の裏側に回ってしまった。
「くそっ！これじゃあ攻撃が届かねえ！！」
すると、真っ赤な瞳がデュランたちの足元へと走った。氷の床の裏側にフィーグムンドは移動したのだ。
デュランは剣を氷床に突いた。だが、凍てつく床に刃は弾かれるだけだった。
「くそっ！！やっぱりダメか……アンジェラ！」
「う、うん、やってみる。……ファイヤーボール！」
アンジェラは放心しているようだったが、デュランの言葉を聞いて集中力を取り戻し、慣れたはずの呪文を口にする。そして放たれた赤黒いファイヤーボールは氷床を突き破り、フィーグムンドの体に命中した。しかし、
「やっぱりダメ……氷の壁のせいで威力が落ちちゃう」
その時、デュランはアンジェラの異変に気づいた。
「アンジェラ、どうしたんだ！いつものおまえらしくないじゃないか！？」
「おかしいの……いつもの感じじゃないのよ……」
「いつもより力が出ないのか？」
意外にも彼女は首を振った。
「その逆、思ってる以上の力が出ちゃうの……だから力を抑えようとするんだけど、そしたら今度は全然力が出ないし……なんだか訳わかんないんだよ」

「アンジェラ……」
その時だった。呪文を詠唱する不気味な声が聞こえたのだ。それから、デュランたちの頭上から雪が降り始めた。
「なんだ、これ？」
雪のようであり、ガラスの破片のようでもある何かが、キラキラ輝いて舞い落ちるのだった。
そして光の破片が動きを止め、レーザーのような光で結びついた次の瞬間、アンジェラが巨大な氷が包み込まれた。
「デュ……ラ……」
ピシッ――と、たちまち氷が割れ、解放されるアンジェラ。だが、彼女の体は真白に凍り付いていた。
「アンジェラーッ！！！！」
デュランは道具入れからマーマポトの油を取り出すと、彼女の体に擦り込み、彼女を抱きしめさすった。身体が揺れ、アンジェラの道具入れから何かが落ちた。
氷は溶け、彼女の状態異常は治った。だが、彼女の唇は紫色に変わり、体は震えていた。
「アンジェラ！……ヒールライト！」
デュランの魔法でアンジェラの体の傷は回復する。だが心の傷までは癒せない。
「デュラン……、もう無理だよ。勝てないよぉ……」
「バカ言うな！今逃げたら勝ち目はねぇ！！」
彼の言う通りだった。最初にアンジェラが言ったように、ここがアルテナ城の地下であるなら、彼らを打ち負かしたフィーグムンドが次に姿を現すのは市民のいる町中である。
「神獣、神の獣って言うだけあるよ……。今のコールドプレイスって言う最高位魔法で、【ルーンマスター】くらいしか出来ない魔法なんだよ」
それ程の知識があるモンスターである。戦闘の場所に選んだのが、たまたまアルテナの地下であるはずがない。フィーグムンドは解っ

ていて、ここにいたのだ。アルテナの市民を襲うために。
「アンジェラ……それでも、俺は戦うぞ！」
デュランはアンジェラを残し、フィーグムンドに向かっていった。
氷床に幾度も剣を打ち始めた。届くはずない太刀を何度も打つ。
「デュラン……」
氷の空間に響く剣の音。アンジェラにはもう一つ違う音――声が聞こえた。
（アンジェラ、アンタ、いったい何しとるんや！）
「……ウンディーネ。私は精いっぱいやってるよ」
（いいや、ちがうっ！アンタは自分の魔力にビビッてるんや！ヒビって、無意識に魔力を押さえ込んでるんや！何でそんなこともわからんのっ！？）
「……わから、ないよ」
アンジェラは言う。儚く、今にも消え入りそうな声で。
（そんなに友達を討った自分の力がこわいんか！？デュランを見てみい！無駄やと解ってんのに諦めてへんで！）
アンジェラが顔を上げると、デュランは何度も何度も床を叩いていた。
フィーグムンドはニヤリと笑うと、彼にアイススマッシュを、そしてアイシクルをお見舞いした　冷たい氷の刃が彼を襲う。
「デュラン！」
「ぐっ！……まだだ。うりゃあああ！！」
一度は膝を付いた兵士は立ち上がり、何度も剣を振るう。
（アンタはただ、見てるだけなんかっ！）
「だって、どうすればいいのか、解んないよ……。あたし、バカだもん。いくら考えても、解んないんだよ！！！」
彼女はポロポロ涙を流し始めた。そしてアカデミーの頃の事を思い出した。先生に言われた通りやっても、火の粉すら、氷の一欠片も作れない。あの時、優しく手を差し伸べてくれた友達は、もういない。

水の精霊（ウンディーネ）の言った事は当たっていた。確かにアンジェラは聖域でアイリスを討った自分の魔力に脅え、恐怖していたのだった。

彼女が俯くと、ポタポタと自分の映る氷の床に涙が落ちた。だが、氷上に写る自分の姿は、涙で滲んでよく見えなかった。

「うぅ、ぐすん……う、う、うう……」

すると、彼女の耳に聞き覚えのある声が聞こえた。

（アンジェラ……）

「……そんな……アイリス？」

アンジェラが再び氷を見ると、そこには聖域で紅蓮の魔導師に討たれ命を落とした、アンジェラの親友、アイリスが映っていた。アンジェラの手を取るように、彼女の手の下にアイリスの手が触れる形で映っている。二人の手が氷一枚をはさんで重なり合う。

（アンジェラ、あなたはわかってないんじゃない。信じていないだけだよ）

「信じて……ない……」

（そう。仲間を信じて。自分の力を信じて。私が信じているよ、あなたのこと……）

「信じ、る？アイリスが信じてくれる私自身を……」

アンジェラは反芻した。自分の力。聖域で親友（アイリス）に向かって放った力。

大きな力を持てば、それ相応の責任が生まれる。力は大きく強いほど、誰かを傷つけるから。

だからこそ、力を自覚しなければならない。無関心であってはいけない。自分に無関心な人間が力をもつことほど、質（たち）の悪いことはない。

アンジェラもまた、大きな力をもった。長い旅の中で成長し、強大な魔力を手に入れた。

（だからね、アンジェラ……）

無関心であってはいられない。考えることから逃げてはいけない。己を知らなくてはいけない。

自分自身（アンジェラ）を知らなくてはならない。

（私は知ってる……。あなたが仲間を傷付けたくないこと……）

強い力を不用意に使えば、誰かを傷つけることになる。誰かを傷付けたくないから、力を抑える。本当（つよさ）の自分を知る者のなんと不自由なことか。

（でもアンジェラ……力を持ってる人は、力を使わなくちゃいけないの……）

力から逃げてはいけない。弱者の振りをしてはいけない。力をもっているなら、使わなくてはならない。それが、力をもつ者が力をもたない者に対して負う、責任。

だから知らなくてはならない――自分を。自分がいつ力を使うか、を。

（アンジェラ、あなたは何のために、その力を使いたい？）

「わ、たしは……」

アンジェラは瞳を閉じた。そして記憶を辿る。以前氷壁の迷宮に入った日のこと、水のマナストーンに誓ったことを思い出す。

「守りたい……大切な人を……」

瞳を開けると、眼に強い意志を宿した少女（じぶん）が氷に映っていた。そしてその後ろに、ある一点を指差す友の姿があった。氷の中から抜け出したように氷の鏡に映りこむ少女。

「アイリス！」

アンジェラは叫びながら振り返った。だがそこには誰もいない。もう一度氷の中を覗いても、そこには自分しか映っていなかった。

「ありがとう……」

束の間の邂逅がウソであったかのように、アンジェラの耳には氷の床を叩く音とアイススマッシュを食らう仲間の声が聞こえた。

アンジェラは急いでアイリスの指差していた場所に落ちていた袋を拾い上げる。中身は一冊の本だった。アイリスが卒業の祝いに贈ってくれるはずだった、魔導書。

「『秘伝の書』」

表紙のタイトルを口にした。中を開けると、数々の呪文が書かれていた。しかも古代文字で読めない。だが、一文だけ、アンジェラにも読むことが出来た。その文字列だけは、彼女には真っ赤に輝いているように見える。

「これは……フフン」

そのセンテンスの意味を理解したアンジェラは不適な笑みをこぼした。そして、自信と誇りを取り戻し、つよさを知った魔術師（アンジェラ）はブツブツと――スラスラと呪文を詠唱した。

氷の空間にこだまする声に、氷を叩くデュランの手が止まる。

「アンジェラ……」

彼が名を口にした瞬間、アンジェラの瞳がカッと開かれた。

「すべてを焼き払いし火竜よ、ここに姿を現せ！！……ファイヤーボール！！！！」

彼女が叫ぶと、杖の先から三頭の火竜が現れた。炎玉が連なった体、大きなキバをもつ竜の顎、鋭いツメをした手、人間を丸飲みできる程の巨体をした、炎の竜。

火竜が所狭しと飛び回ると、部屋の温度が跳ね上がった。氷は一気に水蒸気となる。

脆くなった氷の床を突き破った火竜はフィーグムンドの周りを回る。見る見る間に氷り付いていたウロコが溶け始める。

あまりに熱さに耐えかねたフィーグムンドは氷壁の裏側をかけずり回ると、自らデュランたちの前に降り立った。だが、アンジェラの火竜も氷壁を破り、フィーグムンドを追いかけ、その周りを飛び回る。

さっきの小粒のファイヤーボールと違い、この火竜の勢いはとどまるところを知らない。

そして、炎の竜はフィーグムンドの体に突撃すると、そのウロコを焼き溶かし、巨体を貫いてはフィーグムンドの体には６つの穴を

開けた。
「グギャアアア！！！！」
叫喚の声をあげるフィーグムンドに、火竜は再び突撃し、その巨体を超高温で焼き払った。
「今だ！」
叫んで、アンジェラは秘伝の書をフィーグムンドへと投げつけた。一冊の本が大きく開けられた口の中へと消えていく。そして、
「すべては吹き飛ばせ、エクスプロード！」
アンジェラが叫んだ瞬間、フィーグムンドの体に開いた穴から火柱が上がった。いや、体内で巨大な爆発が起こり、その炎が小さな穴から飛び出たせいで火柱に見えたのだった。
外と内、両方から余すところなく炎に包まれる水の神獣。次第に体組織が崩壊し、後には灰が残るだけだった。
「ハァ……ハア……ハア……」
怒濤の攻撃に、アンジェラは息を切らしていた。そんな彼女にデュランは言った。
「やったな、アンジェラ！！すごいじゃねえか！！」
アンジェラは返した。
「うん！！デュラン、あたしやったよ！！」
アンジェラは大きくＶサインを作った。しかし、次の瞬間、彼女は全身の力が抜け、途端に急激な眠気に見舞われた。
「ア……レ……」
「アンジェラ！？」
ヘタリ込むように倒れかけた彼女をデュランが支えた。
「ごめん……。魔力、使い切っちゃったみたい……。少し眠ら……せ……、スー、スー」
「アンジェラ……」
彼女は気持ちよさそうな顔で寝息を立て始めた。
デュランはくすりと笑い、アンジェラを両腕に抱えると、魔法のロープを使って洞窟の外に出た。

氷壁の迷宮から出ると、外はちょうど朝になるところだった。キレイな朝焼けが二人を照らす。
「アンジェラ、起きろ」
「ん……、わあ、キレイ」
アンジェラが目を開けると、二人の勝利の讃えるかのように海の彼方から太陽が昇り始めているのが見えた。
「あたしたち、やったんだね」
アンジェラはデュランの腕に抱かれながら言った。
「ああ」
デュランはアンジェラを見ながら言った。
二人はジッと見つめ合った。アンジェラはドキリとしつつ、そおっとデュランの頬に手を当てた。
「ねぇデュラン……」
「な、なんだ……」
「あたし、デュランのことが……」
アンジェラは思い切って自分の気持ちを伝えようとした。デュランも彼女の言葉が気になり、バクバクと心臓を鳴らせていた。そして、意外な言葉が彼の鼓膜を震わせた。

「あのう、デュランさんとアンジェラさんですか？」

「「……えっ？！！」」
不意に知らない人から声をかけられた。二人は硬直しながら振り向くと、そこには大きな商袋（あきないぶくろ）を背負った、ニキータそっくりの猫型獣人が二人いた。
「ニキータ？！」
「いえ、私はジョセフィーヌと言います。ニキータとは昔恋人だったんですが、彼は義賊に憧れて、私を置いてナバールに……」
「は、はぁ」

「ワシャ、チキチータ！ニキータとは遠い親戚になるんにゃ。ワシら描族は、本来こうして行商をする商人の一族だにゃ」
「その旅商人がどうしてまたこんなところに？」
「ずっと音信不通だったニキータから連絡があったにゃ」
「そうなんです。神獣が復活し、それを討伐する６人の勇者がいるから、彼らに力を貸して欲しいと言われました。それでこちらにお伺いした次第にございます。あっ、彼との関係は過去のことですから」
ジョセフィーヌは笑いながら言った。そうして二人の商人は声を揃える。
「「ということで、武器・防具はいかがですか？？」」
デュランとアンジェラは自分の武器を見た。すると、フィーグムンドの固いウロコのおかげで刀は刃こぼれし、杖も寒さで大分痛んでいた。防具も神獣相手に心許なかった。
「「買います」」
デュランはアンジェラを降ろし、猫獣人の前に広げられた商い袋の中身を見始めた。そこにはそこらの店では売っていないレアな武具が並んでいた。
「こいつはスゲェ、有名な『バルムンク』じゃねぇか。おっ、こっちは『ヴァーラルソード』だ！」
「流石はデュランさんだにゃ、ソードに詳しいにゃ」
「ま、まあな」
喜びながらう言うチキチータの言葉に、デュランも照れ笑いを浮かべる。それを見て、密かに目を光らせる猫族の二人。
「『バルムンク』は英雄が死ぬ間際に砕けてしまった長刀だにゃ。それよりも【ナイト】のデュランさんには『ヴァーラルソード』が

お似合いにゃ。これは騎士の誓いを象徴するクロス型のソード、デュランさんにも忠誠を尽くす相手がいるはずにゃ」

チキチータは深い意味なく言ったのだが、忠誠を尽くすという言葉にデュランは心をくすぐられるような思いをした。

そこに間髪を入れず、ジョセフィーヌが畳み掛ける。

「でしたら、こちらの防具も買ってください。この『騎士のもんしょう』は昔のフォルセナ王が勇敢な騎士の帰国を願い贈ったというもの、『ヴァーラルソード』にはお似合の一品です。それに、この『レオニスプレート』もおススメです。こっちは胸に獅子の薄彫りがされていて、勇敢な騎士にふさわしいアーマーなんですよ」

まるでデュランを勇敢な騎士に仕立て上げるような防具の説明、それに加えて、ジョセフィーヌが最後の一押しといわんばかりに微笑みを投げかける。

デュランには英雄王という従士する相手がいるから、勇敢な騎士の格好を真似る必然性はない。内実、すでに勇敢な騎士であるのだから。だが、チキチータやジョセフィーヌの言葉を聞くと、どうもこれらの武具をセットで買いたいという意欲にかられるのである。

「ま、まぁ、効力も高いし、これ買っといた方がいい、かな」

「効力も高いけど、値段も高いわよ」

アンジェラがデュランの購買意欲を失くすような言葉を口にした。だが、こんなことで口数を減らす商人ではない。ジョセフィーヌはにこっと微笑みながら、ある防具を手に持った。

「アンジェラさんにはこちらですね。『銀製のサークレット』と『スノークリスタル』です。アルテナ名産のミスリル銀をあのペダンの職人が呪鍛したものです。それに何より、魔力の込められた宝石がアンジェラさんの防御力を高めてくれるうえ……」

彼女はアンジェラにだけ聞こえるように耳元で囁いた。

「意中の彼にも好印象です」

「ふえ?!」

「王女様には、いえ、王女様にしか似合わない一品でございます」

「買ったわ！」
まるでお見通しのようなジョセフィーヌの言葉に、アンジェラは購入を決意したのだ。
もちろん、彼らのセールストークはこんなところでは終わらず、結局、デュランたちは武器からアクセサリー防具まで新調することになった。
最後に、チキチータがオモシロい情報を口にした。
「デュランさんたちにはサービスで、他の方々のことをお伝えするのにゃ」
「他の奴らとあったのか？」
「ここに来る前、月読みの塔でケヴィンさんたちにお会いしたのにゃ。もちろん、神獣対策に武器や防具も買っていただいて。ただ、ケヴィンさんが難しそうな顔をしていたのにゃ。ニキータが教えてくれた様子とは全然違っていて、びっくりしたのにゃ」
「ケヴィンが？」
フラミーの背から空高く飛び降りるほどののん気者の彼が難しそうな顔をしていた。なかなか想像するのは大変だが、それだけ彼が悩んでいるということらしい。
仲間を気遣い、不安になるデュラン。そんな彼を励まそうと、アンジェラは言葉を送るのだった。
「大丈夫よ、ケヴィンは強いもの。それにシャルもいるしね。お互いにうまくやってるわよ」
「そうだな」
アンジェラの言葉にデュランも安心した。きっとあの二人なら大丈夫だろうと。根拠もないがそう思えたのだ。
「今頃は、月の神獣とやり合った後、か？」
デュランは雪原から見える朝日を見ながら呟いた。

# 第六話―B

ケヴィンたちが月読みの塔の最上階に着いたのは、夜が明けるずっとずっと前であった。デュランたちがフィーグムンドと戦闘を開始し、アンジェラがピンチに陥っていた頃である。

「いや～、金の女神像があって良かったでち。それにしても月の神獣はどこにいるんでちか？」

「わからない。この中にいる、思ったけど…」

「いなかったでちね～」

「……バルコニー出て、森を見渡してみる。この高さ、森全体見えるから、何か手がかり掴めるかも」

二人は屋上のバルコニーに出た。

「うわぁー！ビーストキングダムが見えるでちよ！それに満月がこんなに近くにあるでち！」

高い場所から見る夜景に心躍らせて騒ぐシャルロット。だが、すぐに彼女の顔は凍りつくのだった。

ズシーン！

という音と地響きが聞こえたからだ。

「な、なんでちか？！」

ズシーン、ズシーン――とその音、振動は塔に近づいてきた。

「シャルロット、来る！」

ケヴィンが言ったその時、鋭いツメを持った巨大な腕が二人の前に姿を見せた。

「ひえっ！」

月の神獣ドランがその姿を見せた。手すりの向こうから伸び上がる野獣の姿。ヤギといえば聞こえはいいが、頭部からは禍々しい角が二本生え、まるで古い伝記物に出てくる悪魔のような姿をしてい

た。
「ガアァァァ！！！！」
巨大な牙、巨大な角、巨大な爪を持ち、まさに魔獣というにふさわしい月の神獣ドランは、満月に向かって咆哮をあげると、今度はその腕を思い切りふり降ろした。
ガカーン！――と、月読みの塔は揺れ、その力の強さを表していた。
ケヴィンは素早く獣化し、攻撃に入る。
彼はドランの腕に飛び移ると、素早く二の腕を駆け上り、野獣のこめかみに強烈な一撃を打ち込んだ。ドランは苦痛に唸り、ケヴィンを鷲掴みにしようと右手を引いた。彼は迫り来る拳の気配を感じると、鼻先に付けた足で地面ならぬ鼻骨を蹴った。ひらりと舞うケヴィン、ドランの魔手は空掴むだけであった。重力に任せて落ちるケヴィン。満月を背に再度、ドランの額を目掛けてキックを見舞う。
「ガアアア！」
蹴り込んだ反動をいかし、ケヴィンはバルコニーに飛躍した。その隙を逃すまいと、ドランは空振った右手をケヴィンの着地場所目掛けて振り込んだ。拳がケヴィンの左から、なぎ払われるように振るわれる。
「うわっ、と」
バルコニーの手すりの上に着地したケヴィンは息つく暇もなく宙に舞い上がる。シャルロットは身をかがめてドランの拳をやり過ごした。岩石のような拳が頭上を通っていく。
「ひゃあ！」
その横にスっと着地するケヴィン。
「なかなか硬い。長期戦になるかも」
「うーん、それはどうでちょう？」
シャルロットの言葉にケヴィンは首を傾げた。
「見るでち」
シャルロットが指差す先、ドランが息を切らしていた。深く息を

付き、呼吸を整えているように見える。
「あの巨体でち。一回の動作に使うさんそ量はハンパないハズでち」
「コンスタントに攻撃を当てれば、ドランはバテる」
「そういうことでち！」
二人が体制を整えて次の一手に出ようとしたとき、ドランが両腕を高らかに上げ、勢いよく振り下ろしてきた。
「あぶない！」
「きゃあ！」
石造りの月読みの塔全体を揺さぶる程の攻撃。二人は身を投げるようにして、振り下ろされる腕から逃れる。
しかし、床にぶつかった拳はすぐさま振り上げられ、再び二人に襲いかかる。
「シャルロット！」
地面に身を投げたシャルロットが顔を上げると、毛むくじゃらな拳が真上から落ちてくる所が見えた。彼女はとっさに被り物を両手で握りしめ、顔を伏した。
恐怖で体中が震えて歯がかみ合わず、ガチガチと不器用な音を立てていた。
だが、振り下ろされた拳はなかなか落ちてこない。死ぬ間際の一瞬はこんなにも長く感じるのだろうか――そう思っていた。だが、それにしても長すぎる。
彼女はギュッと閉じていた瞳を開けて、ゆっくりと顔を上げた。そして、元から大きな瞳をさらに大きく見張った。
そこには、全身の筋肉を強ばらせて神獣の拳を止めるブラックファングの姿があった。
「だ、い……じょ……ぶ？」
全身の毛穴から汗が噴き出し、がっちりと歯噛みしている。口を開く余裕もないのであろう。唸るような声で、仲間の安否を気遣った。
「ケヴィ……」

名前を呼ぼうとした瞬間、何かが飛んできてケヴィンをさらって行った。巨大な岩がぶつかるような、ドーンという衝撃音が耳をつき、反動で生まれた突風がシャルロットの前髪を揺らした。

急展開する情景にあ然とするシャルロットであったが、段々と冷静さを取り戻し、ケヴィンを吹き飛ばしたのがドランの手拳であることがわかった。振り下ろされたのとは違う、もう一方の手だ。

ケヴィンが弾き飛ばされた方を見ると、バルコニーの外壁に一箇所だけ穴が開いているのが見えた。

「ケヴィン……」

夜空に手が届きそうな程高く、あの巨大なビーストキングダムすら見下ろせる月読みの塔の最上階から落ちたとなれば、いくらケヴィンであってもひとたまりもないであろう。シャルロットの体から血の気が引いた。

だが、大きく欠けた外壁から、ゆっくりと腕が見えた。そして、ケヴィンが重たい体を這い上がらせて姿を見せた。

全身を強打しながらも、何とかバルコニーの端を掴んだケヴィン。痛みをこらえて、シャルロットに歩み寄ろうとする。

しかし、それを阻むかのようにドランの左拳が彼の体を撃つ。

「ぐあ、ああ」

弾き飛ばされて、バルコニーの入り口近くの壁に叩きつけられる。固い壁が砕け、礫がぱらぱらと落ちる音が聞こえた。

意識を失い、人間の姿に戻ったケヴィンはズルズルと冷たい外床に落ちた。

言葉を失っていたシャルロットはすぐさま我に返ると、得意の回復魔法を唱えるのだった。

「ヒールライト！」

【エンチャントレス】になったとは言え、ウェンデルの聖職者。しかも光の司祭の血を引くシャルロットの回復魔法。瀕死状態だったケヴィンはたちまちのうちに力を取り戻し、立ち上がった。

「ケヴィン、だいじょうぶでちか？」

「シャルロット、ありがとう。何とか、無事」
駆け寄り心配するシャルロットにケヴィンは微笑んだ。
仲間の無事を確かめたシャルロットは、ケヴィンと共に神獣へと目を向けた。凶暴さを表すような唸り声でこちらを見る金色の瞳。次の一手を考えているようだった。
「なにを、しているんでちょうか？」
その時、二人の頭の中に声が響いた。
（月の魔力を練っているみたいよ）
「ルナ！」
（気を付けて。ドランはおそらく……）
「何か仕掛けてくる前に、討つ！」
ルナの説明を待たず、再び獣化したケヴィンは石床を蹴ってドランへと突っ込んだ行った。
（ケヴィン、ダメよ。戻って！）
ルナの叫び声が頭の中に響く前に、ドランの両手が動いた。
繰り出されるであろう手拳を撃ち返そうと、ケヴィンは勢いよく床を蹴った。右手の拳を石のように硬く握る。
だが、ドランの手は大きく広がり、ケヴィンの体を掴んだ。
「なにっ！……ぐがあああ！」
身動きを封じられたケヴィン。ドランは握力を入れて、ケヴィンの体を押し潰そうとする。それと同時に、彼の体からは力が抜けていく。
「こ、れは……」
（月の神獣は両手に月の魔力を宿したわ。ムーンセイバーよ）
月の力を宿すことで、相手の力を我が力に換えるムーンセイバー。ドランは手に握るケヴィンから体力を吸い上げていた。骨が軋む音とケヴィンの叫喚がシャルロットの耳をつく。思わず耳を塞ぎ目を逸らしたくなるが、彼女は現実を見つめた。
非力な自分に何ができるのか。回復魔法に長け、攻撃力はほとんどない。

誰かに――ヒースに――助けを請いたかった。だが、それは叶わない。聖域で共に戦った仲間も、ここにはいない。

ケヴィンは神獣の魔手に捕まり、身動きが取れずいる。自分一人の力では、どうしようもない――そう思いながら、シャルロット呪文を詠唱した。

「ダメだ……」

振り絞るような声で、ケヴィンは言った。

「シャルロッ……回復しても……全部、あいつのちか……ら」

圧迫されて潰されそうな骨が叫び声を上げる。あまりの苦痛に、ケヴィンは意識を保つのが精一杯だった。

ケヴィンの声が届いているのかはわからない。ただ、彼女は詠唱を続けた。

そして長い詠唱を終え、シャルロットは叫んだ。

「かの者を貫け！ユニコーンヘッド、召喚！」

その瞬間、ドランの眼前に二つの魔法陣が浮かんだ。魔界と繋がる魔法陣から、バチバチとイナズマを伴いながら、スルドい一角を持った馬頭のモンスターが姿を現す。

命を宿した一角獣の頭像は、一直線に狙った場所に飛んで行った。鋭く尖った一本角が、それぞれドランの目を貫く。

「グゥゥゥガアアア！」

目的を果たして姿を消すユニコーンヘッド。異物のなくなったを目を覆うように、ドランは両手を引いた。開かれた拳の隙間からケヴィンの体がバルコニーの床へと落ちる。

「ケヴィン！」

「大丈夫」

全身をあますところなく締め付けられたケヴィン。シャルロットが駆け寄ると、再び精霊の声が響いた。

（気を付けて、シャルロット。神獣はあなたを狙っているわ）

「えっ」

見上げると、月の神獣は苦しみに叫びながらも角の先に月の魔力

を溜めていた。相当な魔力を使うのか、高圧縮された魔力の塊がバチバチと音を立てている。
「こうつごうでち！」
シャルロットは再び呪文を詠唱し始める。
「一体なにを？」
ケヴィンが緊張しながら見守っていると、シャルロットは閉じていた瞳を開き、
「ゴーレム、召喚！」
今度はドランの頭上に四つの魔法陣が浮かび、中から両アームを広げ回転しながら特攻するゴーレムが現れた。彼らは命じられるがまま、ドランの二本の角の間に浮かぶエネルギーの塊に突っ込んでいく。
ゴーレムは魔力を機動力とする。それが、高圧縮された魔力の塊に突っ込めばどうなるか、想像に難くない。
エネルギー体は爆発し、ドランを襲った。
その爆風とは別に、シャルロットの体は弾き飛ばされた。
「シャルロット！」
「いちちち……」とシャルロットはおしりをさすりながら立ち上がる。
（ドランのハーフバニッシュよ。大丈夫、月の魔力が爆発してしまったから、失敗したみたい）
「ケヴィン、今でち！最高のいち撃をお見舞いしてやるんでち！」
（ドランの弱点は額の結晶よ！あそこで月の魔力をチャクラに変えているの！）
最大のチャンスを十二分に活かすべく、ケヴィンは走った。全身の骨が軋むほどの大ダメージを受けていたのに、その痛みを忘れてしまうほどに、このチャンスを失いたくなかった。
ケヴィンがバルコニーの外枠を踏み越え、夜空に舞う。ドランの額にたどり着くまでに全身の筋肉を硬直させ、
「真空水月拳！」

マシンガンのように無数の拳が撃たれ、ドランの額を歪な形に変える。そしてトドメの一撃、サマーソルトキックが結晶を切り裂く。

結晶はひび割れていき粉々の塵と化すと、ドランの断末魔が月夜の森に響き渡り、月の神獣は爆発した。

爆風に乗ってバルコニーに戻るケヴィン。彼はシャルロットに言った。

「ありがとう。勝てたの、シャルロットのおかげ」

「ふふん、たまには活躍ちないといけまちぇんからね。あたちはただの回復要員じゃないんでちよ」

得意気な顔で言うシャルロット。ケヴィンはスッと右手を伸ばした。

握手でもするんでちか？――不思議に思いながら、彼女も手を差し出した。

が、ケヴィンの手はシャルロットの手を通り過ぎる。そして、彼女の体を片手でヒョイと持ち上げた。

地面から浮かんだ足をバタつかせながら、シャルロットは叫ぶ。

「ちょ、まっ！　なななにをしてるんでちかぁ！」

「降りる、月読みの塔」

「降り……ま、まさか……」

バタつかせる足がピタリと止まる。シャルロットの脳裏をよぎる不安。

「大丈夫、さっき落ちそうになった時に見たら、何とか着地できる」

「ヒィィィ！　な、だ、だってさっき地の文ではただじゃ済まないって！」

「うん、すごく足が痺れると思う。あ、今のメタ発言、ダメ。多方面から怒られる」

シャルロットの抗議も功を奏さず、ケヴィンは淡々と返答しつつ、彼女の発言を正した。一歩一歩、バルコニーの外が近づくに連れてシャルロットは声は大きくなり、抵抗の必死さが高まっていく。だが、ケヴィンはビクともしない。

そしてついに、破壊された床、壁の前に立ち、
「降ろして！降ろしてぇぇぇ～」
「とうっ」
ホップするように床を蹴り、シャルロットを担ぐケヴィンはフリーフォールの世界へと落ちていった。
落下の恐怖からシャルロットはケヴィンの体にしがみつく。それを見越していたのか、ケヴィンは四肢を大の字に広げて風に乗り、体を塔の方へと寄せていく。
そして、ズギャギャギャ――とスゴい音を立てながら足を塔の外壁に付けて制動を掛ける。
壁を削りながら地面を目指すケヴィン。塔の三階部分まで来て、彼は塔の外壁を蹴り、近くの大木に飛び移った。いや、大木を二、三本蹴り、自由落下で得た勢いを殺した。
地面に足を着け、シャルロットを降ろそうとすると、いつからか彼女は気を失っていた。

彼女が目を醒ましたのは、ビーストキングダムの門前だった。
「起きた？白眼剥いてて、オイラ、ビックリしたよ」とケラケラ笑うケヴィン。
「ビックリしたのはこっちでち！それより、どうしてこんなところにいるんでちか！？」
「月読みの塔の周り、木が多くてフラミー、呼べない」
「なるほどでち、ここなら広くてフラミーを呼べ……最初から塔の上で呼べば良かったじゃないでちか！」
シャルロットは勢いで、フレイルでケヴィンの頭を叩いた！
「イタッ！そんなので殴ったら、ヒト死ぬ……」
「あんたしゃんは絶対シなないでち！」
ケヴィンは痛む頭部を撫でながら、風の太鼓を取り出した。
二人を乗せたフラミーはグングンと高度を上げる。上昇するフラミーの背でシャルロットは尋ねた。

「今ごろほかのみなしゃんはどうしているんでちかね？」
（デュランたちは水の神獣と戦っているわ。アンジェラが力をうまく使えなくなってるみたいだけど……。ホークアイたちは……あらあら、ディーンは修羅場になりそうね）
ルナの声が二人の頭に響いた。修羅場という言葉が大いに気になるところではあるが、二人は敢えて深入りしないことにした。
シャルロットがふと下を見ると、ビーストキングダムの屋上の人影が見えた。
「ケヴィン」
名を呼ばれたケヴィンも視線を落とす。
そこには、カールを腕に抱きしめて我が子を見送る父の姿があった。声を掛けることも、手を振ることもしない。ただジッと、彼らを見つめていた。
「……父さん、オイラ、必ず戻ってくるよ」
その言葉は獣人王の耳に届くはずはなかった。だが、獣人王は信じていた。息子（ケヴィン）が更なる成長を遂げて、ここに帰ってくることを。
再び旅立つ青年の背は、やがて見えなくなった。

「ふあ～あ」
時間は流れて、サラマンダーの日の夕刻、夜というにはまだ早すぎる時間からホークアイはあくびをしていた。
「何だいホークアイ、丸一日寝てたってのに、まだ寝たりないのかい？」
隣に立つファルコンは問い掛ける。だがホークアイは返答しない。スリープフラワーで変な時間に眠ってしまったホークアイは、昨晩一睡も出来なかったのだ。むしろ夜明けと共に寝入った。ファルコンもそうなると知っていたはずだ。だから彼は何も答えなかった。
「アニキはお寝坊さんなのにゃ」
そう言って笑うニキータ。ホークアイはバツが悪そうな顔をして、

ニキータの額にチョップを入れる。痛そうに額をさする猫人の姿を見て、ファルコンはケラケラと笑う。

そこで彼らが待つ少女がドアを開けて現れた。ファルコンとニキータ、それにホークアイは店の外でリースが出てくるのを待っていたのだ。

一日中寝ていたホークアイが今日リースと会うのはこれが最初だった。昨晩の事もあり、気まずくなるのではないかと不安が募る。だが、

「みなさん、お待たせしました！お寝坊のホークアイも、おそようございます」

リースはニコニコと笑いながら、挨拶をくれた。

「どうしたんです、ホークアイ？」

「あ、いや……」

まるで昨日のことが夢だったかのように、爽やかな笑顔を振りまくリース。小首を傾げたくなるほど、ホークアイは困惑した。

「さあ、行きましょう！火炎の谷に！火の神獣のもとに！」

リースは新装備の槍を握り締め、自身を鼓舞した。ホークアイも気を引き締め頷く。

「それじゃあ、おばさん、ニキータ、行ってくるよ。ジェシカを宜しく頼む」

二人は熱が引き始めた砂を踏みしめるように、戦地へ歩み出した。遠ざかる勇者の背中を夕焼けが朱に染める。

「おっと、忘れるところだった！」

そう叫んだのは、店の主、ファルコンだった。

旅立ち早々、振り返るホークアイとリース。見ると、ファルコンが指で何かを弾いた姿が見えた。そして、正方形の物体がホークアイの眼前に落ちてくる。両手ですくうように受け取るホークアイ。

「……なにこの縁起の悪そうなサイコロ」

「バカ！縁起悪くて汚いゴミとか言ってんじゃないよ！」

「誰もそこまで言ってないのにゃ……」

ホークアイが受け取ったのは、一つの紐に結われた黒に近い紺色のサイコロ二つ。六面の一つひとつにミミズのような文字が彫られている。呪印か何かのようだった。

「そいつは『夜目のサイコロ』さ。ニンジャをやめ、闇に生きることを誓った暗殺者がお守りに持つ特別なアイテムだよ」

「特別なアイテム、ねぇ。でも俺、ニンジャやめる気ないんだけど」

「今はね。だけど、いつかそれがアンタの力になる時が来るさ。良いから持ってきな。あたしからの餞別だ」

ホークアイはよくわからないまま、夜目のサイコロを道具入れに仕舞った。口では文句を言いながらも、母のように尊敬するファルコンから貰ったもの。これからの旅でなくさないよう、奥底に仕舞い込んだ。

「二人とも、また無事な姿で戻ってくるんだよ！」

「ホークアイのアニキ、リースの姐さん、御武運を！」

ファルコンとニキータに見送られ、ホークアイとリースは火の神獣ザン・ビエのもとへ、歩み始めた。

# 第七話

火炎の谷の中に火系モンスターの他、ソードマスターやニンジャマスターといった猛者が彼らのに襲い掛かってきた。
「この人たちはいったいなんなんでしょうか！？」
ソードマスターが振り下ろす剣をスタッグホーンで受け止めるリースが叫ぶ。その後ろで、ニンジャマスターのこんごうらかんという短刀をびしゃもんてんで受け止めるホークアイ。
「さあな。だがここはもともと、おっと、ナバールの兵士が修行に使ってたし、それを聞きつけた剣士がニンジャに喧嘩売ったりしてたから、なっ！」
ホークアイは流れるように繰り出されるニンジャマスターの技を回避しながら、リースの疑問に答える。すると、二人の脳内に聞き覚えのある声が響いた。耳を傾けているだけで熱くなりそうな火の精霊、サラマンダーの声だ。
（火炎の谷にはマナストーンがあったからな。そこから漏れる神獣の気で、こいつらは自我を失って、いまじゃモンスターになっちまったってわけだ！）
「神獣の操り人形ってことか」
「なら、ここでその呪縛を解き放ってあげましょう！旋風槍！」
「背面斬り！」
重たい剣を押し返したリースはスタッグホーンを勢いよく回し、その遠心力を利用したアマゾネスの必殺技を繰り出した。背後で、びしゃもんてんにチャクラを込め舞うように敵を斬りつけるホークアイ。回転を加えて増した攻撃に吹っ飛ぶ上位ランクのニンジャ。同じように吹っ飛ぶソードマスター共々、熱くなった地面に倒れたまま動かない。だが、
「さて、まだまだ先は長そうだな」
ホークアイが見る先に視線をやると、神獣の気にあてられた剣術（ソードマスター）

使いや忍術使い（ニンジャマスター）、さらにはファイヤドレイクといった火系のモンスターが二人に迫っていた。

襲いくる敵を倒しては切り抜け、そうして辿り着いたのは火炎の谷の奥底、マグマの川が流れる灼熱地獄。

その先に続く開かれた空間、岩の上に乗ると、

ボォォォ！

と、彼らの通った一本道に炎が走った。

「閉じ込められた。これは……」

「ホークアイ、上です！」

顔を上げると、無数の火が空中から降り注いできた。二人は地面に転がるように、敵の先手を交わした。

（きやがったぜぇ！！！）

サラマンダーの声が響くと同時に、炎の塊が彼らを襲った。

「ギィャース」

炎の中から聞こえるのは、鳥系モンスター特有の鳴き声だった。ただ違ったのは、その声を聞いた瞬間足が身震いを起こす程に凶悪なものであったことだ。甲高いにもかかわらず、圧迫感のある鳴き声である。しかも、どこから聞こえてくるのかがわからない。見えるのは炎の塊だけであって、実体が見えないのだ。

（火の神獣、ザン・ビエは炎に身体を変えることができんだ！だが、攻撃のときは実体化しやがる！その隙を突いて攻撃するんだ！！）

サラマンダーの言うとおり、炎の一つが真っ赤な鳥の頭へと変貌した。そして、禍々しい嘴が小刻みに動き、魔法が発動する。

「こ、これは」

足場の岩からボコボコとマグマが噴出し、二人の足元が灼熱と化す。高熱が足を燃やし、高温の蒸気が彼らの身体を包み込む。

「きゃああ！」

「うぐぅ！」

思わず、膝が折れて地面に手を付きそうになる。だが、マグマの

ように高温となった地面に手を付けば、火傷で武器が持てなくなる。そうなれば、その時点で勝機を失うに等しい。

二人は、ぐっと足を堪え、熱に耐える。

「なんだ、この魔法は……」

「こんな魔法、見たことありません」

（こいつぁラーバウェイブだ！人間が使うには何百年もかかる特殊魔法だぜっ！）

「いきなりそのような攻撃をしてくるなんて、私たちは随分歓迎されているみたいですね」

リースがシニカルな言葉を言う。余裕のある表現ではあるが、実際彼女に余裕がないことは、槍に体重を預けていることから明らかだった。

圧倒的な力の差が、人間と神獣との間には存在した。だが、【ワルキューレ（リース）】には、その差を埋めるだけの能力（ちから）がある。

「リース！」

「はい！……大地の子らよ、我等に強き加護を。プロテクトアップ！」

リースが詠唱すると、岩から取り出した大地のオーラがホークアイを包み込み、彼の防御力を上昇させた。

「サンキュー！さぁ次は自分の番だ！」

ホークアイは叫びながら、飛び回る炎の塊へと向かっていった。

まずはホークアイのステータスを上昇させ、彼が得意とする素早い動きで敵を翻弄し、その間にリースが自分のステータスを上昇させる。それが、彼らがコンビを組んで得た必勝の戦術だった。

だが、その戦術はこの瞬間に破られることになる。

「そこか！」

炎の中に見えた嘴、ホークアイはそこ目掛けて手裏剣を投げた。

だが、エレメンタルへと姿を変えたザン・ビエに物理攻撃は利かな

い。肉をも切り裂くことが出来る手裏剣は炎をすり抜け、虚しく溶岩の海へと消える。
「しまっ……！」
数個の炎の塊がリースのもとへと飛ぶ。
そして、彼女の頭上で実体化した神獣が素早く呪文を唱えると、炎の塊の中から三つの火球が現れた。
「ファイヤーボールだ！避けろ、リース！」
「（くっ、間に合って！）」
聖域でアンジェラが見せたような黒い炎、高圧縮された炎の塊がリースの腹部へと直撃する。
吹っ飛び、高温の地面へと突っ伏すリース。さらにそこへ、残った二つのファイヤーボールが飛び込む。
リースの細い身体を高温の火柱が包み込む。
「リィース！」
ニンジャの青年は叫びながら彼女に駆け寄ろうとした。右手に天使の聖杯を持って。
だが、
「だ、だいじょうぶです……」と言って、リースは立ち上がった。
「大丈夫なわけないだろう！さぁ、これを使うんだ！」
はちみつドリンクを差し出すホークアイ。全身に火傷を負っていようと、これを飲めば体力は全回復する。
しかし、リースは差し出されたアイテムを手で払った。
ホークアイは驚きながら、手のひらからこぼれ落ちそうになった回復アイテムを掴み直す。
「なにを……」とホークアイが視線を戻すと、彼女は自分の道具入れからはちみつドリンクを取り出し、飲み干した。
「り、リース？」
「攻撃があたる直前にプロテクトアップが発動してくれました。防御の姿勢を取れなかったので、最初の一撃はこたえましたが……さぁ、敵を倒しましょう！」

力を取り戻したリースは文字通り矛先をザン・ビエへと向けた。
そうして、再び放たれたファイヤーボールをひらりとかわすのだった。
ザン・ビエはいったん炎へと姿を変えたが、次の攻撃を繰り出すために再び実体化した。リースはその一瞬を付き、槍の切っ先を突き出した。
「てぇやぁぁ！」
「ギィィース！」
刃が額を付き、逃げるように姿をくらます。
実体化したとはいえ、相手は神獣。防御力の高さもザコモンスターとはわけが違う。
「やはり通常の攻撃力では厳しいですね。ホークアイ、パワーアップをかけます！」
「あ、ああ！」
ホークアイは若干困惑していた。
いつもなら、リースが大ダメージを食らえば彼が回復アイテムを彼女に施し、再び戦闘を開始していた。だが、彼女は今、ホークアイの手を拒んだのだ。
やっぱりディーンでの事気にしてんのか？――そんなことを考えながら、ザン・ビエの前に出たのが悪かったのか、ザン・ビエが大きく開いた口から放たれた熱線（ヒートビーム）が彼の身体を焼き焦がした。
ほぼ全身に火傷を負い、熱くなった地面に伏すホークアイ。
炎のエネルギーで潜在的な力を出せるようなになったリースは、急いでホークアイのもとに駆け寄った。
「ホークアイ！」
「だ、大丈夫」
彼は起き上がりながら、ポトの油を身体に染み込ませた。幻獣の油が火傷を癒し、体力を回復させる。
「ザン・ビエは、体力はあまり高くありませんが、攻撃を当てるタイミングを掴むの一苦労のようですね」

「奴がエレメンタルに姿を変えているときは、出来る限り特殊攻撃を使っていこう。水とんの術で攻め立てる！」

ホークアイの言葉を聞いたリースは顔を歪めた。眉根を寄せて、不快感を見せるように。そうして、こう言った。

「……それは、攻撃魔法を使えない私に対する“あてつけ”ですか？」

考えてもみなかった言葉が、リースの口から返ってきた。ホークアイはまず自分の耳を疑った。だが、訝しい目で見てくるリースの顔を見て、それが聞き間違いではないとわかった。彼はあぁとか、うぅとか言葉にならない声を出してから、

「なにを、言ってるんだ……そんなわけないだろう？」

リースはホークアイから視線を外して、

「そうですよね。私、つい……」

「……水とんの術が発動した炎が、ザン・ビエの擬態だ。その炎が実体化したら、お前の槍術を見舞ってやれ」

リースは頷き、宙を飛ぶ炎の塊を見た。

「行くぞ！」

ホークアイは叫ぶと、足場の中央に向かって走り出し、地面を蹴った。

舞い飛ぶ炎の中心に跳ぶホークアイ。敵の炎系魔法が彼を狙う。

「そうはさせません！真空波動槍！」

スタッグホーンを頭上で高速回転させるリース。リング状の風の塊が生まれ、彼女は器用に槍を動かして、それを炎の塊に投げつける。

真空状態にまで達した風にかき消されそうになる炎の塊。状態を維持するために生まれた隙をホークアイは見逃さない。

彼はチャクラを操り、大気中の水分を増幅させる。

「水とんの術！」

滝のような水の流れが宙を舞い、炎の塊の一つへと集中する。

「リース、あれがザン・ビエの擬態した炎の塊だ」

二人はその炎を追うように気を張り、攻撃のタイミングを計っていた。

しかし、いくつもの炎の塊が二人を惑わすように飛び交い、ザン・ビエの炎を隠す。

「くそ、どれが本物だ」

「背中を合わせましょう！そうすればどこから攻撃してくるかがわかります！」

「よし！」

背中を合わせ、３６０度の視界を手に入れるホークアイとリース。彼らの周りをぐるぐる回る炎の塊。業を煮やして動いた方が攻撃を受けるのは必至だった。

右から左へと、次々へと視界に入っては消えていく炎の塊。その動きに彼らは翻弄されつつあった。

二人は意思を介したかのように、すぅっと目を閉じた。

その瞬間、炎の一つが禍々しい角を持った鳥の頭へと変化した。炎系の最高位魔法、ブレイズウォールの呪文を詠唱し始める。しかし、

「そこだぁ！」

「そこです！」

二人は同時に目を開き、実体化したザン・ビエの両目へとクナイと槍の刃が突き刺さる。

眼窩からマグマのように燃える涙を流しながら断末魔をあげる火の神獣。二人が武器を抜くと、ザン・ビエは再び炎のエレメンタルへと姿を変えながら、一時撤退の陣を取った。

「さぁ、今のうちに回復を」

二人はそれぞれ回復薬を取り出し、ザン・ビエの次の攻撃に備えた。

回復を終えたホークアイは静かに手裏剣を手に握った。そして、天に向かってそれを投げつけた。

「そこだぁ！」

狙いを外さずに投げられた手裏剣。しかし、エレメントに姿を化していたザン・ビエに物理攻撃は利かない。手裏剣は炎を通り抜けてしまうのだった。

それを笑うように実体化するザン・ビエ。小刻みの動く嘴から炎系魔法の呪文が流れ出る。

ホークアイは手裏剣攻撃でダメージを与える意思はなかった。

「これでも食らいなさい！」

リースは右手でコインを弾いた。水色のコインが宙に舞うと、秘められた魔力が開放された。

解き放たれた水系の魔力が集まり、硬く冷たい氷の塊へと姿を変えていく。水系の基礎魔法、アイススマッシュである。

冷たい氷がぶつかり、ダメージを受けるザン・ビエ。

手裏剣を投げる際、相手の位置を目で確認していたのでは逃げられてしまうときがある。一流のニンジャは相手の気配を読み取って手裏剣を放る。ザン・ビエの奇襲を捉えるのに視覚に頼っていては後れを取る、そう判断したホークアイは、手裏剣を使うことでザン・ビエの先手を取ろうと考えた。

ホークアイが手裏剣が投げるとほぼ同時に、リースは聖域でアンジェラから貰った氷のコインを使ったのだ。

「ぐがががぁぁぁ！」

弱点となる水系魔法を受け、苦しむ火の神獣。

しかし、ザン・ビエは氷塊の攻撃に耐え、怒りを炎を瞳に宿して呪文を詠唱する。

「なっ、どうして？」

驚くリース。

しかし、敵の攻撃、ブレイズウォールが発動する。地面を走る炎、ホークアイとリースの足元に辿り着くと、地面が爆発した。炎とマグマが二人を襲う。

「きゃああ！」

「うあぁぁぁ！」

苦しむ二人の姿を見て、あざ笑うザン・ビエ。
リースは火傷の痛みに苦しみながら、ザン・ビエの変化に疑問を呈した。
「おかしいです……」
「おかしいって、何がだ」
「これだけ攻撃を加えているのに、敵の体力が減っている気配がありません」
「ザン・ビエはそこまでタフな奴じゃないって聞いていたんだけどな」
「それに、私たちがさっき潰した眼も復活しています」
その言葉にホークアイはハッとした。たしかにザン・ビエの顔を見ると、リースの言うとおり、さっき一撃で潰れてマグマの涙を流した眼窩に深い傷がない。まるで嘘だったかのように残っていなかった。
「これは……」
「どこかで回復しているとしか、思えません」
「でも、そんなことしてる風には見えなかったけど……」
ザン・ビエの謎を考える二人。しかし、敵がそんな暇を与えてくれるわけがない。
的は得意とする火系の高位魔法を唱え始めた。
「あぶないっ！」
リースが叫んだと同時に、二人は身を投げるようにその場から跳んだ。すると、その場所で小規模な爆発が起きた。
二人は攻撃を回避した――つもりだった。
しかし、彼らの立つ岩場の至る所で爆発が起きる。炎と爆風に彼らの体力が削られる。高位魔法のエクスプロードが敵全体を対象に発動したのである。続けてザン・ビエは彼らにトドメを刺すつもりで最高位の火系魔法を口にさえずる。
業熱の炎とマグマが彼らを襲う。爆風に焼けた肌が、さらなる高熱で焼けていく。

全身に走る痛みで、地面に伏すホークアイ。彼は同じように地面に倒れるリースに、搾り出すように声をかける。
「うぐ……リース……生きてるか？」
「な、ん……とか」
それぞれ、回復薬を使って、膝に手を付きながら何とか立ち上がる二人。息を切らしながら、炎に姿を変える神獣を睨み付ける。
「何とかして、あいつが回復する秘密を見つけないと」とリース。
「……わかった」
「ホークアイ？」
「俺があいつを惹き付ける！その間にザン・ビエを観察していてくれ！」
ホークアイは両手のクナイを力いっぱい握り締めた。聖剣の勇者６人の中で一番の素早さと強運を持つホークアイ。いくらザン・ビエの攻撃が高かろうと、彼ならその攻撃を回避することが出来るかもしれない。
だが、彼が地面を蹴って走り出そうとすると、強い力が彼の腕を掴んだ。
「わたしが、やります」
「リース？」
今にも走り出していきそうなリースをホークアイが諌める。
「何言ってんだ、俺が行く！君はここで見ててくれ！」
「放して下さい！私が行きます！」
「ダメだ！すばやさなら俺の方が高い！俺なら奴の攻撃を避けられる！」
必死に説得するホークアイ。彼には、何故リースが囮役を志願したのかわからなかった。
するとリースは顎を引いた。長い前髪に隠れ、表情が見えなくなる。だが、わずかに見える唇が震えているのが見て取れた。
「いつまでも……」
「えっ」

眉根を寄せるホークアイ。
その瞬間、リースは怒鳴るように叫んだ。
「いつまでもあなたに甘えていたくはないんです！」
その声は、昨日の夜に聞いたのと同じ感情的なものだった。リースらしからぬ、感情的な叫び声。
意を付かれて呆然とするホークアイを振り切り、彼女は走っていった。彼らを討ち滅ぼそうと呪文を唱えていた火の神獣のもとへ。
その姿を見てザン・ビエの嘴がピタリと止まると、その顔をニタァと笑って見せた。
刹那、浮遊する炎の塊から赤黒い火玉（ファイヤーボール）が高速の勢いで飛び出した。炎の塊は真っ直ぐにリースへと走る。
「ダメだリース！避けきれない！」
叫ぶホークアイ。だが彼は、リースが走りながら呪文を詠唱していた事に気付いていなかった。
「疾風よ、我を乗せて駆け抜けよ……スピードアップ！」
風のリングがリースを中心に展開され、姿を消していった。その直後、ファイヤーボールの第一撃が彼女の眼前に迫る。
だが、彼女は残像を残して、炎の塊を避けた。
「なにっ！」
その速さにホークアイは驚きを隠せなかった。素早さを誇り人一倍の動体視力を持つ彼でさえ、リースの動きを目で追うのがやっとだった。
「キエェェエエ！」
ザン・ビエが甲高く叫び声を上げると、残りの火玉もスピードを上げてリースに突っ込んで行った。
だが彼女も軽快なフットワークで二弾を交わし、さらに地面を蹴って三弾目を飛び越える。全弾を回避した、ように見えた。
「後ろだ！」
避けた炎の塊は方向転換し、三方向から彼女を襲った。
後ろからはファイヤーボール、前にはザン・ビエの本体。逃げる

場所を失うリース。だが彼女は一歩も退かない。
彼女は道具入れに手を突っ込むと、凍ったように青白いツメを取り出した。水系モンスターで一、二の凶暴さを持つポセイドンのツメである。彼女は素早くそれを砕き、ランスの刃に振り掛けた。
舞を見せるかのように振り返りながら放たれる横薙の一閃。粉末の海王の爪がキラキラと漂う。
水の波動を持った刃に赤黒い炎はかき消される。
それを見て驚くザン・ビエ。だが、リースの舞いはまだ終わらない。
彼女は槍を振るった勢いを活かして踵を返すと、一瞬の隙を突いてザン・ビエの眉間に槍を突き刺した。
「グギャアア！」
深く突き刺さった槍に、火の神獣は断末魔のような叫び声を上げる。
だが、ザン・ビエはボォっと燃え上がるように炎のエレメンタルに姿を変える。浮遊する他の炎も、隠すように本体のもとに集う。
炎に翻弄されるリース。だが、その姿をしっかりと追いかける男がいた。ホークアイはリースの任された観察を怠っていなかった。素早さを上げたリースの動きを追っていたおかげで、ザン・ビエの本体を見失うことはない。
そして、
「わかったぞ！」
彼はリースのもとへと駆け寄りながら、印を結んだ。
「水とんの術！」
滝のような水が彼らのいる場所から離れた岩影へと流れる。
「あそこだ！あそこにザン・ビエの体の一部があるんだ！奴はあそこの炎を得て体力を回復してやがる！」
「姑息ですね！」
リースは青いコインを取り出すと、水が流れ落ちる岩影に向かってこれを弾いた。たちまち魔力が解放され、冷たい氷の塊がザン・

ビエの炎へと落ちる。急激に冷やされた氷は爆発するように蒸発した。だが、ザン・ビエの体力を回復していた炎もその姿を消し去った。

「本体（ザン・ビエ）はどこだ！」

「あそこです！」

辺りを見渡したリースが一点を指した。そこにはふらふらと飛ぶザン・ビエの顔があった。回復する前に炎が消されたのだろう、額の傷は癒えていなかった。

「逃がすか！火とんの術」

「ホークアイ、一体何を？」

彼は火とんの術を使うと、取り出した手裏剣の表面を炙って溶かした。柔らかくなった鉄な中に氷のコインを埋めていく。器用なホークアイの手先に掛かれば、その間は一秒にも満たない。

そうして彼は、氷のコインを埋め込んだ手裏剣をザン・ビエへと投げた。

「解！」

叫んだ瞬間、コインに封じられていた魔力が解放される。凍り付く手裏剣、その姿は、結晶を纏ったように美しくもある一方、氷の刃は禍々しかった。その禍々しく冷たい氷の刃がザン・ビエの後頭部に突き刺さる。

「トドメです！」

リースはウンディーネの姿を模した像を地面に置いた。その中に封印されしは高位水系魔法の魔力。その魔力を解放すると、絶対零度の液体がザン・ビエのもとへと飛んで行った。

液体は外気に触れると変化を起こし、鋭敏な氷柱へと姿を変える。

「グゲェェゴオ！」

後頭部に巨大な氷柱が刺さる。

さらに、その氷柱を押すような力が後から加わる。リースが投げた槍が氷柱の根に突き刺さったのだ。そうして押された氷柱の先端が額血の傷から飛び出す。

白目を向き動きを止めるザン・ビエ。顔面に亀裂が走ると、爆発を起こして塵となっていった。

「どうにか、倒せたな」

敵の最後を見届け、ストンと地べたに座り込むホークアイ。熱で臀部が熱くなるが、それよりも立っている方がしんどかった。

リースもフゥと一息付いた。

「一時はどうなるかと思いましたけどね」

「今から移動すれば、明日はローラント城で休めるな」

「……ジェシカさんに挨拶していかなくて良いんですか？」

ホークアイはふとリースの顔を見上げた。不安と期待が入り混じった何とも言えない表情を見つめて、ホークアイはフッと口角を上げた。

「まだ寝てるだろうからな。それに……」

「それに？」

「リースも早く故郷に戻りたいだろう？アルマさんやライザに会いたいだろうと思ってさ」

リースはパチクリと瞳を瞬かせた。ホークアイの言葉が予想外な答えだったのだろう。

自然に彼女は「フフッ」と笑っていた。ホークアイもそれが返事だと思い、何も言わない。

彼女は考えていた――全てが終われば、この人と別れなければならない。いつまでも甘えていられない。でも彼は私の事もちゃんと考えていてくれる。それは、やっぱり嬉しい。

リースは道具入れから魔法のロープを取り出した。そうして、ふと気付いた。ホークアイは私とジェシカを同じくらい大切にしていることに。

恋敵に負けていないことは嬉しかったが、反面、ホークアイの一番ではないことが悔しくもあった。

「どうした、リース？」

ホークアイが優しい声で彼女の名前を呼ぶ。リースは笑顔をつく

り、言う。
「なんでもありません。みんなに会ったら何を話そうか、考えてしまったんです」
嘘を付いた。
造り笑顔をしてしまった。
嫉妬深い女と、ホークアイに思われたくないがために。

# 第八話―A

光の古代遺跡に向かっていたシャルロットたちは突如急降下して聖都の神殿に向かっていた。急角度の降下で振り落とされないよう両手でフラミーの体毛をしっかりと掴むシャルロットとケヴィン。二人の頭の中に響く声にシャルロットは興奮気味に答えていた。

「ドリアード、ウィスプ、そりは本当なんでちか？」

（は、はい。光の司祭さんが罹患した禁呪の病は、わ、わたしとウィスプさんの力で治せるかと……たぶん……）

（たぶんではないッスよ。もともと妖精王さんが使えた治癒魔法は木系と光系の魔法を複合させたものッス）

（わたしたちのような光、闇、月、木の魔力は特殊な波動を持っていて、これらを複合させるのは四大元素の複合より、その、むつかしので……）

申し訳なさそうに弱々しく説明するドリアード。消え入る彼女の言葉をウィスプが引き継ぎ、説明を続ける。

（だからこそ、ニンゲンじゃない妖精王さんしかあの治癒魔法は使えなかったんスよ。でもボクらが力を合わせれば、直接治癒魔法を光の司祭さんに掛けることが可能ッス）

光の神殿の中庭に着陸するフラミー。旅立つ前、ヒースとよく遊んだ花畑のような中庭。今のシャルロットには、昔ほど魅力的には見えなくなっていた。

すぐさま神官候補の青年たちや修道女たちがシャルロットの安否を確かめに駆け寄ってくるが、フラミーから降りたシャルロットは二言三言説明しただけでケヴィンを連れて走って行った。庭に残された神官候補生や修道女たちは、シャルロットの説明不足な説明では状況がよく解らず、顔を見合わせるしかなかった。

後ろの空気など気にする余裕もなく、シャルロットは司祭の寝室へと乗り込んだ。

「おじいちゃん！」
病人がいるにもかかわらず、彼女はバーンとドアを開けた。
そこには病床に伏す司祭の姿しかない。看護の人がいるはずだが、その姿はすらない。もしかしたらさっきシャルロットを囲った人たちの中に紛れ込んでいたのかもしれないが、彼女たちに誰が光の司祭を看ていた人間かは判断できなかった。
孫娘が帰還したこともわからないほど、司祭は衰弱し、意識朦朧の状態であった。二人が病人のもとに駆け寄ると、光の精霊と木の精霊がスッと姿を見せた。
「ドリアード、お願い」
こくりと頷く木の精霊。彼女がウィスプを見て合図を送ると、ウィスプもこくりと頷いた。緑葉の髪が揺れ、暖かな光が揺らめいた。
ドリアードが手の平を司祭に向けて歌声のような呪文を唱えると、ウィスプも詩のような呪文を口にした。二人とも全く別の呪文であるのに、それはまるでハーモニーのようで心地よかった。
シャルロットとケヴィンが幻想的な歌唱に聞きほれていると、ドリアードの手からエメラルド色の光が流れ出てきた。
「シャル、見て」
ケヴィンに言われて、シャルロットは司祭の顔を見た。部屋に入ってきた時は苦しそうに歪んでいた顔が段々といつもの穏やかな表情へと戻っていく。顔色も見る見る間に良くなっていく。
そうして、ゆっくりと目蓋が開かれていった。
「おじいちゃん！」
目にいっぱいの涙を浮かべ、シャルロットは祖父の胸へと顔をうずめた。
「シャル、ロット……それに、ドリアードと……ウィスプ……ケヴィンも一緒か……」
意識を取り戻し、その場にいる者たちの名を口にする光の司祭。
禁呪の呪いを打ち消したことを確認したドリアードたちは詠唱を止めた。

「ドリアード、リロイたちを訪ねた際に会って以来じゃな。二人の病を治す薬草を取りに行って、行方不明となったと聞いたが、どこに行っていたのじゃ？」

「あ、あの、まだあまり喋らない方が……」

ドリアードは恥ずかしくなって、顔をうつむかせた。褐色の顔が朱に染まる。

不十分な説明を補うため、ウィスプが口を挟んだ。

「呪いを消すことはできたッスけど、体力が全快したわけじゃないッス。あまり無茶するのはオススメしないッス」

「うむ……」

首肯する光の司祭であったが、彼はドリアードの顔をジッと見つめた。長年所在がわからなくなっていたドリアードから話が聞きたかったのだ。

「あ、わ、私は……」

「ドリアードさんはギルダーバインに捕らわれていたんスよ。リロイさんとシェーラさんが罹った呪い、寿命を短くする病を消す薬草を取りに行った時にッス」

「あ、わわわ」

ドリアードは顔を真っ赤に染め上げると、逃げるように姿を消してしまった。恥ずかしいというのもあったが、これ以上話を聞かれたくないようにも見えた。

「……昔と、感じが変わってしまったな」と呟くように言う光の司祭。

残されたウィスプは、言葉を選びながら説明する。

「ずっとギルダーバインの養分にされてきましたから。それにリロイさんたちを救えなかった事に責任を感じてるんッスよ」

「ぱぱとままを救えなかったって、どういう意味でちか？」

シャルロットの疑問に答えようと、司祭が口を開く。

「リロイとシェーラは、それぞれの故郷を捨て、ランプ花の森の奥地に小屋を建て住み始めた。ドリアードは故郷も命も捨てて愛し合

うエルフとニンゲンに感動し、どうにかして二人の命を救おうとしたのじゃよ」

「エルフもたまにしかランプ花の森に来ませんからネ。彼女にとっては、久しぶりにできた友人でもあったわけッス。だからこそ、精霊を捕食するような植物がいる場所にまで行って、薬草を探したんスよ」

精霊は各元素エネルギーの塊だ。精霊を捕食して栄養分とする生き物も少なくない。特にドリアードは木の精霊、マナのエネルギーをたくさん蓄えている。生命力の強い彼女を取り込み栄養分とすれば、彼女のエネルギーがなくなるまで不死であることも、また新たな進化も可能となる。

「逆に言えば、ドリアードさんはギルダーバインの中で半永久的に生かされてたわけッス。しかも外界の情報もオーラとかでわかるッスから、リロイさんとシェーラさんが亡くなったのもわかったはずっス」

「大切な人を守れなくて、ずっと邪魔(ギルダーバイン)した怪物の栄養分にされてた……ドリアード、可哀想」

ケヴィンがシュンとしながら言った。皆も同じ気持ちだった。

「きっとドリアードさんは、みなさんが助け出すまで自分を責め続けていたんスよ。それで自分に自信をもてなくなって、あんな感じになってしまったンスよ」

「ドリアードはずっとあのままなんでちょうか？」

そんなことはないッスよ――惑うことなくウィスプは言った。

「ドリアードさんも徐々に変わってきてるッス。みなさんのお役に立てて、自信を取り戻しつつあるんスよ。今回の申し出がその証拠ッスね！」

ウィスプが言うように今までの彼女であったら、光の司祭の病を治す方法があるとは提案しなかったであろう。自分が治療出来ると思っても、『自分は無力だから』『神獣討伐の邪魔をしてしまうから』と考えて口を噤(つぐ)んでいたに違いない。だか彼女は勇気を出して

提案した。シャルロットの力になりたいという思いが、彼女を突き動かしたのだ。

「シャルロットや」

ウィスプの話がひと段落付いたのを見計らい、光の司祭が孫娘を呼んだ。名前を呼ばれ、シャルロットは祖父の顔を見る。

「立派になったお前にプレゼントがある。ヒースの部屋の隣の部屋に棚がある。そこに置いてある瓶を持って行きなさい」

「う、うん。わかったでち！」

急な申し出にシャルロットは若干の戸惑いを見せたが、貰えるものは貰っておこうと考え、首を縦に振った。

駆け足気味に祖父の寝室を後にする。

「それではボクもこのへんでッ」

ウィスプも姿を消し、光の司祭とケヴィンだけが残された。司祭は獣人の青年を観察するように見つめた。

「父とのわだかまりは解けたようじゃな」

「うがっ！カールも死んでなかった！」

かつてウェンデルを訪ねた際、彼は光の司祭にカールを生き返らせて欲しいと願った。しかし、生あるものはいつか死ぬと、彼から死の重さを説かれた。

「すまぬが、ケヴィン」

「うが？」

「わしが倒れている間に何があったのじゃ？……いや、いま何が起きている？」

その言葉を聞いて、ケヴィンは光の司祭が置かれている状況を察した。

彼はビースト兵を駆逐するために禁呪に手を出し、倒れた。彼の認識はそこで止まっているのだ。目を覚ました矢先、瞳に映ったのはクラスチェンジを経て【クレリック】から【エンチャントレス】へとなった孫娘の姿である。

ケヴィンは全てを話すことにした。神獣が復活し、世界が破滅に

向かいつつあることを。

ケヴィンが説明しているころ、シャルロットは祖父に言われた部屋にやってきた。かつて誰かが使っていた部屋。今はいない光の司祭の友人が使っていた部屋だという。それが誰か、シャルロットは知らない。だが、彼女は一度だけ、ヒースが悲しそうな表情でこの部屋の中に入っていったのを見たことがある。

部屋の中は真っ暗だった。カーテンが締め切られているというのもあるが、部屋の壁がダークトーンなのである。まるで黒魔術の実験場のような雰囲気である。

「えっと……あった！これでちね！」

シャルロットは壁際の棚から、小さな小瓶を取り出した。空、というわけではなく、それなりの重みがあった。特段封がされているわけでもないから、という理由でシャルロットはビンのコルク蓋を開けて中を見てみた。

「う、こりは……」

「た、ただいまでち～」

小瓶をもって、シャルロットは光の司祭の部屋へと戻ってきた。おかえり、と返事をしようと思ったケヴィンであったが、シャルロットにいつもの元気がないように見えたので、言葉を飲み込んだ。

「おじいちゃん？」

「いま寝たとこ。まだ体力戻ってない。だから休ませる」

「そう、でちか」

シャルロットは困惑していた。よく見えると、顔色があまりよくないようにも見える。

「どうした？」

「これ、もらったでち」

彼女は部屋の中から持ってきたアイテムをケヴィンにも見せた。小瓶の中には、真っ白な砂がたくさん入っていた。

「これ、なに？」
「『灰の小瓶』というらしいでち。……黒魔術、というか呪術に使うもので、中身はたぶん……」
「たぶん？」
「焼いたイモリとかコウモリの灰でち」
言いながら、シャルロットは顔をそらした。ここまで引いてるシャルロットも珍しいものである。
「いくら信仰を外れた【エンチャントレス】になったからって、これは……」
彼女にとっては予想の斜め上を行くプレゼントだった。むしろこの光の神殿に呪術に使う道具があるとは思いもしなかった。
「シャルロット、光の司祭から伝言。聞く？」
「なんでちか？」
「『ワシからのプレゼント、大切にしてくれ』って」
その言葉に、シャルロット自身が灰になりそうな気分だった。

時は流れ、デュランたち陽の沈んだモールベア高原を歩いていた。何十人ものフォルセナ兵を連れながら。
水の神獣を倒した後、デュランとアンジェラはフラミーに乗り、フォルセナ城へ。そして英雄王に聖域でのあらまし、神獣の復活を報告した。すると王は二人に暇を取らせると、すぐに選りすぐりの騎士らを集め、土の神獣討伐の遠征軍を組織した。
『ジンの日の翌日はノームの日。土の神獣ランドアンバーが最も力を発揮する日だ。しかも、封印が解け時間が立っている。何としてもジンの日のうちにランドアンバーを討ち取るのだ』
英雄王の命令に従い、騎士（ナイト）であるデュランは遠征軍と共に宝石の谷ドリアンに行く事を了承し、現在に至る。
旧来の友人や同僚の中で、彼はいつもと変わらぬ調子で戦いの準備をしていた。だがアンジェラは、団体行動に慣れていないのか口

数少なく恐縮しているようだった。
「っつかさ、お前、マイアの一般人にはあんだけ気軽に声掛けてたのに、何でフォルセナの兵士にはこんなに引いてんの？」
「別に引いてなんかないわよ。でも、ここの人達はさ、あたしが王女だって知ってるわけじゃない？」
「……知ってるから何だよ？」
「だから……」
眉間にしわを寄せながら隣に立つデュランの顔を見上げるアンジェラ。デュランも岩に腰を降ろしている彼女の顔を見た。困惑の色が浮かんでいるようだった。
そこに、アンジェラの説明を遮るように一人の兵士が駆け寄ってきた。デュランもよく知るあの男である。
「アンジェラ姫様、やっとお話出来る時間が出来ました。敵はあの神獣、人間の力など足元にも及ばない。しかしそれは過去の話。このブルーザーが率います鋼の剣士団にかかれば神獣など恐れるに足りません。さあ、その不安にかられた顔を上げ、微笑み下さいませ」
「……なにしてんの、ブルーザー」
三流ミュージカルのようなセリフを言って跪く知り合いを見て、デュランはアンジェラ以上に引いていた。
紅蓮の魔導師が密かに侵入したあの日、剣術大会の決勝戦で刃を交えたのがブルーザーだった。デュランの記憶では、彼はこんな歯が浮くようなセリフを並べるような男ではなかったはずである。
「デュラン、お前は何もわかっちゃいないな。姫様は不安なんだ。俺のような頼れる男が必要なんだよ。さあ姫様、鋼の剣士団隊長のわたくしに思う存分お甘え下さい！」
満面の笑みで両手を広げるブルーザー。
その姿にデュランの顔はひきつっていた。アンジェラも背中がゾワゾワするのを隠しながら、愛想笑いを振りまく。
返答に困るアンジェラに助け舟を出すかのように、デュランが口を開く。

「あのさ、その『鋼の剣士団』って何なの？英雄王様はそんな名前付けてなかっただろ？」
「無論だ。俺が考えたんだ。【ソードマスター】たる俺が隊長をしているんだ、だから剣士団だ！」
鋼にこだわりないんだ――ブルーザーの話を聞く二人は心の中でツッコミを入れていた。
「あの、ブルーザーさん」
「ははっ！何でしょう、アンジェラ姫！」
「あ～……あ、お水！喉が渇いたから水が飲みたいのだけど、あるかしら？」
「水ですね？ただいまお持ちします」
従順な家臣のように低頭したままその場を離れるブルーザー。どうやら彼は、荷物を別の場所に置いていたらしい。
「あの人さ、あたしがフォルセナで修行してる時からことある事に話し掛けてきて、口説き方がマジキモいんだよね」
「直接そう言えば良いじゃねえか。いつもみたいに」
「だからそうはいかないのよ。いい、デュラン。この世には外交という難しい政治問題があってね、一国の王族ともなると種々の振舞いにも気を使わなくちゃいけないのよ」
指を振りながら説明するアンジェラにデュランは首を傾げた。
「でもおまえ、マイアの人には普通に声かけてたじゃん」
「あれは、あたしの事をアルテナの王女だって知らないからよ。だからちょっとやそっとの事しても問題にはならないの。バレないから」
「ふーん。つまりアレか、ブルーザーはアンジェラをアルテナの王女だって知ってるから下手な振舞い見せたら故郷に迷惑がかかるって思ってんのか」
「ピンポーン。正解者のデュランさんにはこれから来る水を分けて上げまーす」
棒読みながらおどけた台詞を口にするアンジェラだった。

そこに件の男が戻ってくる。片手に水の入った革袋を抱えて。
「お待たせしました姫様！」
「ありがとう」
営業スマイルを向けるアンジェラ。ハリボテの笑顔に喜々とするブルーザーは、ベラベラと謝辞を宣い始めた。
「いえいえ姫様これくらい朝飯前にございます。その水は大地の裂け目の東側を降りました所にある地下水脈を……」
照れて顔を赤らめているブルーザーの早口を無視して、水袋に口を付けるアンジェラ。
まだたっぷり残る水をアンジェラはデュランに差し出す。
「はい、デュラン」
「おう」
「この周辺を豊かな草原地帯としているのも全て地下水脈のおかげで……て、えぇ！」
いきなり大声を上げるブルーザー。
キョトンとした顔で声の主を見るアンジェラ。デュランも水袋に口を付けたままブルーザーの驚いた顔を見やった。
「ちょ、デュラン、おま、なにして……」
「プハッ。なにビックリしてんだよ？」
「だっ、え、間接キ……」
ブルーザーは立ち上がり、両手で頭を抱えた。自分がやりたくてもやれないような事を目の前で、さも当然のようにやっていることに理解が追い付けないのだ。
「間接キスって、旅してたらそんな悠長なこと言ってられねーぜ」
そうは言っても、ブルーザーにはなかなか理解出来なかった。
デュランは良いとしても、アンジェラ姫はどうなのか、正直引いているんじゃないのか――自分の常識が正しいことを信じて、アンジェラの方を見る。しかし、そこには動揺する気配すらない王女が一名。そもそも彼女から渡しているのだから、譲渡人本人が引いているとは考えがたい。ブルーザーはそこに気が付けない程に動揺し

ていた。
だが、そこでピーンと来た事があった。
「待てデュラン、そもそもキサマ、何故そんなにアンジェラ姫様に馴れ馴れしいんだ？」
「……はぁ？」
怪訝という表現がまさに相応しい顔でデュランはブルーザーを見た。当のブルーザーは興奮状態である。二人の様子を見て、アンジェラはニヤリと笑った。悪戯を思い立った小悪魔的な笑い方だ。
「それはね、デュランが私の事を好いているからですよ」
「ブッ！」
「んな、な、な……」
二口目の水を盛大に吹き出すデュラン。ブルーザーは口をパクパクしながら狼狽するも、頭をぶんぶんと振って冷静さを取り戻した。
「わかった、デュラン。決闘だ！」
「何が『わかった』だ！全然冷静さなんか取り戻してないぞっ！」
「そうだな、『わかった』ではない。わかっていた、だ。さっきからオマエのアンジェラ様に対する態度、アレは明らかに馬鹿が恋をした時の振る舞いだ」
「いや、オマエには言われたかねーよ」
「しかし、オマエではアンジェラ様と不釣り合いだ」
この辺りからアンジェラの顔も曇り始めた。想定していたのとは違う方向に話が進んでいる。決闘って、何でするの？といった顔である。
「オマエが勝てば、アンジェラ様への求婚を認めてやろう。しかし、俺が勝てば……」
「勝てば……？」
「アンジェラ様は俺がいただく！」
「「……」」
デュランとアンジェラは沈黙した。最高位風魔法にスタンウィンドというものがあり、これを食らうと喉が大気を震わせることが出

来なくなり、沈黙状態に陥る。
彼らはスタンウィンドを食らったかのように沈黙し、硬直していた。
だが、一瞬の間を経た後、二人同時に騒がしい程の抗議を申し立てた。
「いや、話が飛躍し過ぎているぞ！」
「何であたしが決闘の景品になってるの！」
「てか神獣戦前に無駄に体力を消耗するだけだって！」
「いや、そもそもあたし、アンタみたいなのタイプじゃないのよ！というか気付いて！あたしずっとアンタの事煙たがってたのよ！」
「確かにアンジェラのことはす……」
「えっ！」
デュランは言いながら言葉を詰まらせた。微かに聞こえた「す」という音に、アンジェラは驚きと喜びがごちゃ混ぜになり、さらなるパニックに陥りつつあった。
そんな二人の抗議を一蹴するように、ブルーザーが笑う。呵々大笑。
「ハッハッハッ！デュラン、いくら勝ち目がないからって決闘からは逃れられないぞ。アンジェラ様、この私が必ず勝ち、あなた様をお迎えに来ます故！アッハッハッハ……」
そういって剣を取りに行ったブルーザー。
残された二人は顔をひきつらせていた。
「オマエ、何であんなこと言ったんだよ？」
「ああ言えば、あの馬鹿が諦めくれると思ったのよ」
「わりぃ、アイツ、馬鹿だから……」
「私こそごめん。あそこまで馬鹿だとは思わなくて……」
「「……ハァ」」
二人はシンクロ率１００％の溜め息を吐いた。
数分した後、剣を握ったデュランとブルーザーが対峙していた。
周りを囲むは野次馬の神獣討伐兵だ。

ブルーザーは剣術大会の借りを返せるかね――必死に特訓してたからな――ブルーザーはクラス3の【ソードマスター】だが、デュランはクラス2の【ナイト】だ。勝敗は目に見えてるよ――野次馬の声はこんな感じだった。

「デュラン、万が一にもだが、お前が勝ったらこいつをやろう！」

「何だよ、それ」

「これは『剣士の証』といってだな、我が家に代々受け継がれる家宝だ！」

「あ、そう」

「キサマだけ大切なものを差し出すのでは公平ではないからな！ハッハッハッ！」

声を張って笑うブルーザーを睨みながら少女はつぶやく――ていうか、あたし、まだデュランのものじゃないんだけど、と。

「さて、そろそろ試合を始めようぜ！」

「試合じゃねえだろ……」

剣を抜いたブルーザーにツッコミを入れながら、デュランも剣を携え構える。

審判役の男が手を上げ、

「始めっ！」

腕を振り下ろした。

それと同時にブルーザーが大地を蹴ってデュランに突っ込む。大きく振り上げられた大剣が、デュランの額当てへと振り下ろされる。

一瞬にして詰まった間合いと俊敏な一手に、周りの野次馬が驚きの声を上げた。これでもう勝負は着いたな、と皆が感じた。

だが、

「よっ、と」

ヒョイと上半身を捻らせたデュラン。誰もがブルーザーの剣が額当てを打つものだと思っていた。それだけ彼の一刀は速かったし、デュランも回避動作を取ろうとしていなかった。

だが、デュランは紙一重のタイミングで大剣の刃を避けてみせた。

周りも驚いたが、一番驚愕したのは予想外にも空を斬ってしまったブルーザーだった。彼は勢いのあまりにデュランの横を通り過ぎ、あ然とした。

「あ、はは、昔のよしみで手ぇ抜いたかな。運が良いぜ！だが、次は本気だ！ウラァ！」

再び地面を蹴るブルーザー。今度は大振りすることなく、連続した突き攻撃を繰り出した。その速さは、ザコモンスターなら穴だらけにすることも可能だったであろう。

だが相手はデュランである。

ヒョイ、ヒョイとステップを踏むように右に左にと体を移動させる。ブルーザーが踏み込む度に後退していくが、デュランに焦りの色など微塵もなかった。むしろ慌てていたのはブルーザーの方だった。

「くそ……くそ……あた、れ……あたり、やがれぇぉ！」

一か八か大きく踏み込み、全体重を乗せた一撃が放たれる。

だが、デュランは顔色一つ変えずに攻撃を避けた。そして体重を乗せて突き出される手首を思い切り蹴り上げた。

「ぐあっ！」

下からの衝撃に剣は手からすっぽ抜けて、宙を舞う。そして回転しながら弧を描き、野次馬たちの真ん前、地面に突き刺さった。

持ち主も足下がおぼつかなくなり、地面に倒れ込んだ。

「く、そ……マジメにやりやがれデュラン！」

「て言われてもな。剣振るったら、一撃で倒してしまいそうで」

「何言ってやがんだ！剣を持つ者なら、いつだって本気で戦えっていうんだ！」

デュランは頭を掻いた。心底困った顔をしている。彼は言葉を選んでいたのだ。

だが、うまい表現が見つからず、デュランはばつが悪そうにこう言った。

「いや……剣を振るったら、オマエを殺しちまいそうで……」

「!?」

その言葉にブルーザーは震えた。死の恐怖とかではない。怒りに身を打ち振るわせていたのだ。

「テメェ、ば、バカにしやがってぇぇ!」

ブルーザーは地面に刺さっていた剣を抜いた。そうして頭上で剣を高速回転させ始めた。

風が集まり、周りの兵士たちがざわめき立つ――ブルーザーの野郎、真空剣を使う気だ――そんなことしたら、俺たちも危ないんじゃないか――あのバカ隊長、怒りで我を忘れやがったな――。

その中で一人、賭けの対象となっている少女は静かだった――静かにデュランを見つめていた。

反対に、彼に対峙する男が叫んだ。

「これが俺の力だあ!さあ、剣を抜きやがれ!でなきゃオマエが死ぬぜ!」

「剣を抜いちまって、本当にいいんだな?」

「……なっ!?」

デュランが呟くや否や、ブルーザーは驚きの声を上げ、喉を詰まらせた。

対戦相手の言葉に反応したわけではない。

彼は、デュランが瞬間的に間合いを詰めてきたことに驚いたのだ。モールベアでもこんなに速く移動できない。

ブルーザーは瞬間、フォルセナ城に単身攻めてきた紅蓮の魔導師を思い出していた――あの男もこれくらいの速さを見せていたな、と。

次の瞬間、彼の頭の中は恐怖で真っ白になる。

眼前に迫るデュランは剣の柄を握り、月の光でギラつく刃の影が見えたからである。刀身など見えない程速かった。

そうして、喉にドンという衝撃が加わった。

彼の瞳には闘志を放つ目をしたライバル、いや元ライバルの姿が映っていた。眼下には剣の柄が握られたデュランの拳が見える。拳

が喉にぶつかっているということは、刃体はすべて、喉を貫いているということだろう。そんなことは考えなくてもわかった。

頭上で回る剣が止まり、ブルーザーは膝から崩れ落ちるように倒れた。

全身から力が抜けていくのを感じながら、ブルーザーは思った――死っていうのは穏やかだ。痛みもなけりゃ、苦しくもない。喉かっ切られてるってのに……。

どんどん意識が遠退くブルーザー。その時、彼の耳に声が聞こえた。

「おーい、勝手に死んだ気になるなー」

間の抜けた調子で言われたか台詞に、ブルーザーは目をパチクリさせた。恐る恐る手を喉に当てるが、出血どころか、傷すらない。わけもわからず、彼はデュランの方を見た。

すると、右手の剣は逆さ向きに握られていた。デュランは瞬時に剣を逆手に持ち替え、柄の底でブルーザーの喉仏を突いたのだ。それも直前で勢いを殺した、寸止めの要領で。

「な、んで……だ……」

ブルーザーは愕然としながらも、どうにか口を開いた。

「俺の方がクラスもレベル上だってのに」

「実戦の違いよ」

彼の疑問に答えたのはアンジェラだった。デュランたちと旅をしてきた彼女は言う。

「ブルーザー、あなたは城内での訓練かフォルセナ周辺のモンスターとしか戦ったことがないわ。でも、デュランは色んな場所で多種多様なモンスターと戦ってきた、時には自分よりはるかにレベルの高いモンスターとも」

「いや、しかし、こんなに違うはずは……」

「あなたも見たでしょう？攻撃する時のデュランの目。あのような

目があなたにできまして？」
　む、ぐ――ブルーザーは口を閉じた。剣を振ったデュランの目、あの闘志に満ちた目。何人もの兵士と手合わせしてきたが、あんな目をしていた人間はいない。
　剣術大会の決勝で戦った、あの日のデュランですら。
「実戦経験とは、そんなにまで剣の腕を高めてくれるのか……」
「剣の腕だけではありませんよ」と、アンジェラは柔和な笑みを浮かべて言う。
「私も旅に出るまではほとんど魔法を使えませんでした。でも、この二年と少しの旅路で、高位魔法を使えるようになりました」
　ねぇデュラン、と言いたげな柔和な眼差しをアンジェラは旅の仲間に向けた。そうだなと、彼も微笑みを返した。
　言葉もなく意思の疎通を図る二人を見て、ブルーザーは悟った。
「こりゃ俺の完敗だな。デュラン、約束通りこいつをやるぜ」
　彼は懐から賭けの対象としていた『剣士の証』を取り出し、デュランに放り投げた。
　片手でキャッチするデュラン。彼は特殊アイテムに目を落としたが、すぐにブルーザーへと投げ返した。
「こいつはオマエの家に代々受け継がれていた大切なものだ」
「だが……」
「それに、俺にはこれがある！」
　デュランは懐から一つの勲章を取り出した。黄金色に輝く円形の勲章だ。
「英雄王さまから頂いた『聖騎士の証』だ。これだけあれば、俺は十分なんだ」
　それを見て、ブルーザーはフッと笑った。デュランの強さを知り、何故だか嬉しさを感じたのだ。
　彼は立ち上がり、隊長として命じた。
「さぁ休憩は終わりだ！我々はこれから宝石の谷最深部へと向かう！必ずこの二人を、無傷で神獣のところまで送るんだ！」

その叫びに、周りの兵士は『オー！』と歓声を上げた。
出立する群集の中で、アンジェラはデュランの腕を抱きしめた。
「な、なんだよ？」
「なんでもないっ」
アンジェラの声は嬉々として、弾んでいた。二人は腕を絡めてドリアンへと入っていった。

# 第八話―B

シャルロットたちが古代遺跡の中に入ったのは、夜の静寂に世界が支配された頃だった。夜闇のなか、人の気配もない古代遺跡は不気味であった。

光の神獣は当然ながら闇に弱い。そこを狙ってジェイドの刻になってから光の古代遺跡にやってきたのだが、彼らの目論見は外れることになる。

歩みを進める二人がまず目指したのは、遺跡全体を見渡せる高台だった。そこからダンジョン全体を見渡すと、遺跡の奥で何かが見え隠れしていた。気球のような何かがフコフコと漂っている。

「シャルロット、あれ……」

「ええと、あそこまで行くには、ああ行って、ここくぐって、こっちに回って……わかりまちた！案外すぐに着きそうでち！」

高台を降りて来た道を戻り、遺跡の中央へと向かう通路を歩く。

「こっちでち。ここを抜ければ奥に行けるでち！……それにしても、きったない水で……ウボッ！！」

階段を下りて廊下に溜まる水の中に足を突っ込むや、彼女の体は水溜りの中に飲まれてしまった。ケヴィンは急いで腕を水の中に突っ込む。見た目以上に深い水溜り、いくら腕を奥に突っ込んでも床に当たる気配がない。

すると、何かが彼の腕を掴んだ。

「ウベェ！ペッペッ！ダメでち、こっからは深くなってて先に進めないでち！……って、なに水の中に腕突っ込んで硬直してるんでちか？」

シャルロットがケヴィンの横から顔を出した。緑に濁った水を少し飲んでしまい、本当に気持ち悪そうな顔をしている。

だが、ケヴィンの腕はいまも掴まれたままであった。見る限り、シャルロットのたっている位置から、彼の腕を掴むことは不可能で

ある。というか、彼女の手は二本とも水の中から抜かれ、まさにお手上げのポーズをしているのだから、三本目の腕がなければ、ケヴィンの腕を掴むことはできない。

もちろんそんなわけはないので、ケヴィンは硬直しているのである。

彼はゆっくりと腕を水の中から引き上げた。

すると、太い二の腕に数本の触手が絡まっていたのだ。ケヴィンは驚き腕を振る。だがその瞬間、彼の腕にビリビリとした電流が流れた。

「これ、グレルメイジ！」

叫ぶと同時に腕から離れる不定形モンスター、グレルメイジ。真っ赤な体に、収縮自在の触手。

戦闘態勢い映るケヴィン。ところが、彼の足元に白く輝く魔方陣が現れ、その身動きを封じる。

「うっ、これは……」

その瞬間、遺跡の壁からきらりと光る何かが見えた。

顔を上げると、ダークシルバーの甲冑に身を包んだ騎士が剣を振り上げながら、跳び込んできた。

「気をつけるでち！そいつはシルバーナイトでち！」

光属性の甲冑を身にまといながらも、悪魔に魂を売った騎士、その必殺技、魔方陣斬がケヴィンを襲った。

彼は瞬く間に獣化し、振り下ろされた剣を砕き、そのまま甲冑に一撃を見舞った。甲冑が割れ、底深い水の中に沈んでいく。

彼がシルバーナイトを倒すと同じ頃、シャルロットがシュビラフレイルを振り回し、グレルメイジをばらばらに砕いていた。

（ケヴィンさん、シャルロットさん）

二人の頭の中に昼間も聞いた元気な声が響いた。

（あそこにある排水穴を見てほしいッス。この遺跡にはいろいろな仕掛けがあるんスよ。この水を流す仕掛けがあるはずッス。それを見つけ出してください！）

「早くしないと夜が明けてしまうでち。そうすればアウトでち！」
二人再び来た道を引き返し、排水装置の仕掛けを探し出した。
さっきまで気配のなかった遺跡に、多数のモンスターがうごめき始めた。不意打ちでは彼らを倒せないと踏んだモンスターは、多勢に無勢、人海戦術で二人を倒すことにしたらしい。セイレーンのカギヅメを交わし、ときにはぱっくんドラゴンの舌に巻かれながらも、二人は遺跡を一回りして、排水装置の仕掛けを探した。
そして見つけたのは、壁にかかった二枚の石版だった。
「これは……？」
「ウィスプしゃん、これがとってもあやしいのでちけど、何かわからないでちか？」
呼ばれて姿を表す光の精霊。外が暗いからか、彼の放つ明かりで廊下がふぅっと明るくなる。
「うーん、そこまではボクにも……」
「ちょっと待つでち！」
ウィスプが出てくるや否や叫びシャルロット。ケヴィンとウィスプが少女の顔を見ると、シャルロットは指を唇に当てた。
すると、遠くで――カラ、カラ……と機械じみた音が聞こえた。
「これは、もちかちて……ウィスプしゃん、光の波動とかって出せまつか？」
「出せるッスけど」
「そちたら、光の波動をこの石版に当ててみてくだちゃい！」
ウィスプは疑問符を浮かべながらも、揺らめく光を強めた、そうして、照らされる二枚の石版。すると、左側の石版がカタカタと揺れ始め……
ガタンッ！
と、石版とは反対側の壁が崩れ、新たな道が現れたのだ。
「やっぱり、これが仕掛けだった！でも、まだ水が……」

「時間もありまちぇんし……ジェーイド！」
爪をかんでいたシャルロットが、今度は闇の精霊を呼んだ。ぬぅっと影が実体化したように、闇の精霊ジェイドが姿を現した。
「……なんだ」
「こっちの右側の石版に闇の波動を当てるんでち！」
「私が闇の波動を出せるのが前提だが。まあいい、可能だ」
ジェイドはこうもりのような黒い羽を羽ばたかせて石版に近づけると、不気味な目玉を石版に向けた。鋭い瞳から黒い波動が放たれる。
その瞬間、遺跡を地響きが襲った。そしてどこか遠くで聞こえる水の流れる音が聞こえた。
「この音、水ながれた！」
「しかし、シャルロットさん、よくジェイドさんの力が必要だってわかりましたネ？」
「そんなの簡単でちよ！『光』といったら『闇』とくるのがセオリーでちから！」
安易な考えに、それを聞いた三人は言葉を失った。それを見たシャルロットが悪ふざけに一言添える。
ゲーム脳でt……――言い切る前にケヴィンがその口を塞いだ。
ともあれ、二人は新たな道から、さっき水の溜まっていた場所へと掛けて行った。装置を探すのに時間を使い、夜はもう更け、陽が出るのもつかの間だった。
溜まっていた水はなくなり、彼らは階段を下りていく。むかし水の底に沈んだ者の頭蓋が転がっているのが不気味だった。
そうして、高台からふわふわした何かが見えた広場、遺跡の奥地へと入った。だが、
「なんにもないでちね……」
二人は小首をかしげた。だがそこでおかしなことに気がついた。
「ここ、どうしてこんなに明るい？」
夜明け間近といっても、あっという間に太陽が昇るはずはない。

異様なまでの明るさに、二人を包み込まれていた。
そこで彼は気がついた。ここには最初から、光の神獣がいることに。
「シャルロット、上！」
見上げると、闇のような空に一つの目が輝いていた。太陽のように輝く目玉と、日輪のような体が夜空に浮かんでいる。
「神獣でち！」
光の神獣ライトゲイザーは目をつぶり姿を消した。だが、すぐ様その正体、ガス風船のような巨体を二人の目の前に現した。
「いくぞ、ライトゲイザー！！」
ケヴィンはブラックファングへ獣化し、光る目に向かっていった。だが、ライトゲイザーは巨体に合わない軽快な動きで飛び上がり、彼の拳をかわす。
ケヴィンは素早く再攻撃に移り、ライトゲイザーに飛びかかった。しかし、ライトゲイザーはすぅーっと、姿を消していく。
「まかせるでち！」
シャルロットは神殿の倉庫から持ってきた暗闇のコインを使った。すると、彼らの後ろでコインが発動し、地獄の入り口が開いていた。イビルゲートに吸い込まれまいと、光の神獣の姿が見せる。
（ライトゲイザーは光を屈折させて姿を透明化するんス！）
イビルゲートに光が吸い込まれ、ライトゲイザーの体が浮き彫りとなった瞬間、ケヴィンは地面を蹴った。
「いまだ！真空水月斬！」
ライトゲイザーの体に無数の拳が打ち込まれる。
だが、ライトゲイザーは何事もないようにホーリボールを放った。
「うわぁぁ！」
「きゃあ！ちょっとケヴィン！何やってるんでちか！？」
「手応えがない……。いくら殴っても空振りしてる感じ」
「なにバカなこと言ってるんでちか？もう一発行ってくるでち！」
「ウ、ウガ！」

ケヴィンは再び地面を蹴った。今度は連続打撃ではなく、渾身の一撃をライトゲイザーの体に打ち込んだ。だが、
「やっぱり同じ……手応え、ない……」
ケヴィンの言うとおり、ライトゲイザーは平気な顔をして浮遊していた。そして二人をバカにするよう、その目を細めたのだ。
「キッー！なんでちか、その目はっ！？このこのこのこの……」
暗闇のコインとジェイドの像を派手に使った。闇の扉が開き、さらに闇の波動を纏った黄金の矢が白く輝く瞳を射る。
それを見ていたケヴィンはあることに気がつく。
「シャルロット、ちょっと待つ！落ち着いて、もう一度暗闇のコイン投げる」
シャルロットは言われるがまま、もう一度暗闇のコインを使った。すると、光る目の下にイビルゲートが発生し、光を吸い込んだ。
「シャルロット、あれ見る」
「あ、ありはどういうことでち？」
邪悪な波動を持った闇の穴がライトゲイザーの真下に広がり、ライトゲイザーを吸い込もうとする。その力に敵の体はぐらぐら揺れていた。水面にできる波紋のように、風船のような体がぐにゃりと曲がる。だが、強く瞑られた目だけは形を変えようとしない。むしろその部分だけから光の粒子が闇の扉へと吸い込まれている。
「シャルロット、今度はジェイドの像使ってみて」
「う、うん」
シャルロットがジェイドの像を使うと、黄金の矢はライトゲイザーの目だけを狙って発生した。
「やっぱり。ライトゲイザーの本体はあの目玉。たぶん周りのモコモコは幻覚」
（おそらく、あの体も光を曲げて作り出したものッス）
「じゃあ、さっさとあそこに攻撃を当てるんでち！」
ケヴィンは頷くと、両脚に力を込めた。そして、床が欠けるほどの勢いで、ライトゲイザーの中心を目掛けて跳び上がった。

ミサイルのような跳び蹴り。ケヴィンの足が目の中心点に突き刺さる。

「ブボォォォ！」

強烈な一撃を浴びたライトゲイザーは大きな叫び声をあげると、目をつぶり再び姿を消した。

「どこに行ったんでちか？！」

シャルロットがあたりを見渡すと

バシュ！

と何かが焼けるような音が聞こえた。

「『バシュ』？」

「……シャルロット、上！」

見上げると、夜空から無数のレーザー光線が降り注いできた。

バシュバシュ……バシュバシュバシュバシュ……！

「グアァアア！」

「キャー！！」

ライトゲイザーのセイントビームに床は焦げ、二人は大きなダメージを受けた。砂煙の中、地面に突っ伏すケヴィンとシャルロット。だが、

「ヒールライト！！」

這いつくばりながら唱えたシャルロットの回復魔法で二人は再び立ち上がる。しかし、思いもよらないライトゲイザーの攻撃力に、シャルロットは苦い顔をしていた。

「やっと弱点がわかったのに、これぢゃあ……」

「大丈夫、オイラに考えがある！たぶん、これすればライトゲイザー、オイラにしか攻撃しない。だから、ヒールライトでオイラのこと回復して！」

「いったい何をするつもりでちか！？ちょ、ケヴィン！！」

心配するシャルロットを置いてケヴィンは飛び上がった。そして姿を現したライトゲイザーの上に乗り、硬い拳を振り下ろした。一撃にとどまらず、何度も拳を振り下ろして打撃を加える。

ライトゲイザーは彼を振り落とそうとしたが、足の爪がしっかり食い込み決して落ちることはない。

「不思議でち。あのもこもこしたのは幻覚のはずなのに、どうしてケヴィンはあの上に乗っかっているんでちか？」

（いくら光を曲げようと、存在しないものは映し出せないッス。ケヴィンさんが乗ってるのが実体なんッスよ）

光の精霊が言うように、ライトゲイザーの身体をよく見ると、小さな風船がいくつもひしめき合って一つの風船を作っているようだった。

「あ！あぶない！

「ブボォ！」

土砂降りのように振り続けられる拳にライトゲイザーは苦しんでいたが、怒りを露にした瞳をケヴィンに向けた。神獣はケヴィンに照準を合わせると、その瞳から青白い光線、セイントビームを発射したのである。

強烈なレーザー光線のゼロ距離発射。ケヴィンの体毛は焼け、肉の焦げる臭いがした。

「うがぁぁぁ！」

「ケヴィン！……ヒールライト！」

痛みで意識が飛びそうになったケヴィンであったが、シャルロットの回復魔法で何とか意識を保ち、再び打撃を繰り出した。だが、ライトゲイザーも諦めることなく、セイントビームを撃ち続ける。シャルロットもヒールライトを繰り返すばかりだった。

単調な戦いだが、手を休めた方が負ける――ケヴィンとシャルロットはそう実感していた。しかし、そうなるとマジックポイントの多いライトゲイザーの方が有利であった。

だが、意外にも先に手を休めたのはライトゲイザーの方だった。

敵は突然その目を閉じた。そして力を蓄え、大きく目を見開いた。
その瞬間、

カッ！

と強力なフラッシュが焚かれたように、二人の体を閃光が包んだ。
まるで光の塊が爆発したような衝撃。セイントビームとは違うが、焼けるような痛みが全身を駆け抜けた。
その衝撃で爪が抜けたのか、ケヴィンの体が硬い床に落ちる。
「（くっ！だけど、まだ行ける！）」
ケヴィンは再びライトゲイザーに飛び乗ろうとした。だが、いつもの跳躍が出来ない。足に力が入らないのだ。
思った以上のダメージを受けたのかもしれない――彼は回復してもらおうと、シャルロットの姿を探した
だが、その姿が見えない。その代わり、さっきまで彼女がいた場所に一匹のモーグリがいたのだ。
「（まさか……）」
その瞬間、ケヴィンは体から血の気が引くのを感じた。
視線を下ろし、自分の体を見る。すると、黒い毛に覆われた武き腕は白く可愛いモーグリの手に変わっていた。
（こいつは敵の体をモーグリに変えてしまうプリズナーって特殊攻撃ッス！）
ウィル・オ・ウィスプの説明を聞きながら、ケヴィンはシャルロットの名を呼ぼうとした。しかし…
「モグモグー！（……ダメだ、人語も出せない。これじゃティンクルレインの詠唱も……）」
何もできないのをいいことに、ライトゲイザーは大きな一つ目から朱色の殺人光線、ガイズブラストを放った。
白い毛が燃え、全身に火傷の痛みを刻み残していく。
キバもツメも失い、手も足も出ない状況。あとはもうなぶり殺し

にされるだけだ、とケヴィンの心に絶望の波が打ち寄せた。
その時、
「モ、モグゥ!?」
彼の心が絶望で満たされる前に、口の中に苦い味が広がった。吐き出そうとするが、
「そのまま飲み込むんでち!」
シャルロットの声が響いた。
「どうして、しゃべれ……アレ?」
シャルロット同様、ケヴィンも人語を回復していた。姿も元の人間の形に戻っている。
彼は驚きながら、声のした方向を見る。すると、同じく人間の姿に戻っていたシャルロットが右手に赤色の薬草をもてあそんでいた。彼女はモーグリになるも、冷静に分析し、この状態異常を回復する手段を考えた。そうして、道具入れの中から状態異常を回復する薬草、プイプイ草を取り出し、ケヴィンに投げたのだ
「これでもう一度闘える!……ウグッグ……あれ?」
ケヴィンは再びウルフの姿になろうとしたが、変身できなかった。慌てて空を見あがると、さっきまで真っ暗だった空が明るさを持ち始めていた。夜が明け始めたのだ。
「しまった。闘い、長引きすぎた」
「諦めるのはまだ早いでち!」
シャルロットが叫ぶ。彼女はまだ勝利を信じていた。
「獣人王しゃんとの約束を思い出すでち!」
「……そうだ、オイラ、いつかあの人を倒す。そして、獣人たちの未来を手にする、決めた。約束した。父さんと!」
フラミーの背中から見た獣人王の顔。初めてみる父として顔だった。必ず帰るとの誓いを思い出し、彼は拳を握った。ブラックファングの力は引き出せなくても、ニンゲンとして十二分の力を発揮しようと、全身に力を込めた。
「見て、ライトゲイザーも弱ってるでち!」

「ウガァァァ！」
渾身の一撃を放とうと、力強く地面を蹴って跳ぶケヴィン。彼の背中を後押しするように、シャルロットも呪文を詠唱する。
「ヒールライト！」
聖なる光に包まれて、全身の火傷が治癒していく。そのおかげで、腕により一層力を込めることができる。
「ウガァ！真空水月斬ッ！！！！」
無数もの拳がライトゲイザーの眼球を襲い、ハリボテのように目玉が変形していく。
そして右腕を白目の部分に突き刺し地面に引きずり下ろすと、彼は跳ねるように地面を蹴り、サマーソルトキックで瞳を切り裂いた。
亀裂のような穴から大量の粒子が昇天し、ついにライトゲイザーの本体も粒子へと変わり、消滅した。
着地と同時に、地面に倒れたケヴィン。シャルロットは彼の顔を覗き込んだ。
「大丈夫でちか？」
「ウガっ！シャルロットだけにイイカッコ、させない」
その言葉にシャルロットはふふっと微笑み、太陽が昇ったそれを仰いだ。
「あいつ、魔法生物だったみたいでちね」
「月の神獣は獣で、光の神獣は魔法生物。神獣にもいろいろ」
「みんなは今頃、どんな奴と戦っているんでしょうかね？」
夜が深まった時点で、日付はドリアードの日からジンの日へと移り変わっている。うまくいけば、デュランたちが土の神獣を倒しているはずであるが、事はそう、うまくいっていないようだった。

# 第九話

「ハァ、ハァ……」

宝石の谷ドリアンの奥深く、土のマナストーンのあった場所よりもさらに最深部で、息を切らす三人の影があった。

「な、なんだよ、アイツら」

「土属性のモンスターだから、防御力が高いのはわかるよ。でも、さすがにアレはねーだろ」

二人の剣士が丸みを帯びた岩に腰掛け、息を整えている。大地の裂け目に入るまで一緒だった何十人ものフォルセナ兵の姿はそこにはなかった。

「みんなも無事だと良いんだけど」

予想以上の防御力を持ったニードリオンや、毒まで備えたスライムプリンス、さらにはプチドラゴンといった強敵がここにはいたのだ。フォルセナの兵士たちは、デュランとアンジェラを土の神獣のいるところまで無傷で送ろうと、囮役を買って出たのである。一人、また一人と敵の注意を引き付けていくうちに、ドリアンの奥底に辿り着いたのは、デュラン、アンジェラ、そしてブルーザーの三人であった。

「いや、どうやら俺もここまでのようだ」

そう言いながら、彼は腰を上げて剣を抜いた。

見ると、彼らを追ってきたモンスターたちの姿があった。ぴょんぴょん飛び跳ねて毒を撒き散らす真っ赤なスライムに、鋼の針を飛ばすモールベアの変異体。

「さぁ、俺に構わず神獣を倒してきてくれ！」

「ブルーザー……、わかった。また後でな！死ぬなよ！」

そう言って、デュランとアンジェラは神獣が待つであろう宝石の谷の最深部へと走っていった。

残されたブルーザーはポツリと言う。

「バーロー、最後まで残って主役を送る脇役は必ず生き残るんだよ！うぉぉぉ！」

彼は剣を握り締めて、敵の中に突っ込んで行った。

デュランたちが最深部の空間に足を踏み入れると、急に岩が崩れ落ち、出入り口を塞いでしまった。

そして岩が盛り上がり、地響きとともに巨大な魔法生物の姿をした土の神獣、ランドアンバーが谷の上から降りて来た。

「エアブラスト！！」

先手必勝と言わんばかり呪文を詠唱したアンジェラ。彼女の作り出した疾風をランドアンバーを狙う間、デュランはセイレーンのツメを使い剣に風の属性を持たせた。

そして風の刃が硬いランドアンバーの体に弾かれると、彼はその剣を振りかざした。。

ガキーン！

谷に鈍い音が響く。流石は土の神獣、その防御力は8神獣のうち最強であった。

（コアじゃ！ランドアンバーは魔法生物、魔力をコアにためて起動しておる。ランドアンバーのコアを狙うのじゃ！）

二人の頭の中にノームの言葉が響いた。

「コア？……あのダイヤみたいのか？よぉし！」

デュランはコアを狙い剣を切りつけた。だが、コア自体の強度も高く、彼の剣は弾かれてしまった。

硬いものを殴り手が痺れるデュラン。浮遊するランドアンバーはその隙を突いて、大きな手で彼を捕らえ、そのまま握り潰そうとした。

「グアァァァ」

「デュラン！……俊敏なる風の魔物よ、彼の者を切り刻め。エアブラスト！」

アンジェラの魔法がコアを直撃すると、ランドアンバーは怒った

ようにデュランの体を彼女に投げつけた。
「うわぁ！」
「きゃあ！！」
「くっそお、なかなか手強いじゃねぇか！」
すぐさま立ち上がったデュランはアンジェラの上か退くと、再びランドアンバーに立ち向かおうとした。しかし、急に足下の石や岩がごろごろと動き出した。
「こいつは……」
「アースクエイクだよ、高位土魔法の！」
大地が揺れて浮かび上がる岩石。それらは投擲のように、デュランたちを狙った。
「ぐっ！アンジェラ、大丈夫か！？」
「平気！」
大切な仲間の無事を確認し、デュランは得意の剣さばきと瞬発力で岩を切り裂いた。障害がなくなった空間を走るデュランは、次の魔法を詠唱するランドアンバーの懐に潜り込んだ。
「ドリャアア！」
舞うような連続斬りを放つデュラン。
そしてフィニッシュの一撃を放とうと剣を振り降ろそうとしたその時、ランドアンバーは魔法攻撃が発動しようとする。地面や壁に埋もれる硬い石がデュランの頭上に集まり、彼を押しつぶそうとする。。
「デュラン、あぶない！……エアブラスト！」
彼女は叫びながら、両手で黄色のコインを弾いた。
呪文によって発生したエアブラストと、風のコインで現れたエアブラストが、ダイヤよりも圧縮された大岩を粉々にする。
「せいゃああ！」
大きく振り下ろしたデュランの剣がランドアンバーのコアを襲う。
バチバチバチバチ――と、小さな電流を放電する刃によって硬いはずのコアにヒビが入った。だが、それすらランドアンバーにとっ

てはかすり傷程度のダメージしか与えないようだった。
だが、息ぴったりの二人の攻撃は治まるところを知らない。
アンジェラは道具入れからジンの姿を模した像を取り出すと、その中に封じられたエネルギーを解放し始めた。狙うはコアの一点。
「神の怒りを浴びよ、サンダァァ、ボルトォォォ！」
局部的に発生した暗雲、その中から大量の電圧を持った雷がコアのヒビに落ちる。彼女ほどの魔力を持つものだからこそできる、ピンポイント攻撃である。
衝撃で崩壊しつつあるコアに、デュランは必殺技を打ち込む。
「三・段・斬りィィ！」
強烈な突き、身を翻しての上段から下段への斬り付け、そして下段から上段への斬り返し。すべてコアのヒビを狙っての攻撃である。アンジェラ同様、デュランほどの剣の使い手だからこそできる集中攻撃である。

ピシッ！

二人の連続攻撃を受け、コアに大きな亀裂が生じる。
「よし！このまま一気に畳み込むぞ！」
「はい！……えっ、何これ？」
突如、青黒い雲の塊が現れ、アンジェラを取り囲んだ。サンダーボルトを使ったときとは違う、だがそれでいて電流を帯びているのは似ていた。
「アンジェラ！？アンジェラー！」
異様な暗雲を見て、彼には嫌な予感がした。彼女を救うため、暗雲に近づくデュラン。そのとき、濃厚な雲から黒い塊が飛んできた。それはデュランを襲うものではなかったが、スゥーっと彼の持つソードに纏わりついた。電流を帯びた剣身に吸い付くように。
「これは、砂鉄？しまった！」
彼が暗雲の正体に気がついたのと同時に、雲の中からアンジェラ

の悲鳴が聞こえてきた。
「イヤ、なにこれ、イヤー！」
「アンジェラ！その中から脱出するんだ！……くそっ」
彼はその場で大きく剣を振り下ろした。風が舞い、役目を果たした雲が晴れていく。そして、中から現れたのは石化した仲間の姿だった。
（これは、ストーンクラウドじゃ。最高位の土系魔法じゃぞ！）
再び響くノームの声。
デュランはマーマポトの油を使おうと、アンジェラ象へ近寄ろうとした。だが、後ろで土の中から何かが飛び出す音が聞こえた。
神獣に操られたダイヤの塊がデュランの背中に突き刺さる。
「ぐあ！」
衝撃と痛みで地面に倒れるデュラン。
歯を食いしばりながら立ち上がろうとする彼を大きな影が包んだ。強烈な敵意を感じ、彼は反射的に身を転がせた。さっきまで倒れていた場所に、岩石の塊が落ちて砕けた。
「くそ、これじゃあアンジェラに近づけねえ！」
ランドアンバーは二人のコンビネーションを崩すため、アンジェラの行動を封じた。その上で、デュランに連続攻撃を仕掛けてきたのだ。
アンジェラを回復しようとすれば、ランドアンバーに背を向ける必要があり、神獣はその隙を突いてくる。
彼は意を決して剣の柄を握り締めた。そして、攻撃の対象に鋭い眼光を向けた。ランドアンバーを倒してからアンジェラを助ける――それがデュランの作戦だった。
「でぇやあああ！」
彼は叫び声をあげて気合を入れ、地面を蹴った。だが、浮遊する手は拳を硬く握り、デュランのいく手を阻む。
「ぐあっ」
右から飛んできた拳に吹き飛ばされ、デュランは地面を転がる。

さらに左手の拳が振り下ろされる。
叩き潰すように落ちてきた巨大な拳、ハンマーパンチがデュランの腹を抉る。骨がきしむ音が響き、デュランの口から鮮血を飛び散る。
彼は鉄の味を噛み締めて寝返りをうち、剣を杖のようにして立ち上がる。彼の目には、まだ闘志がみなぎっていた。
だが、その心を折る、いや体ごと押し潰すように、ランドアンバーは両手でデュランの体を握り締めた。そして力づくで体を丸め、ボールのように彼を地面に投げつけた。地面に叩きつけられ、二度三度とバウンドする。
冷たい地面に顔を突けながら、彼は悔しそうにつぶやく。
「あと一太刀、……一太刀入れられりゃあ勝てるのに……」
自由自在に宙を舞う拳に、コアに近づくことさえもできない。彼は苦肉の策として、道具入れの中から、一枚のコインを取り出した。
「俺の魔力で、どこまでダメージを与えられるかわからねぇけど……」
そういいながら、彼は風のコインに封じられたアンジェランの魔力を解放した。たちまち谷間に吹き込む風が集まり、真空状態を作り出す。その中から生まれるカマイタチ。目にも止まらぬ速さでランドアンバーのコアを狙う。
だが、宙に浮く二つの拳がコアの前に下りてくると、デュランの作り出したエアブラストを払い除けるようにかき消してしまった。
「く、そぉ」
彼は顔を地面に突っ伏した。
遠くからの攻撃もランドアンバーの拳が防いでしまう。近づこうとしても、やはりあの手が邪魔をする。
「あれさえ、どうにかすれば」
(しかし、あの手の動きを封じても攻撃を当てなければどうにもできんぞい?)
「わかって、ノーム。いま、その手を考えてんだ」

（命を捨てる覚悟で特攻しても、弾き飛ばされてしまうだけじゃぞ）
「命を、捨てて？　そうか、この手なら！」
デュランは考えをまとめると、ニヤリを口の端を上げて立ち上がった。そして、剣先をランドアンバーの顔に向け、
「へっ！俺の命、テメェにくれてやるぜ！」
（な、なにを言っておるんじゃデュラン、気でも触れたか！？）
驚く土の精霊の声が頭の中に響いた。
だが、彼は冷静なままだった。剣を握り締めてランドアンバーのコアめがけて走り出した。
ランドアンバーの右手が素早く左方向から飛んできた。
「ぬぉぉ！」
彼は足を止めると、左手に持つ盾を地面に突き刺し、その影に身体を潜めた。勢いよく飛んできた右手が盾に直撃する。だが、その直前、デュランは盾の影から飛び出した。ランドアンバーの拳は盾だけを打ち、持ち主を失った黄金の盾が吹き飛ぶ。
ランドアンバーの攻撃を回避したデュランは再びコアを目掛けて大地を蹴る。
しかし、今度は左手の拳がデュランめがけて飛んできた。同じようにかわされないよう、真正面からのストレートである。だが、彼には攻撃を避ける意思など最初からなかった。
「ぐぶっ！」
岩石の体当たりを浴びたような衝撃で、吹き飛ばされるデュラン。だが、拳の端から見える彼の顔は勝ち誇っていた。
土の神獣は不思議な顔をした。だが、次の瞬間、身体に違和感を感じた。だんだんと身体の構成が崩壊し始めていたのだ。
まさかと思いながら視線を落とすと、さっきまでデュランが手にしていた剣がコアに突き刺さっていた。
「言ったろ？俺の命、くれてやるって。どうだい、剣士の命を心臓（コア）に突き刺された気分は」
「グオオオ！！」

ランドアンバーは断末魔と共に大爆発、デュランはアンジェラを庇うため、石化した彼女に飛びついた。
　すると、ランドアンバーが消滅したことでアンジェラの石化が解け始めた。冷たい石の肌が温もりのある人肌へと戻っていく。アンジェラも目をパチクリさせて、意識を取り戻していく。
「う、う～ん……、あれ、あたし……？って、どさくさに紛れてなに抱きついてんのよ！？」
「ぐへっ！」
　アンジェラは顔を真っ赤にしながらデュランに正拳突きを食らわせた。最後の一撃にデュランのヒットポイントが赤色に点滅する。

　その頃、リースたちはローラント城の一室でじぃやアルマから風の神獣について話を聞いていた。
「ということは、風の神獣ダンガードはローラントの山岳地帯を飛び回っているのね」
「左様にございますじゃ。バロの者たちにもその姿が目撃されており、町民の中にはその正体に気づいている者もいるとのことですじゃ」
「みながパニックを起こす前に倒しましょう」
　そうリースが言うと、ホークアイが手を上げて彼女の提案を遮った。
「だからと言って今すぐというのは得策じゃない。風の神獣はなかなかタフなやつなんだろ？　しかも今日はジンの日だ」
　ホークアイ殿の言うとおりです、とアルマも言う。
「しかも夜となれば視界も悪く、フラミーの体から振り落とされかねません」
「でもそれでは夜が明けてから闘うことになってしまいます」
「リース、焦りは敗因の一つとなるぜ」
　ホークアイのたしなめるような言葉に、リースは俯いてしまいます。

その様子を鋭く見つめる少女の目。アルマたちの後ろで待機するアマゾネス隊体長代理のライザが二人の様子を見ていた。
「アルマさん、一個気になったんだけど」
「何でしょう、ホークアイ殿」
「ダンガードと闘うのに、やっぱりフラミーの力が必要か？」
「敵は山岳地帯の上空を高速で飛び回っています。下に引き釣り下ろすのは不可能。となると、翼あるものの父、フラミーに乗って攻撃を仕掛けるしかありません」
「てことは、今回はフラミーも一緒に闘うわけだ。となると、あいつにも休みを与えないとな」
ホークアイの提案に、その場にいた誰もが目を瞬かせた。フラミーの状態など気にかけてはいなかったからだ。
「ここはもともとフラミーの故郷でもある。ダンガードを倒すまで、デュランたちにもフラミーを使わないよう伝えておこうぜ。なぁリース？」
「そ、そうですね」
急に向けられた笑顔に、リースは顔を赤らめて、目を背けてしまった。
彼女はそのまま瞳を閉じて、フェアリーに呼びかけた。
（フェアリー、聞こえる？）
（……リース？　どうしたの？）
遠隔地からの呼びかけに答えるフェアリー。初の試みに若干の緊張を覚えながらも、リースはフラミーを休ませてあげたいということをフェアリーに伝えた。
（わかったわ。ケヴィンたちは今朝のうちにワンダーの樹海に入っているから、デュランたちにフラミーを使わないよう伝えておくね）
だんだんとフェアリーの意識がリースの頭の中から遠ざかっていく不思議な感覚を味わいながら、リースは目を開けた。
「これで大丈夫です」
「あとはフラミーを読んで、天の頂で休ませるだけだな」

ローラント城での神獣討伐の会議はそこで終わった。

その頃、デュランたちは宝石の谷から脱出して、陽の光を浴びていた。道中で分かれたフォルセナ兵も、それぞれ大なり小なりの怪我をしていたが、行方不明者や死者がでることなく、今はデュランたちと共にモールベア高原で体を休めている。

「ザコモンスターに苦戦しちまったからな。もうジンの日の夕刻くらいか？　なぁフェアリー、みんなは今、どんな感じなんだ？」

デュランは姿の見えない仲間に声をかけた。すると、久しぶりにフェアリーが姿を見せて、会話に応じてくれた。

「今度はデュランか」

「久しぶりに姿を見せてくれたと思ったら、随分な言い方だな」

「ふふ、ごめんなさい。そんなつもりはなかったの。ええとね、リースたちはローラント城で風の神獣の対策を練っているわ。明朝に戦いを挑むみたい。ケヴィンたちはね、あら？」

そこでフェアリーはハッとしたような顔を作った。何か問題でも起きたのだろうかと、不安になるデュランとアンジェラ。

「ワンダーの樹海に乗り込んだのは良いけど、二人して迷子になってるみたい」

予想外のオモシロ解答に、デュランとアンジェラは吹き出すように笑みをこぼした。天然コンビの二人らしいや、と感想を口にした。

笑いを堪えながら、アンジェラは言う。

「で、デュラン、次はどうする？私たちだけで闇の神獣、探しに行く？」

「そうだな……」

デュランは手を顎に置き、考えをまとめるのだった。

そして少し時間は流れ、ローラントの山々に太陽が沈もうとしている頃、リースは亡き父ジョスター王の墓前にいた。
「父上……、これから私は神獣と戦います。そして、エリオットをさらった者たちのもとへ……。必ずエリオットを探し出し、邪悪なる者たちを討ち滅ぼします」
リースは両手の指を絡ませて手を組み目を瞑ると、小さな声で言った。祈りの言葉をささげるように。
「……どうかお守り下さい」
ぎゅっと指に力を込める。
彼女が目を開けると、墓石に銀のクサリが掛けられていた。
「何かしら、これ？さっきまではなかったのに……」
銀色にきらきら輝くクサリに、星の形をした飾があしらわれている。
「どうかなさいましたか、リース様」
ここには一人できたはずなのに、突然誰かに声をかけられた。リースは驚きながら振り返る。そこにいたのは、
「アルマ！」
リースは驚きながらも、にこりと微笑む乳母の顔を見て、同じような微笑みを返した。そして、すっと右手に持っていたアクセサリーを差し出した。
「これが父の墓石にかけられていて……なにか心当たり、あるかしら？」
「これは……『明星のクサリ』でございます！ローラントの秘宝の一つですが、確か、ナバール侵入時に紛失したはずでございます」
「今、目を開けたら突然これが父の墓石にかけられてたの……」
「それは妙でございますね……。しかし、『明星のクサリ』が持つ聖なる星の力は持ち主を邪悪から守護すると言います。きっとジョスター王様も、リース様のことを心配され、お守り下さろうとしているのですよ」
「……そう。ありがとうございます、お父様」

リースはもう一度墓前に黙祷を捧げる。穏やかな顔でその姿を見つめるアルマ。彼女は静かに言う。

「明朝の戦いに備え、今日はもうお休み下さいませ、翼あるものの父も先ほどお休みになられましたよ」

「わかったわ」

リースは決意を新たにして、アルマに微笑むのだった。

それと時を同じくして、ローラント城のとある一室、そこでホークアイは、ライザに胸ぐらを掴まれ、壁に押しつけられていた。感情の沸点を越えたライザは、廊下にまで響く声で叫ぶ。

「ホークアイ！キサマァ、リース様に何をしたぁぁ！」

背部の痛みを堪えながら、ホークアイは怒るアマゾネス兵の後ろに立つ少女に言う。

「メルシー、急に呼び出したと思ったら、こういう事だったのか」

「はぐらかさず、ライザ様の質問に答えて下さい」

かつてデュランたちをバイゼルに飛ばしてくれたアマゾネスの新兵も、今では立派な兵士となっていた。

彼女はつい先ほど、ホークアイの部屋を訪ねて、彼をライザの部屋へと案内したのだ。部屋に入った時点ですでにライザは激昂しており、メルシーが扉を閉めるや否やホークアイの胸ぐらを掴んだのだ。

「なぜだ！なぜ、リース様はあんなに哀しい顔をしている！」

そう叫びながら、ライザの瞳には涙が滲んでいた。

おそらく、普通の人から見ればいつものリースに見えただろう。しかし、幼なじみのライザにはリースが何かを胸に秘していることが丸わかりだった。それは乳母のアルマも同様であったし、リースを慕うアマゾネスの兵士たちも同じであった。特にライザはリースを姉妹のように思っていた。それだけに、本当は泣きたいのを我慢して微笑むリースを見て、彼女も胸を痛めた——痛めて、その苦しみを和らげて上げたいと思った。

「俺がリースを苦しめているみたいだな」
「貴様以外に誰がいる！」
感情に任せて、ライザはホークアイの頬に拳を打ち込む。
床に倒れ込むホークアイ。ジンジンと左頬が熱くなり、口の中に鉄の味が広がった。
「ライザ様！」
「ハァ、ハァ……」
手を出したライザを諫めようと、メルシーは彼女の名前を叫んだ。だが、それ以上の言葉が出てこない。ホークアイも何も言わず、床から立ち上がろうともしない。室内に響くのは、ライザの荒くなった息だけだった。
「アルマ様は母親みたいなものだから、グッと堪えて何も言わないんだ。……だけど、私は違う！私はただ見守るだけなんて出来ない！そこまで出来た人間じゃないの！」
ホークアイは何も言わない。手の甲で血を拭い、顔を俯かせたままだった。
「正直、あんたなら……仕方ないって思ってたさ。あんたと話してたリース様、すごく楽しそうだった……幸せそうだった！あんたなら、私以上にリース様を幸せにしてくれるって、そう思ってたんだ！」
「ライザ様……」
苦しくて心の内を吐露する副隊長の姿に、アマゾネス（メルシー）の兵士も心が苦しくなる。
「でも、久し振りに帰ってきたリース様は泣いていた！あんたには笑ってるように見えるんだろうけど、あの人、心の中では泣いてんだよ！お父上や仲間が死んでも、それを乗り越えてきた人が、あんたを見て泣いてるんだ！」
「わかってる……」
ぼそりと呟くホークアイ。彼もライザ達と同様、リースが苦しんでいることを察していた。そして自分には何も出来ない、どうしよ

うもないこともわかっていた。
彼はゆっくりと立ち上がると、それ以上何も言わず、部屋を立ち去ろうとした。
ライザの横を通りすぎるホークアイに、彼女は何も言えなかった。彼を引き止めることも出来なかった。ただ、彼が部屋から出る直前に一言、
「いつまでも逃げてないで、リース様を見てあげてよ……」
バタンと閉まるドアの音。
体が強張り、何も出来なかったメルシーがライザに声をかける。
「止めなくて、良かったのですか？」
「わからないわ。でもあの男、それなりに反省はしてるみたいだった。だから、それで十分よ」
ホークアイの言葉から、ライザは彼の苦悩を察した。ただそれでも、本当は彼に言ってやりたかった―本当にリース様を愛しているのか、と。

さらに時は流れ、陽が完全に落ちきった頃、ケヴィン達は……
「キャー！キャー！」
「シャルロット、いま助ける！」
シャルロットは木の神獣ミスポルムの人面触手バドに捕まっていた。
ケヴィンが触手の根に回し蹴りを浴びせると、バドは痛さのあまり口をパカリと開けてシャルロットを離した。
「あいた！よくもやってくれたでちね！……マシンゴーレム、召喚！」
「ウォォォ……、真空水月斬！！」
マシンゴーレムがミスポルムに突撃し大爆発を起こす。それに次いで、ウェアウルフの姿となったケヴィンが連続打撃を加えた。
だが、ミスポルムは顔色一つ変えず佇んでいた。

「うぅ～、体堅すぎ……」
マシンゴーレムの自爆でもろくなっているはずなのだが、ミスポルムの幹は何本もの枝や根に覆われ、鉄のような頑丈さをもっていた。
ジンジン痛む拳にもう一度力を溜めて、彼は再びミスポルムへと向かっていった。だが、カボチャをくり貫いたような顔が不気味に微笑むと、バドの口から緑色液体が吐き出された。猛毒ポイズンバブルである。これまでになく濃い毒を浴び、ケヴィンは弾き返されてしまった。地面にのた打ち回る彼の体が紫色へと変色していく。まるで皮膚そのもの腐ってしまったかのような色だ。
「ぐっ……がぁ……」
「ケヴィン！……ティンクルレイン！……ヒールライト！」
聖なる光で清められた水がケヴィンの体から毒を消し去り、毒でごっそり削られた体力をヒールライトが回復する。紫に変色した肌の色もすっかり元通りである。
回復魔法を唱えるシャルロットの隙を狙って、バドがキバを向いて噛み付こうとする。口の隙間から見える歯から、ポイズンバブルの原液が垂れるのが見えた。
「そうはいきまちぇん！」
毒を出すキバが彼女の皮膚を貫く前に、シャルロットは風のコインを投げた。いくつもの竜巻が発生し、突風がバドの顔を遠ざける。
「いまだ！」
ケヴィンは大地を蹴り、シャルロットが発生させた突風に乗って、ミスポルムの体に跳び蹴りを決めた。
だが、見た目以上の硬度を持つ体に、彼の足がジンジンと痛んだ。
「ケヴィン、そこを退くでち！」
その言葉を耳にして、彼は痛んだ足で大地を蹴った。瞬時にケヴィンとミスポルムの体との距離が出来る。
そして、強烈な雷がミスポルムの体を焼いた。
「やった、サンダーボルトが効いてる」

「ドリアードさんに言われて、風のコインとジンの象を持ってきていて良かったでち！」

ミスポルムは大地に根を張る植物系のモンスターである。大風吹けば根が大地から引き剥がされそうになるし、雷が走れば幹が割れそうになる。ミスポルムの弱点は風なのである。

（シャルロットさん、神獣がアレを使ってしまう前に魔法攻撃を！）

今までと違い、ドリアードが積極的に指示を出す。

「わかったでち！」

何枚もの風のコインを放り、さらにジンの象を発動させるシャルロット。強烈な疾風が吹き荒れ、カミナリが走って辺りを照らす。

連続魔法にミスポルムは苦しんでいる。

だが、シャルロットは唐突に違和感を覚えた。ミスポルムがアレを使ったのである。

（カウンタマジックが発動されました！シャルロットさん、備えて！）

シャルロットは両腕で顔を庇う。すると、ミスポルム目掛けて発動した疾風とイカズチが跳ね返り、彼女を襲ったのである。

突風で体は飛ばされカマイタチを身を裂く。さらに高圧の電流が彼女の体を駆け抜けた。

一瞬で大ダメージを受けるシャルロット。だが、意識を失ってしまう前、彼女が詠唱した呪文が効果を発する。

「ヒールライト！」

聖なる光が地面に転がる彼女の体を包み込み、失った体力を回復する。

シャルロットは立ち上がりながら、次の作戦へと移行する。

「魔法攻撃が使えないなら、物理攻撃でち！ケヴィン！」

「うがっ！」

彼は道具入れからセイレーンのツメを取り出すと、それを砕いて自分の四肢に擦り込んだ。大地を蹴って距離を詰め、重たい一撃が何度もミスポルムの幹に打ち込まれる。

その都度、ミスポルムの体に電気が走り、先ほど異常のダメージが加えられていく。

「さて、あたちはこいつらを相手にちないと……」

シャルロットは目の前でウネウネ動く触手、バドを見据えて言った。

先に動いたのはバドだった。長い茎を延ばして、彼女に噛みつこうとする。シャルロットはすばしっこく動いて、それを交わした。

「ここからちょっとした実験でち！」

彼女は数少ない攻撃系呪文を唱えた。

「ユニコーンヘッド、召喚でち！」

二つの魔方陣が浮かび上がり、そのから鋭いツノを持った魔法生物が姿を見せる。だが、彼女の手は止まらない。

シャルロットは道具入れからまだ使っていないジンの象を取り出すと、出力を抑えて魔力を発動させた。しかも、その弱い雷はユニコーンヘッドのツノへと落ちたのである。

少しばかりのダメージを受ける召喚獣。だが、そのツノにはカミナリのエネルギーがバチバチと帯電していた。

「さぁいくでち！あたちの僕（しもべ）たち！」

鋭く尖ったツノがバドの口に刺さると、その顔が醜く歪んだ。ビリビリと電気が走り、感電しているのである。

「思った通りでち！」

彼女は魔法攻撃系のアイテムを召喚獣に使い、ユニコーンヘッドの風系の力を付加したのである。シャルロットもまた、黒魔術の応用した補助系魔法のエキスパートになりつつあった。

痺れて動けなくなったバドは、しおしおと地面に落ちていった。そのダメージがミスポルムの本体にも通じ、カボチャの顔が痛みで歪んだ。

だが次の瞬間、木の神獣ミスポルムは両目を釣り上げて怒りを露にした。ポカンと開いた口の穴から粉のようなものが吹き出される。

「これ、花粉？」

ケヴィンがつぶやいた瞬間、周りの草木がざわめき始めた。まる意思をもったかのように、凶悪な姿に変わっていく草木。それらは二人に敵意をむき出しにしているようだった。

（これは神獣の必殺技、キルスディンガーです。気をつけて！）

ドリアードの声が響く。だが、四方を囲まれた状態では手の打ちようがなかった。

立ちすくむケヴィンとシャルロットに、鋭い棘を持った触手が襲い掛かる。

「がぁぁ！」

「キャー！」

無数の棘が体に刺さり皮膚を切り裂く。文字通り身を裂くような痛みに、二人は汚い地面に崩れ落ちた。

だがミスポルムは容赦なく追い討ちをかける。

大きく開けられた口から、硬く大きなカボチャの爆弾が発射されたのである。緑色のカボチャ型爆弾、グレネードボムが大量に飛び跳ねて爆発する。

その爆風にシャルロットは吹き飛ばされ、硬い木の幹に背中をぶつける。痛みと衝撃に意識をが朦朧とするシャルロット。

「ぐっ、シャル……」

爆風に耐えながら、ケヴィンは立ち上がった。もう一度拳を握り、ミスポルムを相手にして身構える。

だが、攻撃しようとも体に力が入らない。体力を回復させたいが、シャルロットのヒットポイントは限界に近づいている。

（ケヴィンさん、私が力を貸します）

「ドリアード？でも、どうやって？」

（私に任せて、ください……）

どこか申し訳なさそうに言う木の精霊。だが、ケヴィンは彼女の言葉を信じた――信じてグレネードボムを吐き出す神獣の元へと走った。

しかし、復活したミスポルムの触手、バドがケヴィンの行く手を

阻む。ポイズンバブルの原液を滴らせながら、鋭いキバが彼の体に突き立てられそうになったその時、

（トランシュシェイプ……）

ドリアードの言葉が響くと同時に、ケヴィンの体がスゥっと姿を消したのだ。彼は瞬時にそれを理解すると、横に飛んでバドの一撃をかわした。バドは追撃したくとも、敵の姿が見えず、困惑している。

（さぁ、今のうちにミスポルムのもとへ！）

ドリアードに言われるがままに痛む足を動かす、ケヴィン。だが、まだ彼の拳に力が入らない。

（オーラウェイブ……）

ミスポルムに操られ攻撃を仕掛けてきた周りの草木が輝き始めた。その輝きに、意識を失いつつあったシャルロットは目を開いた。それは不可思議な現象でありながらも、神々しく見えた。

そして輝く草木から自然の力、マナのエネルギーが流れ、ある一点に集中していった。

透明になっていたケヴィンの体にマナの力が集まると、彼の筋肉や集中力がいつもの調子を取り戻していった。

（自然のエネルギーが力を貸してくれました。さぁ、あなたの力を解放して下さい）

マナの力を多く持つ木の精霊にしか出来ない、特殊な魔法である。

ケヴィンは闘気を全開に放出して大地を蹴ると、ミスポルムの顔を狙っていくつもの拳を繰り出した。

「真空水月斬！」

突如として目の前に姿を見せたことに意表を突かれたミスポルムは何もできないままケヴィンの拳を受けるしかなかった。

重たい必殺の一撃が何度も繰り出され、カボチャの頭が削れ、凹み、歪なものへと変形していく。

滞空時間を越え、地面に着地したケヴィンは再び地面を蹴ると、トドメの一撃を放った。刃のように鋭い蹴りで、頑丈だったはずの

ミスポルムの幹に亀裂が走る。
「ギィィィ！」
金切り声を上げるミスポルム。
やったか、とケヴィンは敵の顔を見上げた。ボコボコになった顔に生気はないように思えた。だが、
バゴッ！
根の部分から太い触手が飛び出し、満身創痍のケヴィンを押し跳ばした。ミゾオチに刺さるような一発をもらい、口から胃の内容物が飛び出る。
だが、まだ誰も諦めていなかった。
シャルロットは道具入れから、さっき拾ったばかりの道具を取り出した。手のひらに収まるほど小さな丸い水晶。その中にビー族の長の瞳が封じられている。
「ケヴィーン！」
彼女は立ち上がると、それをミスポルムに投げた。ケヴィンの攻撃に視界はほとんど奪われたミスポルムに小さな水晶は見えない。
ビーの瞳はケヴィンが切り裂いた隙間へと姿を消した。
それを見たケヴィンは近くを飛び跳ねていたグレネードボムを蹴りつけた。ミスポルムの裂傷を目掛けて。だが、流石に大きな塊の姿は認識できるらしく、神獣はいくつもの触手を伸ばして、柱のような防護壁を作り上げた。
その瞬間、ミスポルムの体内でビーの瞳が発動する。
ビーの瞳から流れ出る水滴は、相手の防御力は激減させる効果を持つ。つまりプロテクトダウンの魔法がかかるのである。
それゆえ、触手の壁は萎れていき、防護壁としての役割を果たさなくなった。
硬いグレネードボムの弾頭が触手の柱を貫き、同じ弱まったミスポルムの体の内部へと

突撃する。その裂傷を大きく広げて。
「ギィィィィィィ！」
痛みと共に断末魔を上げるミスポルム。その体内でグレネードボムが爆発を起こし、頑丈だった神獣の体を木っ端微塵に吹き飛ばし、辺りを燃やした。
「ふぅ～」
「終わったでち～」
二人はノルマを達成した小説家のように、草原の中に倒れ込んだ。

# 第十話

ノームの日の明け方、ホークアイとリースは風の回廊を昇っていた。

かつて風のマナストーンがあった場所には何もなく、たださびしい風が吹き抜けるだけだった。彼らは風が入り込む横穴から外に出て、巨大な影が空を走るのを見上げた。

「見て、あの空の彼方！あれが風の神獣に違いありません！」

リースは風の太鼓を使い、フラミーを呼んだ。彼女の背中に飛び乗ったリースはフラミーにやさしく囁いた。

「フラミーちゃん、私たちと一緒に闘ってください」

「きゅーん！」

首肯するような鳴き声を上げるフラミー。彼女も大空を我が物顔で飛び回る風の神獣にに怒っているようだった。　風の神獣ダンガード、その羽根はやしの葉ほどあり、二本の長い首をもつ鳥のモンスターである。凶獣としての姿では火の神獣ザン・ビエが三つ目の頭となり、三つ首のモンスターとなっていただろう。

だが、復活して時間を経た今、その力は凶獣に近いものがあり、素早さはフラミーすら翻弄されるほどであった。

ダンガードはフラミーの周りを旋回し、二人の出方を伺っているようだった。リースたちも『バルキリースピア』や『たいしゃく』という新しい武器を振るうが、ダンガードは素早くその攻撃をかわしてしまう。

「攻撃が当てられない……」

「リース、スピードアップをかけてくれ！」

彼女は頷き、時の魔法をホークアイに、そして自分にもかけた。

ザン・ビエの攻撃をかわし、あまつさえ正面に強烈な一撃を見舞えるほど、素早さを上げてくれる補助魔法。制限された足場で、二人は攻撃を当てていく。

「でも、もっとにこっちに引き寄せないと！」
「任せとけって！……土とんの術！」
ホークアイがチャクラを練ると、、大気中の塵埃が集まりダンガードを襲った。ダンガードも羽ばたき、その攻撃を回避しようとするが、ホークアイに操られる砂塵はなおもその姿を追いかける。
「しゃあ！砂に追われてこっちに近づいて来たぜ！」
「よおし、旋風槍！」
「背面斬り！」

バン！
ババン！！

二人の武器がダンガードの体に深い傷を付けた。近づきすぎたことに気がついたダンガードは急速旋回して、再びフラミーとの距離を取る。
「やった！」
「この調子で攻め立てましょう！」
だが、そううまくは行かなかった。
ホークアイが再び砂塵を操り、ダンガードをこちらに引き寄せようとした。だが、ダンガードはその大きな羽根を羽ばたかせ、エアブラストを発生させた。その勢いは凄まじく、砂塵はあっと言う間に散らされてしまった。
「くそっ、学習しやがったな。リース、大地のコインは？」
「ここに！」
彼女はこげ茶色のコインを取り出した。そして、魔力を解放してダイヤのミサイルを作りあげる。土とんの術と同じ要領で、硬く鋭い結晶が構築される。
だが、ダンガードはぶつぶつと呪文を詠唱する。瞬く間に暗雲が立ち込め、いくつもの雷撃がダイヤのミサイルを打ち落とした。
「そ、そんな、こんなに早くこっちの攻撃が効かなくなるなんて…

…」

「せめて、もっと近い距離で攻撃を撃てれば……」

その言葉を聞いて、フラミーは大きく鳴き声を上げた。

「どうしたの、フラ、きゃあ！」

リースが言い終わる前に、フラミーは全速でダンガードのもとへ突っ込んでいった。

急速な移動にダンガードも回避行動が取れず、フラミーの大きな手に体を押さえつけられてしまった。暴れまわれる神獣と取っ組み合いを演じるフラミー。

二人は振り落とされそうになりながらも、必死で揺れに耐えた。

フラミーは近接戦闘が出来るようにと、危険を覚悟しながら、ダンガードを押さえ込もうとしたのである。

「このチャンス、十二分に活かすからね！……パワーアップ！」

炎のエネルギーで活性化した力を武器に込め、二人はフラミの手の中で暴れる風の神獣に攻撃を放った。

鋭い刃が再びダンガードの皮膚を切り裂く。

「キェェェ！」

ダンガードは痛みでより一層強く暴れたが、フラミーはがっちりダンガードを押さえ込み放さなかった。

自分よりも一回りも二回りも大きなフラミーの手の中で、ダンガードはぶつぶつと呪文を唱え出した。そして、さっきよりも黒く怪しげな暗雲を呼び寄せた。

「な、なんだ！？」

「こ、これは……！フラミーちゃん、逃げて！」

リースが叫ぶと同時に、暗雲から高電圧のカミナリが落ちた。高位風魔法、サンダーストームである。その威力は人智を超え、一瞬にしてフラミーの羽を焦げ付かせるほどであった。

あまりの痛みに彼女は手を離しダンガードを解放した。それでも降り止まない雷を避けながら、フラミーは暗雲の中を抜け出した。

「大丈夫、フラミーちゃん？」

「きゅーん」
リースが羽を見ると、カミナリの落ちた箇所の羽根は焼け、皮膚が真っ赤になっていた。
あまりに痛々しそうで、彼女は思わず目をそらしてしまった。
そして道具入れからポトの油を取り出し、火傷に塗り込んだ。
「フラミーちゃん、無理しないでいいからね」
「きゃん！」
回復したフラミーはダンガードと対峙して、徐々に距離を詰めていった。
ダンガードもいつフラミーが間合いを詰めてくるかを見計らっている。ホークアイはその隙を突いた。
「忍法土とんの術！」
砂の塊がダンガードを襲う。だが、砂の一団は術者の意図に反して舞い上がってしまった。彼は眉根を寄せて、砂が飛び去った方向を見た。
「マズイ！フラミー、回避だ１」
フラミーは急降下して、ダンガードから離れた。見ると、さっきまでフラミーがいた場所に強烈なイナズマが光っていた。
「やっぱりな。電気に砂鉄が持って行かれたんだ！」
フラミーは下方からダンガードに向かっていった。下からならイナズマを落とすことは出来ない。
ホークアイが再度チャクラを練りこむ。
「土とんの術！」
ダンガードは翼を広げ、エアブラストで砂を吹き飛ばそうした。
「させない！真空波動槍１」
攻撃を当たるため、リースは槍を高速回転させ、切れ味鋭いカマイタチを発生させた。それはホークアイの操る砂塵を纏い、ダンガードの両翼に突っ込んだ。
「ギィース！」
「今よ、フラミーちゃん！」

「キューン！」
苦しむダンガードにフラミーは突っ込み、再びダンガードを押さえ込む。その一瞬でリースとホークアイは出来る限りの攻撃を加え続けた。
「こいつもだ！」
ホークアイが大地のコインを発動させる。ゼロ距離で発射されるダイヤモンドミサイルが、ダンガードの体を貫く。
だが、それでも敵は倒れない。むしろ呪文を唱え、再びカミナリを落とそうとする。
「アンジェラの見よう見真似だけど、やってみるか！」
彼は再び大地のコインを投げた。魔力により結晶が構成されると同時に、黒雲からカミナリが振り落ちる。
だが、ダイヤの結晶がフラミーを守るように展開され、カミナリの落ちる方向を変える。
「聖域でアンジェラがサンダーストームを回避するのに使ってたやり方だ。俺は方向を変えるので精一杯だけどな」
思いもよらない防御方法にダンガードは狼狽していた。その隙に、二人の刃が二本あるそれぞれの首の付け根を切り裂いた。
「ぐがぁぁ！」
長い首を仰け反らせて痛みの声をあげる風の神獣。
すると、ホークアイたちの耳にバチバチバチバチという嫌な音が聞こえてきた。
（気をつけるダスー！風の神獣の必殺技、サンダーボルトがくるダスー！）
ジンの注意を受け、周囲を見計らうリースたち。しかし、どこにも電撃系の攻撃が来る様子はなかった。
「いったいどこから……」
彼らは一箇所だけ見ていない場所があった。だが、それに気づくのは、ダンガードが攻撃を発射する直前だった。
「まさか！」

二人は顔を上げ、仰け反った首の先端を見た。フラミーが羽ばたき、ダンガードの顔が見える位置に移動する。すると、ダンガードの二本の頭は口を大きく開け、巨大な電撃球を作っていた。見るからにして、高電圧で高電流の電撃の塊だった。

「フラミーちゃん、緊急回避！」

「きゅーん！」

「ダメだ、間に合わない！……土とんの術！」

背を向けて距離を取ろうとするフラミー。だが、その背中に向かって電撃球が放たれる。

とっさの判断で、ホークアイがチャクラを思い切り使い、大気中の砂塵を集めて壁を作った。高圧縮された電気の塊に吸い寄せられる砂。それにエネルギーバランスを崩した電撃の塊は大爆発を起こした。衝撃波だけがフラミーたちを襲う。

「きゃあ！」

「きゅぅぅーん！」

フラミーはバランスを崩すが、もう一度体勢を立て直し、ダンガードに対峙した。ビリビリと羽に電気が走っていた。

だが、それはダンガードも同じであり、敵もそれなりのダメージを負っている。

彼は魔法のくるみを取り出し、チャクラを回復しながら、神獣の様子を伺っていた。しかし、ダンガードはまだぴんぴんしているように見える。

「くそぉ、なんてタフな野郎なんだ」

「アルマの助言どおり、回復系のアイテムをたくさんもってきておいて、よかった」

リースも道具入れからはちみつドリンクを取り出し、回復を図る。

その様子をジッと見つめるダンガード。神獣の封印が解けて一週間近くの時間が立つ。彼らにもそれなりの知識があるのである。

知識を司る水、その神獣フィーグムンドは最初から知識が高く、魔法攻撃に優れたモンスターであった。そして、封印から相当の時

間を経た今、本来の力に近づきつつあったダンガードにも同程度の知識が芽生え始めていた。

ダンガードはやしの葉のような羽を羽ばたかせると、さっきのフラミーのようにリースたちのもとへと突っ込んできた。自らフラミーの懐に飛び込んできたのである。

そして長い首を生かし、フラミーの4枚ある羽のうち2枚に噛み付いたのである。キバを食い込ませ、羽をむしり取ろうと暴れる風の神獣。あまりの痛みにフラミーも身をよじらせるほどに暴れる。

「フラミーちゃん！この、放しなさい！」

リースは槍を目の前の首に突き刺した。それでもダンガードは離れようとはしない。

ホークアイもチャクラを練って、土とんの術で攻撃する。すると、ダンガードも呪文を詠唱し、再度暗雲を呼び込み始めた。

二人の近くで高圧の電流が走り、カミナリがフラミーの体を焼く。大きなダメージを受けて、泣き叫ぶフラミー。全身に電流が流れ、体が痺れるリースとホークアイ。しかし二人はフラミーの泣き声を聞き、それぞれの武器を強く握り絞めた。

そして、羽に噛み付く二本の頭、その目に刃を突きたてた。

さすがにこの攻撃には強い痛みを覚えたのか、ダンガードは口を開けて、距離を取った。

「フラミーちゃん、いまポトの油を」

「リース、あぶない！」

リースがポトの油を取り出した瞬間、強烈なカマイタチが彼女を狙った。

だが、その斬撃が彼女の身体を傷つけることはしなかった。その代わり、彼女の道具入れの紐を切り裂いた。

真っ逆さまに山岳地帯へと落ちていくアイテムたち。

「これでは、もう回復が……」

「俺のを使え！」

そう言ってホークアイが道具入れを放り投げた。リースは彼の道

具入れを両手でキャッチする。その時、目の端に呪文を詠唱するダンガードの姿が映った。
ダンガードの詠唱が終わると、突然彼の体を生暖かい風が包み込んだ。
一気に喉が干上がるのを感じるホークアイ。
「しまっ！これは……」
ホークアイは口をパクパクさせていた。本人は声を出しているつもりなのだが、音の振動を回りの空気が伝えてはくれない。
（最高位の風魔法、スタヌィンドだすー。ホークアイは沈黙状態に陥ってるんダス、このままじゃチャクラを練ることもできないダスよー！）
「そんな！待っててホークアイ、いま回復薬を……」
リースがホークアイの道具入れからプイプイ草を取り出そうとした瞬間、ダンガードは再び特攻して、フラミーに体当たりをかました。
「キューン！！！」
「キャア！あっ！」
バランスを崩すフラミー。リースも振り落とされないようにフラミーの背中にしがみついた。だが、その衝撃でホークアイの道具入れまでもが地面に向かって落ちてしまった。
「これじゃあ回復が……。スタンウィンドの沈黙効果でホークアイもチャクラを練れないし、攻撃も……」
喋れないホークアイはゆっくりとリースに歩み寄り、その肩に手を置いた。自責の念とか、絶望感とかに打ちひしがれるリースが顔を上げると、ホークアイは微笑みながらダガーを見せた。
「……そうですね。まだ武器攻撃がありますすね！フラミーちゃん、お願い！」
ポトの油で羽の痛みが和らいだフラミーは警戒しながらもダンガードに近づいた。
その背で、リースは槍を回して勢いをつける。

「旋風槍！」
ダンガードの体を思い切り突き刺そうと、頭上で勢いよく槍を回す。しかし、その時、バリバリバリというスゴイ音が耳を突いた。その音に気をそらしたリース。
そして次の瞬間、
ズドーン！！！
と強烈なサンダーストームが彼女の槍に落ちたのだ。彼女の身体を伝い、フラミーへと電流が流れる。
「キャアアアア！！」
「きゅーん！」
「ぐっ！」
不適な笑みを見せるダンガード。フラミーは全身の痺れをガマンしながら、４枚の羽を羽ばたかせて、何とか空を飛んでいた。
「ごめんね、フラミーちゃん……回復薬も、もうないの。このままじゃ……」
負ける――リースの心に不吉な言葉が響いた。もうすぐ二人の体力は底をつく。しかし回復することは出来ない。次の攻撃を受ければ、フラミーもリースも、ホークアイさえも倒れる。
リースはフラミーの背にストンと腰を下ろし、最後の一撃を放たれるのを待った。見ると、ダンガードは両首を合わせ、一つの巨大な電撃球を作りだそうとしていた。
ホークアイが何とかダガーを握ろうとするが、手が痺れてしまいうまくいかない。
「万事休す、ですね…」
リースは悔しさを噛みしめると、右手の槍を力強く握りしめ、目をギュッと瞑った。
バチッ、バチバチバチッ

電圧が高まる音が聞こえた。
しかし、次の瞬間、その音はダンガードの叫び声と

バチーン！！

という破裂音に変わる。
思わず耳を塞いだリース。ホークアイが彼女の肩を揺さぶると、リースは恐る恐る目を開いた。その瞳に映ったのは、無数のダイヤがダンガードを囲んでいる光景だった。
そして、リースは自分たちの体力が回復していっていることに気がついた。
「これはダイヤモンドミサイル、それにヒールライト！まさか……」
リースとホークアイが真下の山岳地帯を見ると、二人の人間がこちらに手を振っていた。
「デュラン！アンジェラ！」
リース達のピンチに、ランドアンバーとの戦いを終えたデュランとアンジェラが駆けつけたのだった。
「アンジェラ、こいつも使っちまいな！」
「オーケー！」
アンジェラはデュランからノームの像を受け取ると、その力を解放した。その途端、ダンガードの頭上に巨大に岩石が現れ落ちる。
「グギャアアン！」
「まだよ、まだまだ！……ダイヤモンドミサーイル！！」
以前よりも鋭く大きなダイヤがダンガードの体肉を貫く。金剛石の弾丸はさらに神獣の羽そも穴だらけにしたしまった。
「ギャアアス！！」
ダンガードはフラミーに背を向け逃げだそうとした。だが、穴だらけの羽でうまくバランスがとれず、スピードも出ない。
「逃がさない！真空波動槍！」

回転する槍から飛び出した二枚のカマイタチは、ダンガードの両翼を切り裂いた。翼が機能を失い、ただの飾りとなった瞬間、ダンガードの体はゆっくり降下していった。

「フラミちゃんを傷つけたあなたは、この手で倒します！」

そう宣言したリースはギュッとバルキースピアの柄を握り締めた。

「ホークアイ、行きますよ！！」

ホークアイもたいしゃくを握り、力強く頷いた。

二人の様子を察したフラミーは落下するダンガードを追う。その背で、槍を回転させるリース、力を溜めるホークアイ。

「ハァー……、セイヤーッ！」

フラミーがダンガードを追い抜く瞬間、リースの槍とホークアイのダガーがその両首の根に深く突き刺さった。そしてフラミーの勢いも加えて、太い首の根を完全に切り裂いたのである。

二本の首は菊の花のように落ち、ダンガードは爆発四散した。

「やったぜ！あっ、声が出た」

「ホークアイ、やりましたね！」

リースは勢いのあまりホークアイに抱きついた。

「ちょっ、リース！？」

「キャッ！わ、私としたことが、はしたない……」

リースは顔を真っ赤にして、ホークアイから離れた。フラミーは顔をほころばせて笑うと、ゆっくりと地面に立つ仲間たちの下へと降りていった。

下からデュランたちが手を振っていた。ホークアイたちもその手を振り返す。

「お～い！ホークアイ、リース！」

「デュラン、アンジェラ！」

「二人とも、どうしてこちらに？」

「みんなより一足早く神獣討伐のノルマを達成したから応援に来たのよ。ブースカブーに乗ってね」

「間に合って良かったぜ！」

「あとは闇の神獣だけね」
ホークアイたちがフラミーの背から降りると、フェアリーが姿を見せた。
「ケヴィンたちはどうなってるんだ？」
「えっと、ミスポルムとの戦闘を終わらせて……えっ！」
フェアリーが驚きの声を発した。
まさか神獣と闘って疲弊している二人に何かトラブルでも起きたのか――そんな不安を４人は抱く。
「ど、どうしたんだ？」
「そんな、まさか……」
「フェアリー、はっきり言ってくれ！」
デュランとホークアイの声に、フェアリーがゆっくりと口を開こうとする。固唾を飲む４人に語れる、ケヴィンたちの現状とは……

「ワンダーの樹海でまた迷子になってるの」

４人とも頭を垂らしてしまった。
行きで迷うのは良いだろう。しかし、帰りでも迷うというのはなかなか起きないように思う。来た道をそのまま帰ればいいのだから。
「そういえばケヴィンって、一人で旅したのってジャドとウェンデルの間だけじゃないか？」
「ランプ花の森でも、ずっと俺の後ろくっ付いてたし」
「シャルロットに至っては、デュランと会うまで大砲を使って移動していたのでしょう？」
「しかも樹海だからね。そりゃ迷子になるってもんよ」
「「「「はぁ～」」」」
ため息のカルテットである。
気を取り直して、ホークアイが仕切り始める。
「それで、闇の神獣はどうするんだ？闇のマナストーン、現世にはないんだろ？」

「そうなんだよなぁ…」
４人が困っていると、二人の商人が声をかけてきた。大きな商い袋を担いだ、あの猫族の二人である。
「武器防具はいかがでしょうか？」
「おわっ！チキチータにジョセフィーヌ！？」
「あなたたち、どこにでもいるのね」
「はい、それが私たちの特技ですから」
チキチータが営業用のスマイルを咲かせる。その横で同じように微笑むジョセフィーヌ。彼女はサンプル用の防具を取り出して、４人に見せた。
「今日はより協力な武器防具を持ってきましたよ。南洋ブッカ沖の島国ペダンにはこれよりも強力な武器防具があると聞くのですが…」
「ペダン？あそこはとうの昔に滅亡したはずだろ？」とホークアイ。
「はて、私たち猫族の者でペダンから商品を手に入れている者もおりますから、滅亡してるなんてことはにゃいかと？」
「どういうことでしょう？生き残ってる人がいるってことなのでしょうか？」
リースが大きく首を傾げる。するとデュランが感情を込めて言った。
「いや、だったら大騒ぎになってるはずだ。何せ、ペダンの都市は竜帝が粉々にしちまったんだからな」
「私も小さい時にその話聞いたわ！お母様が淋しげな顔をしてたから、よく覚えてるもの！」とアンジェラ。
「なくなったはずの都市があって、あるはずのマナストーンがないのですか……。もしかしたらペダンに何か手がかりがありかもしれませんね！」
「たしかにリースの言うとおりだ。ペダンの歴史は古い。もしまだ本当にペダンがあるっていうなら、闇のマナストーンについての情報を得られるかもしれないぜ！」

「そうみたいだな！よし、ペダンに行こう！」
「デュラン、その前にケヴィンたちを助けに行かないと！」
アンジェラが諭すように言うと、リースが右手を肩くらいまでの高さに上げながら、
「あの、その前にフラミーちゃんの手当てを……」
そして完全に置いてけぼりを食らうチキチータとジョセフィーヌも弱腰で一言。
「……その前に、武器防具はいかがですか？」

それぞれの用事を済ませ、デュランたちはフラミーに乗った。デュランのヒールライトやアイテムで回復したフラミー、彼女にかかればワンダーの樹海などあっという間に辿り着く。
下を見ると、樹海から何とか抜け出した様子のケヴィンとシャルロットがとぼとぼと歩いているのが見えた。
「お～い！ケヴィン、シャルロットー！」
「あの声、デュラン？」
「デュランだけじゃないでち、みんなフラミーに乗ってるでち！」
ビーストキングダムに飛び降りた二人をワンダーの樹海で引き上げ、これからの行き先を説明した。
説明を終えると、６人の頭の中にフェアリーの声が響いたのだった。
（こうしてる間にも闇の神獣が完全体に近づいてるかもしれない。さぁ、ペダンに急ごう）
「おぅ！フラミー、いっちょ頼むぜ！」
「きゅーん！」
フラミーは力強い鳴き声をあげると、６人を背に乗せ大きく羽ばたいた。
ワンダーの樹海からペダンのある南洋ブッカ沖は北東の位置であり、その距離も差ほど遠いものではなかった。

だが、彼らがペダンのある大陸に降り立ったときには、すでに陽が沈もうとしている頃だった。

そこで、彼らは辺りを見渡し、呆然としていた。

「何にもないじゃない！」

頭を抱えて叫ぶアンジェラ。無駄骨だったぁ、と思っているようだ。そしてそれに賛成するデュランが一言。

「ホントだな……」

だが、一名だけ荒地となっている場所にある物があることに気がついた。

「いえ、そうでもないみたいですよ」

リースが指差す方を見ると、何も野原に古びた建物が一個だけあった。レンガ造りの建物。ここがペダンの跡地出なければいたって普通なのだが、滅びた町の中で一軒だけ残っているというのが怪しくて仕方がない。

行く宛てもない6人はその建物の中に入っていった。

「宿屋、か？」

中にはベッドがあり、簡易な作りとなっていた。だが、人の姿が見えない。6人が不気味な感覚を覚え始めると、

「……いらっしゃい」

誰もいないはずの空間に、男の声が響いた。

よく見ると、入り口の真ん前にある壁に穴があった。監視用に開けられたような細長く小さな穴である。中は暗く、宿屋の主人の顔はわからなかった。

その時、フェアリーが6人に話しかけた。

（この場所、なんだか変な感じがするわ。存在値が確認できないっていうか……）

存在値という未知の単語に6人が疑問符を浮かべていると、店の主人らしき男がさらに言葉を連ねた。

「旅の方、ペダンに行きたいのかね？」

「あ、ああ」

「あの町はとうに滅亡しちまったよ。だが、この店にはペダンの住民が来るし、ペダンに出入りすることもできるよ……」
「はぁ？そりゃ、どういう……」
「泊まっていきなさい」
「？　まぁ、神獣との戦いやらフラミーでの移動やらで疲れてるのは確かだ。どうだみんな、ここは一宿していかないか？」
デュランは疑問を拭い去れないではあったが、特に泊まらない理由もないし、むしろ泊まる方が良いのではないかと思い始めた。
「それ、賛成。オイラたち、ライトゲイザー倒して、すぐミスポルムと戦闘。疲れた」
たしかに、ケヴィンとシャルロットはハードスケジュールでここまで来ている。だが、同じ組のシャルロットはケヴィンほど宿泊に賛成しているようには見えなかった。
「そりはかまいまちぇんが……」
「しかし、どうしてこんなところに宿屋があるのでしょう？ペダンはもうないというのに……」
シャルロットとリースの疑問に、みなが黙り込んだ。その中でこの男だけが安易な答えを口にした
「ここはあれだよ、観光案内所みたいなもんだよ。ほら、ペダン跡地って結構有名だろ？で、ここに観光に来るやつの為に建てたんだろ？」
「ホークアイ、おまえ、幽霊船のときも似たようなこと言ってなかったっけ？」
「そうか？」
ホークアイの説明に疑問を抱きつつも、６人は宿屋で夜を明かすことにした。
ごつごつした岩の台に藁を引いただけのベッドに対し１５０ルクは高いとアンジェラがクレームをつけたこと以外、何の問題もなく、彼らは床に就いた。
無機質な天井を見つめながら、デュランはこの後の事に思いを馳

せていた。
　闇の神獣はいったいどこにいるんだろうか。竜帝、黒の貴公子、仮面の導師、この邪悪なる者たちとの決着はどうなるのか。そして、紅蓮の魔導師とはいつ闘うことができるのか。
　そんなことを考えているうちに、彼の意識は夢の世界へと溶けていった。

～第５章『冒険の終焉』に続く～

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8891h/

【改訳】　聖剣伝説3

2011年9月18日03時31分発行